長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第７集

一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅱ

中 ノ 瀬 遺 跡

２０１２

長 崎 県 教 育 委 員 会

長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第７集

一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅱ

中 ノ 瀬 遺 跡

２０１２

長 崎 県 教 育 委 員 会

中ノ瀬遺跡遠景写真Ⅰ（北から）
（国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所提供）

中ノ瀬遺跡遠景写真Ⅱ（南から）

弥生時代　竪穴式住居跡群

SK１完掘状況（北から）

SK７完掘状況（南から）

中世木棺墓出土遺物

近世土壙墓出土遺物

序

本書は，西九州自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の通巻第Ⅱ分冊として，平成20年度から平成21年度までに実施した，中ノ瀬遺跡の調査報告書を収録したものです。

西九州自動車道建設事業につきましては，道路建設計画当初から可能な限り文化財保存に努めていただくよう，県教育委員会は関係機関と協議を重ね，記録保存してまいりました。

埋蔵文化財の一部は，開発によって失われることになり，発掘調査で行った記録保存は，地域の歴史を知る大切な資料となります。発掘調査から得られた資料から先人たちの足跡を学び，次の世代へ伝えていくことは，私たちの重要な責務であると考えます。

このような意味で，中ノ瀬遺跡の発掘調査成果が，文化財保護や地域を学ぶ資料の一つとして広く活用され，県民の皆様の関心に少しでも応えることが出来ればと切に願う次第であります。

本書の刊行にあたり，発掘調査に従事された方々をはじめ多大なご尽力をいただきました関係者各位に対し，衷心から厚く御礼申しあげます。

平成24年３月

長崎県教育委員会教育長

渡辺　敏則

例　　言

Ⅰ　本書は，一般国道497号伊万里松浦道路（西九州自動車道）建設工事に伴う，埋蔵文化財発掘調査の第Ⅱ冊である。調査は，長崎県教育委員会が国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所が平成20年度から平成21年度まで実施した。

Ⅱ　当該調査に係る遺跡は，八幡山城跡（はちまんやまじょうあと），中ノ瀬遺跡（なかのせいせき），今福遺跡（いまふくいせき），太郎浦岩陰（たろうらいわかげ）１～３である。本書は，中ノ瀬遺跡を収録したものである。

Ⅲ　今回報告する遺跡の内容は以下のとおりである。

1　中ノ瀬遺跡：長崎県松浦市今福町（ながさきけんまつうらしいまふくちょう）に所在する。

2　中ノ瀬遺跡の範囲確認調査は，県教育庁佐世保文化財調査事務所が実施した。本調査は，県教育庁佐世保文化財調査事務所が主体となり調査を行った。

3　本書の写真は，遺構を江上正高，石橋忠治，柴田妃三光，半田章，矢葺都子，折原賢児，福永祐馬が，遺物を江上正高，福永祐馬，松田菜津子が撮影した。

4　本書に収録した遺物データの作成は，江上正高，矢葺都子，福永祐馬，松田菜津子が行った。

5　本書で使用した主要な遺構，全ての遺物の実測・製図は，県教育庁佐世保文化財調査事務所が行い，収録した遺物・図面・写真・コンピューター処理データは現在，県教育庁佐世保文化財調査事務所に保管している。

6　本書の執筆は担当者が分担をして行い，執筆者は各項目文末に記した。

7　本書の編集は江上正高，松田菜津子が行い，福永祐馬が協力した。

8　本書で用いた出土遺物に関して，分類及び編年観は主に以下の文献を使用・参照した。

・貿易陶磁器　2000『大宰府条坊跡ＸＶ』－陶磁器分類編－　太宰府市教育委員会
　　1982「Ⅱ　14～16世紀の日本出土貿易陶磁器の編年」『貿易陶磁研究』№２
・備　前　焼　乗岡実　2000「中世備前焼擂鉢の編年について」『第３回中世備前焼研究会資料』
・肥前陶磁器　2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁器学会編
・近 世 全 般　2000『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会

9　本書で用いた土層および土色の色調観察は，以下に準拠した。

・『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修

10　本書で用いた方位は全て真北であり，国土座標は世界測地形による。

11　自然科学分析は㈱古環境研究所，パリノ・サーヴェイ㈱，㈱パレオ・ラボに，遺物保存処理は㈱東都文化財研究所に依頼した。

12　調査，遺物整理に際して中田敦之（松浦市教育委員会）より，ご教示をいただいた。記して，謝意を表したい。

本 文 目 次

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過……1
1　西九州自動車道の概要と長崎県内の工事区間……1
2　発掘調査の経緯……2
3　中ノ瀬遺跡緊急発掘調査及び報告書作成の体制について……3
Ⅱ　遺跡の位置と環境……5
1　地理的環境……5
2　歴史的環境……6
Ⅲ　調査の概要……9
1　範囲確認調査……9
2　本調査……11
(1)　調査区設定……11
(2)　調査年度毎の概要……11
(3)　土　層……19
Ⅳ　遺構・遺物……21
1　弥生時代……21
(1)　竪穴式住居跡……21
(2)　柱穴跡……29
(3)　不明遺構……29
2　中　世……42
(1)　木棺墓……42
(2)　土壙墓……45
(3)　柱穴跡……46
(4)　不明遺構……46
3　近　世……61
(1)　旧河道跡……61
(2)　掘立柱建物跡……61
(3)　溝　跡……62
(4)　五輪塔……64
(5)　土壙墓……64
(6)　集石遺構……67
(7)　柱穴跡……67
(8)　不明遺構……67
4　第Ⅰ層出土遺物……85
(1)　旧石器時代の遺物……85
(2)　縄文時代の遺物……85

(3) 弥生時代の遺物……95
(4) 古墳時代・古代の遺物……97
(5) 中世の遺物……97
(6) 近世の遺物 ……109
(7) 近・現代の遺物 ……118
Ⅴ まとめ ……122
Ⅵ 図 版 ……123
Ⅶ 附 編 ……152

挿 図 目 次

第１図 長崎県内西九州自動車道の計画状況…… 1
第２図 西九州自動車道「伊万里松浦道路」計画図及び埋蔵文化財発掘調査地区…… 2
第３図 松浦市内地質図…… 5
第４図 中ノ瀬遺跡位置図…… 7
第５図 範囲確認調査試掘坑(TP) 1 ～ 4 配置図 …… 9
第６図 範囲確認調査試掘坑(TP)平面図・土層図 ……10
第７図 グリット配置図及び調査区位置図……11
第８図 年度別調査区位置図……12
第９図 土層図位置図……12
第10図 遺構配置図……13～14
第11図 調査区土層図①……15
第12図 調査区土層図②……16
第13図 調査区土層図③……17
第14図 調査区土層図④……18
第15図 調査区土層図⑤……19
第16図 SH 1 （新）平面図・土層図, 炉跡平面図・土層図, 出土遺物……22
第17図 SH 1 （古）平面図・土層図・断面見通図, 炉跡・土坑跡平面図・土層図……23
第18図 SH 2 平面図・土層図・断面見通図 ……24
第19図 SH 2 炉跡・土坑跡平面図・土層図 ……25
第20図 SH 2 出土遺物 ……26
第21図 SH 3 出土遺物 ……27
第22図 SH 3 平面図・断面見通図, 炉跡・主柱穴跡・周溝平面図・土層図…28
第23図 弥生時代 SP 出土遺物 ……29
第24図 弥生時代 SP 配置図 ……30
第25図 弥生時代 SP 配置図① ……31
第26図 弥生時代 SP 配置図② ……32
第27図 弥生時代 SP 配置図③ ……33
第28図 弥生時代 SP 配置図④ ……34
第29図 SX13平面図・土層図, 出土遺物 ……36
第30図 SX11・23・25・26・29・33～35平面図・土層図……37
第31図 SX24・27・28, SD 1 平面図・土層図 …38
第32図 SX27・29出土遺物 ……39
第33図 SK 1 平面図・土層図 ……42
第34図 SK 1 平面図・断面見通図 ……42
第35図 SK 1 出土遺物 ……43
第36図 SK 6 平面図・土層図・断面見通図 ……44
第37図 SK 2 土層図・断面見通図 ……45
第38図 SK 3 平面図・土層図・断面見通図, 出土遺物……45
第39図 中世 SP 出土遺物 ……46
第40図 中世 SP 配置図 ……47
第41図 中世 SP 配置図① ……48
第42図 中世 SP 配置図② ……49
第43図 中世 SP 配置図③ ……50
第44図 中世 SP 配置図④ ……51
第45図 SX 1 ・ 3 平面図・断面見通図, 出土遺物 ……53
第46図 SX14平面図・土層図, 出土遺物 ……53
第47図 SX19平面図・土層図, 出土遺物 ……54
第48図 SX21・22平面図・土層図 ……56
第49図 SX21出土遺物 ……57
第50図 SX24・28出土遺物 ……58
第51図 SR 1 平面図・土層図 ……61
第52図 SD 2 平面図・土層図 ……62
第53図 SB 1 ・ 3 ～ 5 平面図・土層図・断面見通図……63
第54図 五輪塔・SF 4 平面図・断面見通図 ……64
第55図 五輪塔平面図・見通図……64
第56図 SK 4 平面図・土層図・断面見通図, 出土遺物……65
第57図 SK 7 平面図・土層図・断面見通図, 出土遺物……66
第58図 SK 8 平面図・土層図・断面見通図 ……66

第59図　SF１～３配置図 ……67
第60図　SF１～３平面図・断面見通図 ……68
第61図　近世 SP 配置図 ……69
第62図　近世 SP 配置図① ……70
第63図　近世 SP 配置図② ……71
第64図　近世 SP 配置図③ ……72
第65図　近世 SP 配置図④ ……73
第66図　SX２平面図，SX４・６平面図・土層図，
出土遺物……75
第67図　SX５上・下層平面図，土層図 ……76
第68図　SX５上・下層出土遺物 ……77
第69図　SX16・30平面図 ……79
第70図　SX16土層図 ……80
第71図　SX16出土遺物 ……81
第72図　SX20・32平面図・土層図，出土遺物 …83
第73図　旧石器時代の遺物……85
第74図　石鏃形態分類……86
第75図　石鏃①……87
第76図　石鏃②……88
第77図　石鏃③……89
第78図　石鏃④……90
第79図　石匙・加工痕のある剥片……94
第80図　加工痕のある剥片・その他石器……95
第81図　弥生時代の遺物……96
第82図　古墳時代・古代の遺物……97
第83図　土師器①……97
第84図　土師器②・瓦質土器・備前系陶器……98
第85図　龍泉窯系青磁① ……100
第86図　龍泉窯系青磁② ……101
第87図　同安窯系青磁 ……101
第88図　高麗青磁 ……102
第89図　景徳鎮窯系青花 ……102
第90図　福建省産青花 ……103
第91図　青白磁 ……104
第92図　白磁 ……104
第93図　高麗陶磁器 ……106
第94図　朝鮮王朝陶器 ……107
第95図　滑石製石鍋・滑石製石鍋二次加工品 …107
第96図　その他の陶器・貿易陶磁器 ……108
第97図　銭貨 ……109
第98図　国産磁器① ……110
第99図　国産磁器② ……111
第100図　国産陶器・瓦・墓石①……112
第101図　国産陶器・瓦・墓石②……113
第102図　金属器①……116
第103図　金属器②……117
第104図　土錘……117
第105図　近・現代の遺物……118
附編　図１－１　暦年較正結果 ……153
附編　図１－２　SK１出土炭化材 ……153
附編　図２－１　暦年較正結果 ……155
附編　図２－２　中ノ瀬遺跡の竪穴式住居
出土試料の暦年代の分布 ……156
附編　図３－１　暦年較正結果 ……158
附編　図４－１　中ノ瀬遺跡
プラント・オパール分布図 …159
附編　図４－２　中ノ瀬遺跡
④区のプラント・オパール …159
附編　図５－１　中ノ瀬遺跡の炭化材 ……160
附編　図６－１　中ノ瀬遺跡の花粉・胞子 ……162
附編　図７－１　種実遺体 ……165

表　目　次

第１表　年度別範囲確認調査・緊急発掘調査実施表
……３
第２表　平成23年度西九州自動車道
「伊万里松浦道路」調査計画一覧表……４
第３表　遺物観察表（SH１） ……25
第４表　遺物観察表（SH２） ……26
第５表　遺物観察表（SH３） ……29
第６表　弥生時代 SP 一覧表 ……35
第７表　遺物観察表（弥生 SP） ……35
第８表　遺物観察表（SX13） ……36
第９表　遺物観察表（SX27・29） ……39
第10表　県北部住居跡形態変遷表……40
第11表　土坑跡採取土壌洗浄結果……41
第12表　遺物観察表（SK１） ……44
第13表　遺物観察表（SK３） ……46
第14表　遺物観察表（中世 SP） ……46
第15表　中世 SP 一覧表 ……52
第16表　遺物観察表（SX１・３・14） ……54
第17表　遺物観察表（SX19） ……55
第18表　遺物観察表（SX21） ……57
第19表　遺物観察表（SX24・28） ……58
第20表　県北部中世土師器計測表……59
第21表　遺物観察表（SK４） ……66
第22表　遺物観察表（SK７） ……66
第23表　近世 SP 一覧表 ……67
第24表　遺物観察表（SX５上・下層） ……78
第25表　遺物観察表（SX２・４・６） ……80
第26表　遺物観察表（SX16） ……82
第27表　遺物観察表（SX32） ……83
第28表　遺物観察表（旧石器時代の遺物）……85

第29表　石鏃形態別相関グラフ……86
第30表　石鏃破損状況……91
第31表　遺物観察表（石鏃①）……91
第32表　遺物観察表（石鏃②）……92
第33表　遺物観察表（石匙・加工痕のある剥片・その他石器）……93
第34表　遺物観察表（弥生時代の遺物）……96
第35表　遺物観察表（古墳時代・古代の遺物）…97
第36表　遺物観察表（土師器①）……97
第37表　遺物観察表（土師器②・瓦質土器・備前系陶器）……98
第38表　遺物観察表（龍泉窯系青磁）……99
第39表　遺物観察表（同安窯系青磁）……101
第40表　遺物観察表（高麗青磁）……102
第41表　遺物観察表（景徳鎮窯系青花）……103
第42表　遺物観察表（福建省産青花）……103
第43表　遺物観察表（青白磁）……104
第44表　遺物観察表（白磁）……105
第45表　遺物観察表（高麗陶磁器）……106
第46表　遺物観察表（朝鮮王朝陶器）……107
第47表　遺物観察表（滑石製石鍋・滑石製石鍋二次加工品）……108
第48表　遺物観察表（その他の陶器・貿易陶磁器）……108
第49表　遺物観察表（銭貨）……109
第50表　遺物観察表（国産磁器）……114
第51表　遺物観察表（国産陶器・瓦・墓石①）…114
第52表　遺物観察表（国産陶器・瓦・墓石②）…115
第53表　遺物観察表（金属器）……117
第54表　遺物観察表（土錘）……118
第55表　遺物観察表（近・現代の遺物）……118
第56表　第Ⅰ層石器組成表……119
第57表　第Ⅰ層出土古代末～中世遺物組成表…120
第58表　貿易陶磁器組成表……120
第59表　近世陶磁器組成表……120
附編　表１－１　測定試料及び処理……152
附編　表１－２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……152
附編　表２－１　測定試料及び処理……154
附編　表２－２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……155
附編　表３－１　試料と方法……157
附編　表３－２　測定結果……157
附編　表４－１　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数……159
附編　表５－１　中ノ瀬遺跡における樹種同定結果……161
附編　表６－１　中ノ瀬遺跡における花粉分析結果……162
附編　表７－１　種実同定結果……163

図　版　目　次

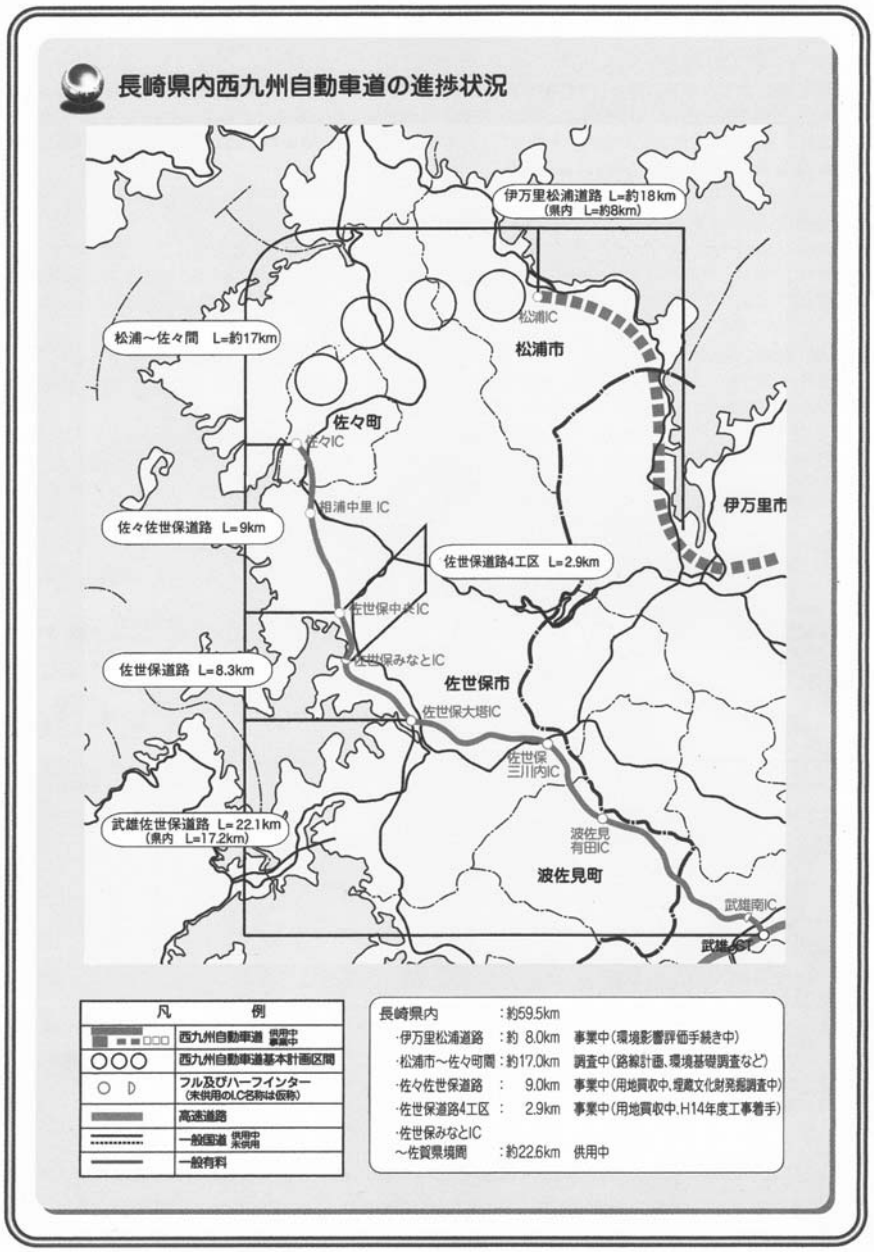
巻頭写真①　中ノ瀬遺跡遠景写真Ⅰ（北から）
中ノ瀬遺跡遠景写真Ⅱ（南から）
巻頭写真②　弥生時代　竪穴式住居跡群
SK１完掘状況（北から）
SK７完掘状況（南から）
巻頭写真③　中世木棺墓出土遺物
近世土壙墓出土遺物
図版１　範囲確認調査及び①～③区……123
図版２　③～⑦区……124
図版３　④～⑦区……125
図版４　竪穴式住居跡①……126
図版５　竪穴式住居跡②……127
図版６　竪穴式住居跡③，出土遺物……128
図版７　竪穴式住居跡④，出土遺物……129
図版８　竪穴式住居跡⑤，出土遺物……130
図版９　竪穴式住居跡⑥，柱穴跡（弥生），不明遺構①，出土遺物……131
図版10　不明遺構②，出土遺物……132
図版11　不明遺構③，トレンチ，木棺墓①，出土遺物……133
図版12　木棺墓②……134
図版13　木棺墓③，出土遺物……135
図版14　木棺墓④，出土遺物……136
図版15　木棺墓⑤，土壙墓①……137
図版16　土壙墓②，柱穴跡（中世）①，出土遺物…138
図版17　不明遺構④，柱穴跡（中世）②，出土遺物……139
図版18　不明遺構⑤，出土遺物……140
図版19　不明遺構⑥，旧河道跡，掘立柱建物跡①，出土遺物……141
図版20　掘立柱建物跡②，溝跡，五輪塔，土壙墓③……142
図版21　土壙墓④，出土遺物……143
図版22　土壙墓⑤，出土遺物……144
図版23　集石遺構，不明遺構⑦，出土遺物……145
図版24　不明遺構⑧，出土遺物……146
図版25　不明遺構⑨，出土遺物，第Ⅰ層出土遺物①……147
図版26　第Ⅰ層出土遺物②……148
図版27　第Ⅰ層出土遺物③……149
図版28　第Ⅰ層出土遺物④……150
図版29　第Ⅰ層出土遺物⑤，土壌洗浄……151

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過

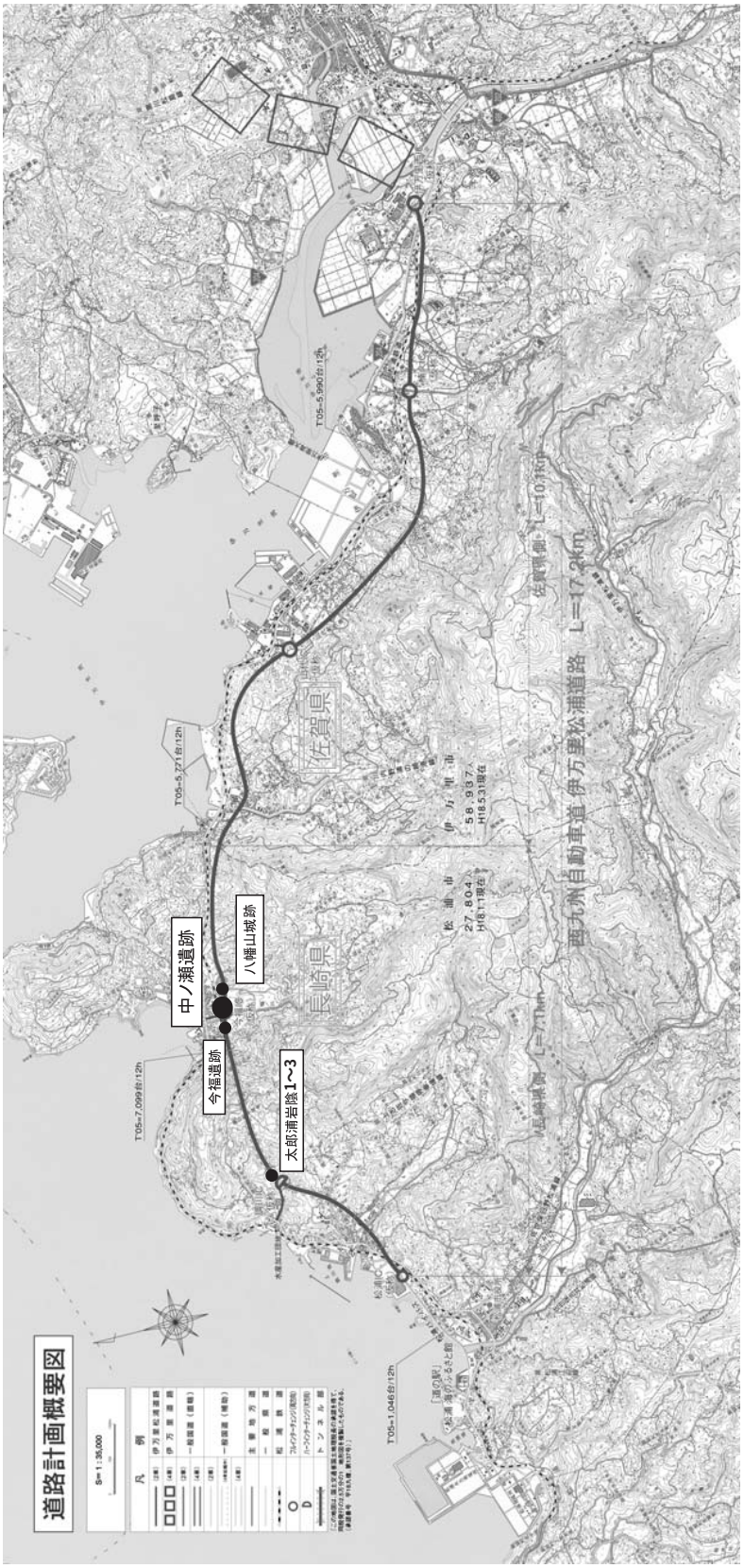
１　西九州自動車道の概要と長崎県内の工事区間（第１・２図）

旧建設省は，昭和62年６月30日に道路審議会答申に基づき，14,000㎞の高規格道路網計画を決定した。西九州自動車道は，高規格幹線道路網の一環として計画された道路で，福岡市を起点として唐津市，伊万里市，佐世保市を経由して武雄市に至る延長約150㎞一般国道の自動車専用道路であり，九州西北部の地域経済の活性化，高速定時制の確保に大きく寄与することで計画された。

長崎県では高規格幹線道路をはじめとする幹線道路網の整備については，県民の暮らしの豊かさを支える重要な課題として取り上げ，県内主要都市を２時間程度で結ぶ道路ネットワーク構想を想定し，景観や自然との調和を図りながら整備を推進している。西九州自動車道の県内の路線は，４区間に分



第１図　長崎県内西九州自動車道の計画状況
（国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所発行のパンフレットを一部改変）



第２図　西九州自動車道「伊万里松浦道路」計画図及び埋蔵文化財発掘調査地区

けられる。既に供用路線の開始は，「佐世保道路」（佐世保みなとIC～相浦中里IC区間，距離約7.9㎞，平成22年３月）と，「佐々佐世保道路」（相浦中里IC～佐々IC区間，距離約４㎞：平成23年９月）の２区間となっている。一方，残り２区間のうち「伊万里松浦道路」（松浦市志佐町～佐賀県伊万里市間：長崎県内区間距離約８㎞）は埋蔵文化財発掘調査中及び終了区間，「松浦～佐々間」（松浦市志佐町～北松浦郡佐々町沖田免間：区間距離約17㎞）は国土交通省での調査中路線となる。

（江上正高）

２　発掘調査の経緯

（第１表）

発掘調査は，国土交通省九州地方整備局長（長崎河川国道事務所）と長崎県知事との間で受託事業として契約し，長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所が調査担当として，現地踏査および範囲確認調査を実施している。このうち，「佐世保道路」・「佐々佐世保道路」に伴う文化財調査の詳しい経緯については，既刊の『八幡山城跡』に記しているので参照されたい。

「伊万里松浦道路」は平成17・18年度に分布調査を実施し，計画区域内に八幡山城跡（はちまんやまじょうあと），中ノ瀬遺跡（なかのせいせき），今福遺跡（いまふくいせき），太郎浦岩陰１～３（たろうらいわかげ）の遺跡が確認され，発掘調

査総面積は48,116㎡を予定している。調査は，平成20年度～平成26年度まで範囲確認調査及び緊急発掘調査，報告書作成業務を予定している。（江上正高）

年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
範囲確認調査	中ノ瀬遺跡 八幡山城跡	今福遺跡	－	太郎浦岩陰１～３	－
緊急発掘調査	中ノ瀬遺跡	中ノ瀬遺跡 八幡山城跡 今福遺跡	今福遺跡	今福遺跡	太郎浦岩陰１～３

第１表　年度別範囲確認調査・緊急発掘調査実施表

３　中ノ瀬遺跡緊急発掘調査及び報告書作成の体制について（第２表）

調査は，長崎県教育委員会が主体として，以下の調査体制により，県教育庁佐世保文化財調査事務所が担当した。このうち，現場を担当したのは，文化財保護主事と文化財調査員である。

県教育庁佐世保文化財調査事務所長　副島　和明（平成20・21年）
係長　山村　智成（平成20・21年）
村川　逸朗（平成20・21年）
主任文化財保護主事　杉原　敦史（平成21年）
文化財保護主事　杉原　敦史（平成20年）
文化財調査員　江上　正高（平成20・21年）
柴田妃三光（平成20・21年）
石橋　忠治（平成20年）
半田　章　（平成20年）
矢葺　都子（平成20年）
折原　賢児（平成21年）
福永　祐馬（平成21年）

発掘調査は，業務名称「一般国道497号西九州自動車道埋蔵文化財発掘調査委託業務」として業務委託を行った。

平成20年度の緊急発掘調査は，調査面積4,800㎡について中ノ瀬遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体（国際航業株式会社長崎支店・株式会社三基）に業務委託して実施，終了した。委託調査員等の配置は，現場代理人１人，発掘調査員４人である。

平成21年度の緊急発掘調査は，調査面積12,759㎡について中ノ瀬遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体（株式会社九州文化財研究所・株式会社大信技術開発）に委託して実施，終了した。委託調査員等の配置は，現場代理人１人，発掘調査員５人である。

両年とも委託業務内容は，発掘調査業務（発掘調査作業員の雇用，安全対策等），遺構実測業務，検出遺構の空中写真撮影業務，掘削及び排土運搬業務，水中ポンプ，ローリングタワー等配置業務，防塵ネット，足場設置業務，仮設排水設備設置業務を委託した。また，調査状況の進展により面積増加の変更契約を行った。

中ノ瀬遺跡の調査記録や整理作業は佐世保文化財調査事務所によって，発掘調査と並行して順次進

めた。平成22年度までの詳しい経緯については，既刊の『八幡山城跡』に記しているので参照されたい。本格的な報告書作成作業は平成23年度に着手し，同年度に作成および刊行を行った。

平成23年度　県教育庁佐世保文化財調査事務所長　副島　和明
係長　荻野　雅寛
村川　逸朗
杉原　敦史
文化財調査員　江上　正高（平成23年６月より松浦市教育委員会）
松田菜津子
福永　祐馬

（江上正高）

調査年度	調査形態	遺跡名	調査面積（㎡）	調査期間	調査担当	委託業者
平成23年度	緊急発掘調査	今福遺跡	6600㎡	H23.6.15～H24.2.20	杉原・半田・福永・生田・加世田・佐々木・松田・竹本	国際文化財㈱・㈱三基の共同企業体
	報告書作成	中ノ瀬遺跡	－	H23.4.1～H24.3.31	杉原・江上・松田・福永	－

調査形態	面積	備　　考
要調査面積	47,216㎡	西九州自動車道計画路線内３遺跡の要調査面積（八幡山城跡，中ノ瀬遺跡，今福遺跡）
	900㎡	西九州自動車道計画路線内３遺跡の要調査面積（太郎浦岩陰１～３）
発掘調査済面積	37,916㎡	平成20年度～平成22年度の発掘調査面積（八幡山城跡，中ノ瀬遺跡，今福遺跡）
	6,600㎡	平成23年度の発掘調査面積（今福遺跡）
発掘調査予定面積	3,600㎡	平成24年度以降の発掘調査予定面積（今福遺跡，太郎浦岩陰１～３）

第２表　平成23年度西九州自動車道「伊万里松浦道路」調査計画一覧表

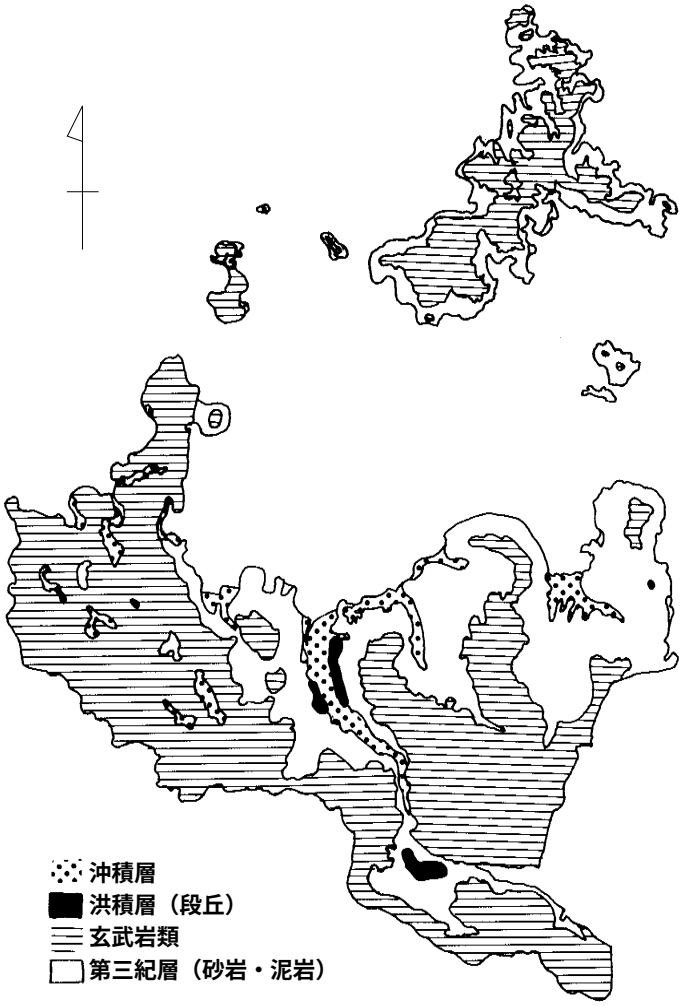
Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境（第３図）

中ノ瀬遺跡が立地する長崎県松浦市今福町は九州島の西北部，東シナ海へ突出した形状の北松浦半島の北部に位置し，今福町は市域の東部にあたる。市域は南に山麓，北に海域に接する「南高北底」の地勢を呈する。この山麓が県・市境となり西側を平戸市，南側を佐世保市，東側を佐賀県伊万里市と接する東西に長い市域である。県境は国見山（776m）を最高峰に，八天岳（はってんだけ）から隠居岳（かくいだけ）と南北に続き，北と西に標高を下げながら海へ没する。

市域の地形は大きく４つに分類される。まず，玄武岩の溶岩台地が山麓に展開する。この台地は北松浦半島全域を覆い，北松浦玄武岩としてキャップロック構造を呈する。これは主に市域東部の全域にみられる。本遺跡はこの地形に属し，南北に延びる舌状台地に立地する。本遺跡の東側は人柱川，西側は今福川の両河川による長年の削平を受けて形成されたと推測される。次に緩やかな起伏をもつ砂岩や泥岩で堆積した第三紀（佐世保層群・福井層）層である。この層は市域の基盤を形成するが，主に山麓に展開する。今福町付近では寺上（てらげ）・木場（こば）などで平坦面が広がる。北松浦半島一帯は北松炭田として1950（昭和30）年代に栄えたが，炭田は狭炭層を含む第三紀層と砂礫層の互層から形成されているため，一方で地すべりの多発地帯でもある。これは「北松型（ほくしょうがた）地すべり」と呼称されているが，キャップロック状に玄武岩が一帯を覆っているため，降雨時は不整合に覆う砂礫層との間に貯留層となり誘発している。地すべりは幾度となく起きているが，近年では1990（平成２）年の今福町石倉山地すべりによる被害は記憶に新しい。そして沖積層は，志佐川（約11.5㎞）流域で最も展開がみられるが，今福川（約1.8㎞）流域においても確認できる。これらの河川は，上流から下流までの長さが短く急傾斜地を流れる。そのため，第三紀層を削り，幾度となく氾濫している。また，市域に確認できる沖積層は流域に沿った細長い様相を呈し，河口では三角江を形成するものの，市全域で平地は限られる。洪積層（段丘）は志佐川流域にて展開が確認できる。市域の北側の海域に位置する鷹島・福島等の島も構成されるが，地質は玄武岩と第三紀層に分類される。

（江上正高）



第３図　松浦市内地質図

2　歴史的環境（第４図）

松浦市では旧石器時代より人々が活動した痕跡が窺える。ここでは市域東部を中心に述べる。

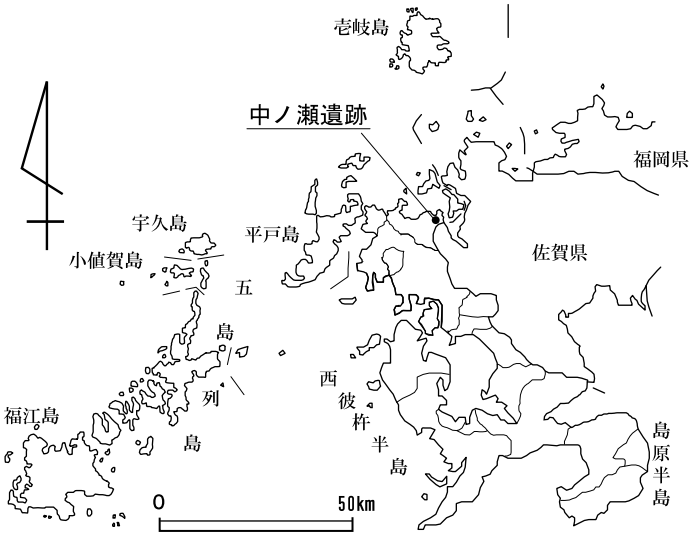
旧石器時代は今福川上流域に川頭池遺跡・湯ノ谷遺跡，下流域の今福遺跡，調川町の海側の台地に平尾遺跡・大塔遺跡，今福町の金井崎半島に満場遺跡，鷹島町の長畑遺跡・開田遺跡が所在する。このうち，川頭池遺跡と湯ノ谷遺跡は，長崎県立松浦高校郷土社会部による踏査及び試掘調査が行われている。また，平尾遺跡・大塔遺跡よりナイフ形石器が表採されている。今福遺跡は市教育委員会による発掘調査が行われ，今福川旧河道と推測される二次堆積よりナイフ形石器が出土している。満場遺跡では台形石器など表採資料や，遺物包含層が確認されている。

縄文時代は今福川・調川川上流域に湯ノ谷遺跡・牟田池遺跡，下流域に今福遺跡，金井崎半島に城山山麓遺跡・北平遺跡，鷹島町に鷹島海底遺跡・三代遺跡が所在する。湯ノ谷遺跡では県立松浦高校郷土社会部の試掘調査より，縄文時代早期頃と考えられる押型文土器が確認されている。また，遺跡の立地及び調査方法より，鷹島海底遺跡からも押型文土器を主体とした土器が出土している。北平遺跡は1981（昭和56）年に県教育委員会による緊急発掘調査が行われ，攪乱の影響で包含層が限られているものの，黒曜石製のナイフ形石器や台形石器などの石器類が出土している。今福遺跡は縄文時代後期～晩期，三代遺跡では縄文時代中期～晩期の土器・石器が出土している。

弥生時代～古代の遺跡の数は限られるが，これは，河川域とそこに展開する平野に生産基盤を求めた結果と捉えられる。弥生時代の北松浦半島一帯は，『魏志』「倭人伝」に記される末盧国の周縁と考えられる。この時代は今福川流域で，中ノ瀬遺跡・今福遺跡・今福小学校遺跡・八幡山城跡，志佐川流域右岸に栢ノ木遺跡が所在する。中ノ瀬遺跡は市教育委員会の調査より，弥生時代中期中頃の土器が出土している。今福遺跡では前期後半～中期中頃の土器や石包丁が出土している。八幡山城跡では弥生土器が出土している。栢ノ木遺跡は前期後半の甕棺墓・石棺墓の墓域を形成し始め，後期前半には内行花文鏡やガラス玉を持つ集団となる。古墳時代は今福遺跡で，４世紀初頭頃と６世紀後半の土師器の甕や須恵器の坏身・坏蓋・高坏・甕などが出土する。一方，志佐川流域左岸の宮ノ下がり遺跡より，４世紀後半～５世紀代の竪穴式住居跡が確認されている。また，栢ノ木遺跡より６世紀後半の須恵器が出土する。松浦市域で確認できる古墳は，志佐川より西側に小嶋古墳群，東側に鷹島の薫崎鬼塚古墳や宝ヶ峰１～３号墳と限られる。古代は，今福遺跡より８世紀末～10世紀中頃の土師器や越州窯系青磁椀が出土するが，明確な遺構は確認されていない。

中世は中ノ瀬遺跡・今福遺跡・鷹島海底遺跡，山城跡は史跡松浦党梶谷城跡や八幡山城跡が立地している。中ノ瀬遺跡は，12世紀後半～13世紀代と15・16世紀にかけての土師器や中国産や朝鮮産の貿易陶磁器などが確認できる。今福遺跡からは11世紀後半～14世紀中頃の土師器，中国産や朝鮮産の貿易陶磁器などが出土する。鷹島海底遺跡は島南海岸部一帯に広がり，蒙古襲来（文永の役：1274（文永11）年，弘安の役：1281（弘安４）年）に関する遺物が確認されている。また，畿内産（和泉産）瓦器椀が出土し，交易路として伊万里湾沿岸が使用されたと推測される。

松浦市域の山城跡は市全域に展開するが，志佐川流域では医王城跡や陣内城跡が展開する。本遺跡北東側に立地する史跡松浦党梶谷城跡は，標高約197ｍの城山山頂部に楕円状に主郭を設け，外周に段築と石垣からなる山城跡である。石垣の構築技法などから豊臣政権の文禄・慶長の役（1592（文禄元）年～1598（慶長３）年）に伴う改築様相を示す。遺物は縄文時代の石器，13世紀前半から14世紀前半代の貿易陶磁器が確認されたが，主体は15世紀後半～17世紀前半の陶磁器類が確認され，遺構の



1 **中ノ瀬遺跡**
2 八幡山城跡
3 今福遺跡
4 北平遺跡
5 満場遺跡
6 ぎぎが浜遺跡
7 松浦党梶谷城跡
8 城山山麓遺跡
9 山川遺跡
10 今福小学校遺跡
11 大塔遺跡
12 柳池遺跡
13 雨久保遺跡
14 若宮神社
15 松浦丹後守勝の墓
16 松浦丹後守盛の墓
17 文禄の役
松浦家供養塔
18 八幡神社
19 今福（歳の宮）神社
20 旧宛陵寺跡
21 今宮神社
22 平戸街道　御厨筋

第４図　中ノ瀬遺跡位置図（Ｓ＝１/25,000）

時期と符合する。八幡山城跡は本遺跡東側に立地し，大きく北部の区域（北城）と南部の区域（南城）に分かれる。当該調査路線内にあたる北部の区域の調査が行われ，その結果，尾根筋を取り囲む切岸が配置される特異な構造を呈することが明らかになった。出土遺物より，15～16世紀後半頃に位置付けられる。南部の区域は，曲輪・切岸を中心とした一般的な形態を呈する。このため，同一丘陵上で構造の違う城郭跡が確認されている。

一方，『松浦家世伝』に拠ると，源（みなもと）（松浦（まつら））久（ひさし）なる人物が1069（延久元）年に摂津国渡辺荘より今福に下向し土着，宇野御厨検校及び検非違使となることが記されている。宇野御厨は現在の長崎県五島市，佐世保市北部，佐賀県伊万里市を結んだラインより北側と考えられ，皇室への贄貢進所（にえこうしんじょ）が荘園化したとされる。久の後，子孫は御厨内に独立，分散する。一族は松浦党と集団で呼称される。そのうち，宗家松浦氏は15世紀に佐世保市相浦地域に移るまで，当該地域を拠点としている。このため，今福町周辺は宗家松浦氏に関連する史跡・石造物が数多く所在する。

近世の今福町は平戸藩領に属するが，1635（寛永12）年に分地，1790（寛政２）年に押役所の設置，平戸－伊万里間に平戸街道御厨筋の設置など，藩の重要な機関及び交通の要所として認識される。産業では今福浜の干拓や1794（寛延２）年に赤岩炭坑の採掘が行われ，人口の増加が確認できるものの，自然災害も頻発し，特に今福川の氾濫の被害を幾度となく受けた記録が残る。

近・現代の今福町は，1871（明治４）年の廃藩置県により平戸県，同年に長崎県，郡制施行で北松浦郡の管轄となる。この時期も炭坑採掘・干拓が継続して行われる。戦後の1955（昭和30）年には，松浦市に編入される。この時期も炭坑で栄え，1962（昭和37）年に最盛期を迎えた。しかし，エネルギー革命の影響を受けて1967（昭和42）年を最後に市域全ての炭坑が閉山している。2008（平成18）年には松浦市・鷹島町・福島町を統合して「松浦市」が設置される。　（江上正高）

【引用・参考文献】

久原巻二　1987「Ⅲ　松浦市域の地形的環境」『下田遺跡』松浦市文化財調査報告書 第３集 松浦市教育委員会

坂田邦洋　他　1975「鷹島埋蔵文化財調査報告」『鷹島町郷土誌』鷹島町郷土誌編纂委員会

芝本一志　1965「松浦市の石器時代の紹介」『松浦考古』創刊号 長崎県立松浦高等学校郷土社会部

芝本一志・下川達彌　1966「伊万里湾沿岸における無土器文化」『古代学研究』第46号

芝本一志　1966「湯の谷遺跡概略報」『松浦考古』３号 長崎県立松浦高等学校郷土社会部

下川達彌　1984「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」『長崎県北松浦地方の文化』－特定地域の基礎文化調査報告書Ⅳ－長崎県立美術博物館

高原愛・中田敦之　1998『松浦今福遺跡』松浦市文化財調査報告書 第14集 松浦市教育委員会

高野晋司　編　1992，1993『鷹島海底遺跡』，『鷹島海底遺跡』Ⅱ　長崎県鷹島町教育委員会

中田敦之　他　2003『松浦市内遺跡確認調査』⑷松浦市文化財調査報告書 第19集

中田敦之　2004『松浦市内遺跡確認調査』⑸松浦市文化財調査報告書 第20集

萩原博文　1971「長崎県松浦市周辺の先土器文化」『考古学ジャーナル』№59　8　ニュー・サイエンス社

矢葺都子　編　2011『八幡山城跡』長崎県佐世保文化財調査事務所報告書 第６集 長崎県教育委員会

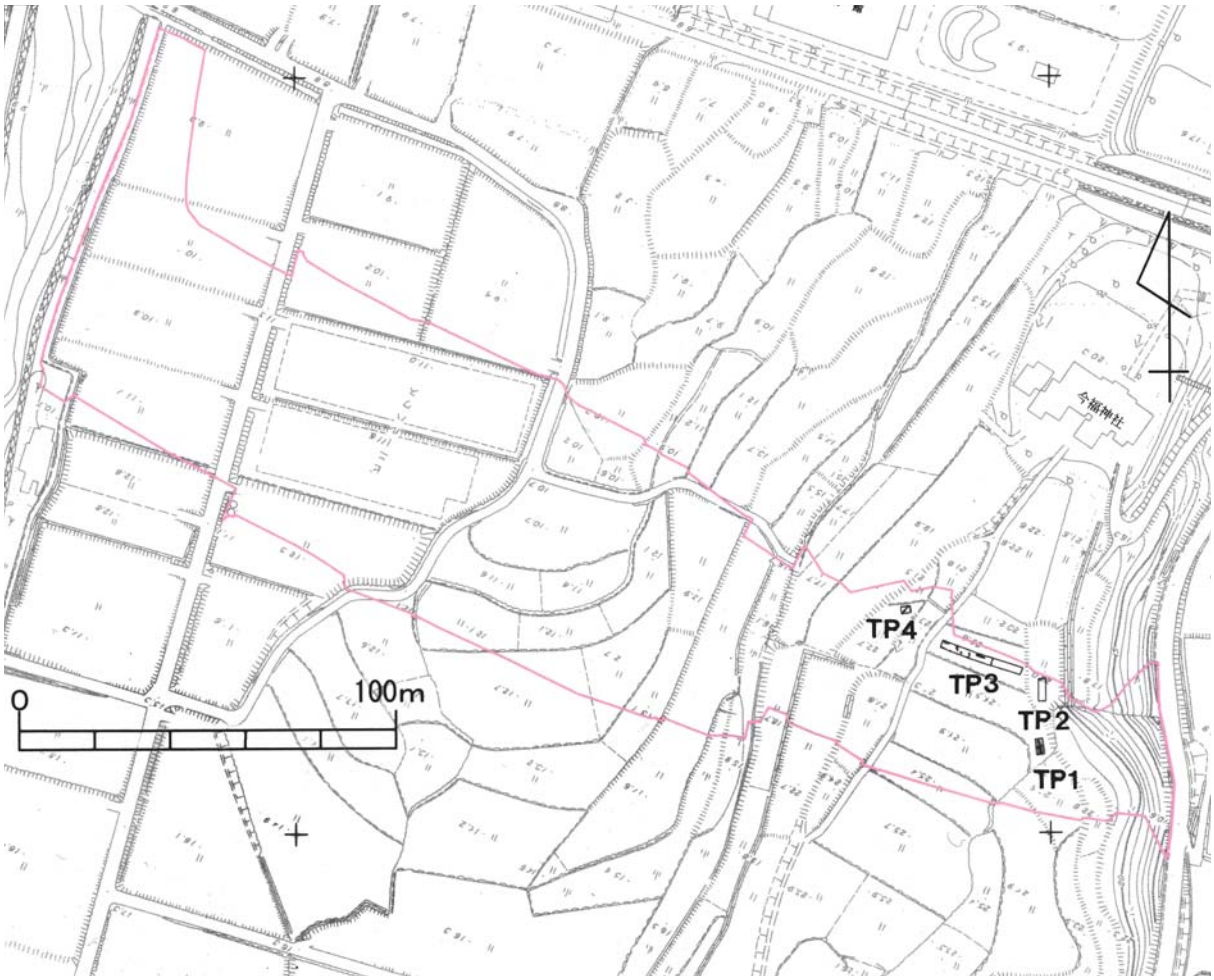
Ⅲ　調査の概要

１　範囲確認調査（第５・６図　図版１）

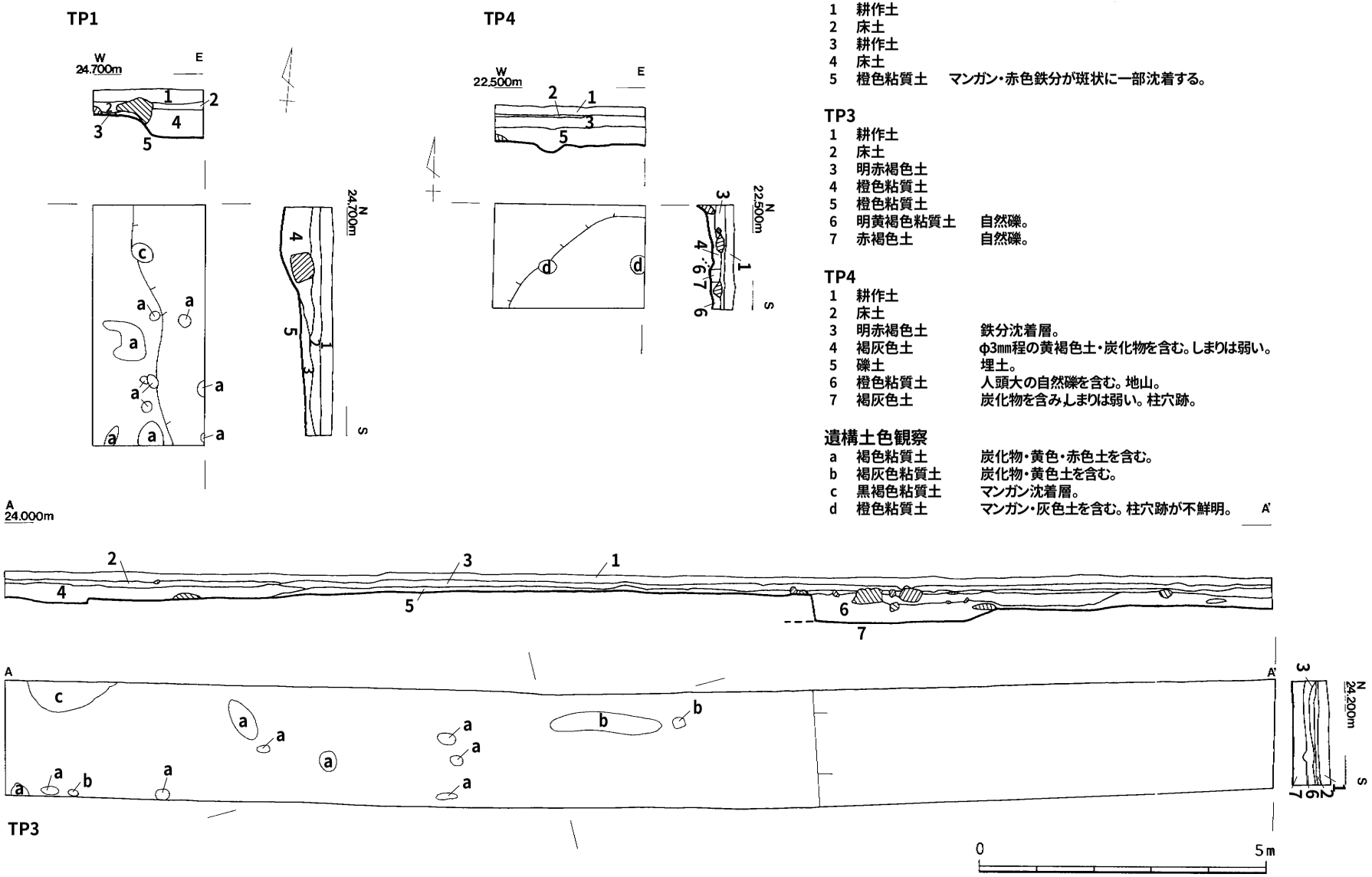
期間は平成20年11月17日～28日の９日間に実施した。試掘坑（TP）は，遺跡内の西九州自動車道建設工事に伴う調査対象地域の遺跡東部の丘陵北端，今福神社の裏手にある地区に設定を行った。調査区範囲の東からTP１（２ｍ×４ｍ＝８㎡），TP２（２ｍ×６ｍ＝12㎡），TP３（２ｍ×22ｍ＝44㎡），TP４（２ｍ×３ｍ＝６㎡）の合計70㎡の試掘坑を設置し，調査を実施した。TP１は丘陵部の東斜面，TP２・３は丘陵部の鞍部，TP４は丘陵部の西斜面の３箇所に分かれる。

層位はTP１・３・４が３層に分層が可能である。第Ⅰ層は現耕作土と鉄分沈着層，第Ⅱ層が赤褐色粘質土，第Ⅲ層は黄褐色粘質礫層である。第Ⅳ層はTP３東側にて調査を進めたものの，遺構・遺物はみられなかった。第Ⅴ層は地山となる層で，自然礫に黄褐色粘質土が入り込む層である。TP２は第Ⅰ層の単層であるが，深度基準を満たしても目的とする層まで達せなかった。

遺構はTP１・３・４の第Ⅱ層より，柱穴跡と考えられる遺構プランの確認ができた。しかし，この調査終了後，直ちに緊急発掘調査を予定していたため，遺構の掘削は進めていない。そのため，表面観察による土質の分類を行い，時期が違う遺構の展開が想定された。出土した遺物は各TPの第Ⅰ層より，縄文時代～近世までの幅広い時期の遺物が確認できた。この結果から，調査対象地区内の丘陵を中心に遺構の展開が想定されたため，継続して緊急発掘調査を進めた。　　（江上正高）



第５図　範囲確認調査試掘坑（TP）１～４配置図（Ｓ＝１/2,000）



TP1

1　耕作土
2　床土
3　耕作土
4　床土
5　橙色粘質土　マンガン・赤色鉄分が斑状に一部沈着する。

TP3

1　耕作土
2　床土
3　明赤褐色土
4　橙色粘質土
5　橙色粘質土
6　明黄褐色粘質土　自然礫。
7　赤褐色土　自然礫。

TP4

1　耕作土
2　床土
3　明赤褐色土　鉄分沈着層。
4　褐灰色土　φ3mm程の黄褐色土・炭化物を含む。しまりは弱い。
5　礫土　埋土。
6　橙色粘質土　人頭大の自然礫を含む。地山。
7　褐灰色土　炭化物を含み,しまりは弱い。柱穴跡。

遺構土色観察

a　褐色粘質土　炭化物・黄色・赤色土を含む。
b　褐灰色粘質土　炭化物・黄色土を含む。
c　黒褐色粘質土　マンガン沈着層。
d　橙色粘質土　マンガン・灰色土を含む。柱穴跡が不鮮明。

第６図　範囲確認調査試掘坑（TP）平面図・土層図（S＝1/100）

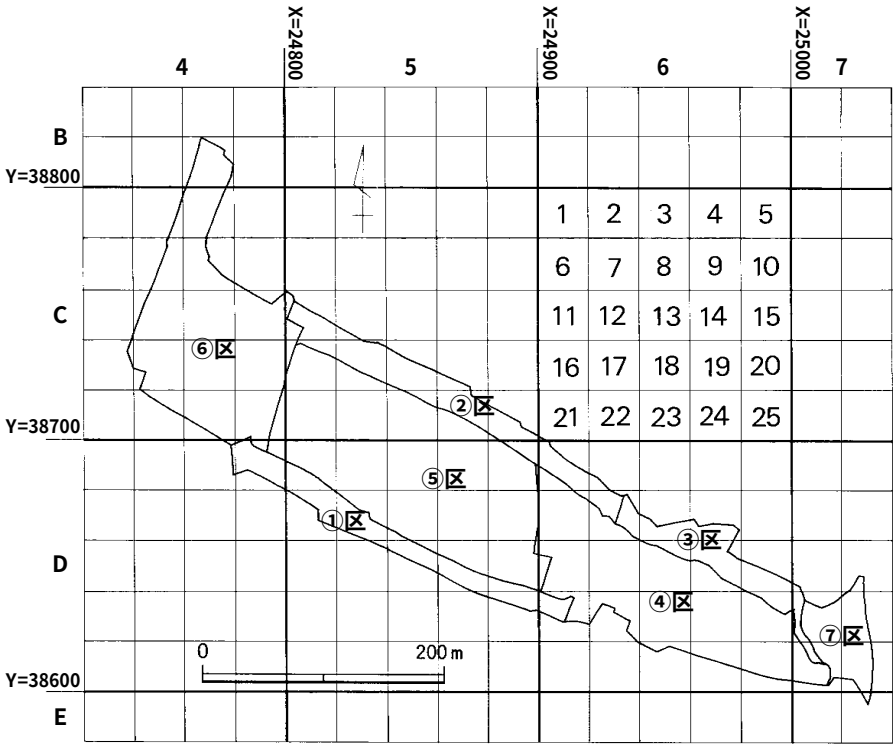
2　本調査（第７～15図　図版１～３）

（1）　調査区設定（第７図　図版１～３）

調査区の設定は，今福遺跡・中ノ瀬遺跡・八幡山城跡の３遺跡で座標系に合わせて南北を主軸とする100m方眼の大グリットを設定し，東西を１～９，南北をＡ～Ｅと符号し，さらに大グリット内を20m方眼で区画して中グリットを設定，１～25の番号を付した。この設定は，第Ⅰ層を人力掘削後に進めた。また調査区は便宜上，①～⑦区と付け作業を進めた。

個々の遺構名は，遺構の種別を表す英大文字２文字の分類記号（下記参照）で示した。小穴や柱穴，倒木痕は遺物の出土したものに限り，SP の記号を用いている。このうち，掘立柱建物跡などの遺構を構成するものについては英大文字 P の記号を付し，SP についても構成された場合は，略記号とは別に英大文字 P の記号を付し，SP の番号の変更は行っていない。

SA：柵列跡	SB：掘立柱建物跡	SC：石棺墓	SD：溝跡
SE：井戸跡	SF：五輪塔・集積遺構	SH：竪穴式住居跡	SJ：甕棺墓
SK：土坑・墓壙跡	SP：柱穴跡・小穴・倒木痕	SR：旧河道	SX：不明遺構・倒木痕



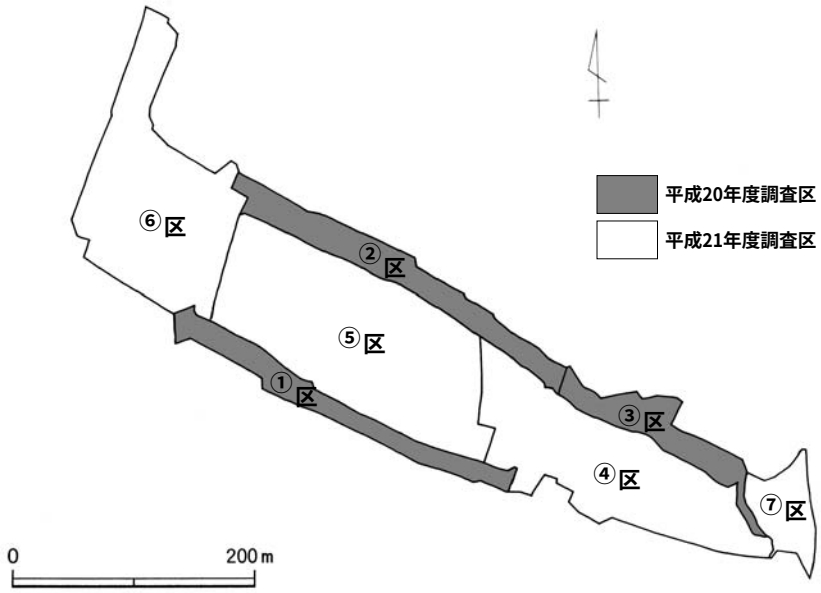
第７図　グリット配置図及び調査区位置図（Ｓ＝１/6,000）

（2）　調査年度毎の概要（第８・10図　図版１～３）

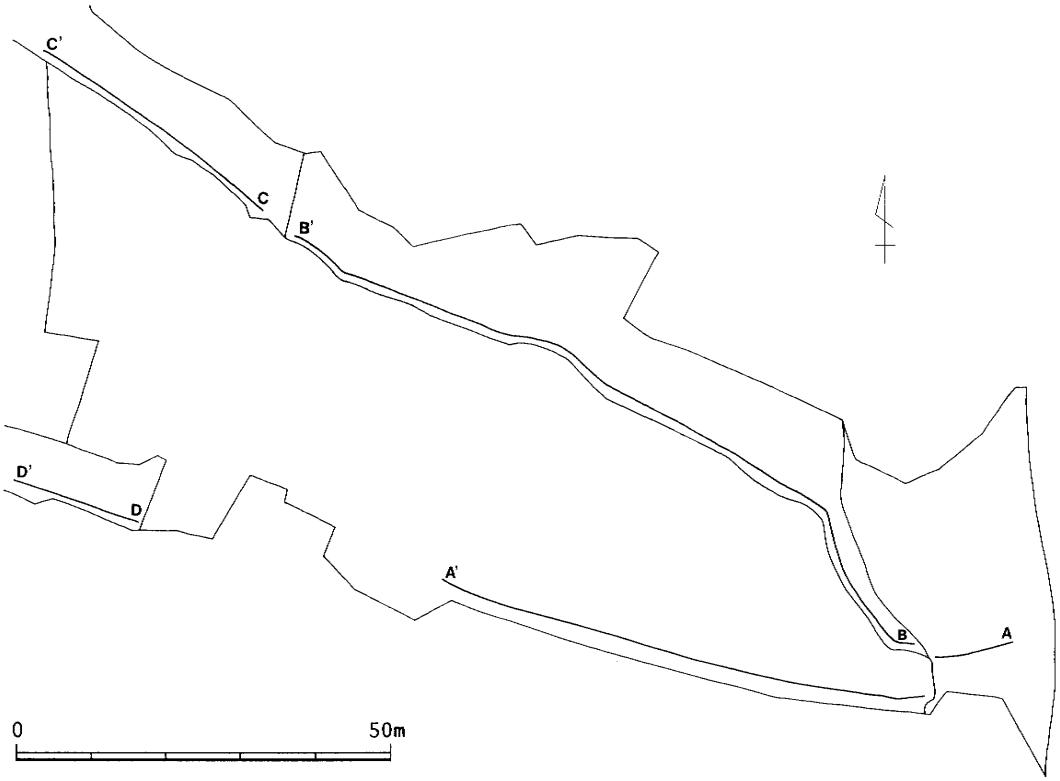
平成20年度の調査は，調査区南と北の縁部4,800㎡について実施した。調査区は①～③区に分かれ，①区は遺跡の南縁平地部，②区は北縁平地部，③区は北縁丘陵部とした。調査は，①区の西側及び②区の西側は第Ⅰ層の耕作土と圃場整備時の整地層，また旧河道内堆積礫層を重機で掘削した。その他の調査区は重機の侵入が困難なことから，耕作土より人力掘削を進め，礫層は重機掘削を行った。

確認できた遺構・遺物は，①区は第Ⅱ層の D－６－16で柱穴跡や小穴が検出され，縄文時代の石器，弥生土器，中世～近世の貿易陶磁器・近世陶磁器が出土した。②区はⅡ層の D－６－１を中心に，弥生時代と中・近世の SP・SX・柱穴跡・小穴が検出され，縄文時代の土器・石器，弥生土器，中世土

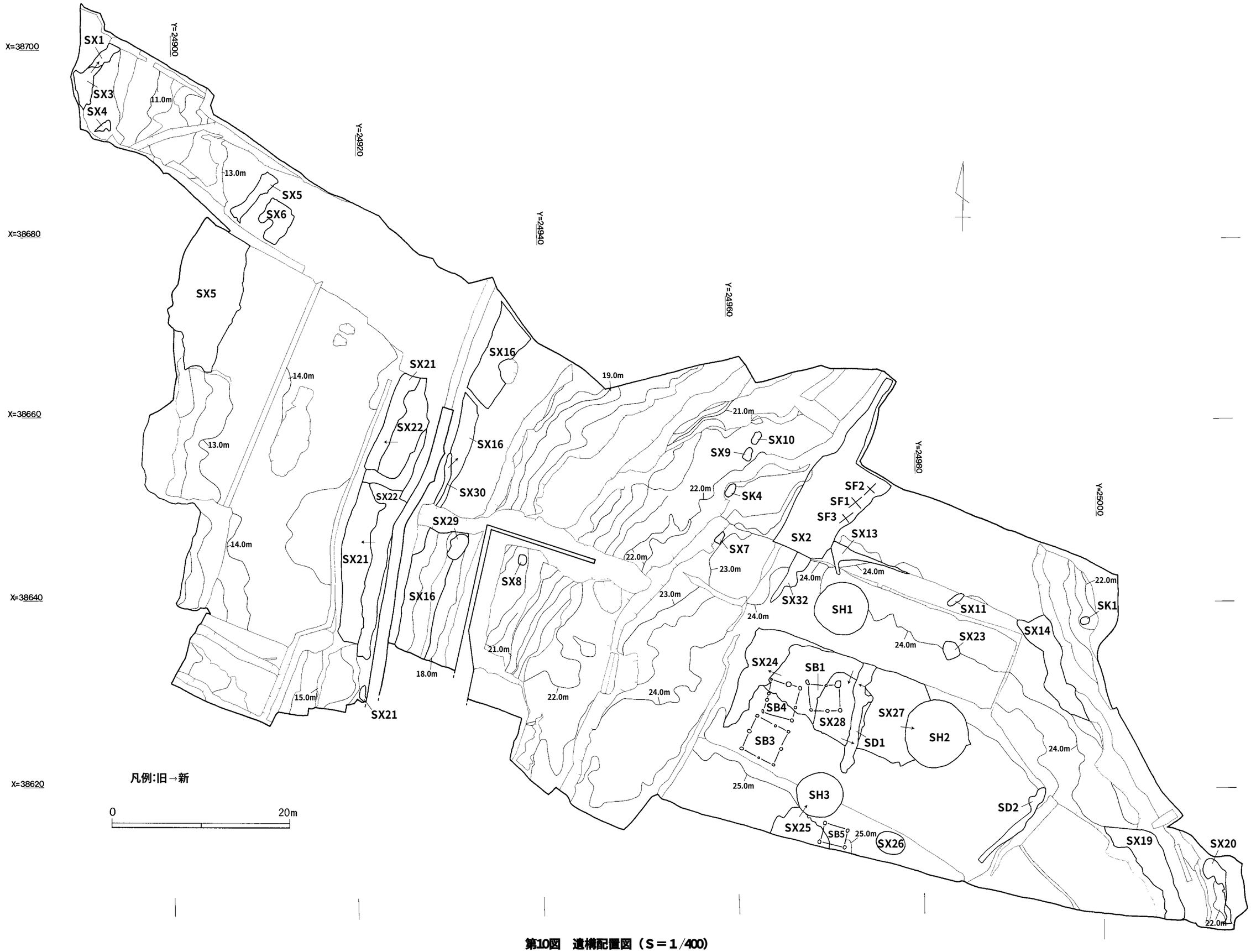
師器，黒色土器，国産陶磁器，滑石製品，貿易陶磁器，近世陶磁器が出土した。③区は第Ⅱ層の全域にわたり遺構の展開がみられ，弥生時代～近世にかけて SF・SK・SP・SX が検出された。SP は範囲確認調査と同様に，土質観察の記録を進めた。縄文時代の石器，弥生土器，中世土師器，瓦器，国産陶器，滑石製品，貿易陶磁器，近世陶磁器，近代陶磁器などが出土した。　（江上正高）



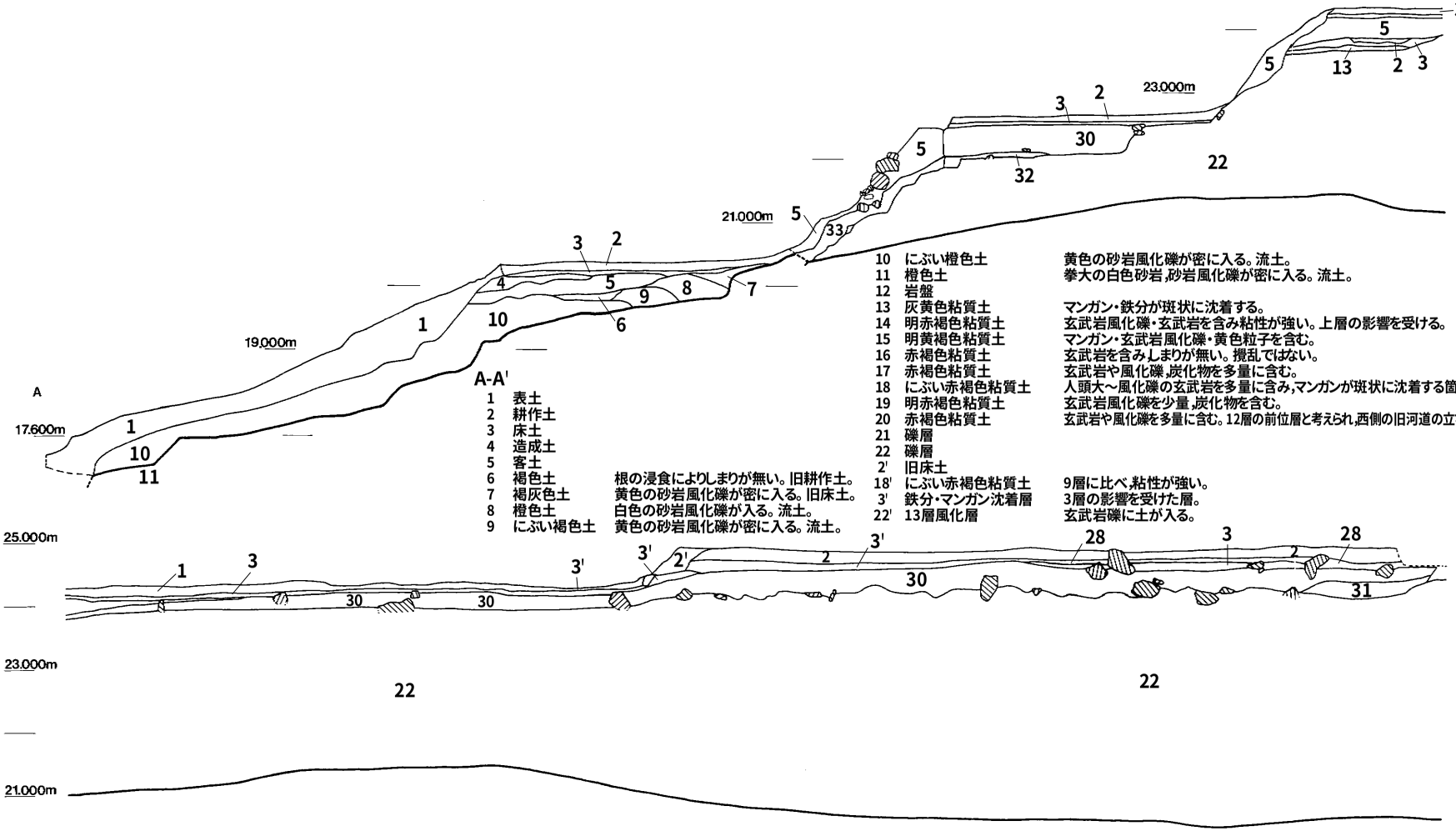
第８図　年度別調査区位置図（Ｓ＝１/6,000）



第９図　土層図位置図（Ｓ＝１/1,000）



第10図　遺構配置図（S＝1/400）

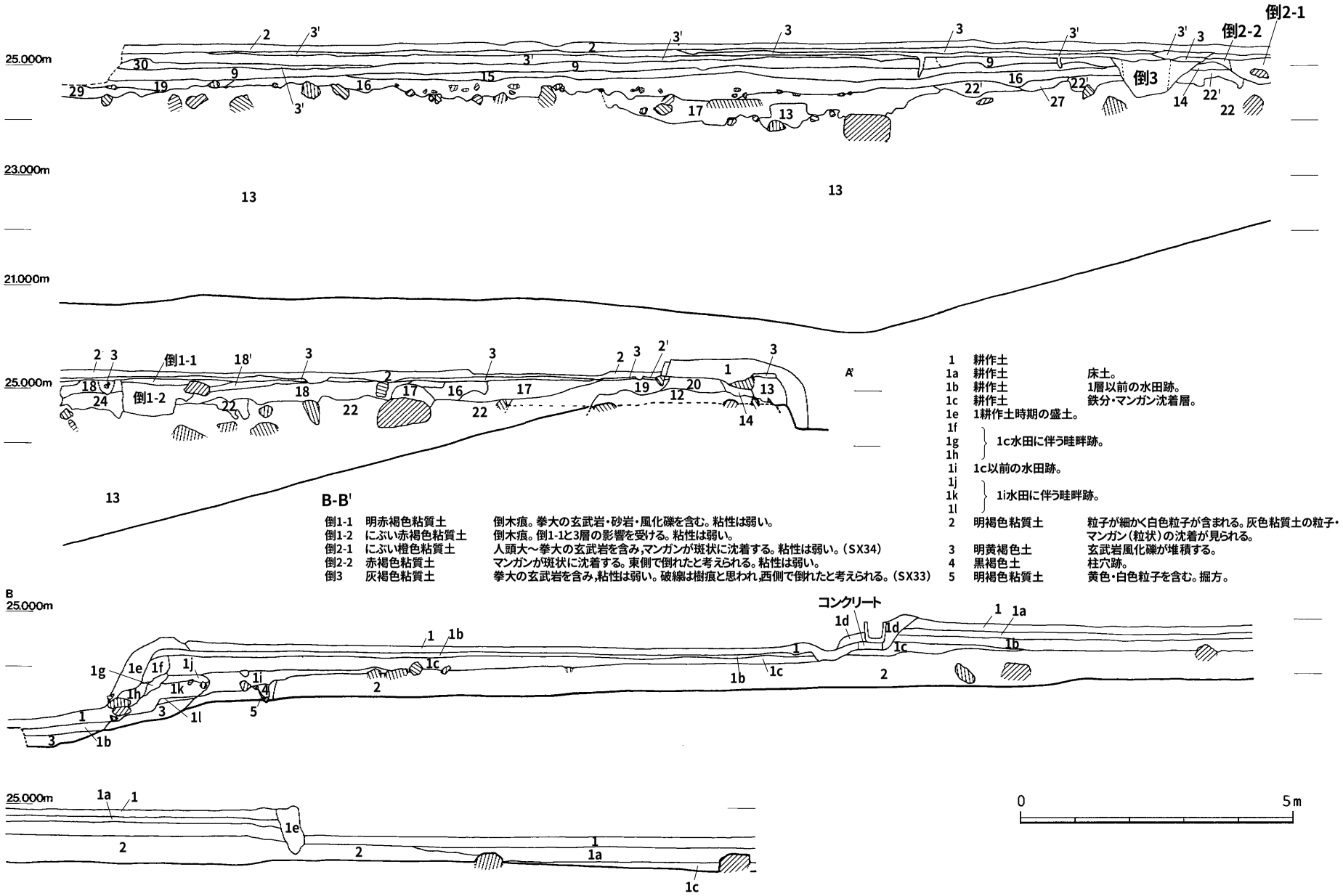


1 表土
2 耕作土
3 床土
4 造成土
5 客土
6 褐色土　根の浸食によりしまりが無い。旧耕作土。
7 褐灰色土　黄色の砂岩風化礫が密に入る。旧床土。
8 橙色土　白色の砂岩風化礫が入る。流土。
9 にぶい褐色土　黄色の砂岩風化礫が密に入る。流土。
10 にぶい橙色土　黄色の砂岩風化礫が密に入る。流土。
11 橙色土　拳大の白色砂岩,砂岩風化礫が密に入る。流土。
12 岩盤
13 灰黄色粘質土　マンガン・鉄分が斑状に沈着する。
14 明赤褐色粘質土　玄武岩風化礫・玄武岩を含み粘性が強い。上層の影響を受ける。
15 明黄褐色粘質土　マンガン・玄武岩風化礫・黄色粒子を含む。
16 赤褐色粘質土　玄武岩を含み,しまりが無い。撹乱ではない。
17 赤褐色粘質土　玄武岩や風化礫,炭化物を多量に含む。
18 にぶい赤褐色粘質土　人頭大～風化礫の玄武岩を多量に含み,マンガンが斑状に沈着する箇所がみられる。
19 明赤褐色粘質土　玄武岩風化礫を少量,炭化物を含む。
20 赤褐色粘質土　玄武岩や風化礫を多量に含む。12層の前位層と考えられ,西側の旧河道の立ち上がりである。
21 礫層
22 礫層
2' 旧床土
18' にぶい赤褐色粘質土　9層に比べ,粘性が強い。
3' 鉄分・マンガン沈着層　3層の影響を受けた層。
22' 13層風化層　玄武岩礫に土が入る。

23 明赤褐色粘質土　9層に比べ,マンガンの沈着が多くなる。倒木痕の影響が考えられる。
24 橙色粘質土　マンガンが斑状に沈着,粒子が非常に細かく,粘性が強い。
25 明黄褐色粘質土　玄武岩・玄武岩風化礫・砂岩を含む。
26 黄橙色粘質土　玄武岩・砂岩風化礫を含み,粘性が強い。
27 明黄褐色粘質土　玄武岩風化礫・赤色粒子（砂岩風化礫）を含む。
28 黄橙色粘質土　玄武岩・砂岩風化礫を含み,粘性が強い。
29 橙色粘質土　玄武岩・砂岩風化礫を含み,粘性が弱く,13層の風化礫を含む割合が19・21層と比べて多い
30 橙色粘質土　玄武岩・砂岩風化礫を含み,粘性が強い。
31 明赤褐色粘質土　粘性が強い。
32 にぶい黄褐色粘質土　橙色ブロック土が入る。（SX20）
33 褐灰色粘質土　山土。

0　5m

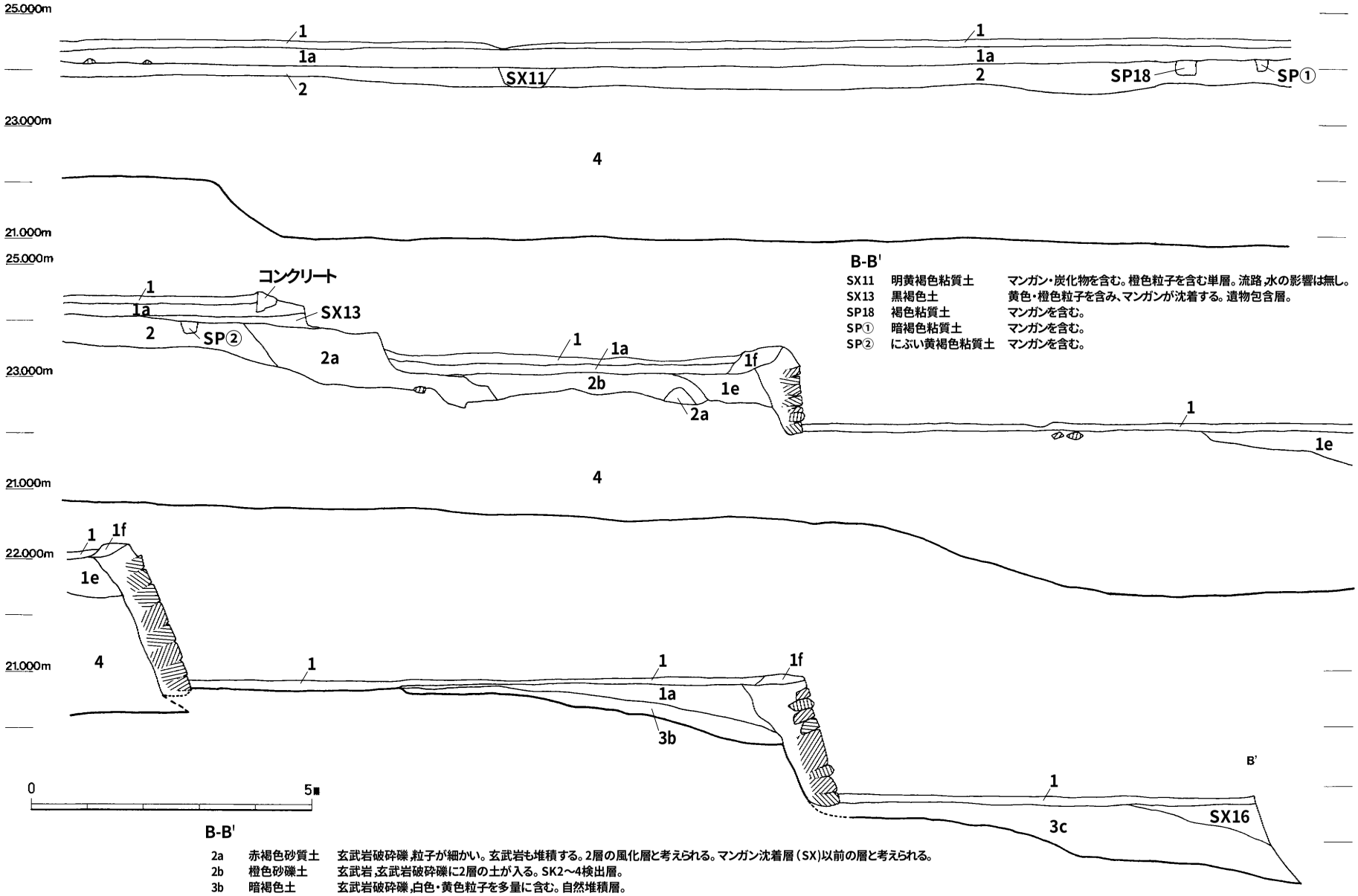
第11図　調査区土層図①（S＝1/100）



倒1-1	明赤褐色粘質土	倒木痕。拳大の玄武岩・砂岩・風化礫を含む。粘性は弱い。
倒1-2	にぶい赤褐色粘質土	倒木痕。倒1-1と3層の影響を受ける。粘性は弱い。
倒2-1	にぶい橙色粘質土	人頭大～拳大の玄武岩を含み,マンガンが斑状に沈着する。粘性は弱い。(SX34)
倒2-2	赤褐色粘質土	マンガンが斑状に沈着する。東側で倒れたと考えられる。粘性は弱い。
倒3	灰褐色粘質土	拳大の玄武岩を含み,粘性は弱い。破線は樹痕と思われ,西側で倒れたと考えられる。(SX33)

1	耕作土	
1a	耕作土	床土。
1b	耕作土	1層以前の水田跡。
1c	耕作土	鉄分・マンガン沈着層。
1e	1耕作土時期の盛土。	
1f, 1g, 1h	1c水田に伴う畦畔跡。	
1i	1c以前の水田跡。	
1j, 1k, 1l	1i水田に伴う畦畔跡。	
2	明褐色粘質土	粒子が細かく白色粒子が含まれる。灰色粘質土の粒子・マンガン(粒状)の沈着が見られる。
3	明黄褐色土	玄武岩風化礫が堆積する。
4	黒褐色土	柱穴跡。
5	明褐色粘質土	黄色・白色粒子を含む。掘方。

第12図　調査区土層図②（S＝1/100）



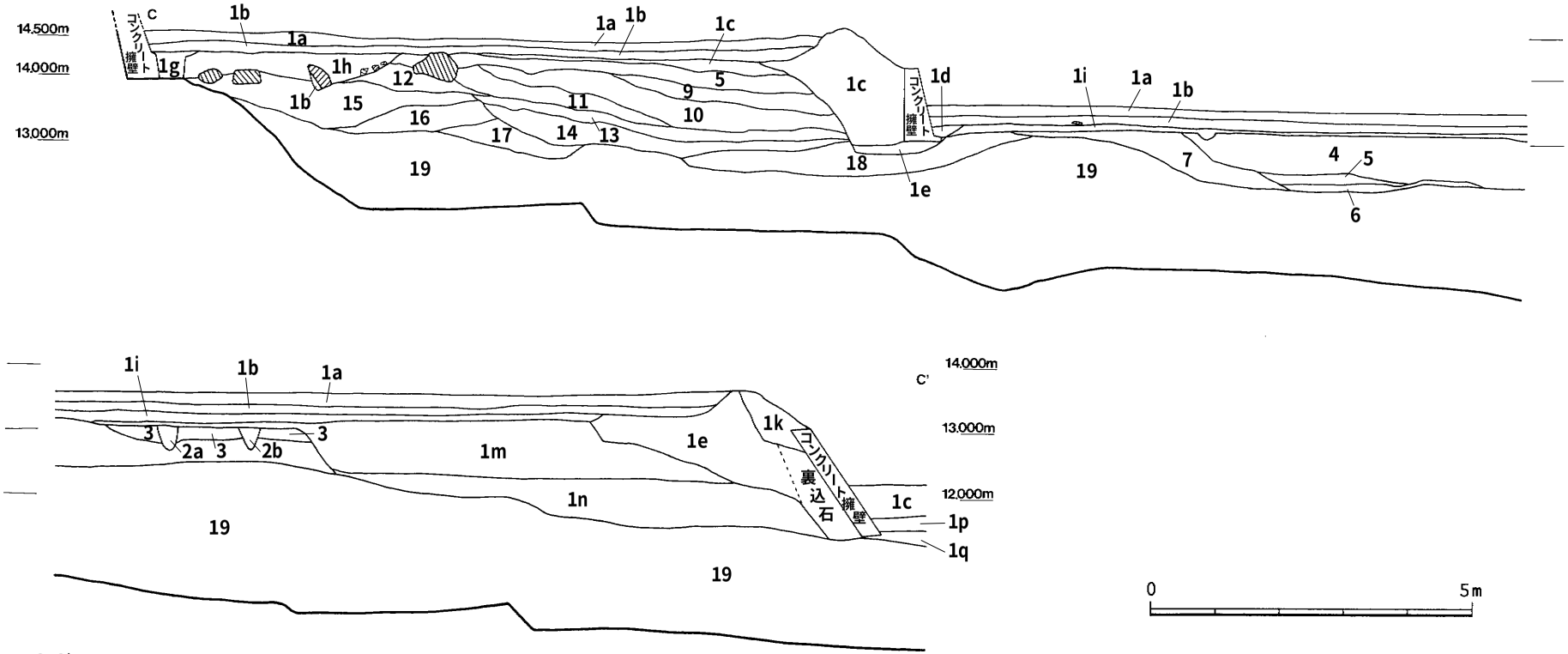
B-B'

SX11	明黄褐色粘質土	マンガン・炭化物を含む。橙色粒子を含む単層。流路,水の影響は無し。
SX13	黒褐色土	黄色・橙色粒子を含み、マンガンが沈着する。遺物包含層。
SP18	褐色粘質土	マンガンを含む。
SP①	暗褐色粘質土	マンガンを含む。
SP②	にぶい黄褐色粘質土	マンガンを含む。

B-B'

2a	赤褐色砂質土	玄武岩破砕礫,粒子が細かい。玄武岩も堆積する。2層の風化層と考えられる。マンガン沈着層（SX)以前の層と考えられる。
2b	橙色砂礫土	玄武岩,玄武岩破砕礫に2層の土が入る。SK2～4検出層。
3b	暗褐色土	玄武岩破砕礫,白色・黄色粒子を多量に含む。自然堆積層。
SX16	黒褐色粘質土	橙・黄色粒子,マンガン沈着が見られる。粒子は細かく粘性は強い。下層は自然礫が少量見られるが,分層は出来なかった。自然堆積層。
3c	赤褐色粘質土	黄色粒子,玄武岩破砕礫,風化礫が堆積。粒子は細かく,丘陵部からの流れ込みと考えられる。
4	玄武岩堆積層	礫層。

第13図　調査区土層図③（S＝1/100）



C-C'

1a	表土		造成土
1b	赤褐色土		
1c	褐色礫層	コンクリート擁壁の裏込めの礫。	
1d	褐色礫層	φ1cm以下の礫を少量含む。	
1e	にぶい褐色土	φ5cm以下のレンガが混入する。	
1f	褐色土		
1g	褐灰色土	φ1～10cmの礫を少量含む。	
1h	褐色土	マンガンを少量含む。	
1i	褐色土	鉄分を少量含む。	
1j	褐色土	マンガンを少量含む。	
1k	赤褐色土		
1l	にぶい黄褐色土	φ5～25cmの礫と鉄分を少量含む。	
1m	礫層	φ20～50cmの礫層	
1n	にぶい黄褐色粘質土	φ3cm以下の礫を少量含む。	
1o	赤褐色土	φ10cm以下の礫を少量含む。	
1p	褐灰色土	φ3cm以下の礫を少量含む。	
1q	明黄褐色土		
2a	黒褐色土	φ3cm以下の褐色土のブロックを少量含む。	
2b	黒褐色土	φ1cm以下の橙色粒子を多く含む。	
3	暗褐色土	マンガン沈着層。SX5（遺物包含層）近世陶器,弥生土器出土。	
4	明褐色粘質土	マンガンを少量含む。φ1cm以下の黄褐色土のブロックを少量含む。	
5	橙色粘質土	粘性は中。	
6	明褐色粘質土	φ1cm以下の黄褐色土のブロックを少量含む。弥生土器出土。	
7	にぶい橙色砂質土		
8	にぶい褐色土	マンガンを多く含む。	
9	橙色土		
10	明褐色土		
11	橙色土		
12	明褐色土	φ5cmの礫を少量含む。	
13	にぶい橙色土		
14	明褐色粘質土		
15	明褐色礫層	マンガンを多く含む。φ5cm以下の明褐色土のブロックを少量含む。	
16	褐色礫層	φ10cm以下の礫を含む。	
17	明褐色粘質土	φ3cmの礫を含む。	
18	青灰色粘土	粘質が強い。	
19	礫層	φ10cm～1mの礫層。	

第14図　調査区土層図④（S＝1/100）

平成21年度は，調査区の中央部12,759㎡について実施した。調査区は④～⑦区に分かれ，④区は遺跡の丘陵部，西斜面，西斜面部の３区画，⑤区は東縁平地部，⑥区は西縁平地部，⑦区は東斜面部とした。調査は，区により第Ⅰ層と旧河道内堆積礫層も重機で掘削した後に開始した。また，⑦区は急傾斜地のため安全確保を優先し，２本のトレンチを調査区内に設定後調査を進め，岩盤層まで人力掘削後，重機掘削を行った。

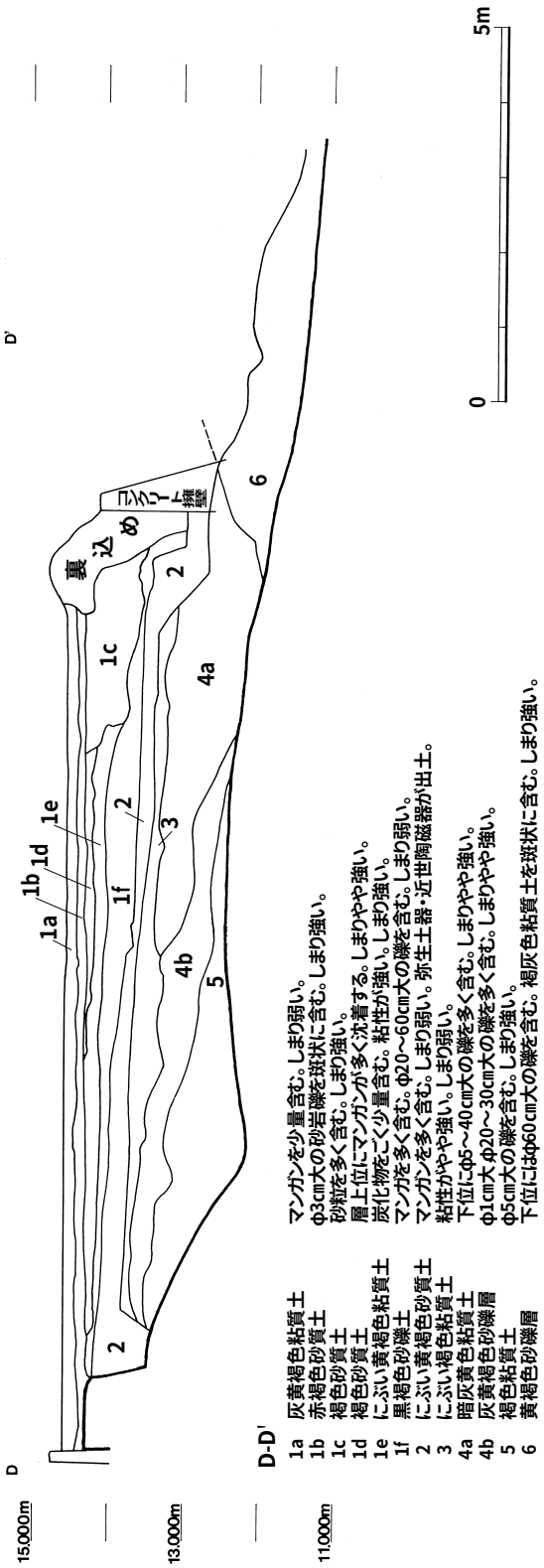
遺構は④区の第Ⅱ・Ⅲ層と⑤区の第Ⅱ層にて確認できた。④区は弥生時代～近世にかけてのSB・SD・SH・SK・SP・SXが検出された。SPは平成20年度調査同様に調査を進めた。なお，土質と出土遺物を検討し，時代に伴った分類を行った。縄文時代の土器・石器・弥生土器・中世土師器・国産陶器・貿易陶磁器・滑石製品・近世陶磁器が出土した。⑤区はC－５－１にて近世のSRが検出され，縄文時代の石器，弥生土器，中世土師器，国産陶器，貿易陶磁器，近世陶磁器が出土した。⑥・⑦区は遺構が確認できなかったものの，第Ⅰ層より縄文時代の石器，弥生土器，中世土師器，滑石製品，国産陶器，貿易陶磁器，近世陶磁器が出土した。

また，今年度の調査で検出された遺構を中心に，弥生時代～近世に至る今福町周辺の人々の暮らしの一端を県民の皆様に見ていただき，郷土の埋蔵文化財についての理解と協力を得ることを目的とした現地説明会を，平成22年１月31日に実施した。

（3） 土　層

（第９・11～15図　図版１～３）

土層は丘陵部の断面を主に写真・図面の記録を行い，その他の箇所については，必要に応じて写真記録を行った。写真・図面の記録



第15図　調査区土層図⑤（S＝1/100）

を行った箇所は４区間に分かれ，A－A′間（⑦区と④区丘陵部の調査区南側），B－B′間（③区南側の丘陵西側斜面～丘陵部），C－C′間（②区南側の丘陵西側斜面），D－D′間（①区南側）の堆積状況を記録した。基本層序は試掘調査の所見と照らし合わせ，５層に分けられる。第Ⅰ層は近・現代耕作土及びそれに関する盛土である。第Ⅱ層は遺構検出層とし，各区で堆積の状況に違いがみられる。第Ⅲ層は玄武岩風化礫を含む赤褐色粘質土を主体とする層である。第Ⅳ層は玄武岩を含む礫層である。第Ⅴ層は第三紀層の砂岩盤である。第Ⅱ・Ⅲ層は遺構検出層に対する地山層である。

A－A′間は東側斜面部において平坦部がみられるが，これは現・近代の耕作地拡幅の影響を受けている。そのため，深度は浅く第Ⅰ層を取り除くと第Ⅴ層が確認できた。丘陵部でも現・近代の耕作地拡幅による削平がみられるものの，第Ⅱ層を形成する赤褐色粘質土が確認できた。また，丘陵部は南→北へ傾斜を呈するが，一部で第Ⅲ層の堆積が確認できた。この層は人為的行為が認められず，第Ⅱ層で検出した遺構の時期より以前に自然堆積した層と位置付けられる。第Ⅲ層より下層は第Ⅳ層が確認でき，堆積は厚さ約３ｍを測る。

B－B′間は調査区の設定上，丘陵部の一部は南北方向の堆積を記録している。A－A′間と比べ現・近代の耕作地拡幅による削平の影響を受けており，第Ⅱ層の堆積は厚くない。西側斜面はA－A′間と同様に，現・近代の耕作地拡幅による削平を受ける。そのため，一部で第Ⅰ層の直下に第Ⅴ層が確認された。

C－C′間は第Ⅰ層を除去すると第Ⅱ層が確認されたが，この層の土質は一様ではない。これは，土層観察の結果，斜交葉理が認められることから，旧河道の影響及びそれに伴う廃絶の状況による堆積と考えられた。また，C－C′間より西側は第Ⅰ層を取り除くと第Ⅳ層と下層は第Ⅴ層が確認され，東側より続く堆積層が途切れる。礫原の展開が認められることから，今福川の氾濫原と捉えられる。

D－D′間は限られた土層であるが，第Ⅰ層除去後，第Ⅱ層が確認できた。この層は東→西へ傾斜が確認できるものの，攪乱の影響を受けている。この層より下層は，第Ⅳ層の堆積が確認できる。

⑤・⑥区の土層は写真記録を行った。この両区は，第Ⅰ層除去後は第Ⅴ層の堆積で一面が覆われる。これは，旧今福川の氾濫が繰り返し行われ，礫を主体の堆積が行われたと考えられる。そのため，旧今福川の氾濫原として生活が営まれたとしても，新たな氾濫により破壊されたものと想定される。

丘陵部を中心とした土層の観察の結果，本遺跡の地形の形成要因は次が考えられる。１つは，B－B′間及びC－C′間の斜交葉理の西側が認められないのは，旧今福川が時期の変化に伴い東→西へ丘陵を削平し変遷したためと考えられる。そのため，遺跡が立地する丘陵は，南高北底へ傾斜する地形と旧今福川の度重なる氾濫などの影響を受けて形成したと考えられる。また，今福川流域でみると，八幡山－中ノ瀬遺跡丘陵部－坂野免・仏坂免までの標高で繋がり，そこに旧今福川や八幡山西側を流れる旧住ノ江川による氾濫及び削平の繰り返しによって現況の地形が形成されたと推測される。

（江上正高）

Ⅳ　遺構・遺物

１　弥生時代（第16～32・48図　第３～11表　図版４～11・18・29）

（１）　竪穴式住居跡（第16～22図　第３～５表　図版４～９）

・SH１（第16・17図　第３表　図版４～７）

SH１はD－６－14にて確認された。このSHは炉の作り替えが確認され，SH１（新）とSH１（古）に分けて調査を進めた。

SH１（新）の形態は円形を呈し，計測値は長軸5.6m，短軸5.56mを測る。床面は削平の影響を受けている。屋内の施設は，２本の主柱穴と炉を備える。炉は床面中央より北側に位置する。規模は長軸約2.7m，短軸約2.1mの楕円形を呈する。検出時は炭化物の広がりと赤褐色を呈する焼土の範囲を確認した。炭化物は北方向に広がり，その内側に焼土が弧を描く範囲が認められ，燃焼箇所と灰のかきだしが考えられる。その堆積は0.1mと薄く，６層に分層が可能である。主柱穴の径は小さく，深度も浅い。P２は作り直しが行われたと考えられる。計測値はP１の径が0.35m，深度は0.37m，P２の径が0.55m，深度は0.35mである。

SH１（古）の形態及び主柱穴はSH１（新）と同じであるが，西側の壁面の高さが0.3m程残存する。屋内の施設は，周溝，炉，土坑を備える。周溝は床面の周囲に巡り，規模は幅0.6m，深度0.15mを測る。炉（古）は中央より南側に位置するものの，北東側において炉（新）の削平を受ける。残存する炉跡の計測値は，長軸2.9m，短軸1.8mの隅丸方形を呈する。堆積は薄く，厚さ0.4mを測る。検出時は炭化物と焼土の範囲を確認したものの，焼土は少なく，炭化物を多く含む。土坑跡は炉跡の東側に位置し，隅丸方形を呈する。規模は長軸1.7m，短軸1.35m，深度0.49mを測る。堆積は５層に分層が可能で，南西側より３層が入り，１・２層が灰色を呈する。被熱を受けた形跡は認められない。床面の土壌の洗浄を行ったが，出土遺物は認められなかった。

また，炉（新）・（古）で検出した炭化材は第Ⅳ章－２で述べる分析を行った。

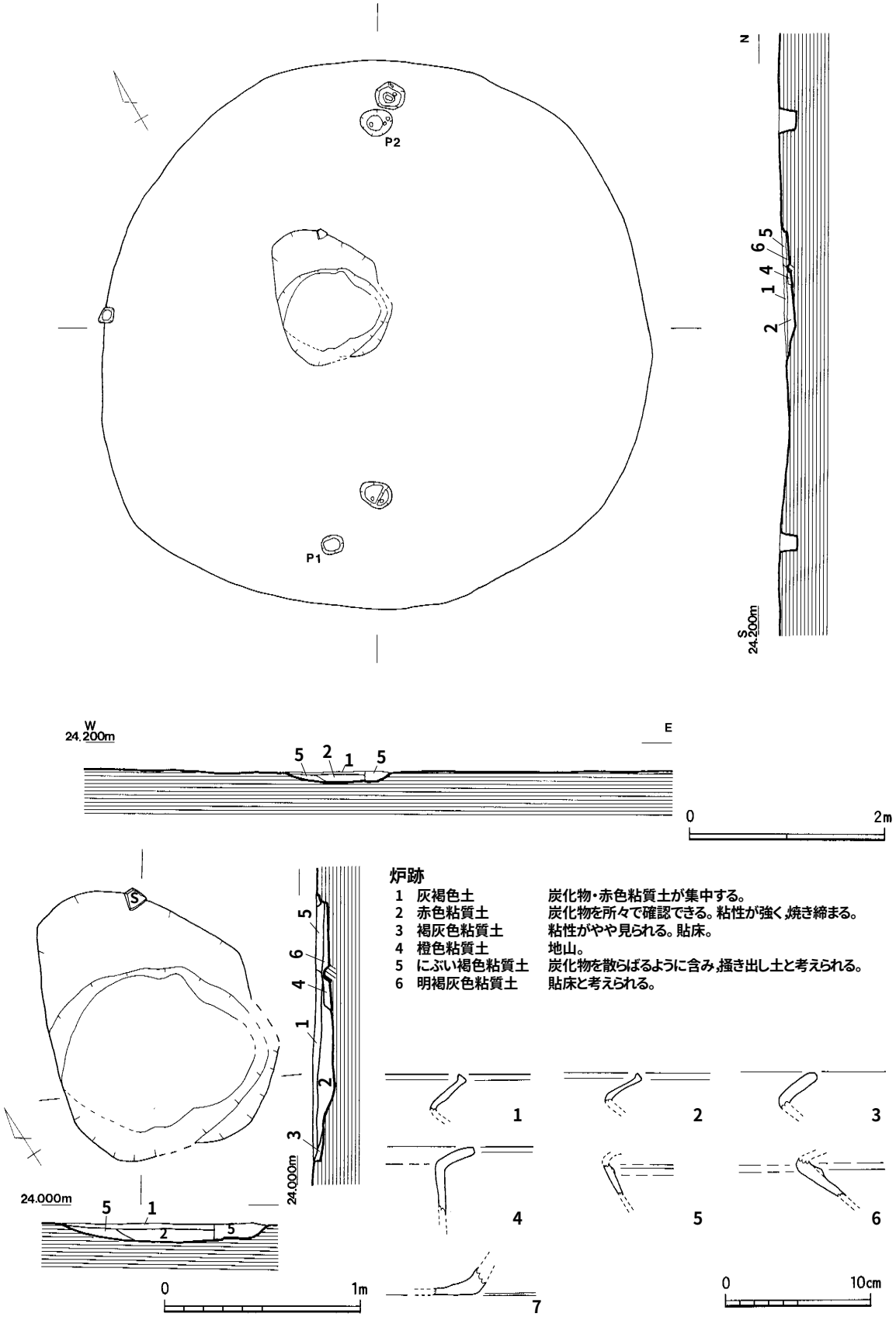
出土遺物

１は口縁部が残存する甕で，断面が三角形の貼付けを口唇部に施す。器面は磨滅が著しい。**２**は口縁部が残存する甕で，断面が三角形の貼付けを口唇部に施す。器面は磨滅が著しい。**３**は口縁部が残存する甕で，器壁が厚く，器面は磨滅が著しい。**４**は口縁部～体部上半まで残存する甕である。**５**・**６**は頸部～体部上半が残存する壺である。器面の磨滅が著しいが，断面が三角形の突帯を一条巡らす。**６**は外面の一部が黒褐色を呈し，煮炊き時に付着したと考えられる。**７**は甕の底部である。

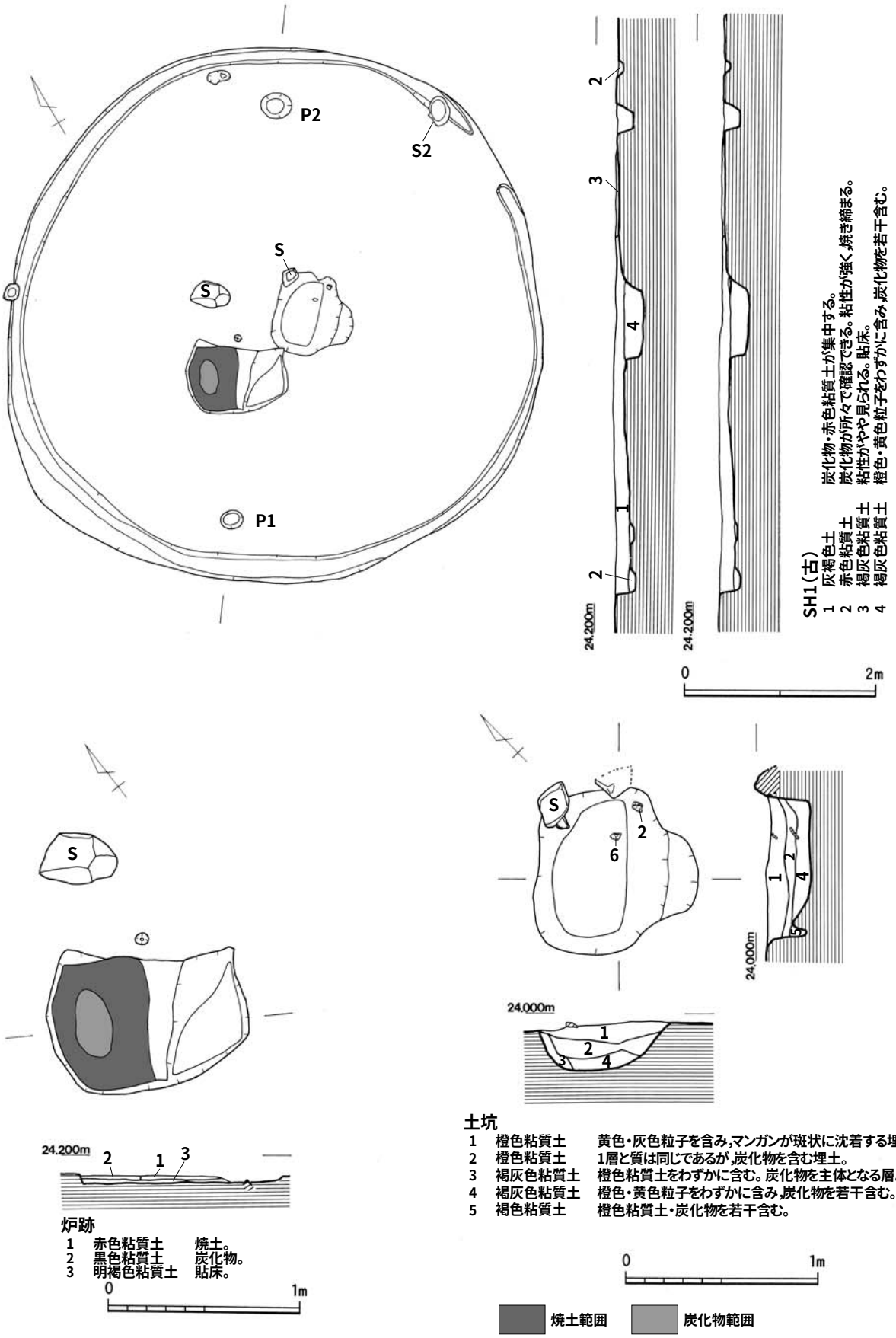
以上よりSH１（古）は中期後半頃，SH１（新）は中期後半以降に位置付けられる。

・SH２（第18～20図　第４表　図版７・８）

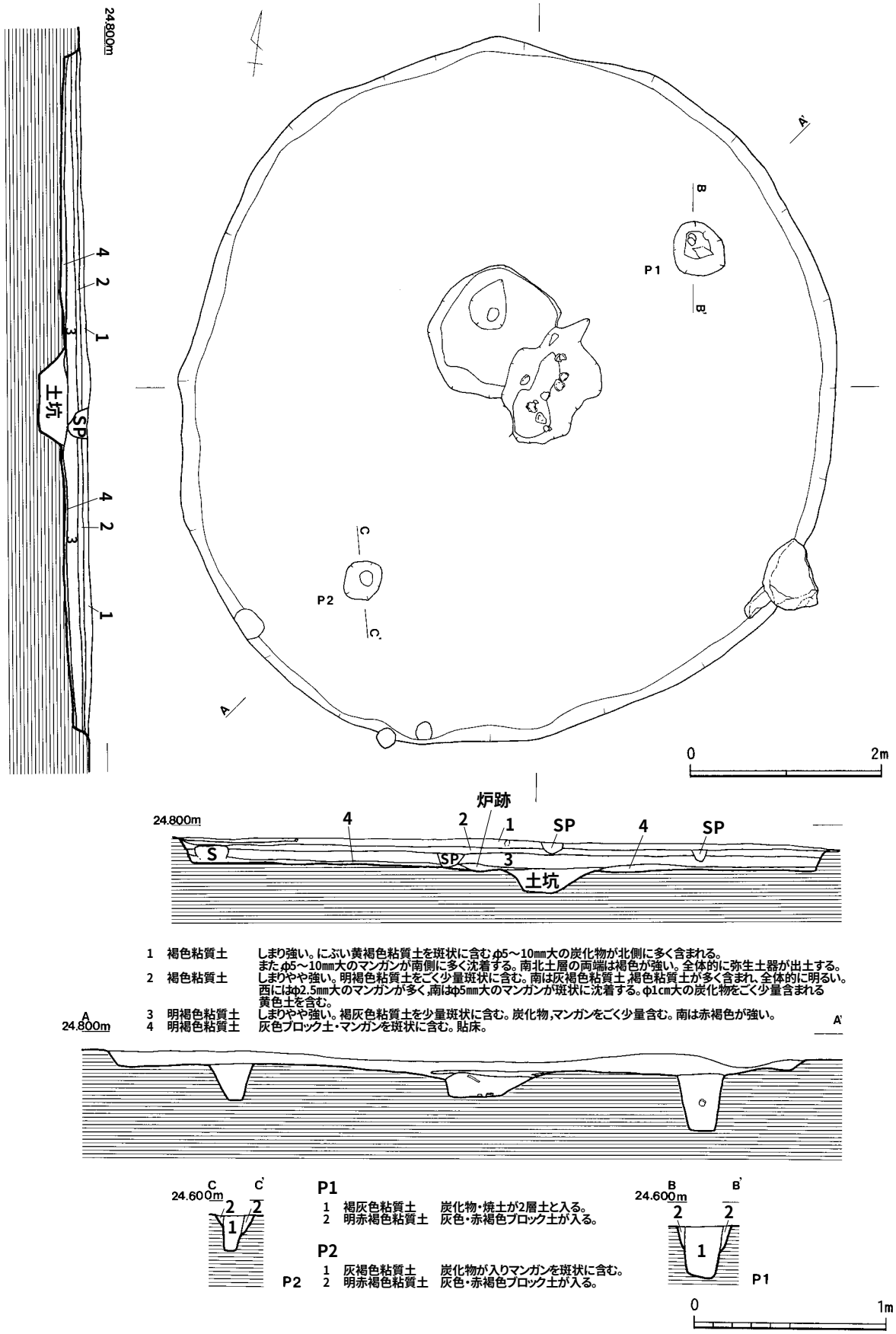
SH２はD－６－20にて確認された。形態は円形を呈し，計測値は長軸7.3m，短軸6.82mを測る。土層は４層に分層が可能で，検出面から床面までの深度は0.22mを測る。屋内の施設は，２本の主柱穴と主柱穴の間に炉跡と土坑跡を備える。炉跡は中央より北側に位置する。規模は長軸1.4m，短軸1.1mの隅丸方形を呈する。検出時は赤褐色を呈する焼土の範囲を確認した。焼土は北西方向に広がり，堆積は0.9mと薄い。土坑跡は床面の中央に位置し，形態は不定形である。堆積は４層に分層が可能で，被熱の形跡は認められない。床面は灰色ブロック土を主体とした貼床が施され，厚さは0.3mと薄い。主柱穴の計測値はP１の径が0.38m，深度0.35mを測り，隅丸方形を呈する。P２の径が0.55m，深度0.31mを測り，隅丸方形を呈する。床面及び土坑跡の土壌の洗浄を行った。その結果，



第16図　SH１(新)平面図・土層図（S＝1/60），炉跡平面図・土層図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）



第17図　SH１（古）平面図・土層図・断面見通図（S＝1/60），
炉跡・土坑跡平面図・土層図（S＝1/30）



1 褐色粘質土 しまり強い。にぶい黄褐色粘質土を斑状に含む。φ5～10mm大の炭化物が北側に多く含まれる。
また φ5～10mm大のマンガンが南側に多く沈着する。南北土層の両端は褐色が強い。全体的に弥生土器が出土する。

2 褐色粘質土 しまりやや強い。明褐色粘質土をごく少量斑状に含む。南は灰褐色粘質土,褐色粘質土が多く含まれ、全体的に明るい。
西にはφ2.5mm大のマンガンが多く,南はφ5mm大のマンガンが斑状に沈着する。φ1cm大の炭化物をごく少量含まれる
黄色土を含む。

3 明褐色粘質土 しまりやや強い。褐灰色粘質土を少量斑状に含む。炭化物,マンガンをごく少量含む。南は赤褐色が強い。

4 明褐色粘質土 灰色ブロック土・マンガンを斑状に含む。貼床。

第18図 SH２平面図・土層図・断面見通図（S＝1/60）

番号	遺構(SH1)	種類	器種	法量(cm)( )は復元径			調整		焼成	色調		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	新	弥生土器	甕	－	－	2.5	磨滅	ナデ	やや良	5YR3/1 黒褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石･石英
2	新	弥生土器	甕	－	－	2.1	磨滅	磨滅	やや良	2.5YR5/8 明赤褐色	5YR4/1 褐灰色	やや精緻 長石･石英
3	新	弥生土器	甕	－	－	2.6	磨滅	ナデ	やや良	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	やや精緻 長石･石英
4	古	弥生土器	甕	－	－	4.7	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR8/2 灰白色	やや精緻 長石･石英･黒曜石
5	新	弥生土器	壺	－	－	2.3	ナデ	磨滅	やや良	2.5YR6/1 黄灰色	2.5YR7/3 灰黄色	やや精緻 長石･石英･片岩
6	新	弥生土器	壺	－	－	2.7	ナデ	磨滅	やや良	5YR4/8 赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石･石英･黒色粒子
7	新	弥生土器	甕	－	－	1.9	ナデ	ナデ	やや良	10YR7/1 灰白色	10YR8/4 浅黄橙色	やや精緻 長石･石英･片岩

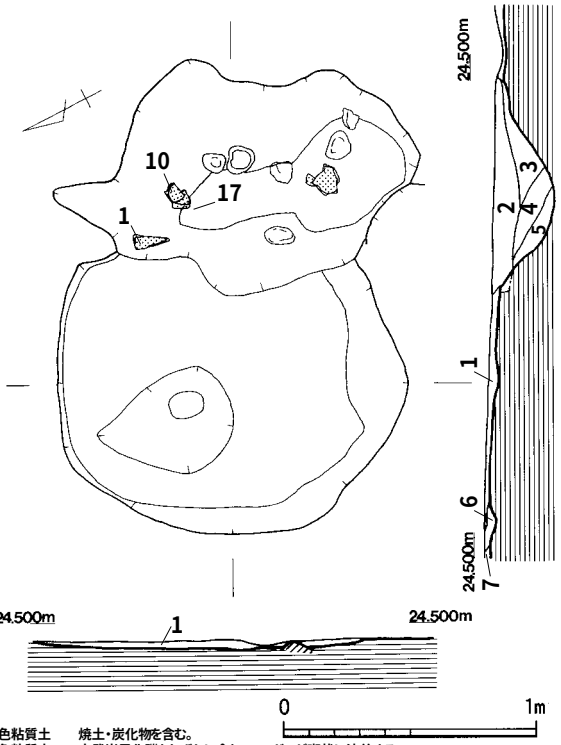
第３表　遺物観察表（SH１）

炭化物と第Ⅶ章－７で述べるアズキ類の種子を確認できた。また，炉跡から検出した炭化材は第Ⅶ章－２で述べる分析を行い，P１から検出した炭化材は第Ⅶ章－５で述べる分析を行った。SH 内遺構の新旧関係（旧→新）は，貼床→土坑・主柱穴→炉で，遺構の新旧関係は SX27→SH２である。

出土遺物

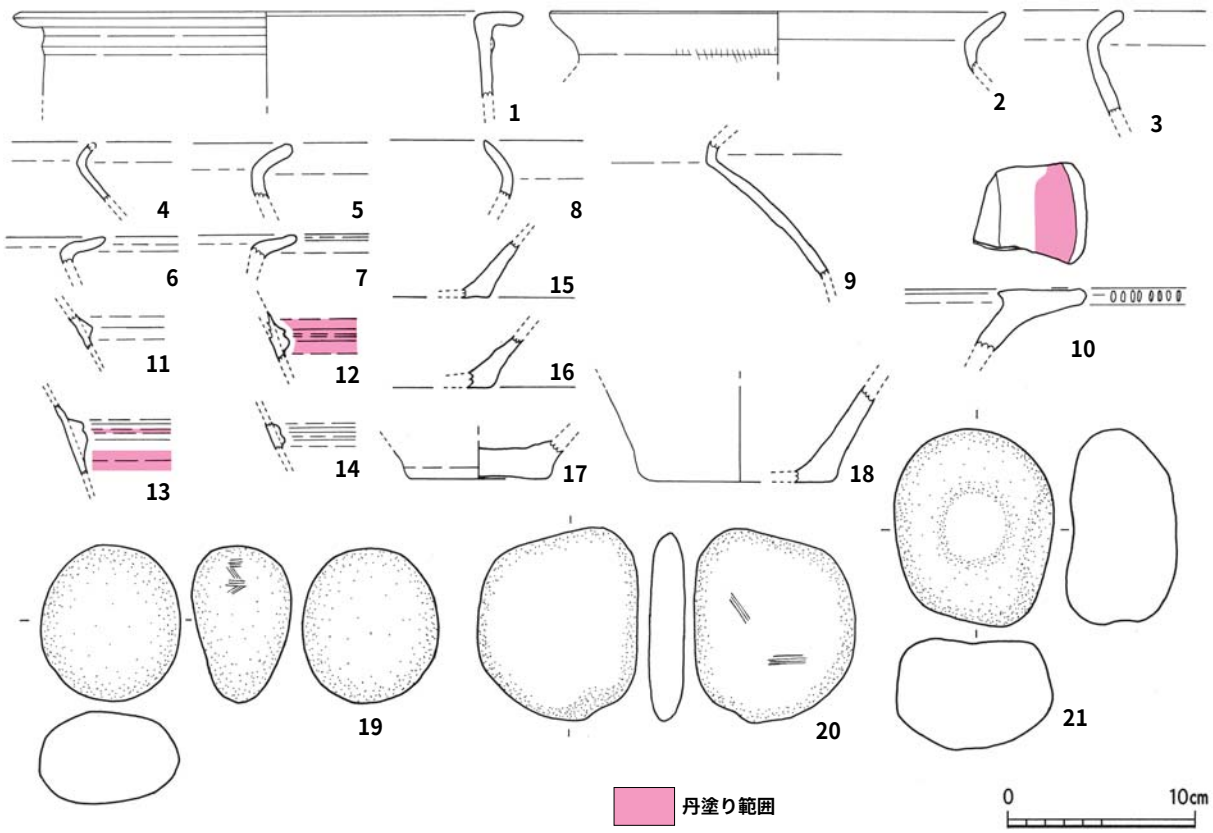
1は口縁部から体部下半まで残存する甕である。口唇部は黒褐色を呈し，頸部下に断面が三角形の低い突帯が一条巡る。**2**は口縁部から頸部まで残存する甕である。内面は磨滅が著しいが，外面の頸部にタテハケが施される。**3**は口縁部から体部下半まで残存する甕である。器面は磨滅が著しい。**4**は口縁部から体部上半まで残存する甕である。口唇部は欠損し，器面の磨滅が著しい。**5**は口縁部から体部上半まで残存する甕である。**6**は口縁部が残存する甕である。口唇部は黒褐色を呈し，形態は斜め上方へ摘み上げる。**7**は口縁部が残存する甕である。器面の磨滅が著しい。**8**は口縁部が湾曲する複合口縁壺である。器面の磨滅が著しい。**9**は頸部から体部上半まで残存する壺である。**10**は口縁部から体部上半まで残存する高坏である。口唇部は刻み目，口縁部は丹塗りを施す。**11**は壺の胴部である。器面は磨滅が著しいが，外面に断面が三角形の突帯を一条巡らす。**12**は壺の胴部である。器面は磨滅が著しいが，外面は「M」字状の突帯を巡らせ，丹塗りを施す。**13**は壺の胴部で，器面は磨滅が著しい。外面に「M」字状の突帯を巡らせ，一部に丹塗りを施した痕跡が認められる。**14**は壺の胴部である。器面の磨滅が著しいが，外面に低い「M」字状の突帯を巡らす。**15・16**は内・外面の磨滅が著しい底部である。**17**は底部で外底は均一ではなく，若干の凹凸が認められる。**18**は甕の底部で，外底は平底を呈する。**19**は磨石である。柱穴跡の最下層より出土したことから，埋納及び二次利用した根石とみられる。**20**は安山岩製の台石と考えられる。器面は擦過が確認できるものの状態は良好である。**21**は安山岩製の台石と考えられる。器面は擦過が確認でき，凹みがみられる。20・21は住居跡床面より出土した。

以上より SH２の時期は，弥生時代中期後半頃に位置付けられる。



1　赤色粘質土　焼土･炭化物を含む。
2　褐色粘質土　玄武岩風化礫をわずかに含む。マンガンが斑状に沈着する。
3　明褐色粘質土　灰色土をごくわずかに混じる。マンガンがごくわずかに沈着する。
4　褐色粘質土　しまりはやや弱い。
5　暗褐色粘質土　しまりはやや弱い。炭化物がφ2～3cm大のブロックで混じる。
6　黒褐色粘質土　しまりは強い。玄武岩風化礫を少量含む。燃焼の際に焼けたものと考えられる。
7　明褐色粘質土　灰色ブロック土,マンガンが斑状に含む。貼床。

第19図　SH２炉跡・土坑跡平面図・土層図（S＝1/30）



第20図　SH２出土遺物（S＝1／4）

番号	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	弥生土器	甕	(22.0)	－	4.6	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/2 灰褐色	5YR6/8 橙色	やや精微 長石･石英	
2	弥生土器	甕	(24.0)	－	3.3	タテハケ/磨滅	磨滅	やや良	5YR5/3 にぶい赤褐色	5YR4/1 褐灰色	やや精微 長石･石英	
3	弥生土器	甕	－	－	6.6	タテハケ/ナデ	ナデ	やや良	7.5YR5/3 にぶい褐色	2.5YR4/1 黄灰色	やや精微 長石･石英･片岩･黒色粒子	
4	弥生土器	甕	－	－	3.0	ナデ/磨滅	磨滅	やや良	2.5YR3/1 暗赤灰色	5YR2/1 黒褐色	やや精微 長石･石英	
5	弥生土器	甕	－	－	2.9	ナデ	ナデ	やや良	5YR4/1 褐灰色	5YR4/4 にぶい赤褐色	やや精微 長石･石英･黒色粒子	
6	弥生土器	甕	－	－	1.5	ナデ	ナデ	やや良	10YR3/1 黒褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや精微 長石･石英	
7	弥生土器	甕	－	－	1.3	ナデ	ナデ	やや良	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/6 黄橙色	やや精微 長石･石英･黒色粒子	
8	弥生土器	壺	－	－	3.1	ナデ	ナデ	良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/6 橙色	やや精微 長石･石英･片岩	
9	弥生土器	壺	－	－	7.4	ナデ/磨滅	磨滅	やや良	2.5YR5/8 明赤橙色	5YR2/1 黒褐色	やや精微 長石･石英	
10	弥生土器	高杯	－	－	3.3	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/8 黄橙色	やや精微 長石･石英	丹塗り
11	弥生土器	壺	－	－	2.0	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR4/1 褐灰色	やや精微 長石･石英	
12	弥生土器	壺	－	－	2.3	ナデ	ナデ	やや良	10YR5/8 赤色	5YR7/4 にぶい橙色	やや精微 長石･石英･黒色粒子	丹塗り
13	弥生土器	壺	－	－	3.9	ナデ	ナデ	やや良	10YR7/8 黄橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや精微 長石･石英･黒曜石	丹塗り
14	弥生土器	壺	－	－	1.5	ナデ	ハケ/ナデ	良	2.5YR5/8 明赤褐色	2.5YR6/8 橙色	精微 長石･石英	
15	弥生土器	壺	－	－	3.0	ナデ	磨滅	やや良	2.5YR6/8 橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	やや精微 長石･石英	
16	弥生土器	壺	－	－	2.8	ナデ	磨滅	やや良	10YR6/6 明黄褐色	7.5YR5/6 明褐色	やや精微 長石･石英	
17	弥生土器	壺/甕	－	－	2.0	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/8 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや精微 長石･石英	
18	弥生土器	甕	－	(10.4)	6.1	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR7/1 明褐灰色	やや精微 長石･石英･黒曜石･片岩	

番号	種類	石種	法量(cm)			重さ(g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
19	磨石	－	8.2	7.3	4.9	413.0	
20	不明	安山岩	10.3	8.5	1.9	257.0	台石か。
21	不明	安山岩	10.5	8.5	6.0	859.0	台石か。

第４表　遺物観察表（SH２）

・SH３（第21・22図　第５表　図版８・９）

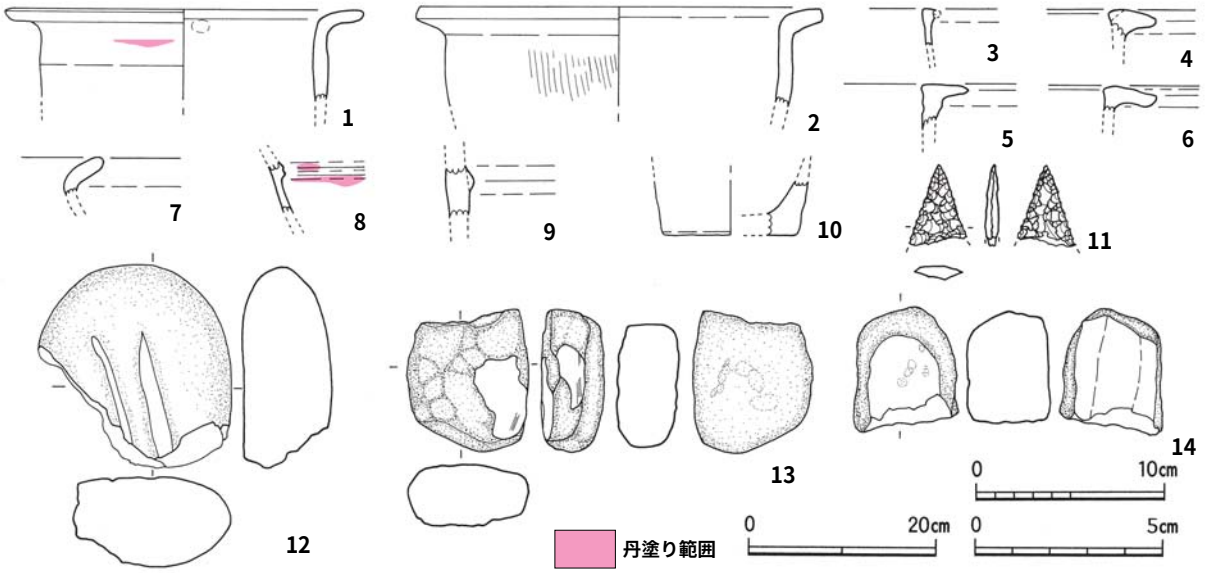
SH３はD－６－24にて確認された。形態は円形を呈し，計測値は長軸5.12m，短軸5.08mを測る。検出できた４基のSHの中では，小さい形態を呈する。遺構の北半分は，圃場整備時による削平の影響を受ける。土層は４層に分層が可能で，検出面から床面までの深度は0.32mを測る。屋内の施設は

２本の主柱穴と，主柱穴の間に炉と土坑を備える。炉跡は中央に位置する。規模は長軸1.62m，短軸7.8mの長楕円形を呈する。検出時に赤褐色を呈する焼土と炭化物の範囲を確認した。焼土は炭化物の範囲の中央に位置し，厚さは0.1mを測る。炭化物は西方向に広がり，堆積は0.1mと薄い。土坑跡は床面の中央に位置し，形態は隅丸方形を呈する。堆積は３層の分層が可能であるが，中央付近の分層は不明確である。床面はにぶい褐色砂質土を主体とした貼床が施され，厚さは0.1mと薄い。主柱穴の計測値は，Ｐ１の直径が0.6m，深度0.33mを測り，隅丸楕円形を呈する。Ｐ２の直径が0.64m，深度0.41mを測り，円形を呈する。周溝は南西側以外に認められ，計測値は最大幅0.4m，最大深度0.34cmを測る。床面及び土坑跡の土壌の洗浄を行った。その結果，炭化物と第Ⅶ章－７で述べるコムギの胚乳が１点，マメ類の種子が１点確認できた。また，炉跡より検出した炭化材は第Ⅶ章－２で述べる分析を行った。SH 内遺構内及び遺構の新旧関係（旧→新）は，土坑→貼床→炉・周溝で，遺構は SX25→SH３である。

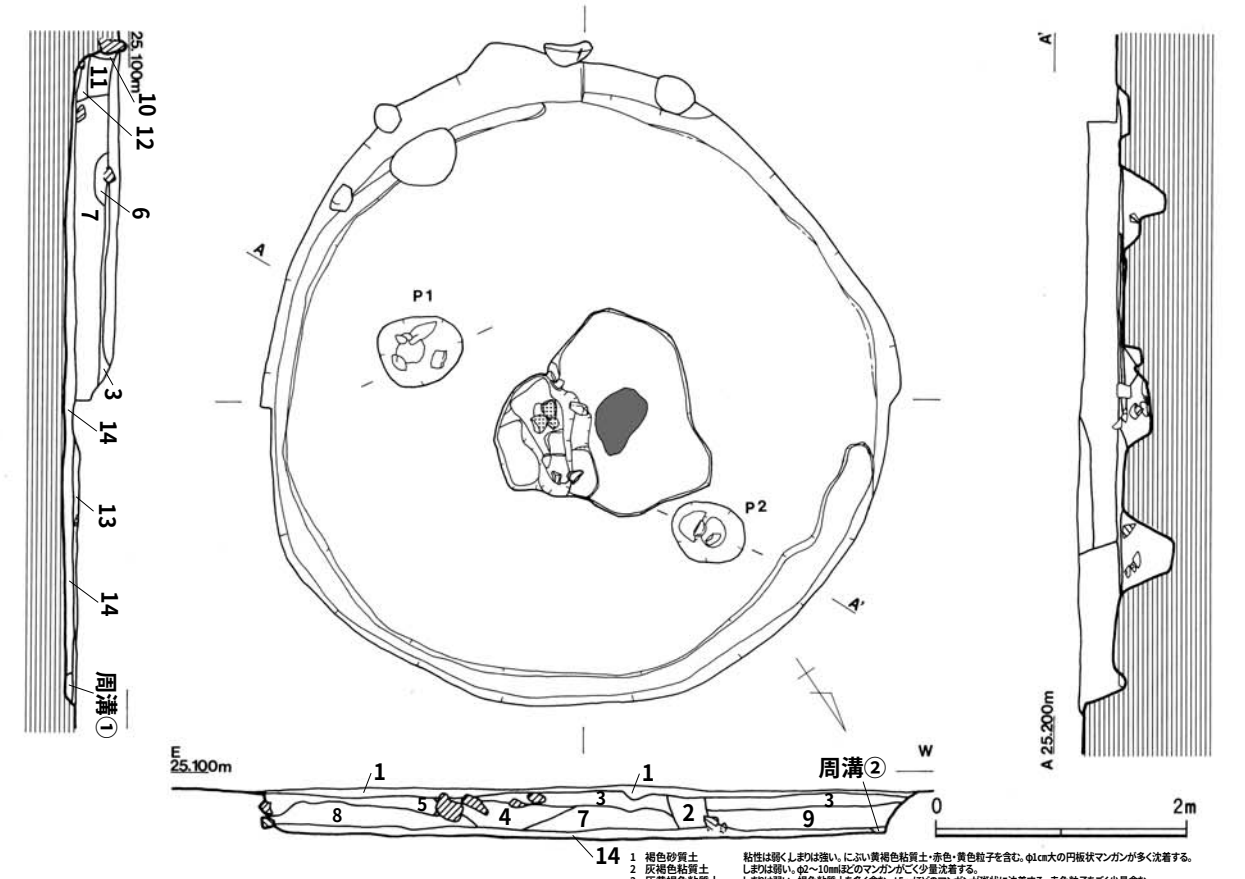
出土遺物

1は口唇部が欠損する甕である。器面は内面の磨滅が著しいが，外面の一部に丹塗りの痕跡が認められる。**2**は口縁部が残存する甕である。全体の色調が黒色を呈する。**3**は底部から体部下半まで残存する甕である。外底は平底を呈する。**4**は口縁部が残存する甕である。口唇部は外方へ摘み出す。**5**・**6**は口縁部から体部上半まで残存する甕である。**6**は口唇部が外方へ摘み出し，頸部の下はナデによる緩やかな稜が認められる。内・外面の器面は，磨滅が著しい。**7**は口縁部が残存する甕である。内面の色調は，黒色を呈する。**8**は断面が台形の突帯を巡らす壺と考えられる。外面は丹塗りの痕跡が認められる。**9**は断面が低い三角形の突帯を巡らす壺である。器面の状態は内・外面ともに磨滅が著しい。**10**は口縁部から体部上半まで残存する甕である。器面の状態は内・外面ともに磨滅が著しい。**11**は黒曜石製の石鏃である。**12**は砂岩製の砥石である。表面には２条の擦過痕が認められる。**13**は砂岩製の敲石と考えられる。表面には敲打痕が認められる。**14**は砂岩製の敲石と考えられる。表面には敲打痕が認められる。12～14は土坑跡の底面から出土した。

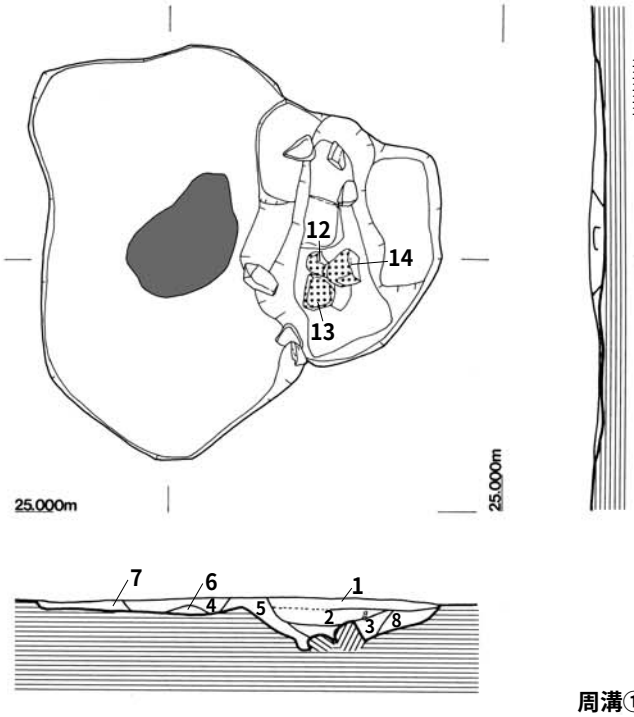
以上より SH３の時期は，弥生時代中期前半頃に位置づけられる。

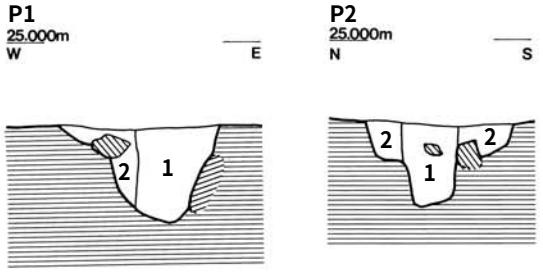


第21図　SH３出土遺物（１～10はＳ＝１/４，11はＳ＝１/２，12～14はＳ＝１/８）



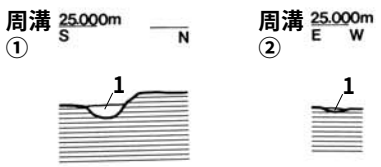
1 褐色砂質土　粘性は弱くしまりは強い。にぶい黄褐色粘質土・赤色・黄色粒子を含む。φ1cm大の円板状マンガンが多く沈着する。
2 灰褐色粘質土　しまりは弱い。φ2～10mmほどのマンガンがごく少量沈着する。
3 灰黄褐色粘質土　しまりは弱い。褐色粘質土を多く含む。φ5mmほどのマンガンが斑状に沈着する。赤色粒子をごく少量含む。
4 にぶい黄褐色粘質土　しまりはやや強い。円状にマンガンが沈着する。φ1～2mm大の焼塊・炭化物を含む。上位には10～30mm大の礫。
5 褐灰色粘質土　しまりはやや強い。褐色粘質土を含む。全体にマンガンが沈着し,黄色粒子を少量含む。Ⅳ層よりしまりが弱く黄色土が多い。
6 灰褐色粘質土　しまりは弱い。少量の炭化物を含む。7層中のノイズ。
7 褐色粘質土　しまりは弱い。マンガンは斑状に沈着するが,上位に円形のマンガンが沈着する。φ3mm大の黄色粒子を含む。4層よりしまりが弱い。
8 明褐色粘質土　しまりはやや強い。マンガンは斑状に沈着するが,下位には多く沈着する。白色・黄色粒子をごく少量含む。φ1cm大の炭化物をごく少量含む。
9 明褐色粘質土　しまりは強い。マンガンは全体に沈着するが上位に密に沈着する。
10 明褐色粘質土　しまりはやや強い。11層に比べマンガン粒が大きく,灰色が強い。風化礫がごく少量入る。拳大～φ40cm大の礫が入る。
11 明褐色粘質土　7層に比べ混じりが少ない。しまりが弱い。φ2mmほどのマンガンを上部に斑状に沈着する。褐灰色・黄色土が斑に入る。
12 褐色粘質土　しまりがやや弱い。
13 灰褐色粘質土　しまりが強い。上部にφ5mm大のマンガンが多く沈着する。中央部に炭化物,赤色・黄色粒子が多くみられる。褐灰色が斑に入る。
14 にぶい褐色砂質土　しまりが強い。マンガンが斑状に沈着する。炭化物をごく少量含む。風化礫の砕けたものが入る。灰色土が混入する。





P1
1 褐色粘質土　しまりがやや弱い。中位に少量のマンガンの沈着が見られる。
2 明褐色粘質土　しまりがやや弱い。橙色土が若干混入しφ3mm程のマンガンが上位にわずかに沈着する。

P2
1 褐色粘質土　橙色土を若干含む。しまりが弱い。
2 褐色粘質土　灰色土が若干混入する。赤土,マンガンがごく少量沈着する。



周溝① 1 褐色粘質土　橙色土が若干混入し,マンガンがφ3mm程斑に沈着する。しまりはやや弱い。

周溝② 1 灰褐色粘質土　しまり弱い。φ2mm程のマンガンが若干沈着する。

0　1m

焼土範囲

1 暗褐色粘質土　しまりが強い。マンガンが斑状に沈着し,炭化物が少量含まれる。白土をごく少量含む。
2 褐色粘質土　しまりやや強い。橙色土が混入する。φ2mm大の炭化物を若干含む。弥生土器出土。
3 褐色粘質土　しまりがやや弱い。炭化物をごく僅かに含む。
4 暗赤褐色粘質土　しまりがやや弱い。φ2mm大の炭化物を斑状に含む。焼土。
5 暗褐色粘質土　しまりがやや弱い。φ2～5mm大の炭化物を多く含む。北側により多くみられる。
6 明赤褐色粘質土　しまりがやや弱い。玄武岩の風化した小礫,赤土をごく少量含む。
7 明赤褐色粘質土　しまりがやや弱い。φ2mm大のマンガンがわずかに沈着する。橙色土を少量混入する。
8 明褐色粘質土　しまりがやや弱い。玄武岩の風化した小礫,拳大の礫が混入する。白色土がわずかに混入する。

第22図　SH３平面図・断面見通図（Ｓ＝１/60），炉跡・主柱穴跡・周溝平面図・土層図（Ｓ＝１/30）

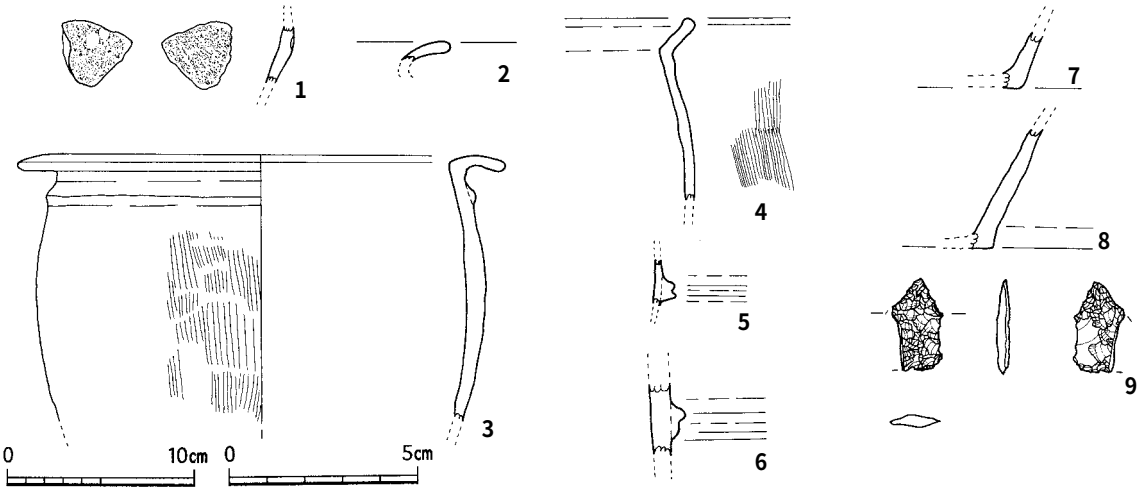
番号	種類	器種	法量(cm)( )は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底形	器高	外面	内面		外面	内面		
1	弥生土器	甕	(17.0)	－	4.8	ナデ	ナデ/指頭圧痕	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR6/8 橙色	やや精緻 長石･石英･片岩	丹塗り
2	弥生土器	甕	(21.4)	－	5.3	ナデ/ハケ	ナデ	やや良	2.5YR3/1 黒褐色	2.5YR1/3 浅黄色	やや精緻 長石･石英･片岩	
3	弥生土器	甕	－	－	2.0	磨滅	磨滅	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	やや精緻 長石･石英	
4	弥生土器	甕	－	－	1.8	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR5/8 明赤褐色	5YR2/1 黒褐色	やや精緻 長石･石英･片岩	
5	弥生土器	甕	－	－	2.4	器面剥離	器面剥離	やや良	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	やや精緻 長石･石英	
6	弥生土器	甕	－	－	1.4	ナデ	ナデ	やや良	10YR4/1 褐灰色	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや精緻 長石･石英	
7	弥生土器	甕	－	－	2.0	ナデ	ナデ	やや良	10YR2/1 黒色	10YR7/4 黒褐色	やや精緻 長石･石英	
8	弥生土器	壺	－	－	2.7	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR3/1 黒褐色	やや精緻 長石･石英･片岩	丹塗り
9	弥生土器	壺	－	－	2.7	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR4/1 褐灰色	やや精緻 長石･石英･黒曜石	
10	弥生土器	甕	－	－	2.0	磨滅	磨滅	やや良	5Y6/8 橙色	7.5YR7/6 橙色	やや精緻 長石･石英	

番号	種類	石種	法量(cm)			重さ(g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
11	石鏃	黒曜石	2.15	1.5	0.4	0.72	
12	砥石	砂岩	10.8	10.3	4.7	621.0	
13	敲石	砂岩	15.1	12.8	6.5	1587.0	
14	敲石	砂岩	13.2	11.0	8.9	1701.0	

第５表　遺物観察表（SH３）

（２） 柱穴跡（第23～28図　第６・７表　図版９）

1は縄文土器である。本遺跡より出土した縄文土器は数点と限られ，図示可能な遺物である。柱穴の土質より近世に混入したと考えられる。器面に列点文が施され，胎土に滑石の混入が認められる。２～４は甕である。**2**は口縁部が残存し，断面が肥厚する。**3**は口縁部が下方を向き，頸部には断面が三角形の一条の突帯を巡らす。**4**は口唇部にヨコナデを施し，跳上げ口縁状を呈する。**5**・**6**は壺の胴部で，「M」字状の突帯を一条貼付ける。突帯の高さは高い。**7**・**8**は底部である。**9**は黒曜石製の石鏃である。一部欠損がみられ，本来は五角形を呈したと考えられる。

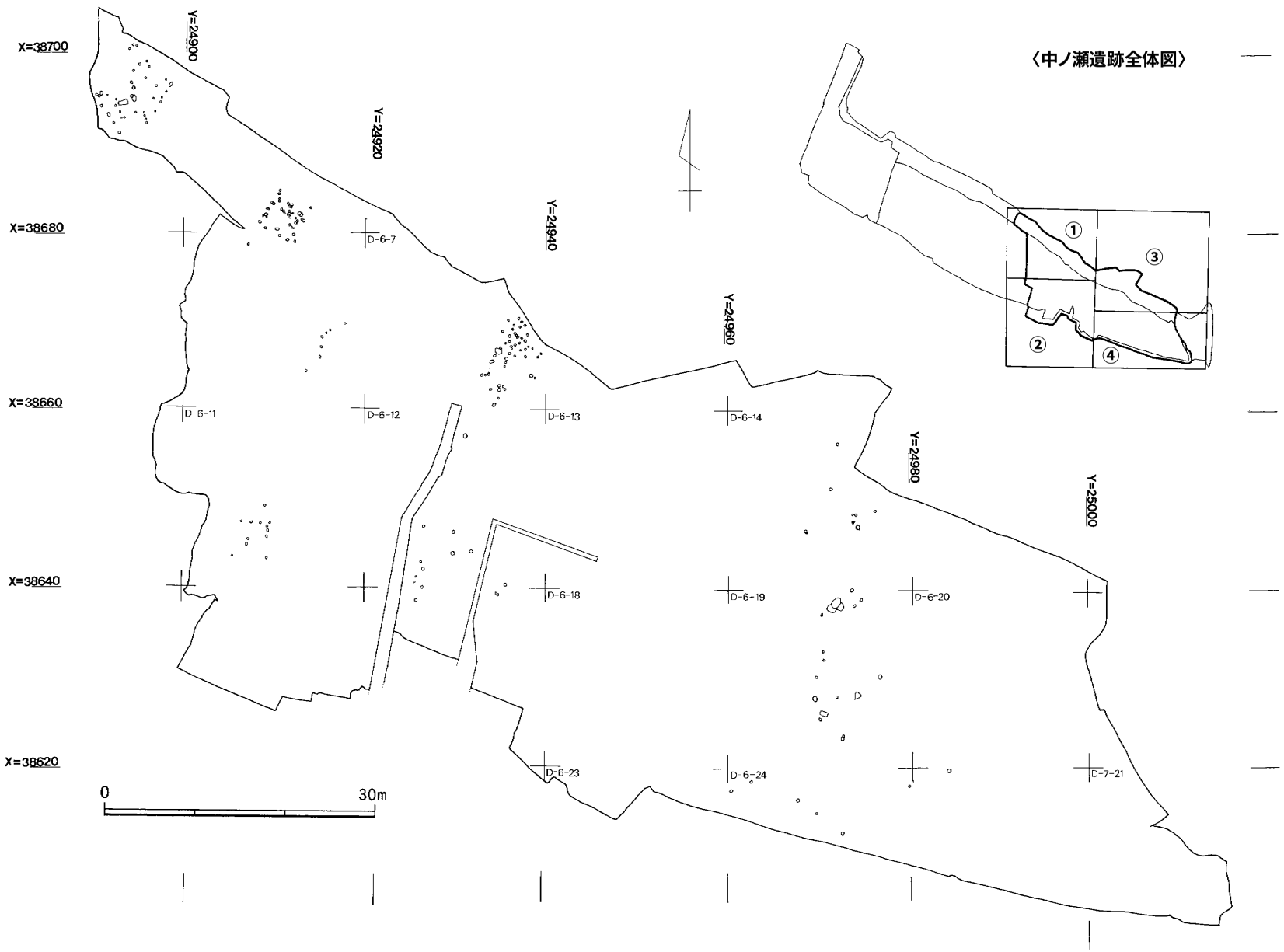


第23図　弥生時代 SP 出土遺物（１～８はＳ＝１/４，９はＳ＝１/２）

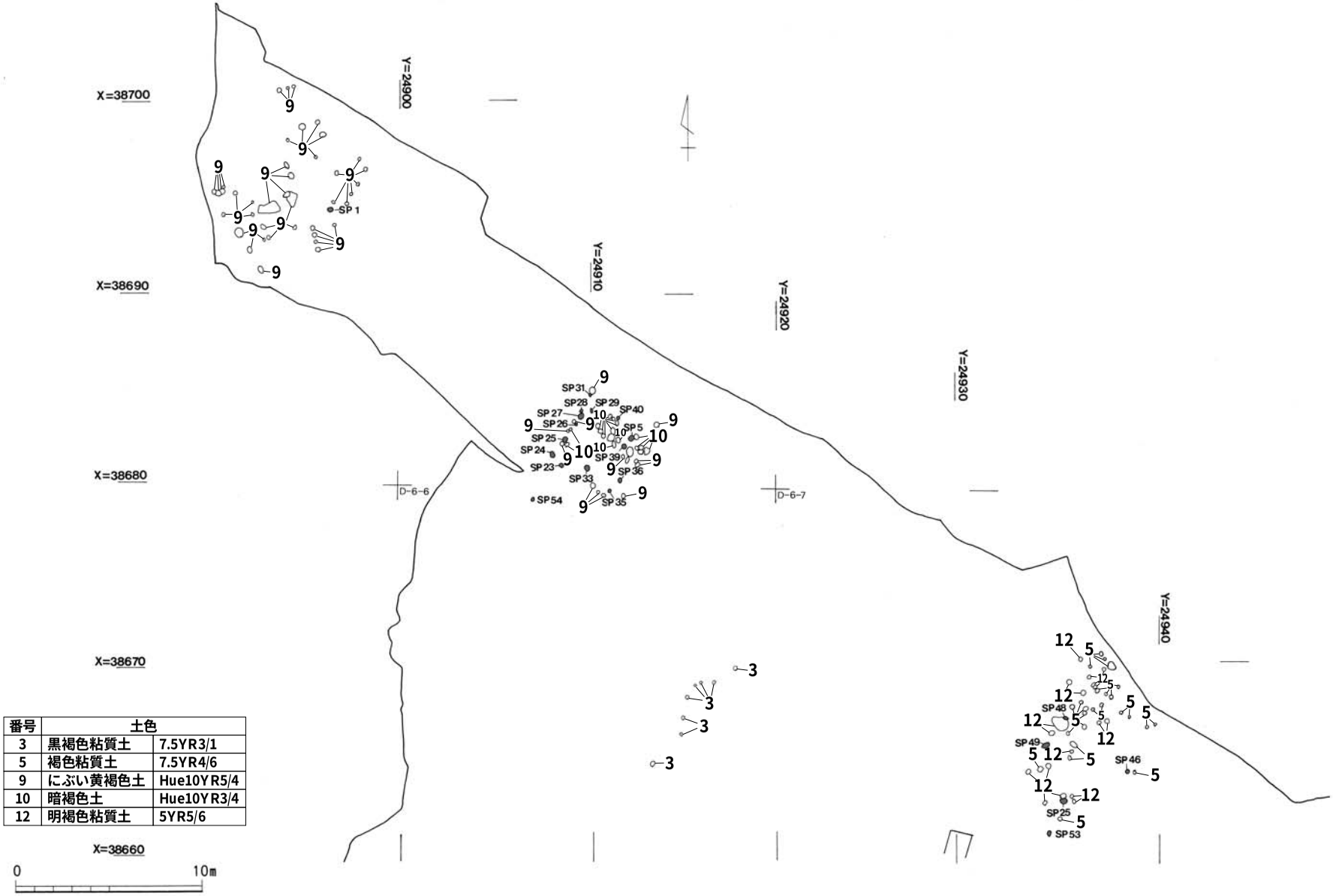
（３） 不明遺構（第29～32・48図　第８・９表　図版９～11・18）

・SX11（第30図　図版９）

D－６－11に位置し，最大長2.1m，最大幅0.58mの長円を呈する。土層の堆積は４層に分層が可能である。出土遺物はみられなかった。



第24図　弥生時代 SP 配置図（S＝1/650）



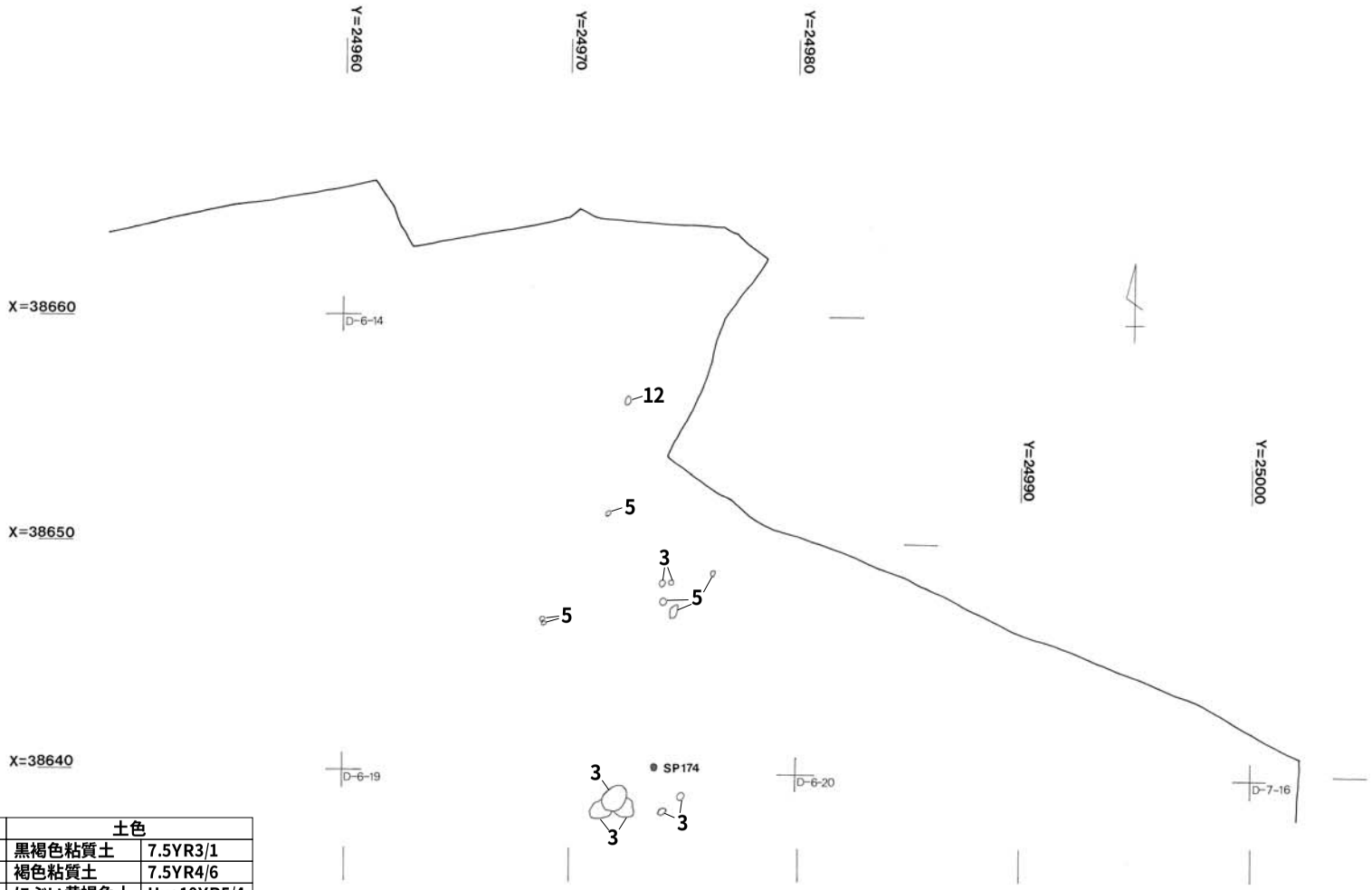
番号	土色	
3	黒褐色粘質土	7.5YR3/1
5	褐色粘質土	7.5YR4/6
9	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4
10	暗褐色土	Hue10YR3/4
12	明褐色粘質土	5YR5/6

第25図　弥生時代 SP 配置図①（S＝1/300）

番号	土色	
3	黒褐色粘質土	7.5YR3/1
5	褐色粘質土	7.5YR4/6
9	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4
10	暗褐色土	Hue10YR3/4
12	明褐色粘質土	5YR5/6

0　10m

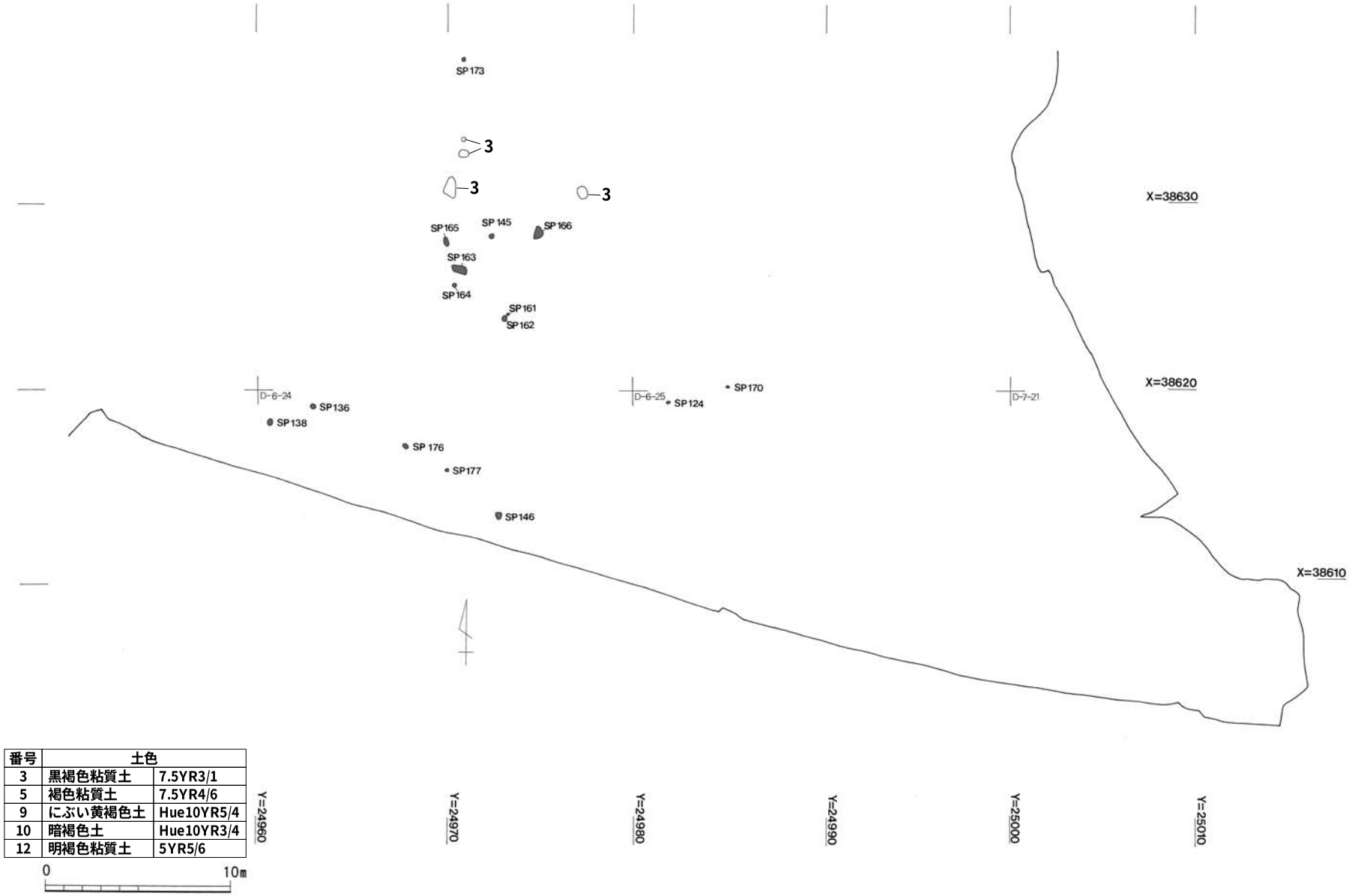
第26図　弥生時代 SP 配置図②（S＝1/300）



番号	土色	
3	黒褐色粘質土	7.5YR3/1
5	褐色粘質土	7.5YR4/6
9	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4
10	暗褐色土	Hue10YR3/4
12	明褐色粘質土	5YR5/6

0　10m

第27図　弥生時代 SP 配置図③（S＝1/300）



番号	土色	
3	黒褐色粘質土	7.5YR3/1
5	褐色粘質土	7.5YR4/6
9	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4
10	暗褐色土	Hue10YR3/4
12	明褐色粘質土	5YR5/6

第28図　弥生時代 SP 配置図④（S＝1/300）

凡例	土色３：7.5YR3/1 黒褐色粘質土	土色５：7.5YR4/6 褐色粘質土	土色９：10YR5/4 にぶい黄褐色土	土色10：10YR3/4 暗褐色土	土色11：75YR5/2 灰褐色粘質土	土色12：5YR5/6 明褐色粘質土
	出土遺物 黒：黒曜石	出土遺物 安：安山岩	出土遺物 剥：剥片	出土遺物 弥土：弥生土器	出土遺物 数値：出土点数	

番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)	番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)	番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)
SP１	D-5-5	Ⅱ	9	弥土１	11.7	SP40	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	8.9	SP152	D-6-12	Ⅱ	12	黒剥１	21.0
SP５	D-6-1	Ⅲ	10	弥土２	18.6	SP46	D-6-7	Ⅲ	5	弥土壺１	5.3	SP161	D-6-19	Ⅲ	11	安剥１/弥土１	13.2
SP23	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	7.8	SP48	D-6-7	Ⅲ	5	弥土１	14.6	SP162	D-6-19	Ⅲ	11	黒剥１	27.6
SP24	D-6-1	Ⅱ	9	弥土４	8.7	SP49	D-6-7	Ⅲ	5	弥土５	5.2	SP163	D-6-19	Ⅲ	11	弥土１	27.8
SP25	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	13.0	SP52	D-6-7	Ⅲ	5	弥土１	12.9	SP164	D-6-19	Ⅲ	11	弥土１	27.1
SP26	D-6-1	Ⅱ	9	弥土２	12.2	SP53	D-6-7	Ⅱ	12	弥土１	15.1	SP165	D-6-19	Ⅲ	11	黒剥１	26.3
SP27	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	9.3	SP54	D-6-6	Ⅱ	6	弥土２	13.2	SP166	D-6-19	Ⅲ	11	黒剥１	17.3
SP28	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	11.1	SP91	D-6-12	Ⅱ	10	弥土甕１/弥土１	45.6	SP168	D-6-12	Ⅲ	11	弥土１	17.4
SP29	D-6-1	Ⅱ	9	弥土４	10.9	SP92	D-6-17	Ⅱ	10	弥土甕１/弥土１	17.3	SP170	D-6-20	Ⅱ	5	弥土１	7.2
SP31	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	15.5	SP124	D-6-25	Ⅱ	6	弥土１	13.3	SP173	D-6-14	Ⅱ	5	弥土３	5.2
SP33	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	11.2	SP136	D-6-24	Ⅱ	6	弥土４	21.8	SP174	D-6-14	Ⅱ	5	弥土１	5.2
SP35	D-6-1	Ⅱ	9	弥土１	15.7	SP138	D-6-24	Ⅱ	6	弥土１	14.0	SP176	D-6-24	Ⅱ	5	弥土４	42.2
SP36	D-6-1	Ⅱ	9	弥土２	18.3	SP145	D-6-24	Ⅱ	6	弥土２	37.7	SP177	D-6-24	Ⅱ	5	弥土２	49.5
SP39	D-6-1	Ⅱ	10	弥土３	15.6												

第６表　弥生時代 SP 一覧表

番号	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	縄文土器	不明	－	－	3.0	ナデ/刺突痕	ナデ	良	2.5YR5/8 明赤褐色	10YR3/1 黒褐色	精緻 滑石
2	弥生土器	甕	－	－	3.2	ナデ	ナデ	良	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR7/2 にぶい黄橙色	精緻 長石･石英･輝石
3	弥生土器	甕	(22.4)	－	13.6	磨滅	タテハケ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR3/1 黒褐色	やや精緻 長石･石英･片岩
4	弥生土器	甕	－	－	9.6	磨滅	タテハケ	やや良	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	やや精緻 長石･石英
5	弥生土器	壺	－	－	2.4	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR2/1 黒色	精緻 長石･石英･片岩
6	弥生土器	壺	－	－	4.0	磨滅	ナデ	やや良	5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR5/8 明赤褐色	精緻 長石･石英
7	弥生土器	壺/甕	－	－	3.0	磨滅	磨滅	やや良	2.5YR5/8 明赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	やや精緻 長石･石英
8	弥生土器	甕	－	－	6.5	タテハケ/磨滅	磨滅	やや良	5YR4/1 褐灰色	5YR6/5 にぶい橙色	やや精緻 長石･石英･片岩

番号	種類	石種	法量(cm)			重さ(g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
9	石鏃	黒曜石	2.45	1.35	0.35	0.78	

第７表　遺物観察表（弥生 SP）

・SX13（第29図　第８表　図版10）

D－６－14に位置し，北東側及び西側を削平の影響を受けているため，全形は不明である。埋土は単層で，南→北へ傾斜した地山に堆積したと考えられる。

出土遺物

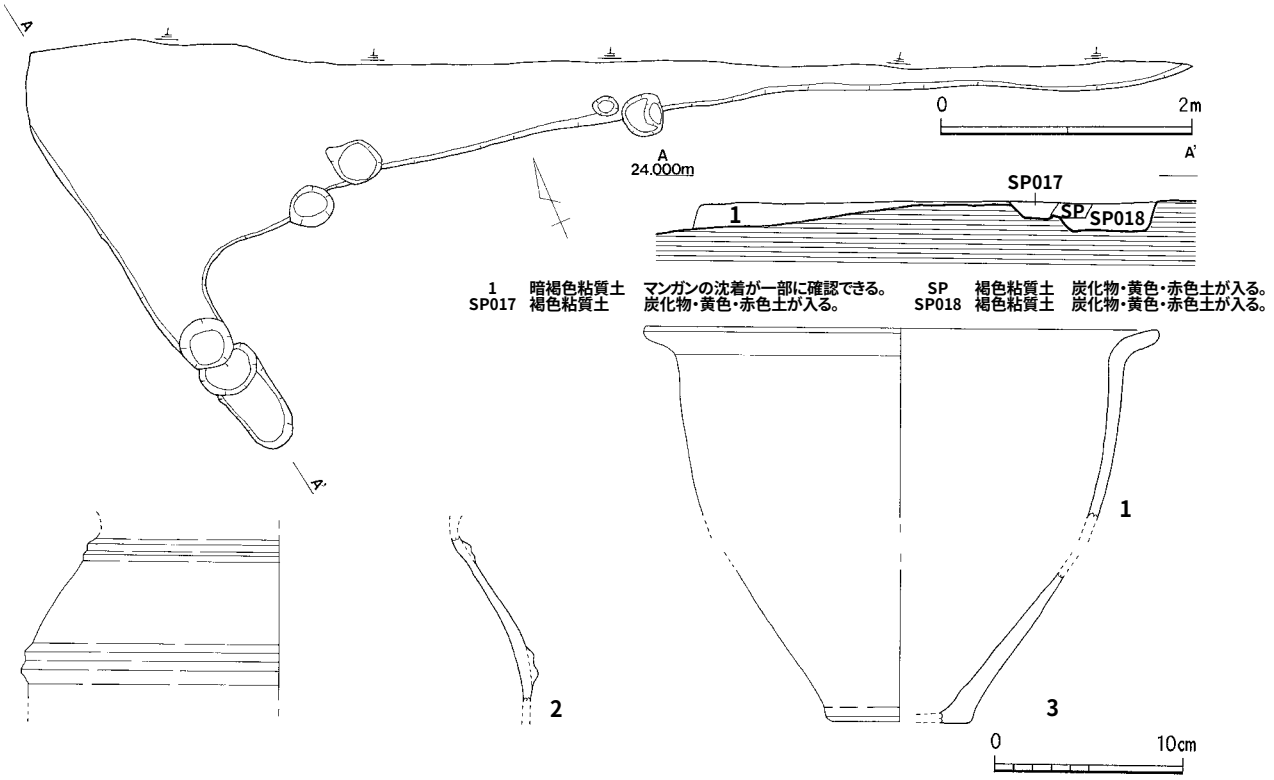
1は口縁部～体部下半まで残存した甕で，外面に黒班が認められる。**2**は頸部～胴部上半まで残存する壺である。頸部及び胴部には，断面が「M」字状の突帯を一条巡らす。**3**は胴部下半～底部まで残存する平底の壺である。これらより，時期は弥生時代中期後半頃に位置付けられる。

・SX22（第48図　図版18）

D－６－13・18の西斜面に位置する。遺構の広がりは，東側一部を南北に走る用水路と南側を擁壁の削平，北側は攪乱の影響を受ける。遺物は弥生土器が出土したが，小片のため図示できない。

・SX23（第30図　図版10）

D－６－20に位置し，最大長4.0m，最大幅3.4mの楕円形を呈する。検出時はドーナツ状に堆積する粘質土，内側に玄武岩小礫と礫をブロック状に含む赤褐色粘質土を確認した。これらから，倒木痕と考えられ，類例は諫早市平遺跡などで確認できる。遺物は，黒曜石製の剥片が出土した。



第29図　SX13平面図・土層図（S＝1/60），出土遺物（S＝1/4）

番号	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	弥生土器	甕	(27.2)	－	10.2	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石･石英･片岩
2	弥生土器	壺	－	－	9.7	ナデ	器面剥離	やや良	10YR7/8 黄橙色	5YR6/8 橙色	やや精緻 長石･石英
3	弥生土器	壺	－	(7.4)	8.1	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/8 橙色	5YR5/1 褐灰色	やや精緻 長石･石英･砂粒

第８表　遺物観察表（SX13）

・SX25（第30図　図版10）

D－６－24に位置し，直径6.7mの円形を呈する。北側に位置するSH３との新旧関係（旧→新）は，SX25→SH３である。南側は調査区外まで延びる。土層観察の結果，倒木痕の可能性が高い。

・SX26（第30図　図版10）

D－６－24に位置し，直径３mの円形を呈する。倒木痕として調査を進めたが，明確ではない。

・SX27（第31・32図　第９表　図版11）

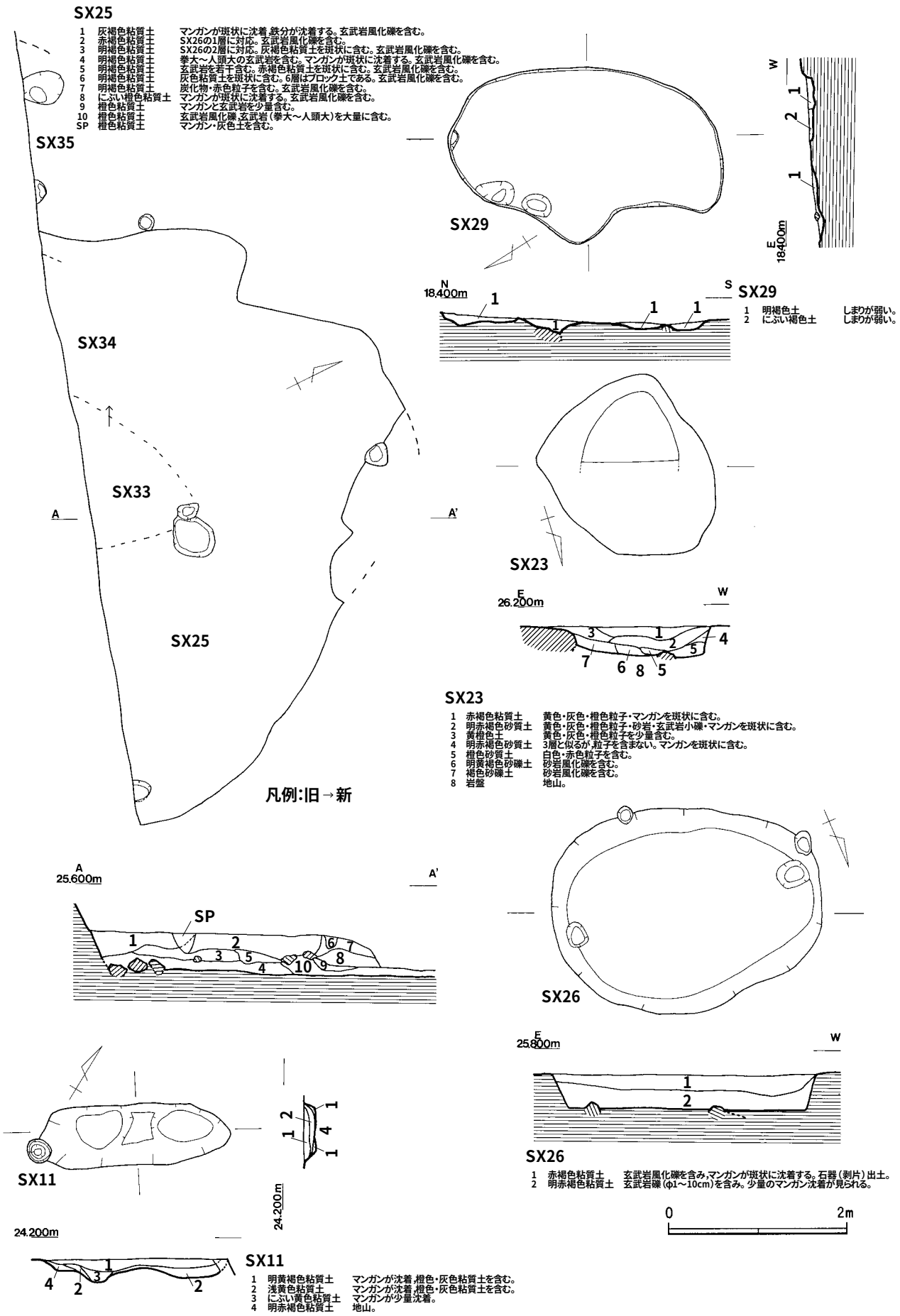
D－６－19に位置する。新旧関係（旧→新）は，SX27→SX24・28，SX27→SH２である。下層地山で検出された炭化材は，第Ⅶ章－３で述べる分析を行った。

出土遺物

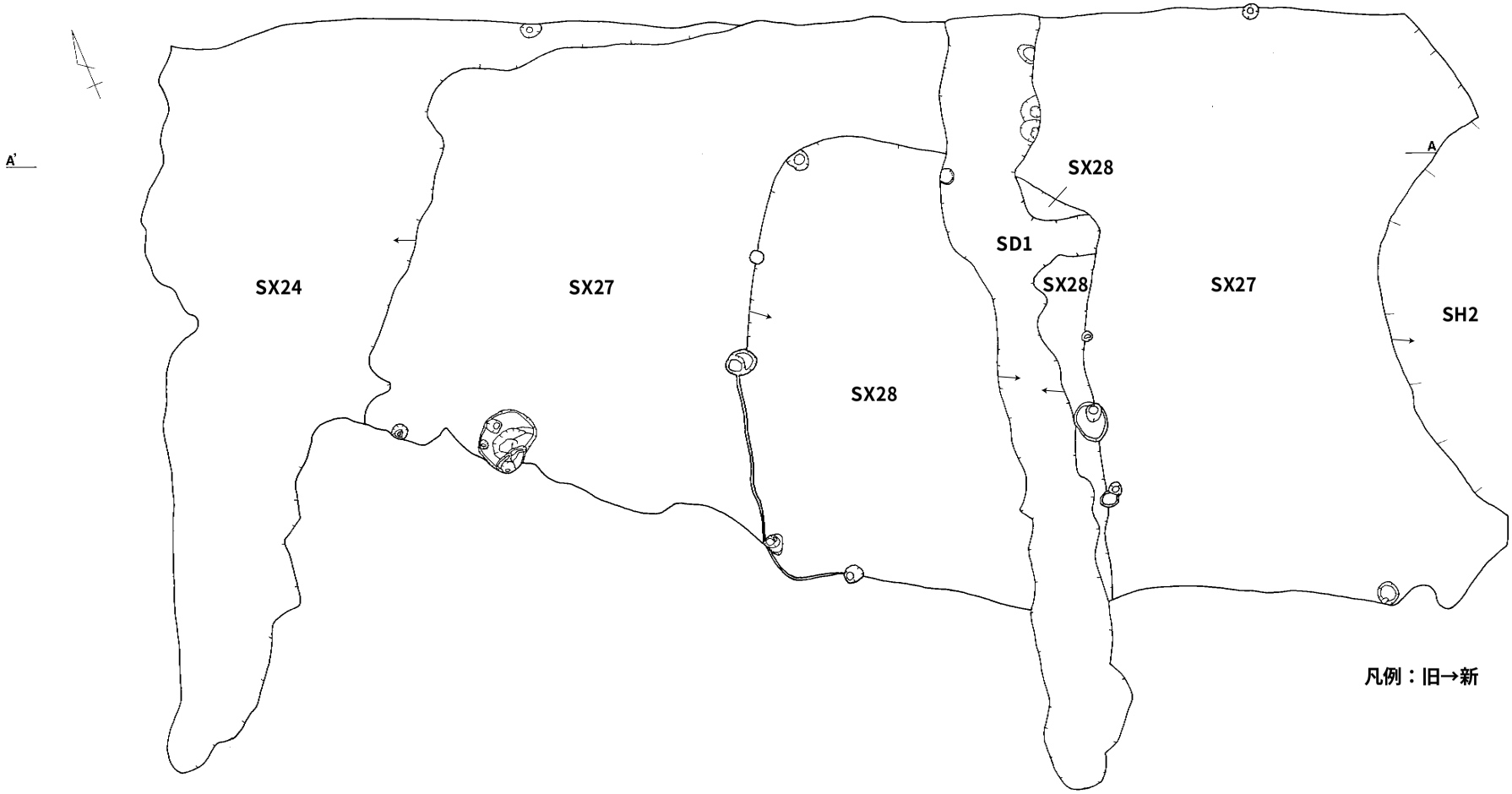
１～３は弥生土器である。**1**は底部を残す平底の壺である。**2**は高坏の坏部である。**3**は壺の胴部である。断面が「M」字状の突帯を一条巡らす。

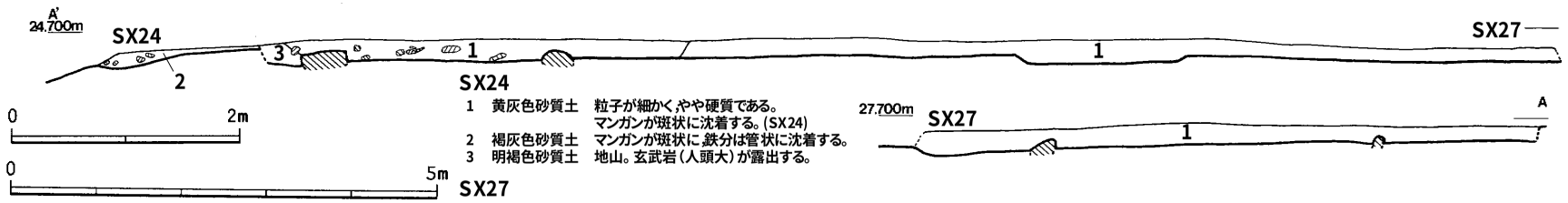
・SX29（第30・32図　第９表　図版11）

D－６－12に位置し，長軸3.0m，短軸1.5～1.9mの長円を呈する。上面は削平の影響を受ける。そのため，深度は浅い。堆積は単層である。



第30図　SX11・23・25・26・29・33～35平面図・土層図（S＝1/60）





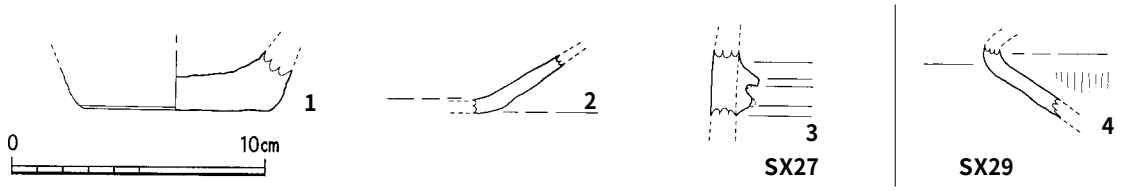
SX24

1　黄灰色砂質土　粒子が細かく,やや硬質である。
　　マンガンが斑状に沈着する。(SX24)
2　褐灰色砂質土　マンガンが斑状に,鉄分は管状に沈着する。
3　明褐色砂質土　地山。玄武岩（人頭大）が露出する。

SX27

1　褐色粘質土　しまりは強い。上位にはマンガンが斑状に多く沈着する。
　　灰色粘質土が少量混じる。ごく少量の玄武岩の風化した
　　小礫が混入する。

第31図　SX24・27・28，SD１平面図（S＝1/80）・土層図（1/60）



第32図　SX27・29出土遺物（S＝1/3）

番号	遺構	種類	器種	法量(cm)( )は復元径			調整		焼成	色調		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	SX27	弥生土器	壺	－	7.4	2.4	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR4/2 灰褐色	やや精緻 長石･石英･片岩
2	SX27	弥生土器	高坏	－	－	2.4	ナデ	ナデ	やや良	10YR7/6 明黄褐色	10YR7/3 黄橙色	やや精緻 長石･石英･片岩
3	SX27	弥生土器	壺	－	－	1.6	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	やや精緻 長石･石英･片岩
4	SX29	弥生土器	甕	－	－	2.8	ヨコナデ/タテハケ	ナデ	やや良	7.5YR5/8 明褐色	7.5YR4/1 褐灰色	やや精緻 長石･石英

第９表　遺物観察表（SX27・29）

出土遺物

4は弥生土器の甕である。頸部～肩部が残存する。

・SX33（第30図　図版11）

D－６－24に位置し，半径12mの長円を呈する。遺構の性格は倒木痕と考えられ，第Ⅶ章－６で述べる分析を試みた。その結果，花粉が検出されず，遺構の性格は不明である。

・SX34（第30図　図版11）

D－６－24に位置し，形態は不明である。SX33との新旧関係（旧→新）は，SX34→SX33である。遺構の性格は倒木痕としたものの，第Ⅶ章－６で述べる分析を試みた。その結果，花粉が検出されず，遺構の性格は不明である。

・SX35（第30図　図版11）

D－６－24に位置する。SX25との新旧関係（旧→新）は，SX35→SX25である。遺構の性格は倒木痕としたものの，第Ⅶ章－６で述べる分析を試みた。その結果，少量の花粉が検出された。

・第Ⅲ層不明遺構（図版11）

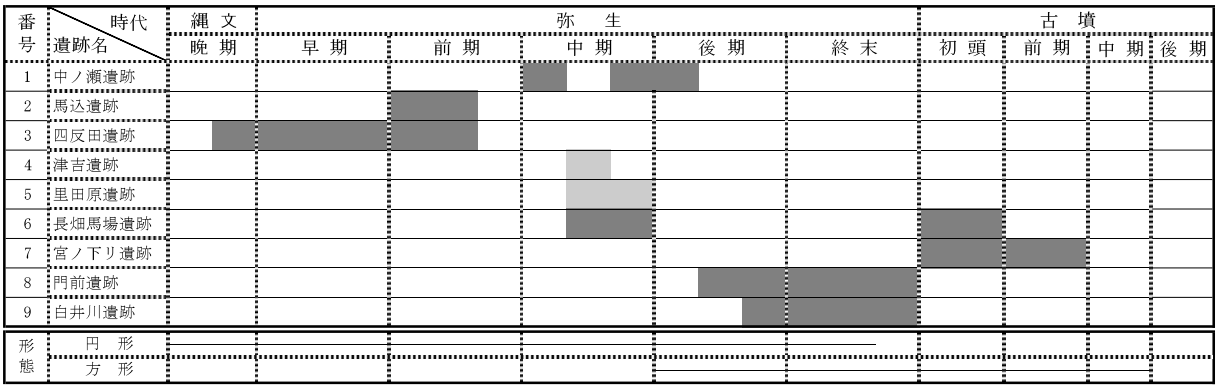
SX28掘削後，３基の倒木痕と推測される遺構（SP170・176・177）の確認を行い，弥生土器片が出土した。しかし図示可能な遺物はみられなかった。さらにトレンチ調査による下層の遺構の確認を行ったが，遺構は確認出来なかった。堆積は単層であるが，土質によって４層に分層が可能である。遺物は弥生土器片・黒曜石製の剥片などが出土したが，図示可能な遺物はみられなかった。

小　結

・竪穴式住居について（第10表）

本遺跡の弥生時代の特筆は本県では貴重な竪穴式住居跡が４基検出され，柱穴跡を加えた検討の結果，丘陵部を中心に集落の展開が確認できたことである。SH の平面形態は円形を用いる。その面積は，小さい順に SH３→SH１（古）→SH１（新）→SH２である。遺構の構成は２本の主柱と，その間に土坑を備える。さらに SH１（古）と SH３は，床面を全周しないが壁溝を備えている。主柱は SH３の規模が最大かつ土坑跡に近い位置に設ける。SH１（古）と（新）・SH２は，主柱が土坑跡から

離れた位置に設ける違いが見出せる。土坑跡の形態は，全て隅丸長方形を呈する。土質は砂質土が主体を示すが，炭化物を含む層も確認された。しかし，土坑跡の壁面に被熱の形跡は認められなかった。また，堆積状況より住居を使用時は埋没していたことが考えられる。そのため，土坑跡の機能は類例が増加した後，検討を進めたい。本県北部の住居の形態は，早期～前期は円形，中期後半は円形と方形，後期後半～終末は方形の変遷が辿れるが，本遺跡の竪穴式住居跡の形態も符合する。



第10表　県北部住居跡形態変遷表（■は時期が未確定）

・遺物について

SH より出土した土器は，決して多くはなく，そして小片である。しかし，図示可能な遺物より，北部九州で確認できる形態を示している。そのため，北部九州の編年に照らし合わせたい。

・SH１（新）は第16図－１・２の甕より中期後半頃に位置付けられる。

・SH１（古）は第16図－４や炉跡の新旧関係，AMS 分析より中期後半以降に位置付けられる。

・SH２は床面より確認できる第20図－２・８の壺の屈曲より中期後半頃に位置付けられる。

・SH３は第21図－１・２の甕は城ノ越式を示すが，６より中期前半頃に位置付けられる。

以上より，本遺跡の集落の時期は，中期前半と中期後半に位置付けられる。

一方，石製品は SH２より磨石及び台石，SH３土坑跡より砥石及び敲石が確認された。SH３土坑跡出土の第21図－12は擦目が明確に残存し，その形より石包丁を研ぐ作業に用いられたと考えられる。本遺跡の石包丁は第Ⅰ層より１点確認できたが，本遺跡西側に隣接する今福遺跡でも確認されている。このため両遺跡は今福川を挟んで，居住空間の時期差が想定される。

・竪穴式住居跡の土壌洗浄について（第11表　図版29）

今回の調査において土壌洗浄を試みたのは，SH１～３の床面，SH２・３の土坑跡，SH３の壁溝である採集方法は，床面が SH の堆積状況を記録した２方向（南北と東西）で分けた４区画，土坑跡は堆積状況を記録した１方向で分けた２区画，SH３の壁溝は堆積が少ないことが想定されたため，区画の設定は行っていない。なお，SH１（古）の床面は，記録調査を終え時間が経過した床面の土壌採集を行ったため，土壌洗浄の雛形として作業を進めた。また，土坑跡は可能な限り層序に従って採取を行った。作業に当たり，以下の文献を参考に進めた。

・『埋蔵文化財ニュース』95「環境考古学１」奈良国立埋蔵文化財研究所埋蔵文化財センター　2000

・藤木　聡　2005「フローテーションについて」『平成17年度　第１回埋蔵文化財担当専門職員研修会』

土壌洗浄の結果，炭化物の量と調査時の自然環境を鑑みると，炭化物は北東・北西に集まる傾向で

ある。自然環境は北側が伊万里湾を向いているため，特に冬場は北風が強く，丘陵上で人や物が飛ばされる可能性も高い。そのため，SH の出入り口を南側に設け，そこから入る風によって炭化物が北東・北西に集まったと推測する。採取した種子は第Ⅶ章－７で述べるアズキ類やマメ類の種子，コムギの胚乳が確認された。また，クスノキ，イネ科，イヌタデ近似種，タカサブロウ，アキノノゲシについては保存状態が良好で炭化も認められないことから土壌乾燥中に混入したものと考えられる。洗浄・乾燥方法については再度検討が必要である。以上が土壌洗浄から得られた成果であるが，今後，生活空間である床面の土壌洗浄は，様々な条件を満たして進めるべきである。　　（江上正高）

すべてｇ表示

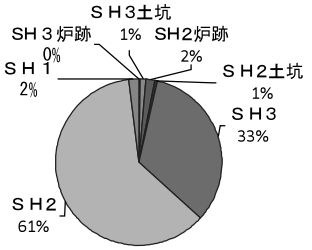
ＳＨ１（古）	乾燥後重量	炭化物	土器	土器以外の遺物
合計	38135	1.150	0.000	0.210

ＳＨ２	乾燥後重量	炭化物	土器	土器以外の遺物
北西	370180	32.100	3.530	3.200
北東	121310	8.840	8.400	0.130
南西	329275	5.370	0.000	0.000
南東	309590	10.640	16.490	0.300
合計	1130355	56.950	28.420	3.630

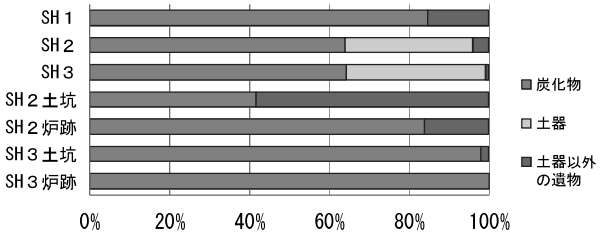
ＳＨ３	乾燥後重量	炭化物	土器	土器以外の遺物
北西	173890	11.250	10.950	0.360
北東	210830	21.150	10.270	0.050
南西	100660	2.830	0.000	0.010
南東	126420	3.760	0.000	0.040
合計	611800	38.990	21.220	0.460

ＳＨ２	乾燥後重量	炭化物	土器	土器以外の遺物
土坑跡	8230	0.200	0.000	0.280
炉跡	31830	1.140	0.000	0.220

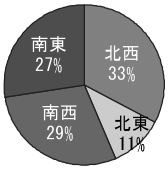
ＳＨ３	乾燥後重量	炭化物	土器	土器以外の遺物
土坑跡	21175	1.880	0.000	0.040
炉跡	3580	0.200	0.000	0.000



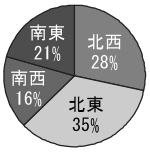
ＳＨ１～３の採集土量内訳



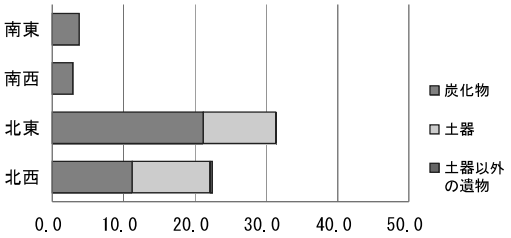
ＳＨ１～３採集土　混入物内訳



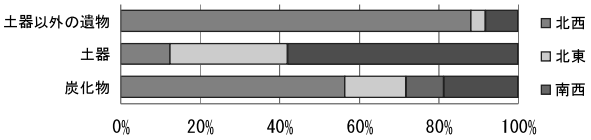
ＳＨ２床面　採集土量



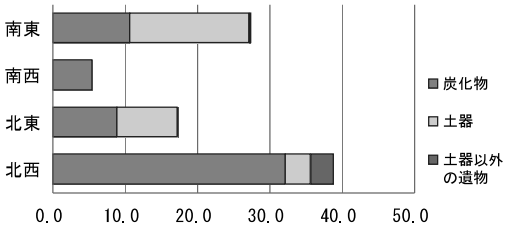
ＳＨ３床面　採集土量



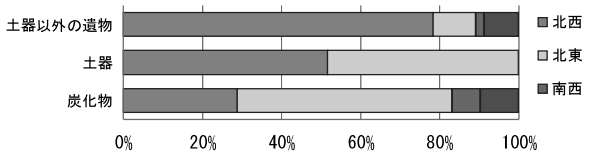
ＳＨ３採集土　混入物量



ＳＨ２混入物内訳



ＳＨ２採集土　混入物量



ＳＨ３混入物内訳

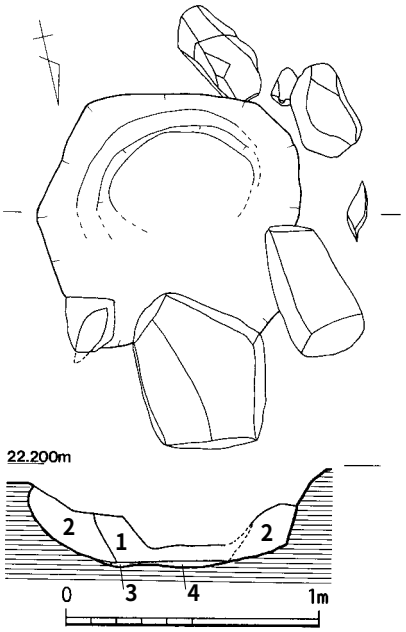
第11表　土坑跡採取土壌洗浄結果

2　中　世（第31・33～50図　第12～20表　図版11～19）

（1）　木棺墓（第33～36図　第12表　図版11～15）

・SK１（第33～35図　第12表　図版11～14）

D－６－20・D－７－16の丘陵部東斜面に位置し，長軸1.3m，短軸0.98mの隅丸方形を呈する。遺構の周囲は削平の影響を受けたと推察され，玄武岩を主体とする礫が露出している。検出及び土層観察より，円形を呈するにぶい黄褐色の主体部とその周囲に灰色粘土が認められ，円形の木棺を用いたと推測される。裏込め土は褐色粘質土，床面のにぶい黄褐色粘質土が確認できる。主体部の計測は，径0.6m，深度0.2mを測る。遺物は主体部東側の床面付近で，褐色粘土状に入り込むように３組の土師器坏と小皿が確認された。１群は坏１枚が小皿２枚に被さり，小皿１枚を立てて配する。２群は小皿１枚の内底に杯２枚を重ね，その中に杯２枚と小皿１枚を重ねる。３群は杯１枚が被さる。また，埋置順序は，３群の後に２群を配したと考えられる。各層序で検出された炭化材は，第Ⅶ章－１で述べる分析を行った。

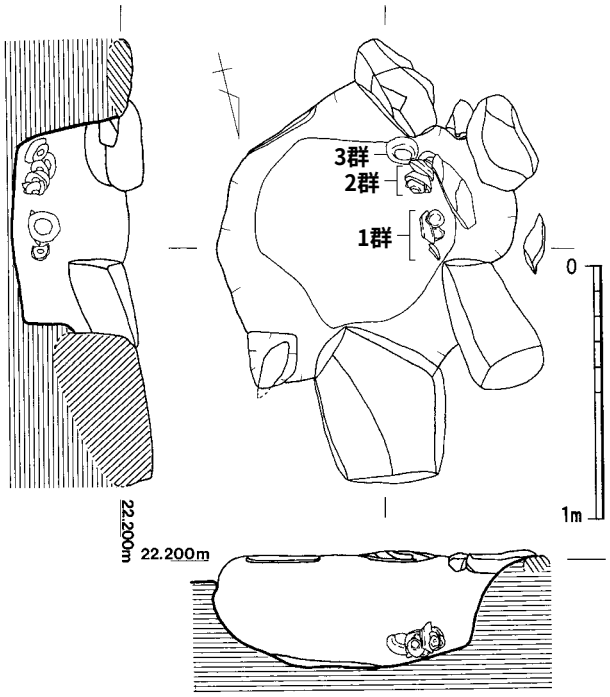


1　にぶい黄褐色粘質土　しまりは弱いが,粘性は強い。
2　褐色粘質土　しまりが強いが,粘性は弱い。黄色のφ1～2mmの砂粒を含む。φ10～20cmの礫も含む。裏込め。
3　にぶい黄褐色粘土　しまりがなく、粘性は強い。炭化物を含む。
4　にぶい黄褐色粘質土　しまりは弱い。砂粒を多く含む。

第33図　SK１平面図・土層図（S＝1/30）

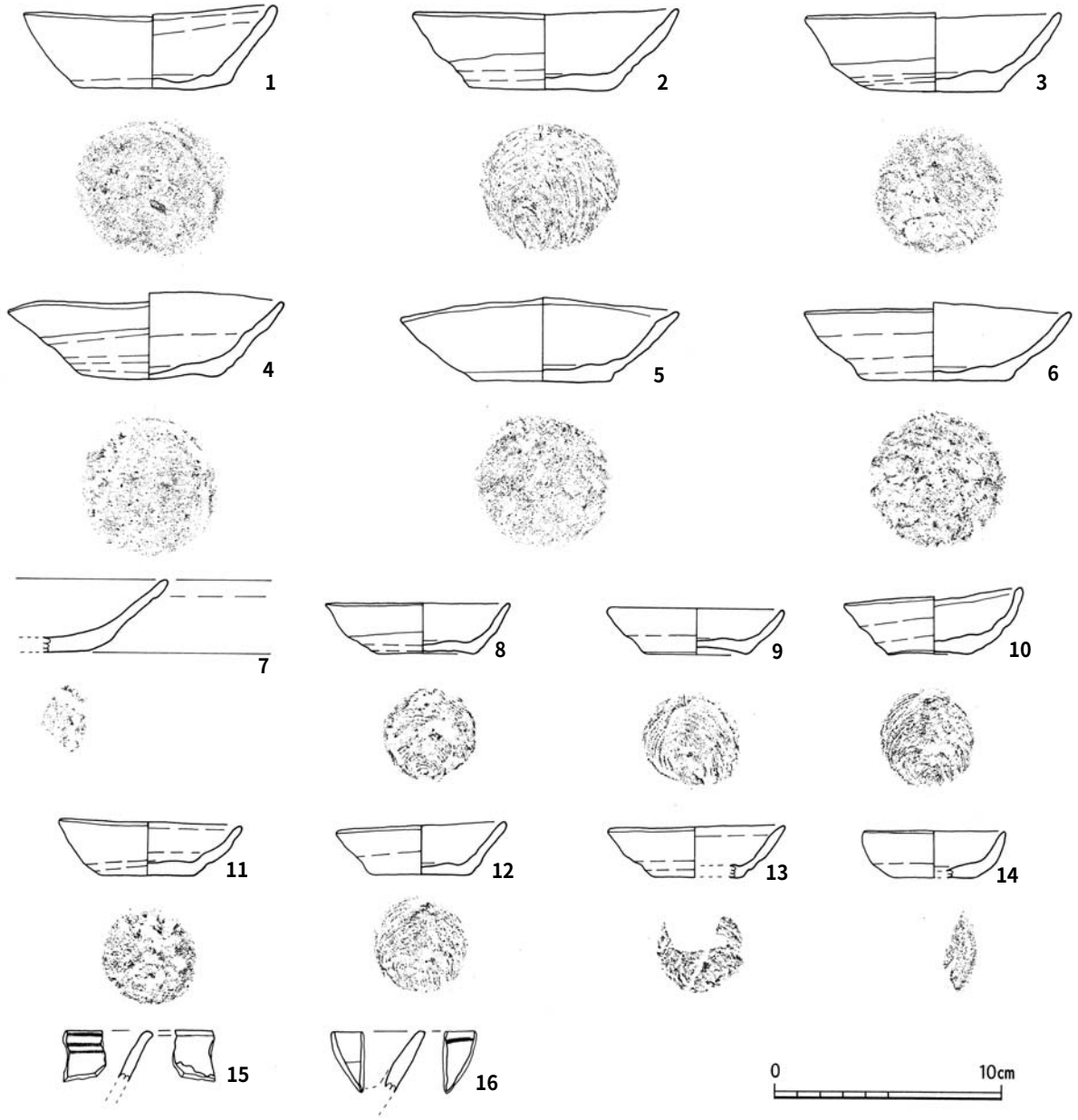
出土遺物

１～６の坏と８～12の小皿が主体部より出土したが，坏は土圧の影響を受けて歪みが認められる。**1**は口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。内底及び内面は緩い凹凸が認められる。外底は磨滅が著しいが，回転糸切を施す。**2**は口唇部の一部が欠損するが，ほぼ完形である。口唇部の厚さは薄い。内・外面の調整は，回転ナデを施す。内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切を施す。**3**は口唇部が丸く，内・外面は回転ナデ調整を施す。内底及び内面は緩い凹凸が認められるものの磨滅が著しい。外底も磨滅が著しいが，回転糸切を施す。**4**は口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は磨滅が著しいが，回転糸切を施す。**5**は口唇部が外方へ開き，内・外面は回転ナデを施す。内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は磨滅が著しいが，回転糸切を施す。**6**は口唇部が丸く，内・外面の長製は回転ナデを施す。内底及び内面は緩い凹凸が認められる。外底は磨滅が著しいが，回転糸切を施す。**7**は口縁部～底部まで残存するが，器面擦過が著し



第34図　SK１平面図・断面見通図（S＝1/30）

い。**8**は口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切が施される。**9**は口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は荒い回転糸切が施され，凹みが認められる。**10**は口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。そのため，内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切が施される。**11**は口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。そのため，内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切が施される。**12**は口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。そのため，内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切が施される。**13**は口縁部～底部の半分，残存する。口唇部が丸く，内・外面の調整は回転ナデを施す。そのため，内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切が施される。**14**は口縁部～底部まで残存する。外底は回転糸切を施す。15・16は口縁部が残存する高麗青磁である。**15**は口唇部が外方へ広がり，内面は３条の白胎線が施される。**16**は外面に１条の白胎線が施される。時期は15世紀頃と考えられる。



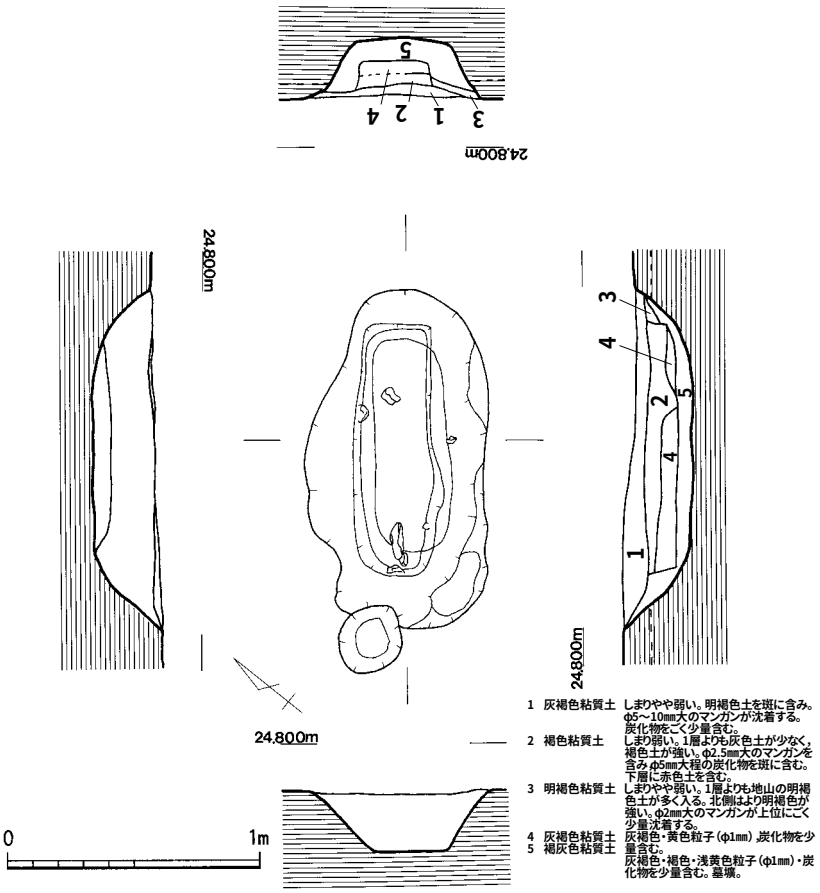
第35図　SK１出土遺物（S＝1/3）

番号	種類	器種	法量(cm)( )は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		内面	外面		
1	土師器	坏	11.0	6.9	3.6	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	5YR7/8 橙色	5YR7/8 橙色	精緻	1群
2	土師器	坏	11.5	6.4	3.3	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	精緻	2群
3	土師器	坏	11.2	5.7	3.6	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転糸切/ナデ	回転ナデ	良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/6 橙色	精緻	2群
4	土師器	坏	12.0	5.9	3.8	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻	2群
5	土師器	坏	12.0	6.0	3.8	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転糸切/ナデ	回転ナデ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻	2群
6	土師器	坏	11.8	6.6	3.5	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転糸切/ナデ	回転ナデ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/8 橙色	精緻	3群
7	土師器	坏	－	－	3.2	回転ナデ/磨滅	回転ナデ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	精緻 長石	
8	土師器	小皿	7.9	4.1	2.2	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転糸切/ナデ	回転ナデ	良	5YR7/8 橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻	2群
9	土師器	小皿	7.5	3.6	2.6	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻 砂粒	1群
10	土師器	小皿	7.0	3.6	2.6	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR7/6 橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻	1群
11	土師器	小皿	7.0	4.0	2.4	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR7/6 橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻	2群
12	土師器	小皿	7.2	4.1	2.2	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻	1群
13	土師器	小皿	7.4	4.2	2.4	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	精緻	第Ⅰ層埋土
14	土師器	小皿	6.4	3.6	2.2	回転ナデ/回転ヘラケズリ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻 長石	第Ⅰ層埋土
15	青磁	椀	－	－	2.2	釉	釉	良	7.5YR5/1 灰色	7.5YR5/1 灰色	精緻	象嵌・第Ⅰ層埋土
16	青磁	椀	－	－	2.7	釉	釉	良	5Y5/2 灰オリーブ色	5Y5/2 灰オリーブ色	精緻	象嵌・第Ⅰ層埋土

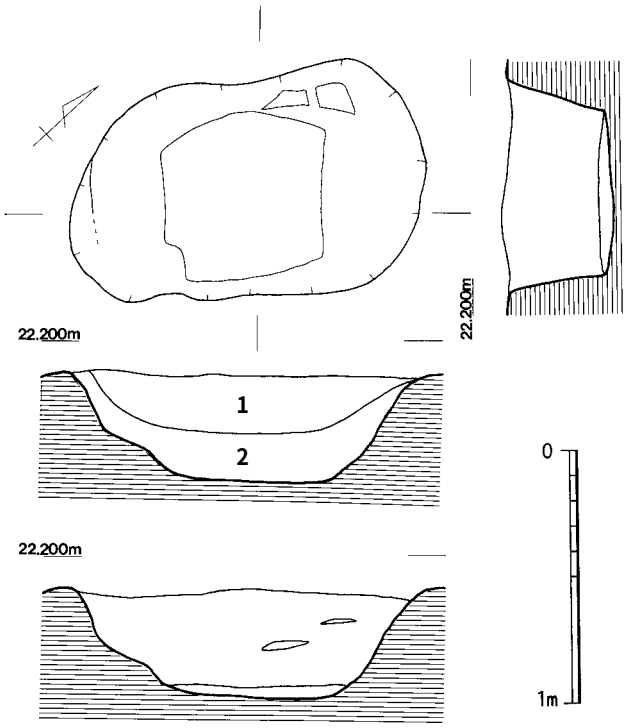
第12表　遺物観察表（SK１）

・SK６（第36図　図版15）

D－６－19の丘陵部西側に位置し，長軸1.34m，短軸0.7mの隅丸長方形を呈する。主軸はN－51°－Eである。南側をSB４－P６が掘り込まれる。堆積は４層に分層が可能で，主体部と掘方に分けられる。裏込め土は褐灰色粘質土で，主体部は長軸0.98m，短軸0.3mの形態が小さい隅丸長方形を掘り込む。主体部の埋土は後世に堆積した灰褐色粘質土でしめる。遺構は逆台形を呈し，計測値は長軸0.84m，短軸0.28mを測る。遺物は土師器小片が第Ⅱ層より出土したが，時期は不明である。裏込め土より採取した炭化材をAMS分析にかけた結果，第Ⅶ章－２で述べる13世紀末～14世紀末の年代が得られた。



第36図　SK６平面図・土層図・断面見通図（S＝1/30）



1　明褐色土　　黄色・白色の砂岩風化礫,マンガン粒子を多量に含む。
　　一部ブロック状の塊が見られる。マンガンの沈着が見られる。
2　灰褐色粘質土　橙色・灰色粒子を含み。しまりがみられない。

第37図　SK２土層図・断面見通図（S＝1/30）

（２） 土壙墓

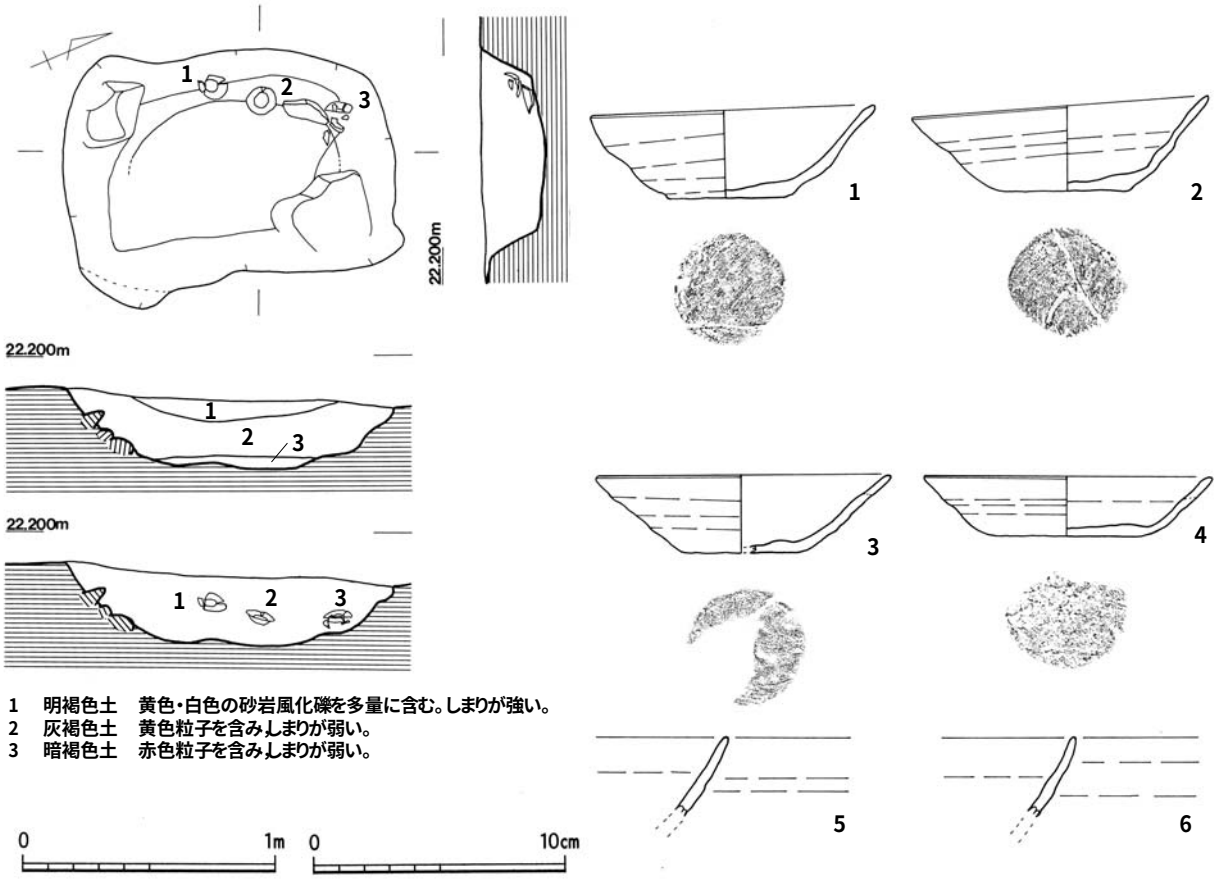
（第37・38図　第13表　図版15・16）

・SK２（第37図　図版15）

D－６－14の丘陵部西斜面に位置し，長軸1.37m，短軸0.84mの隅丸方形を呈する。主軸はN－44°－Eである。遺構は削平の影響を受ける。土層観察より２層に分層が可能である。底面は長軸0.65m，短軸0.6mの正方形に近い形態である。SK３と立地状況・埋土・主軸がほぼ同じである。

・SK３（第38図　第13表　図版15・16）

D－６－14の丘陵部西斜面に位置し，長軸1.31m，短軸0.9mの隅丸方形を呈する。主軸はN－21°－Eである。遺構は削平の影響を受ける。土層観察より３層に分層が可能である。底面は自然礫の影響を受けるが，長軸0.8m,短軸0.6mの長方形を呈する。遺物は西側の２層より，３点の土師器の坏が出土した。



1　明褐色土　黄色・白色の砂岩風化礫を多量に含む。しまりが強い。
2　灰褐色土　黄色粒子を含み,しまりが弱い。
3　暗褐色土　赤色粒子を含み,しまりが弱い。

第38図　SK３平面図・土層図・断面見通図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/３）

出土遺物

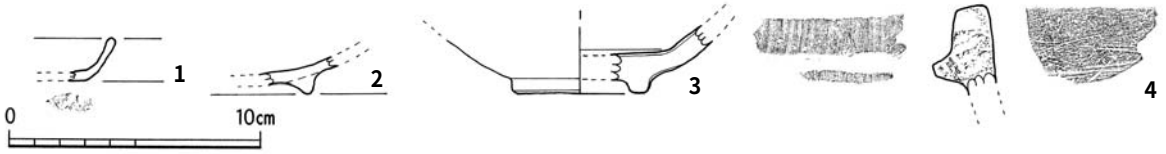
1は口唇部が丸く，体部上半より外方向へ開く。内・外面の調整は回転ナデを施す。内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切後，ナデを施す。**2**は口唇部が丸く，体部上半より外方向へ開く。内・外面の調整は回転ナデを施す。内底及び内・外面は緩い凹凸が認められる。外底は回転糸切後，ナデを施す。**3**は口唇部が丸く，体部上半より外方向へ開く。内・外面は回転ナデ調整を施す。外底は回転糸切を施す。**4**は１/５程残存する。口唇部が丸く，器高は１～３と比べ低い。内・外面の調整は回転ナデを施す。外底は磨滅が著しいが，回転糸切を施す。**5**・**6**は口唇部～体部まで残存する。５は他の坏と比べ，色調の違いがある。時期は，15世紀頃に位置付けられる。

番号	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	土師器	坏	11.0	4.6	3.6	回転ナデ/回転糸切/ナデ	回転ナデ	良	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/8 橙色	精緻 長石･石英･黒曜石
2	土師器	坏	11.7	4.9	3.8	回転ナデ/回転糸切/ナデ	回転ナデ/ナデ	良	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/8 橙色	精緻 長石･石英･黒曜石
3	土師器	坏	11.5	4.4	3.0	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/8 橙色	精緻 長石･石英･黒色粒子
4	土師器	皿	(11.2)	5.6	2.4	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻 長石･石英
5	土師器	坏	－	－	3.1	回転ナデ	回転ナデ	良	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	精緻 長石･石英･黒曜石
6	土師器	坏	－	－	3.2	回転ナデ	回転ナデ	良	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	精緻 長石･石英

第13表　遺物観察表（SK３）

（３） 柱穴跡（第39～44図　第14・15表　図版16・17）

1は小皿である。外底は糸切処理の痕跡が残る。**2**は埦である。内・外面は磨滅が著しい。**3**は龍泉窯系青磁の椀である。**4**は鍔付型石鍋の二次加工品で，鍔の割れ目に幅0.6cmのノミが施される。



第39図　中世 SP 出土遺物（S＝1/3）

番号	遺構	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	SP110	土師器	小皿	(7.6)	－	1.7	回転ナデ/静止糸切	回転ナデ	良	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/5 にぶい橙色	精緻 砂粒	
2	SP 7	土師器	埦	－	－	1.4	ナデ	ナデ	良	10YR6/1 褐灰色	10YR8/3 浅黄橙色	精緻 長石･石英･黒色粒子･雲母	
3	SP 3	青磁	椀	－	(5.0)	2.7	釉	釉/釉剥ぎ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR1/3 黒褐色	精緻	龍泉窯系
4	SP62	滑石製品	二次加工品	3.5	6.1	2.4	－	－	－	－	－		61.34g 鍔付型

第14表　遺物観察表（中世 SP）

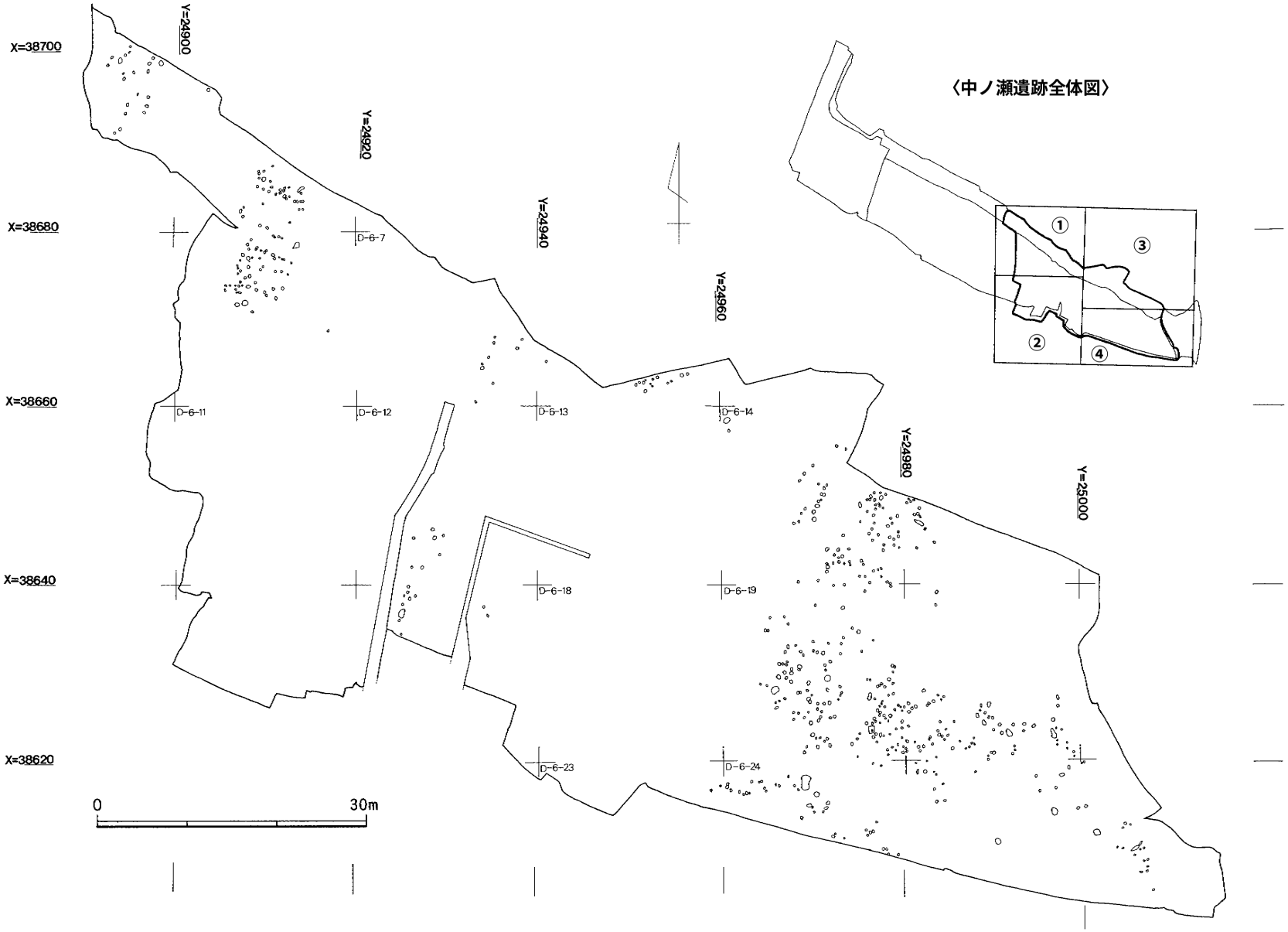
（４） 不明遺構（第31・45～50図　第16～19表　図版17～19）

・SX１（第45図　第16表　図版17）

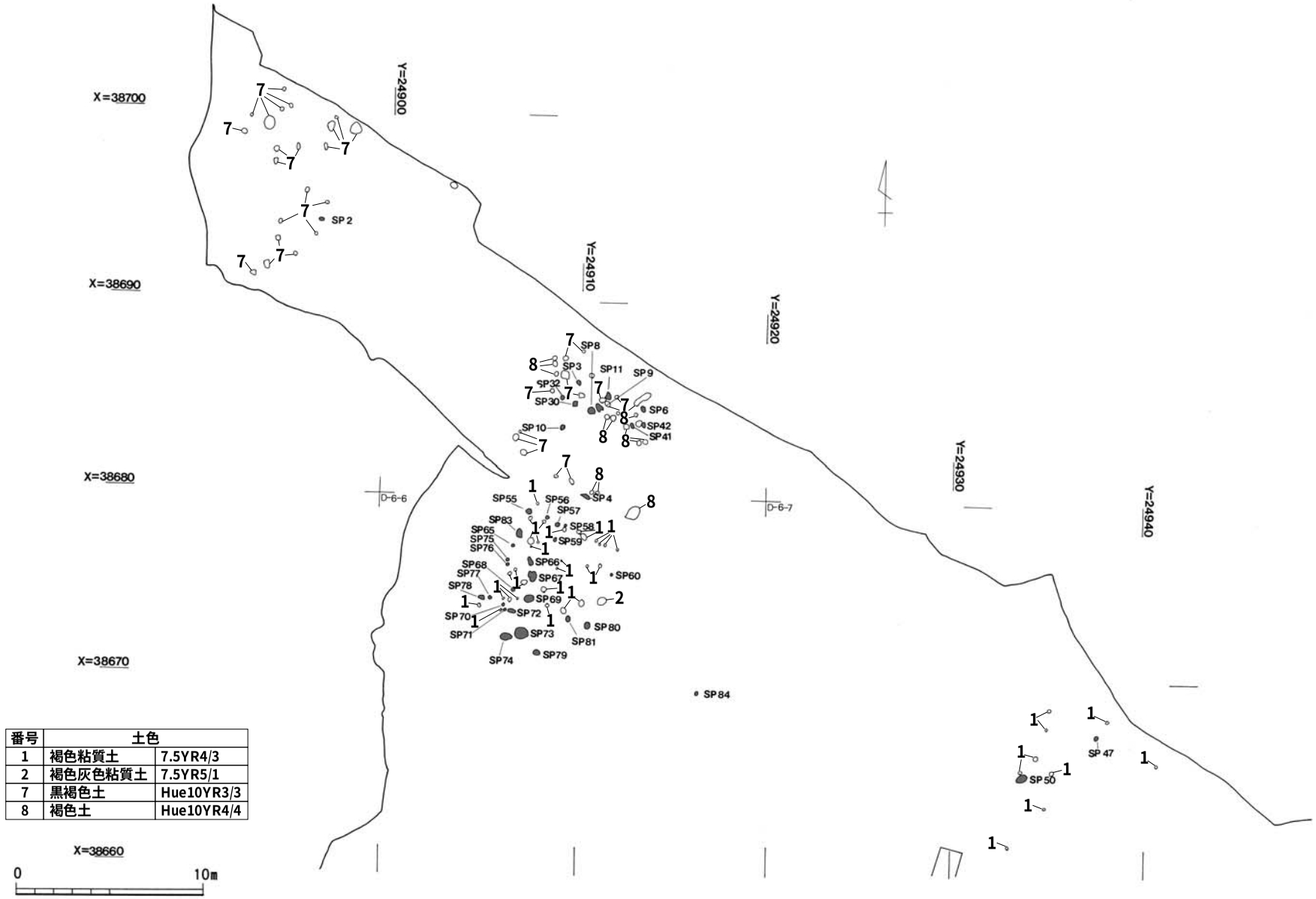
C－５－25・D－５－５に位置し，西側斜面に立地する。遺構の北西側は，攪乱の影響を受ける。堆積は単層である。南側に位置する SX３との新旧関係（旧→新）は，SX３→SX１である。

出土遺物

1は口縁部～底端部まで残存し，丸みをもつ皿である。**2**は口縁部～底部まで残存し，器高が浅い

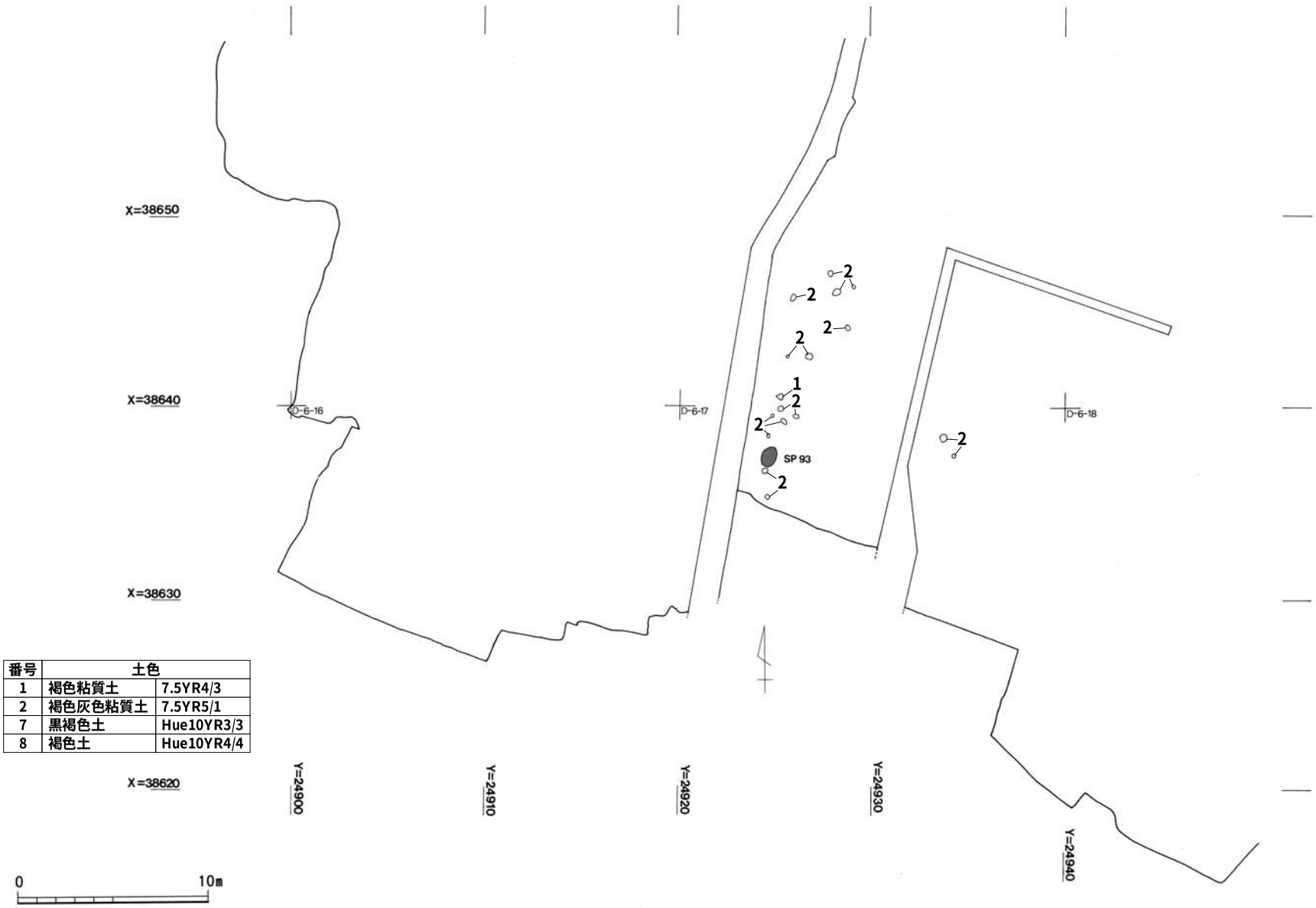


第40図　中世 SP 配置図（S＝1/650）



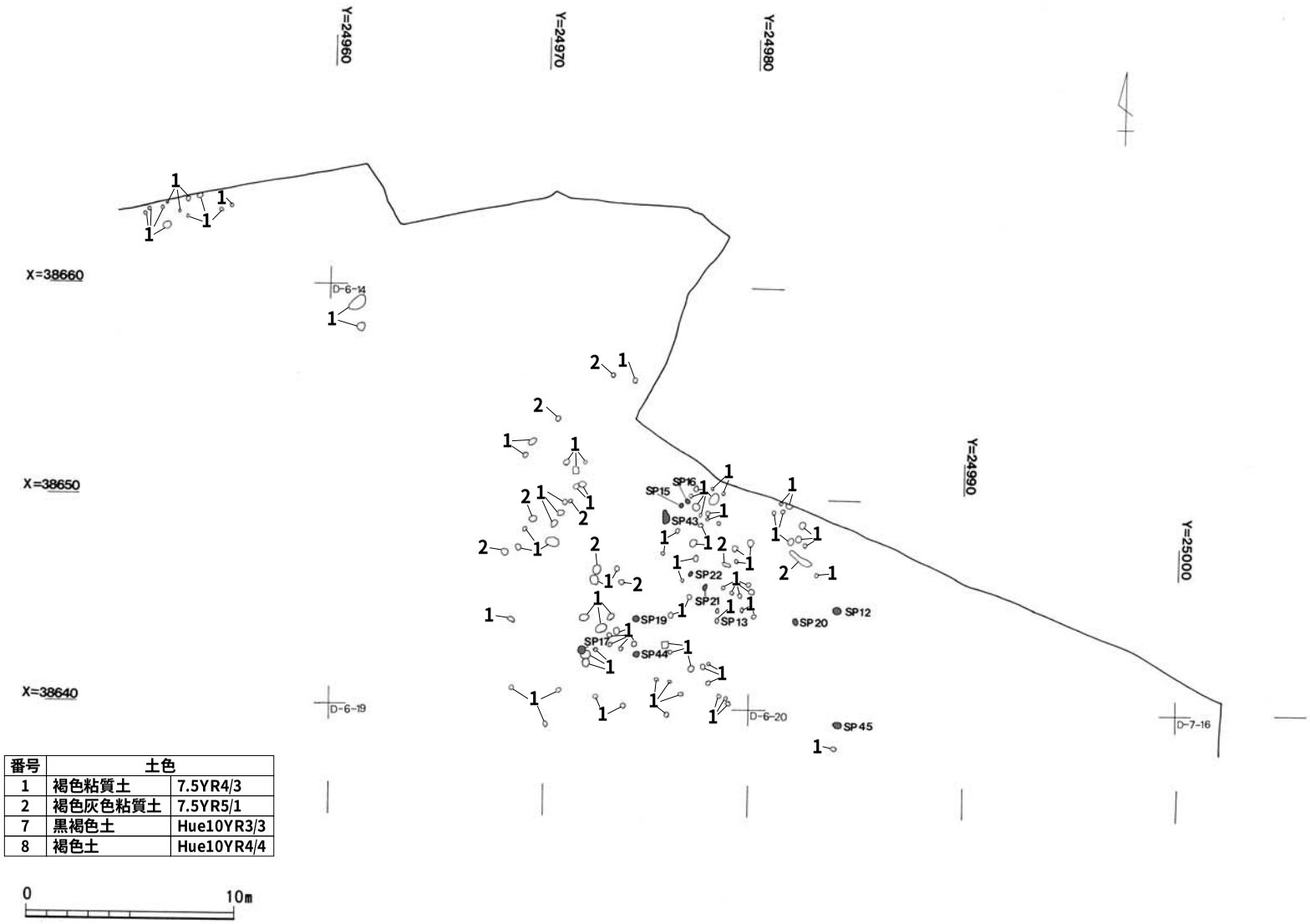
番号	土色	
1	褐色粘質土	7.5YR4/3
2	褐色灰色粘質土	7.5YR5/1
7	黒褐色土	Hue10YR3/3
8	褐色土	Hue10YR4/4

第41図　中世 SP 配置図①（S＝1/300）



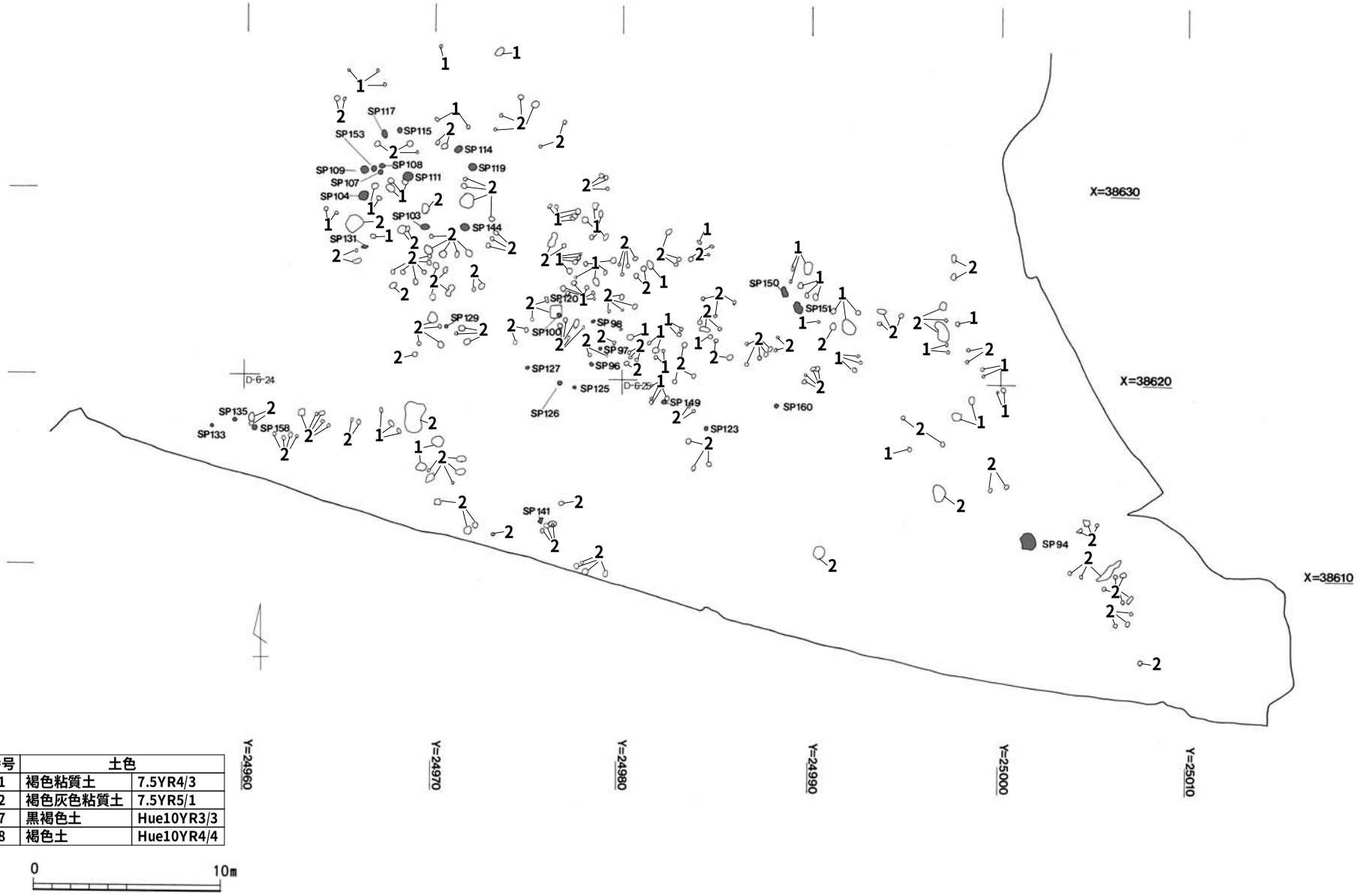
番号	土色	
1	褐色粘質土	7.5YR4/3
2	褐色灰色粘質土	7.5YR5/1
7	黒褐色土	Hue10YR3/3
8	褐色土	Hue10YR4/4

第42図　中世 SP 配置図②（S＝1/300）



番号	土色	
1	褐色粘質土	7.5YR4/3
2	褐色灰色粘質土	7.5YR5/1
7	黒褐色土	Hue10YR3/3
8	褐色土	Hue10YR4/4

第43図　中世 SP 配置図③（S＝1/300）



番号	土色	
1	褐色粘質土	7.5YR4/3
2	褐色灰色粘質土	7.5YR5/1
7	黒褐色土	Hue10YR3/3
8	褐色土	Hue10YR4/4

0　10m

第44図　中世 SP 配置図④（S＝1/300）

凡例	土色１：7.5YR4/3 褐色粘質土	土色２：7.5YR5/1 褐灰色粘質土	土色７：10YR3/3 黒褐色土	土色８：10YR3/3 褐色土	出土遺物 黒：黒曜石	出土遺物 安：安山岩
	出土遺物 剥：剥片	出土遺物 弥土：弥生土器	出土遺物 土：土師器	出土遺物 白：白磁	出土遺物 龍青：龍泉窯系青磁	出土遺物 数値：出土点数

番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)	番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)	番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)
SP２	D-5-5	Ⅱ	7	弥土３/土１	2.2	SP57	D-6-6	Ⅱ	1	弥土２	23.8	SP100	D-6-19	Ⅱ	2	弥土１	19.2
SP３	D-6-1	Ⅲ	7	弥土２/龍青１	8.6	SP58	D-6-6	Ⅱ	1	弥土２	15.4	SP103	D-6-19	Ⅱ	2	弥土１	18.9
SP４	D-6-7	Ⅲ	7	弥土２/土１	7.3	SP59	D-6-6	Ⅱ	1	土１	20.9	SP104	D-6-19	Ⅱ	1	黒剥１	18.1
SP６	D-6-1	Ⅱ	8	弥土４	5.1	SP60	D-6-6	Ⅱ	5	土１	16.6	SP107	D-6-19	Ⅱ	1	弥土１	20.5
SP８	D-6-1	Ⅱ	7	弥土８	6.2	SP65	D-6-7	Ⅱ	1	弥土３	17.5	SP108	D-6-19	Ⅱ	1	黒剥２/弥土２	40.6
SP９	D-6-1	Ⅲ	7	弥土８/土６/白１	23.3	SP66	D-6-6	Ⅱ	1	弥土１	9.0	SP109	D-6-19	Ⅱ	1	弥土６	36.8
SP10	D-6-1	Ⅱ	7	弥土１	11.2	SP67	D-6-6	Ⅱ	1	弥土４	22.9	SP111	D-6-19	Ⅱ	1	弥土１	31.0
SP11	D-6-1	Ⅱ	7	弥土甕４	8.5	SP68	D-6-6	Ⅱ	1	弥土３	12.1	SP114	D-6-19	Ⅱ	1	弥土２	26.1
SP12	D-6-15	Ⅲ	2	弥土１/黒剥１	3.0	SP69	D-6-6	Ⅱ	1	弥土２	3.7	SP115	D-6-19	Ⅱ	2	弥土４	23.4
SP13	D-6-14	Ⅲ	1	黒剥１	16.6	SP70	D-6-6	Ⅱ	1	弥土２	1.7	SP117	D-6-19	Ⅱ	2	弥土６	33.0
SP15	D-6-14	Ⅱ	1	弥土１	2.5	SP71	D-6-6	Ⅱ	2	弥土１	17.6	SP119	D-6-19	Ⅱ	2	弥土１	39.2
SP16	D-6-14	Ⅱ	1	黒剥１	20.4	SP72	D-6-6	Ⅱ	1	弥土４	6.7	SP120	D-6-19	Ⅱ	2	黒剥１	35.3
SP17	D-6-14	Ⅱ	1	弥土１	16.6	SP73	D-6-6	Ⅱ	1	弥土６	6.7	SP123	D-6-25	Ⅱ	1	弥土３	23.0
SP19	D-6-14	Ⅱ	1	弥土１	24.5	SP74	D-6-6	Ⅱ	1	弥土甕１	26.6	SP125	D-6-24	Ⅱ	2	弥土１	12.1
SP20	D-6-15	Ⅱ	2	安剥１	16.3	SP75	D-6-6	Ⅲ	2	弥土５	8.6	SP126	D-6-19	Ⅱ	1	黒剥１	27.8
SP21	D-6-14	Ⅱ	1	弥土１	10.8	SP76	D-6-6	Ⅲ	2	弥土４	17.4	SP127	D-6-19	Ⅱ	2	弥土１	26.2
SP22	D-6-14	Ⅱ	1	弥土１	18.3	SP77	D-6-6	Ⅱ	1	弥土１	26.4	SP129	D-6-19	Ⅱ	2	黒剥１	20.3
SP30	D-6-1	Ⅱ	7	弥土２	17.2	SP78	D-6-6	Ⅱ	1	弥土６	17.1	SP131	D-6-19	Ⅱ	1	弥土５	21.5
SP32	D-6-1	Ⅱ	7	弥土１	29.6	SP79	D-6-6	Ⅱ	1	弥土２	18.3	SP133	D-6-23	Ⅱ	1	弥土２	9.3
SP41	D-6-1	Ⅱ	8	弥土１	18.4	SP80	D-6-6	Ⅱ	2	弥土２	13.1	SP135	D-6-23	Ⅱ	2	弥土１	21.0
SP42	D-6-1	Ⅱ	8	弥土１	12.8	SP81	D-6-6	Ⅱ	1	弥土甕１	31.5	SP141	D-6-24	Ⅱ	2	弥土２/龍青１	16.8
SP43	D-6-14	Ⅱ	1	黒剥１	8.6	SP83	D-6-6	Ⅱ	1	弥土１	3.1	SP144	D-6-19	Ⅱ	2	弥土甕１/弥土５	15.8
SP44	D-6-14	Ⅱ	1	弥土１	9.5	SP84	D-6-6	Ⅱ	1	弥土１	16.8	SP149	D-6-25	Ⅱ	1	弥土４	8.2
SP45	D-6-20	Ⅱ	1	弥土１	24.9	SP93	D-6-17	Ⅲ	2	弥土１	8.8	SP150	D-6-20	Ⅱ	1	弥土１/土１	17.8
SP47	D-6-7	Ⅲ	1	弥土２	25.5	SP94	D-7-21	Ⅱ	2	弥土１	18.0	SP151	D-6-20	Ⅱ	1	弥土１	12.3
SP50	D-6-7	Ⅲ	1	弥土１	14.0	SP96	D-6-19	Ⅱ	2	弥土１	13.5	SP153	D-6-19	Ⅱ	1	弥土３	31.8
SP55	D-6-6	Ⅱ	1	弥土３	24.5	SP97	D-6-19	Ⅱ	2	弥土１	45.3	SP158	D-6-24	Ⅱ	2	弥土１	21.4
SP56	D-6-6	Ⅱ	1	弥土１/土１	23.2	SP98	D-6-19	Ⅱ	1	弥土２	19.2	SP160	D-6-25	Ⅱ	2	弥土１	8.0

第15表　中世 SP 一覧表

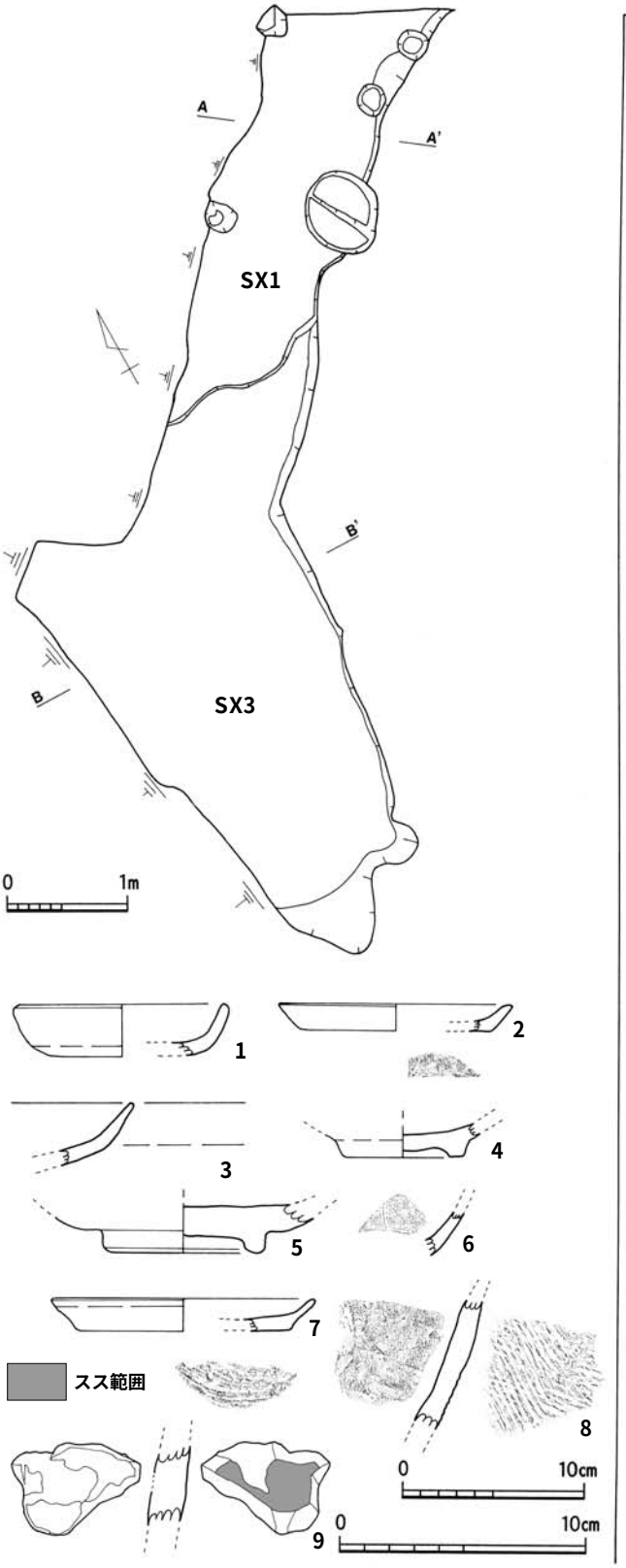
皿である。外底は糸切の痕跡が残る。**3**は口縁部～体部下半まで残存する埦である。器面の磨滅が著しい。**4**は底部が残存する白磁の椀である。施釉は内・外面と外底まで施し，外底には砂が付着する。**5**は底部が残存する龍泉窯系青磁椀である。施釉は内・外面まで施す。**6**は体部が残存する陶器の擂鉢である。内面には３条１組の擂目が残る。

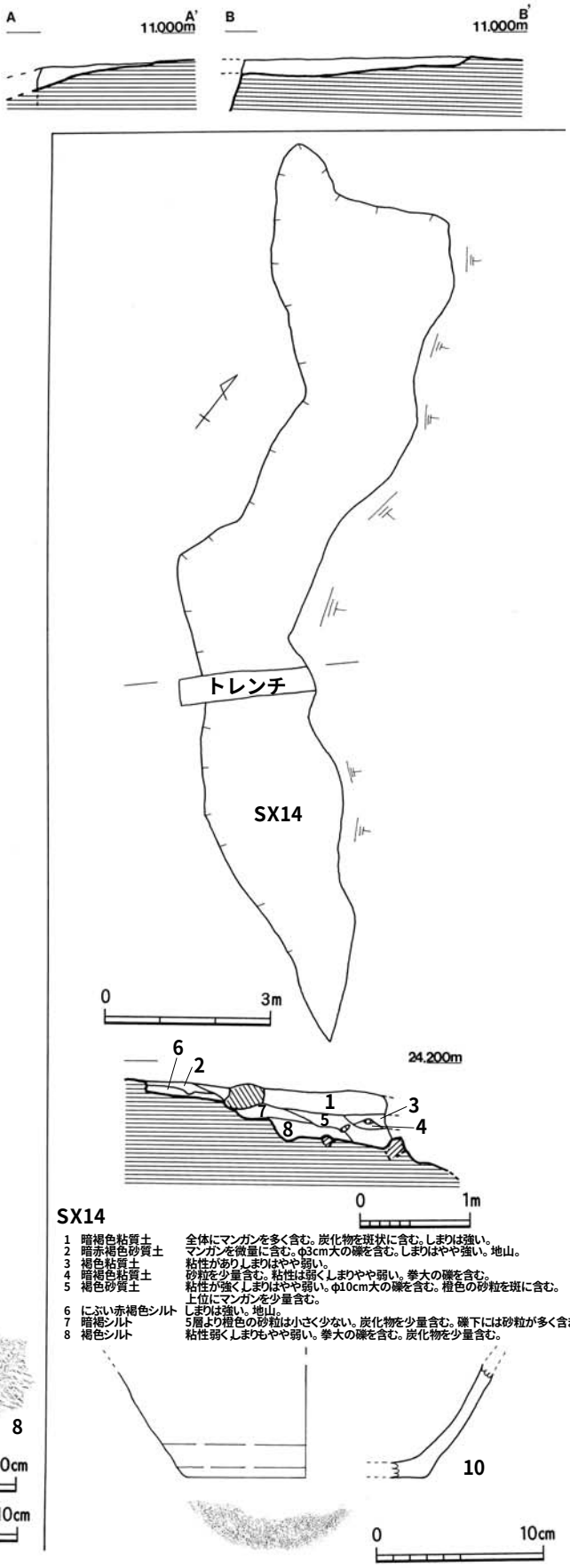
・SX３（第45図　第16表　図版17）

D－５－５に位置し，西側斜面に立地する。遺構の西側は攪乱の影響を受ける。堆積は単層である。

出土遺物

7は口縁部～底端部まで残存する皿である。口縁部の器壁は薄く，外底は回転糸切を施す。**8**は体部が残存する甕である。外面は平行タタキ，内面はナデ消しが施される。**9**は体部が残存する石鍋である。外面は縦方向にノミ，内面は器面擦化が著しい。





第45図　SX１・３平面図・断面見通図（S＝１/60），出土遺物（１～６はS＝１/３，７～９はS＝１/４）

第46図　SX14平面図（S＝１/120）・土層図（S＝１/60），出土遺物（S＝１/４）

・SX14（第46図　第16表　図版17）

D－６－20に位置し，丘陵部の東側斜面に堆積した遺構である。遺構の東側は近・現代の石垣が積まれていたため，削平を受けている。土質より，砂粒や炭化物が斑状に堆積することが観察できる。

出土遺物

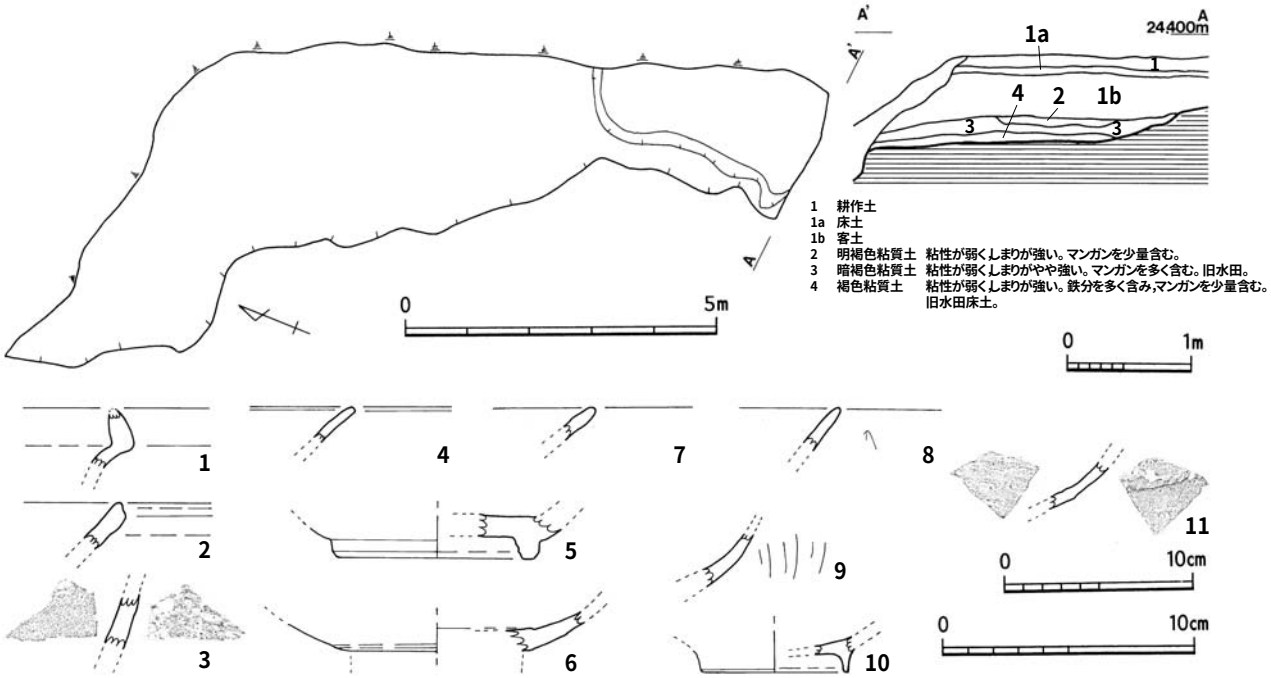
10は体部下半～底部まで残存する瓦質の擂鉢である。内・外面及び外底の器面は剥離が著しく，外面の一部に黒色を呈する。内面の擂目は，体部下半に５条１組が施される。胎土は灰白色で縞模様を呈し，粘性の強い粘土を使用したと考えられる。時期は15世紀頃と考えられる。

番号	遺構	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	SX１	土師器	皿	(8.2)	(4.6)	2.1	ナデ	ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻 砂粒	
2	SX１	土師器	皿	(9.6)	(7.8)	1.1	ナデ/ 回転糸切	ナデ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/8 橙色	やや精緻 砂粒	
3	SX１	土師器	埦	－	－	2.5	ナデ	ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻 砂粒	
4	SX１	白磁	椀	－	(3.8)	1.3	釉/釉剥ぎ	釉	良	7.5GY8/1 明緑灰色	7.5GY8/1 明緑灰色	精緻	
5	SX１	青磁	椀	－	(6.0)	2.0	釉/釉剥ぎ	釉	良	2.5GY5/1 オリーブ灰色	2.5GY5/1 オリーブ灰色	精緻	
6	SX１	陶器	擂鉢	－	－	2.4	回転ヘラケズリ/釉	ナデ/スリメ/釉	良	10YR6/1 灰色	10YR6/1 灰色	精緻	
7	SX３	土師器	皿	(10.8)	(8.8)	1.3	ナデ/ 回転糸切	ナデ	良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	精緻 砂粒	
8	SX３	須恵器	甕	－	－	7.1	平行タタキ	ナデ	良	7.5YR7/1 灰白色	7.5YR6/2 灰白色	やや精緻 長石･石英	
9	SX３	滑石製品	石鍋	－	－	4.4	縦位ノミ	使用擦過	－	－	－	－	外面にススト付着
10	SX14	瓦質土器	擂鉢	－	(14.4)	6.7	回転ナデ	ナデ/スリメ	やや良	10YR8/1 灰白色	10YR8/1 灰白色	やや精緻 長石･石英･黒色粒子	

第16表　遺物観察表（SX１・３・14）

・SX19（第47図　第17表　図版17・18）

D－７－21に位置し，丘陵部の東側斜面に堆積した遺構である。遺構の東側は近・現代の石垣が積まれていたため，削平を受けている。立地・堆積の状況及び土質がSX14と共通していることから，



第47図　SX19平面図（S＝１/120）・土層図（S＝１/60），出土遺物（１～３はS＝１/４，４～11はS＝１/３）

同一遺構の可能性が高い。遺構の性格は，丘陵上に展開する遺構と照らし合わせて，耕作地と推測されたものの，それに関する遺構は検出されなかった。また，第Ⅱ層は第Ⅶ章－４で述べる分析を行った。その結果，調査時の所見の可能性が高い。

出土遺物

1は口縁部が屈曲する壺である。**2**は口縁部が残存する瓦質の捏鉢である。内・外面の磨滅が著しい。**3**は瓦質の擂鉢胴部である。外面の剥離が著しいものの，格子目タタキの痕跡が残る。**4**は口縁部が残存する口禿の白磁である。**5**は底部が残存する白磁である。外面は体部下半まで釉が施され，外底は認められない。内底は荒い釉剥ぎを円弧に施す。また，白色を呈する胎土目跡が残る。**6**は体部下半が残存する白磁である。胎土は白色を呈し，施釉は光沢を帯びる。７～10は龍泉窯系青磁である。**7**・**8**は口縁部が残存し，**8**は鎬蓮弁文を施す。**9**は体部が残存する椀で，鎬蓮弁文を施す。**10**は底部が残存し，復元径より坏と考えられる。施釉は内・外面及び外底に認められ，畳付は釉剥ぎを施す。**11**は体部が残存する陶器で，外面は無釉，内面に灰褐色の釉薬を施す。時期は15世紀頃に位置付けられる。

番号	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	陶器	壺	－	－	3.1	ナデ	ナデ	良	5PB4/1 暗青灰色	5PB6/1 青灰色	精緻 長石･石英
2	瓦質土器	捏鉢	－	－	2.5	ナデ	ナデ	良	2.5Y7/4 浅黄薄色	2.5Y7/4 浅黄色	やや精緻 長石･石英
3	瓦質土器	擂鉢	－	－	2.8	格子目タタキ	ナデ	良	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y5/1 黄灰色	精緻 長石･石英
4	白磁	皿	－	－	1.4	釉	釉/釉剥ぎ	良	5PB7/1 明青灰色	5YR4/2 灰褐色	精緻
5	白磁	椀	－	(6.8)	1.7	釉/ヘラケズリ	釉/釉剥ぎ	良	10Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白色	精緻
6	白磁	椀	－	－	1.6	釉/ヘラケズリ	釉	良	10Y7/2 灰白色	10Y7/2 灰白色	精緻
7	青磁	皿	－	－	1.3	釉	釉	良	2GY7/1 明オリーブ灰色	2GY7/1 明オリーブ灰色	精緻
8	青磁	椀	－	－	1.7	釉	釉	良	7.5Y5/3 灰オリーブ色	7.5Y6/2 灰オリーブ色	精緻
9	青磁	椀	－	－	2.1	釉	釉	良	2.5 GY7/1 明オリーブ色	10Y7/1 明緑灰色	精緻
10	青磁	小坏	－	(5.6)	1.4	釉/釉剥ぎ	釉	良	7.5Y5/3 灰オリーブ色	7.5Y6/2 灰オリーブ色	精緻
11	陶器	皿	－	－	1.9	回転ヘラケズリ	釉/回転ナデ	良	5PB7/1 明青灰色	5YR4/2 灰褐色	精緻

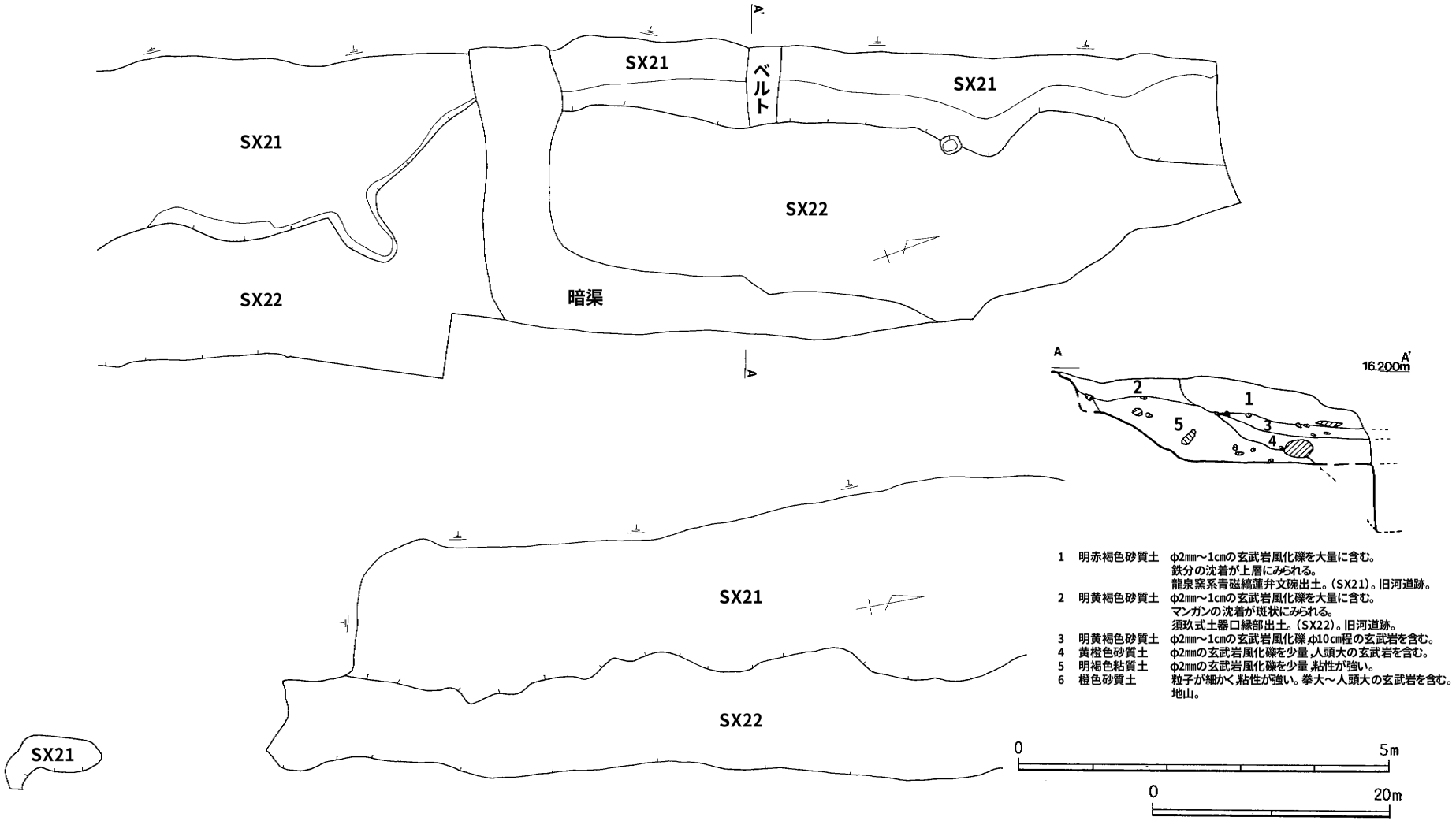
第17表　遺物観察表（SX19）

・SX21（第48・49図　第18表　図版18）

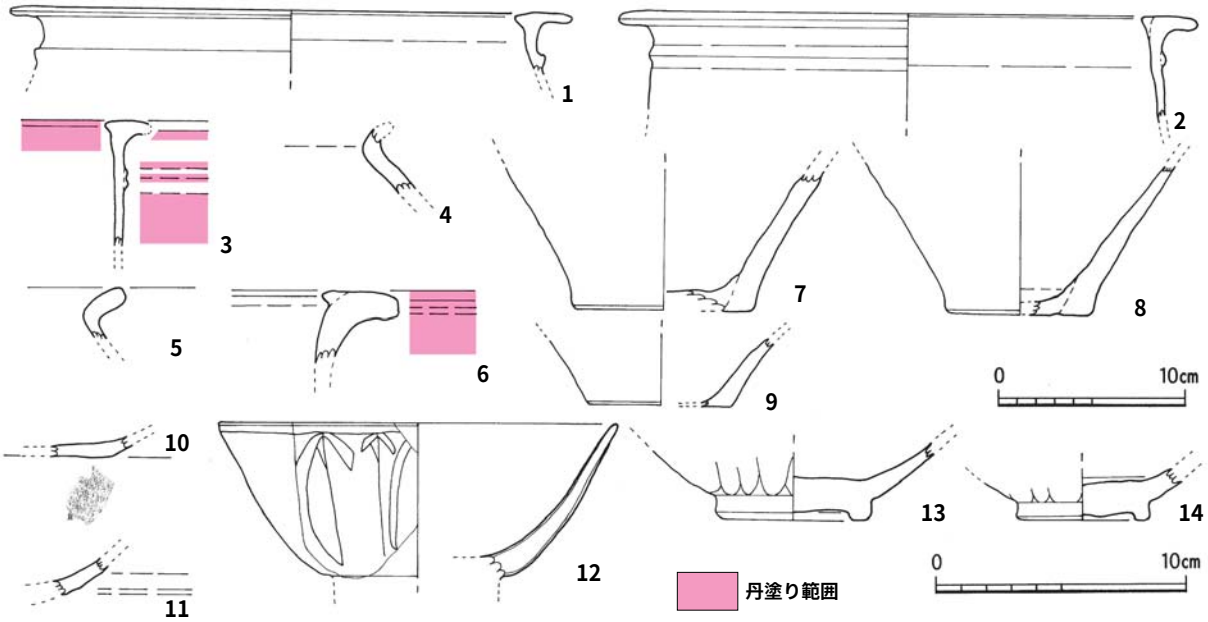
D－６－13・18の西斜面に位置する。SX21との新旧関係（旧→新）は，SX22→SX21である。遺構の西側は，擁壁による削平されているが，土層観察より斜交葉理が確認できる。また，遺構の南側に湧水点が存在し，現在も水路が設けられている。そのため，遺構は旧河道と推測される。

出土遺物

1～**9**は弥生土器である。**10**は底部が残存する小皿である。外底は回転糸切を施す。**11**は体部が残存する広東系白磁の椀である。外面に縦箆花弁文の下端が認められる。12～14は龍泉窯系青磁である。**12**は口縁部～体部下半まで残存する椀で，外面は鎬蓮弁文を施す。**13**は体部下半～底部まで残存する椀で，胎土は黄色を呈する。釉は高台の外面まで施し，外底は露胎である。**14**は体部下半～底部まで残存する椀で，釉は外底の一部以外は全面に施される。また，図化・図示は行っていないが，軽石が出土する。時期は13世紀～14世紀に位置付けられる。



第48図　SX21・22平面図（S＝1/500）・土層図（S＝1/80）



第49図　SX21出土遺物（1～9はS＝1/4，10～14はS＝1/3）

番号	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	弥生土器	甕	(24.0)	－	3.4	ナデ	ナデ	やや良	10YR3/3 暗褐色	10YR6/8 明黄褐色	やや精緻 長石･石英･片岩	
2	弥生土器	甕	(25.0)	－	5.7	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR4/6 赤褐色	2.5YR4/6 赤褐色	やや精緻 長石･石英	
3	弥生土器	甕	－	－	6.6	ナデ	ナデ	やや良	10YR4/8 赤色	10YR4/8 赤色	やや精緻 長石･石英	丹塗り
4	弥生土器	甕	－	－	3.4	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR4/6 赤褐色	2.5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石･石英･片岩	
5	弥生土器	甕	－	－	2.7	ナデ	ナデ	やや良	5YR3/2 暗褐色	5YR4/2 灰褐色	やや精緻 長石･石英	
6	弥生土器	壺	－	－	4.8	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR3/6 暗赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石･石英	丹塗り
7	弥生土器	甕	－	(9.4)	7.4	ナデ	ナデ	やや良	5YR3/4 暗赤褐色	5YR4/8 赤褐色	やや精緻 長石･石英･黒曜石	
8	弥生土器	甕	－	(7.8)	8.0	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	やや精緻 長石･石英	
9	弥生土器	甕	－	(7.6)	4.7	ナデ	ナデ	やや良	10YR6/6 明黄褐色	10YR3/3 暗褐色	やや精緻 長石･石英	
10	土師器	小皿	－	－	0.8	回転糸切	ナデ	良	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR5/8 明褐色	やや精緻 長石･石英	
11	白磁	椀	－	－	－	回転ヘラケズリ/釉	釉	良	7.5Y8/2 灰白色	7.5Y8/2 灰白色	精緻	
12	青磁	椀	(15.8)	－	7.1	釉	釉	良	7.5Y5/3 灰オリーブ色	7.5Y6/3 灰オリーブ色	精緻	
13	青磁	椀	－	(5.8)	3.1	釉	釉	良	10Y5/2 オリーブ灰色	10Y5/2 オリーブ灰色	精緻	
14	青磁	椀	－	(4.4)	2.0	釉	釉	良	5Y5/4 オリーブ色	5Y6/3 オリーブ黄色	精緻	

第18表　遺物観察表（SX21）

・SX24（第31・50図　第19表　図版18）

D－６－19に位置し，遺構の規模は長軸4.5m，短軸1.5mを測る。検出状況より耕作土と推測されたが，それに伴う遺構は確認されなかった。そのため第Ⅶ章－４で述べる分析を行った結果，その可能性が高い。

出土遺物

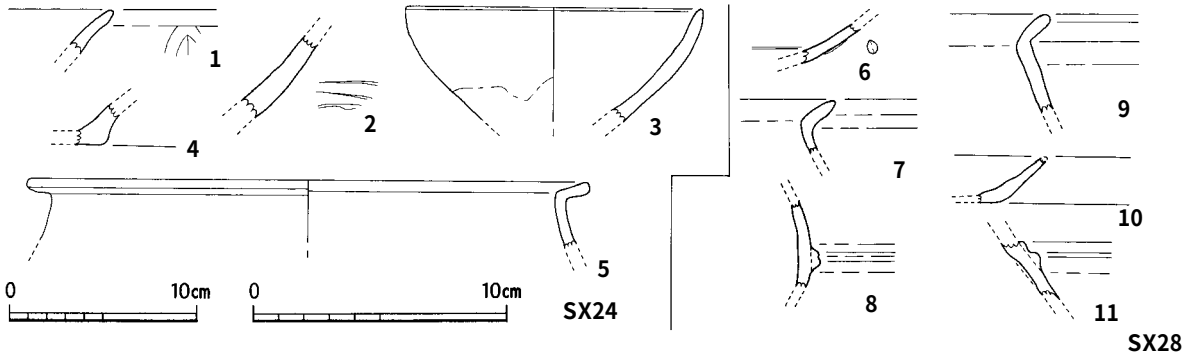
1・**2**は龍泉窯系青磁椀である。**3**は口縁部～体部下位まで残存する天目茶碗である。**4**・**5**は弥生土器である。

・SX28（第31・50図　第19表　図版18・19）

D－６－19に位置し，遺構の規模は長軸2.6m，短軸2.1mを測る。堆積は褐色粘質土の単層で，土層観察より自然堆積の可能性が高い。

出土遺物

6は産地不明の磁器の椀である。外面に楕円形の貼付けが確認できる。**7**～**11**は弥生土器である。



第50図　SX24・28出土遺物（1～3・7はS＝1/3，4～6はS＝1/4）

番号	遺構	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	SX24	青磁	椀	－	－	1.8	釉	釉	良	5GY7/1 明オリーブ灰色	5GY7/1 明オリーブ灰色	精緻
2	SX24	青磁	椀	－	－	3.3	釉	釉	良	5GY7/1 明オリーブ灰色	2.5GY6/1 オリーブ灰色	精緻
3	SX24	陶器	碗	(11.8)	－	4.5	釉/ヘラケズリ	釉	良	N2 黒色	N2 黒色	精緻
4	SX24	弥生土器	甕	－	－	2.2	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	やや精緻 長石・石英
5	SX24	弥生土器	甕	(29.8)	－	3.2	ナデ	ナデ	やや良	5YR4/2 灰褐色	5YR7/3 にぶい橙色	やや精緻 長石・石英・片岩
6	SX28	磁器	椀	－	－	1.6	釉	釉	良	2.5Y6/3 にぶい黄色	2.5Y6/3 にぶい黄色	精緻
7	SX28	弥生土器	甕	－	－	5.3	ナデ	ナデ	やや良	10YR4/2 灰褐色	10YR6/6 橙色	やや精緻 長石・石英
8	SX28	弥生土器	甕	－	－	2.9	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR7/2 明褐灰色	7.5YR7/2 明褐灰色	やや精緻 長石・石英・黒曜石
9	SX28	弥生土器	高坏	－	－	2.9	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	やや精緻 長石・石英・片岩
10	SX28	弥生土器	壺	－	－	4.6	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR5/1 褐灰色	やや精緻 長石・石英
11	SX28	弥生土器	壺	－	－	3.0	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR5/2 暗灰黄色	2.5YR2/1 黒色	やや精緻 長石・石英

第19表　遺物観察表（SX24・28）

小　結

・土葬墓について

今回の調査において，中世のSKは４基検出された。検出状況及び堆積状況より，これらは土葬墓(註1)として認められる。なお，SK１・６の遺構名称は，調査時の所見を優先した。

SK１は丘陵部東斜面の平坦面に設けられる。平坦面は造成した可能性が高いが，調査時に明確に判明できなかった。形態は円形を呈し，本県の類例は諫早市林ノ辻遺跡で確認できる。堆積状況より棺に桶を用いた葬送が考えられるものの上部構造は不明である。遺物は床面東側より土師器坏・小皿が出土した。これらは出土状態に乱れが認められないため，埋納品として棺内副葬が認められる。

SK６は丘陵上に設けられる。掘り方は隅丸長方形を呈し，堆積状況より木蓋の使用が推測され，棺を用いた葬送が考えられる。また，SK６周囲にはSPが確認できるものの，当該期の集落跡が復元できなかった。このため，単独墓または屋敷墓として営まれたか不明である。

SK２・３は丘陵部西斜面に設けられ，削平の影響を受けるものの立地・埋土・主軸方位より，近い時期の埋葬が考えられる。形態は隅丸長方形を呈し，本県の類例は多く確認できる。堆積状況より木蓋の使用が推測される。遺物はSK３より，土師器が床面より浮いた状態で出土した。このため，棺外供献が考えられ，時間の経過とともに墓壙内空間へ落ち込んだと推測される。

・土師器について（第20表）

本遺跡のSK１・３より出土した土師器について，器形・成形技法・底部の切り離し・胎土・法量を整理し，口径／底径の指数値を含めて資料が整っている大宰府周辺地域と時間軸上での比較を進め，県北部の土葬墓出土資料と検討を加え，本遺跡の位置付けを試みたい(註2)。

SK１坏は体部が直線もしくは内湾気味に立ち上がり，口縁部が外方へ開く。内底と体部の立ち上

楼楷田遺跡４号集石土壙墓

番号	器種	口径	器高	底径	口径/器高	口径/底径	底部	復元	備考
4	坏Ｂ類	16.00	2.50	9.30	6.40	1.72	ヘラ		白磁椀Ⅳ類

小薗城跡

番号	器種	口径	器高	底径	口径/器高	口径/底径	底部	復元	備考
12	坏Ｆ類	12.10	3.40	5.40	3.56	2.24	糸	●	46I 土壙墓
7	坏Ｆ類	12.20	3.10	5.10	3.94	2.39	糸		47I 土壙墓
8	坏Ｆ類	11.60	3.60	5.00	3.22	2.32	糸	●	47I 土壙墓
30	小皿ＡⅠ２類	7.40	1.90	4.00	3.89	1.85	糸		47I 土壙墓
31	小皿ＡⅠ２類	6.90	1.90	3.70	3.63	1.86	糸		47I 土壙墓
32	小皿ＡⅠ２類	6.30	1.60	4.00	3.94	1.58	糸/板		47I 土壙墓
33	小皿ＡⅠ２類	7.00	1.60	4.40	4.38	1.59	糸	●	47I 土壙墓
9	坏Ｆ類	12.40	3.30	4.70	3.76	2.64	糸		48I 土壙墓
10	坏Ｆ類	12.70	3.50	5.00	3.63	2.54	糸		48I 土壙墓
11	坏Ｆ類	12.00	3.10	5.40	3.87	2.22	糸	●	48I 土壙墓
6	坏Ｆ類	11.20	4.60	4.80	2.43	2.33	―		55I 土壙墓
29	小皿ＡⅠ２類	6.60	1.70	3.90	3.88	1.69	―		55I 土壙墓

中ノ瀬遺跡ＳＫ１

番号	器種	口径	器高	底径	口径/器高	口径/底径	底部	復元	備考
1	坏ＥⅡ類	11.00	3.60	6.90	3.06	1.59	糸		
2	坏ＥⅡ類	11.50	3.30	6.40	3.48	1.80	糸		
3	坏ＥⅡ類	11.20	3.60	5.70	3.11	1.96	糸		
4	坏ＥⅡ類	12.00	3.80	5.90	3.16	2.03	糸		
5	坏ＥⅡ類	12.00	3.80	6.00	3.16	2.00	糸		
6	坏ＥⅡ類	11.80	3.50	6.60	3.37	1.79	糸		
8	小皿ＡⅠ２類	7.90	2.20	4.10	3.59	1.93	糸		
9	小皿ＡⅠ２類	7.50	2.50	4.50	3.00	1.67	糸		
10	小皿ＡⅠ２類	7.80	2.60	3.60	3.00	2.17	糸		
11	小皿ＡⅠ２類	7.00	2.40	4.00	2.92	1.75	糸		
12	小皿ＡⅠ２類	7.20	2.20	4.10	3.27	1.76	糸		

中ノ瀬遺跡ＳＫ３

番号	器種	口径	器高	底径	口径/器高	口径/底径	底部	復元	備考
1	坏Ｆ類	11.00	3.60	4.60	3.06	2.39	糸		
2	坏Ｆ類	11.70	3.80	4.90	3.08	2.39	糸		
3	坏Ｆ類	11.50	3.00	4.40	3.83	2.61	糸	●	
4	坏ＥⅡ類	11.20	2.40	5.60	4.67	2.00	糸	●	

武辺城跡ＳＫ－３

番号	器種	口径	器高	底径	口径/器高	口径/底径	底部	復元	備考
5	坏ＥⅡ	11.70	2.95	6.20	3.97	1.89	糸	●	白磁皿森田Ｅ－Ⅱ群

三城城跡

番号	器種	口径	器高	底径	口径/器高	口径/底径	底部	復元	備考
3	坏Ｆ	12.00	4.40	4.00	2.73	3.00	糸		
4	坏Ｆ	12.40	4.00	4.40	3.10	2.82	糸		

第20表　県北部中世土師器計測表

がりに，ロクロ成形・水挽き技法が認められる。胎土は類似する。外底は磨滅がみられるが，緩やかな回転糸切を施す。指数値は1.6～2.0を示す。小皿は体部が直線もしくは内湾気味に立ち上がり，口縁部が外方へ開く。内底と体部の立ち上がりに，ロクロ成形・水挽き技法が認められる。胎土は類似する。外底は回転糸切を施す。指数値は1.7～2.1を示す。SK３坏は体部が直線的に開き，口縁部が外方へ開く。内底と体部の立ち上がりに、ロクロ成形・水挽き技法が認められる。外底は緩やかな回転糸切，器高が高い。胎土は類似する。指数値は2.0～2.6を示す。

SK１・３の坏・小皿を比較すると外底は回転糸切離し，内底と体部にみられるロクロ成形・水挽き技法が認められる。しかし，坏の口径と底径はSK１が大きい。また，指数値はSK１の坏が1.6，1.8，2.0前後の３つに，小皿が1.7，1.8，2.0，2.2前後の４つに，SK３は2.0，2.4，2.4前後の３つに分かれる。これらの成形・技法及び指数値より大宰府器種分類坏ｂと小皿ｂが相当する。

次に，本県の土葬墓及び土坑跡は17事例が挙げられる。そのうち，島原半島周辺については，竹中哲郎氏がまとめられている(註3)。そのため，小稿では県北部の土葬墓出土資料を中心に述べる。

①松浦市楼楷田遺跡は２基の集石土壙墓が確認されている(註4)。４号集石土壙墓より白磁椀Ⅳ類，東播磨系捏鉢，土師器皿，瓦器埦が破片資料として出土する。土師器皿の底部はヘラ切離しで，指数値は1.2である。５号集石土壙墓は墓壙内北側に完形の龍泉窯系青磁椀Ⅱ－５類，角釘が出土する。

これらより，葬送に木棺が用いられたことが推測される。

②東彼杵町小薗城跡は４基の土壙墓より土師器の坏と小皿が出土する[註5]。坏はロクロ成形・水挽き技法がみられる。坏の外底は回転糸切離しである。小皿の外底は回転糸切に板状圧痕が１点みられる他は，全て回転糸切である。これらの約半数の坏と１点を除く小皿は完形品であるものの破片資料も含まれる。胎土の色調は55Ⅰ土壙墓出土坏・小皿は白色を呈するが，他は黄褐色を呈する。また，形態より時期差がみられる。これらの坏・小皿は，棺内副葬及び棺外供献は不明である。

③武辺城跡 SK－３は土師器坏と白磁皿が出土する[註6]。坏は完形ではないものの内底と体部は粘土紐巻き上げ技法を用いており，外底は回転糸切離しである。底径が広く，器高が低い。白磁皿は，森田Ｅ－２群に位置付けられる。

④大村市三城城跡は１基の土壙墓より土師器坏が２点出土する[註7]。土壙墓は近世以降の削平の影響を受ける。器形は底部から口縁部へ朝顔形に開き，体部外面にヘラ状工具を用いたロクロ成形が認められる。坏の出土状況より棺外供献が考えられ，葬送は木棺を用いたことが推測される。

県北部の土師器は時期の確定が明確な貿易陶磁器との共伴事例に限りがあるものの，①は12世紀後半と13世紀前半，③は16世紀代が付与される。一方，②は土師器のみであるが，坏・小皿は形成技法及び指数値より大宰府器種坏ｂ，皿ｂに分類され，中島氏の坏Ｆ類・皿ＡⅠ２類に該当する。本遺跡 SK１は坏ＥⅡ類と小皿ＡⅠ２類，SK３は坏Ｆ類，坏ＥⅡ類に分類できる。また，SK３と小薗城跡47Ⅰ出土の坏は，形態及び指数値に類似が認められる。④は坏Ｆ類に分類できるが，底径が小さくなる。遺構の削平と遺物の出土状況より，中世末～近世が付与される。

以上より，本遺跡 SK１・３の新旧関係は法量の小形化が認められることから，同時期もしくは（旧）SK１→SK３（新）が考えられる。また，三城城跡土壙墓出土坏は口径が小薗城跡土壙墓にみられるが，底径の小形化と体部外面のヘラ状工具の成形の相違がみられる。このため，同系列の分化または他系列が推測される。これらの土師器は共伴資料がみられず，比較・検討ができないものの中島氏の変遷と照らし合わせた位置付けを進めると，SK１・３は14世紀末～16世紀代と推測される。

しかし，これらの作業は他地域の分類・変遷作業から導いているため，今後，資料の増加によって，さらなる検証を重ねなければならない。（江上正高）

【註】

註１　狭川真一　1999「４．まとめ⑵墳墓について」『馬場遺跡』太宰府市の文化財第41集　太宰府市教育委員会

註２　山本信夫　1990「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念刊行会
山本信夫　他　1997「［10］九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館
中島恒次郎　2002「Ⅱ．遺跡の時間軸上での位置付け」『大宰府条坊跡ⅩⅥ　分析編』
太宰府市の文化財第52集　太宰府市教育委員会
2005「九州」『中世窯業の諸相』～生産技術の展開と編年～

註３　辻田直人・竹中哲郎　2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）　国見町教育委員会

註４　中田敦之　他　1985『楼楷田遺跡』長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会・松浦市教育委員会

註５　町田利幸　他　1991「小薗城跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書Ⅷ』
長崎県文化財調査報告書第99集　長崎県教育委員会

註６　柴田妃三光　他　2008「武辺城跡」『武辺城跡・末永遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第２集
長崎県教育委員会

註７　安樂哲史　2011「第３章　三城城跡の調査」『市内遺跡発掘調査概報４』大村市文化財調査報告書35集
大村市教育委員会

3　近　世

（第31・51～72図　第21～27表　図版19～25）

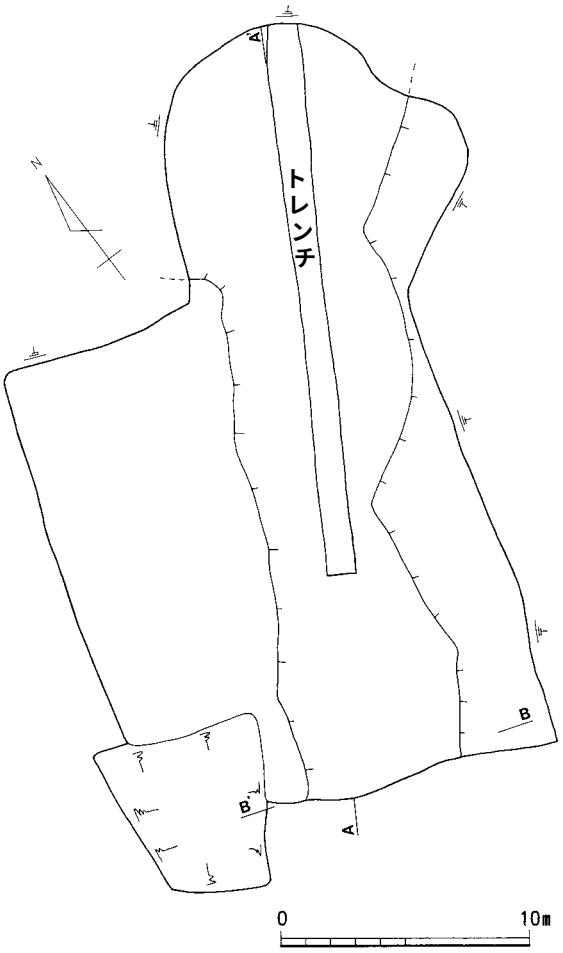
（1）　旧河道跡（第51図　図版19）

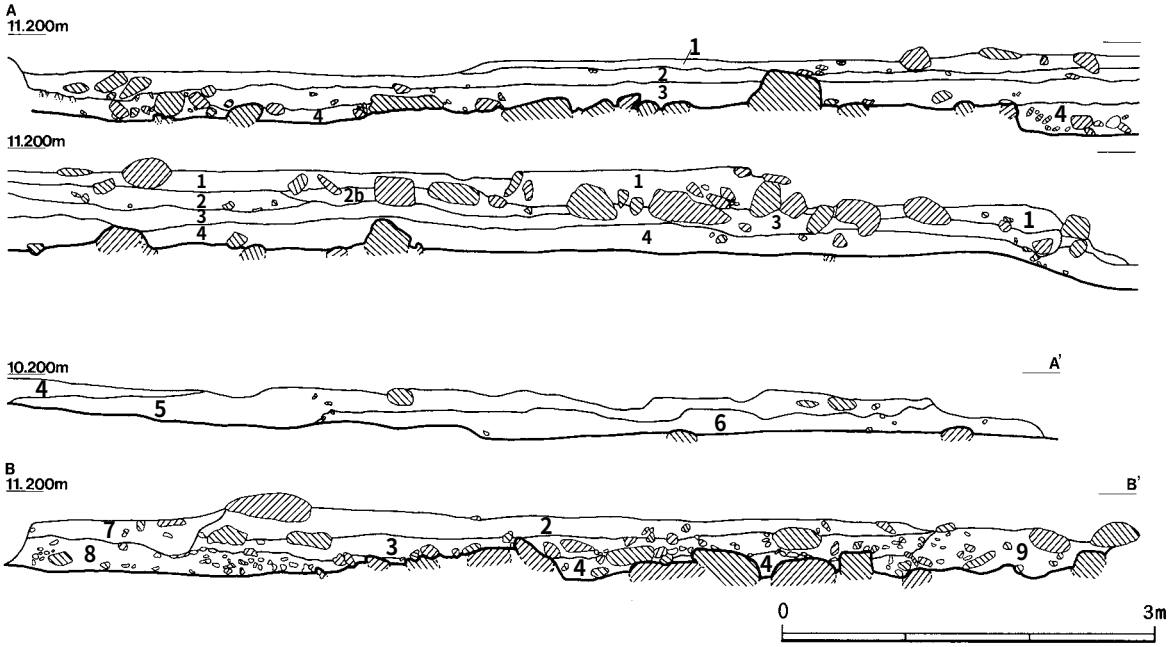
C－５－１に位置し，第Ⅰ層を重機にて除去後，確認できたSRである。周囲は礫を主体とする旧河道である。そのため，本遺構は削平の影響を受けずに残存した箇所である。規模は最大長12.4m，最大幅6.4mを確認できた。土層観察より深度は浅く，堆積は粘質土と礫が主体で砂質土が確認できない。そのため，緩やかな流れが想定される。また傾斜角度より，南→北へ流れが推測される。旧河道跡の東側は上場が確認できたが，西側と北側は別な旧河道によって削平の影響を受けている。出土遺物は，縄文時代の石器，弥生土器，貿易陶磁器，近世の陶磁器・窯道具が出土した。遺構の時期は近世に位置付けられる。

（2）　掘立柱建物跡（第53図　図版19・20）

・SB１（第53図　図版19）

SB１はD－６－19に位置し，方向はN－６°－Eである。構成する柱穴跡の平面形は楕円形を





1　灰色粘質土　拳大～φ30cmの玄武岩を少量含む。
2　明黄褐色粘質土　φ2～30cmの玄武岩風化礫を少量含む。
2b　緑灰色粘質土　φ2～30cmの玄武岩風化礫を少量含む。マンガンが沈着し,青緑色にグライ化がみられる。
3　明黄褐色礫土　φ2～20cmの玄武岩風化礫を大量に含む。
4　浅黄褐橙色礫土　φ2～20cmの玄武岩風化礫を大量に含み,下層は玄武岩が大量に含む。
5　灰色粘質土　φ2～10cmの玄武岩風化礫を大量に含み,4層より粘性が強い。一部,青灰色にグライ化がみられる。
6　灰色粘質土　φ2～10cmの玄武岩風化礫を大量に含み,5層より粘性が強い。
7　灰色粘質土　1層の土に非常に似る土。
8　礫層　SR1東側の立ち上がりを形成する礫層。
9　礫層

第51図　SR１平面図（S＝1/300）・土層図（S＝1/60）

呈し，一部に柱痕が確認できたが深度は浅い。規模は梁行一間×桁行二間である。柱間の計測は，梁行の東側と西側が3.1m，桁行の北側が1.7−2.1m，南側が1.5−2.0mを測る。身舎面積は11.3㎡を測る。出土遺物はP3より黒曜石製剥片，P5より弥生土器が出土した。

・SB3（第53図　図版19）

SB3はD−6−19に位置し，方向はN−31°−Eである。構成する柱穴跡の平面形は楕円形を呈し，一部に柱痕が確認できたものの深度は浅い。規模は梁行一間×桁行二間である。柱間の計測は，梁行の東側と西側が3.1m，桁行の北側が1.9−2.4m，南側が2.0−2.4mを測る。身舎面積は13.64㎡を測る。出土遺物はP1より弥生土器が出土した。

・SB4（第53図　図版19・20）

SB4はD−6−19に位置し，方向はN−22°−Eである。構成する柱穴跡の平面形は楕円形を呈し，一部に柱痕が確認できたものの深度は浅い。規模は梁行一間×桁行二間である。柱間の計測は，梁行の東側が3.6m，西側が3.7m，桁行の北側が1.7−2.4m，南側が1.5−2.4mを測る。身舎面積は14.6㎡を測る。出土遺物はP1とP2より弥生土器が出土した。

・SB5（第53図　図版20）

SB5はD−6−24に位置し，方向はN−23°−Eである。構成する柱穴跡の平面形は楕円形を呈し，一部に柱痕が確認できたものの深度は浅い。規模は調査区南限に接しているため，梁行一間×桁行二間である。柱間の計測は，梁行の東側と西側が3.0m，桁行の北側が2.0m，南側が2.3mを測る。出土遺物はみられない。

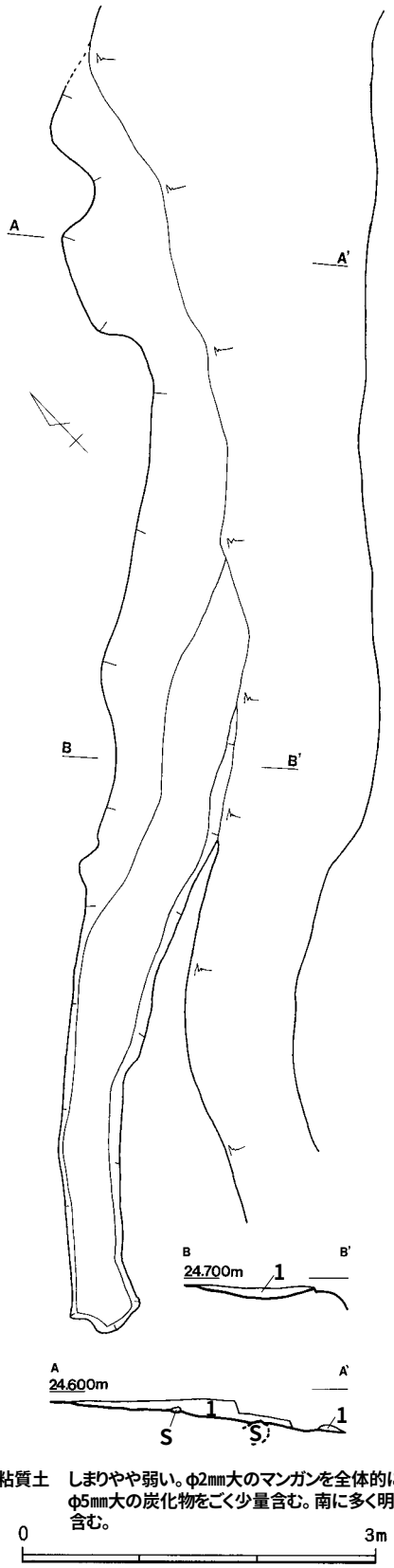
（3）溝　跡（第31・52図　図版20）

・SD1（第31図）

D−6−19に位置しSX28の上位で確認される。規模は最大長10.8m，最大幅1.4m，最大深度0.24mを測る。傾斜角度より南→北への流れが考えられる。弥生土器が出土した。

・SD2（第52図　図版20）

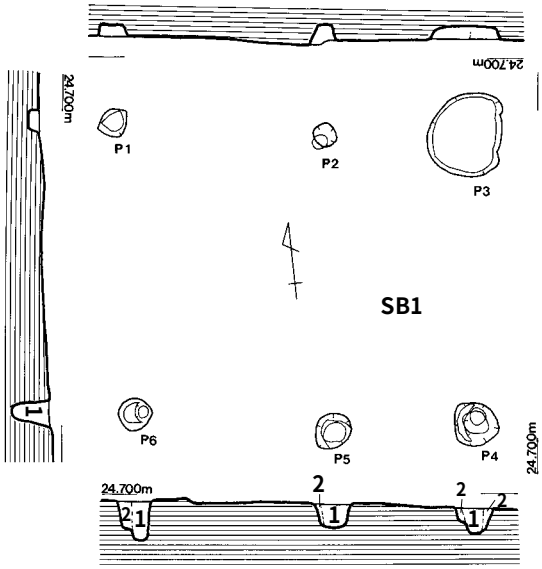
D−6−25に位置する。東側を現水路として使用していたため，削平の影響を受ける。最大長10.8m，最大深度0.14mを測る。傾斜角度より西→東へ流れが考

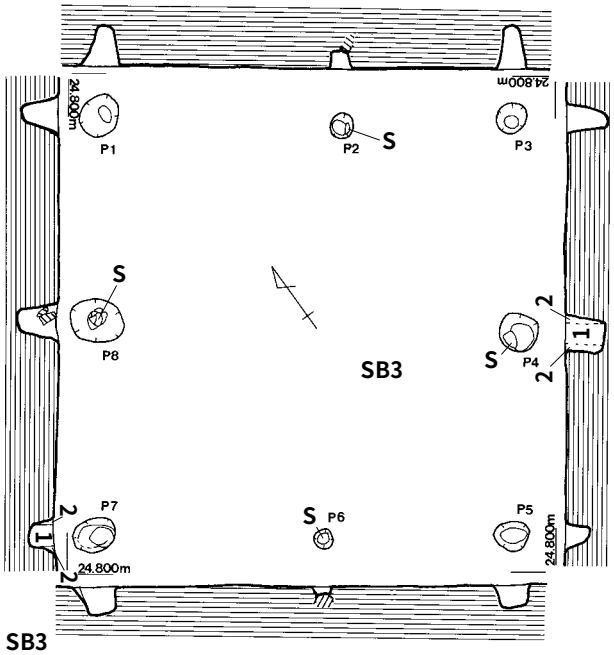


1　褐色粘質土　しまりやや弱い。φ2㎜大のマンガンを全体的に含む。φ5㎜大の炭化物をごく少量含む。南に多く明褐色土を含む。

0　3m

第52図　SD2平面図・土層図（S＝1/60）



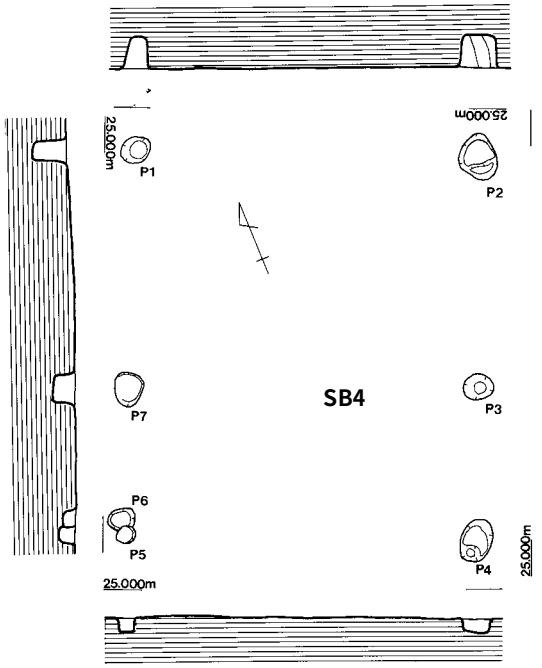


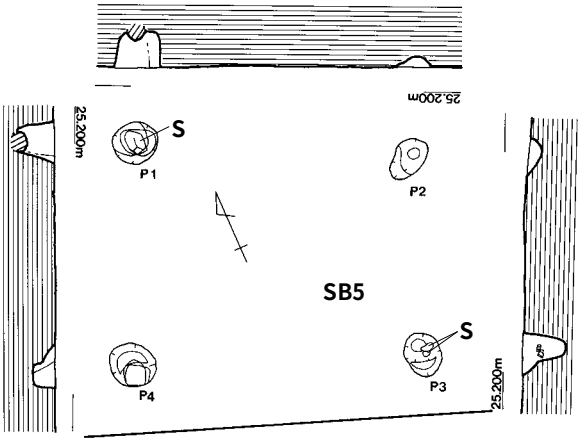
SB1

P1		黒褐色粘質土	黄色・黒色粒子を含む。
P2		灰褐色粘質土	炭化物・マンガンが沈着する。
P3		黒褐色粘質土	
P4	1	褐灰色粘質土	黄色粒子を含み,斑状にマンガンが沈着する。
	2	明赤褐色土	黄色粒子を含む。
P5	1	褐灰色粘質土	黄色粒子を含み,斑状にマンガンが沈着する。
	2	明赤褐色土	黄色粒子を含む。
P6	1	褐灰色粘質土	黄色粒子を含み,斑状にマンガンが沈着する。
	2	明赤褐色土	黄色粒子を含む。

SB3

P1		褐灰色粘質土	
P2		褐灰色粘質土	
P3		灰黄灰色粘質土	黄色粒子・マンガンが斑状に沈着する。
P4	1	灰黄褐色粘質土	黄色粒子・マンガンが斑状に沈着する。
	2	明褐色土	黄色粒子を含む裏込め土。
P5		灰黄灰色粘質土	黄色粒子・マンガンが斑状に沈着する。
P6		灰黄灰色粘質土	黄色粒子・マンガンが斑状に沈着する。
P7	1	灰黄褐色粘質土	黄色粒子・マンガンが斑状に沈着する。
	2	明褐色土	黄色粒子を含む裏込め土。
P8		灰黄灰色粘質土	黄色粒子・マンガンが斑状に沈着する。





SB4

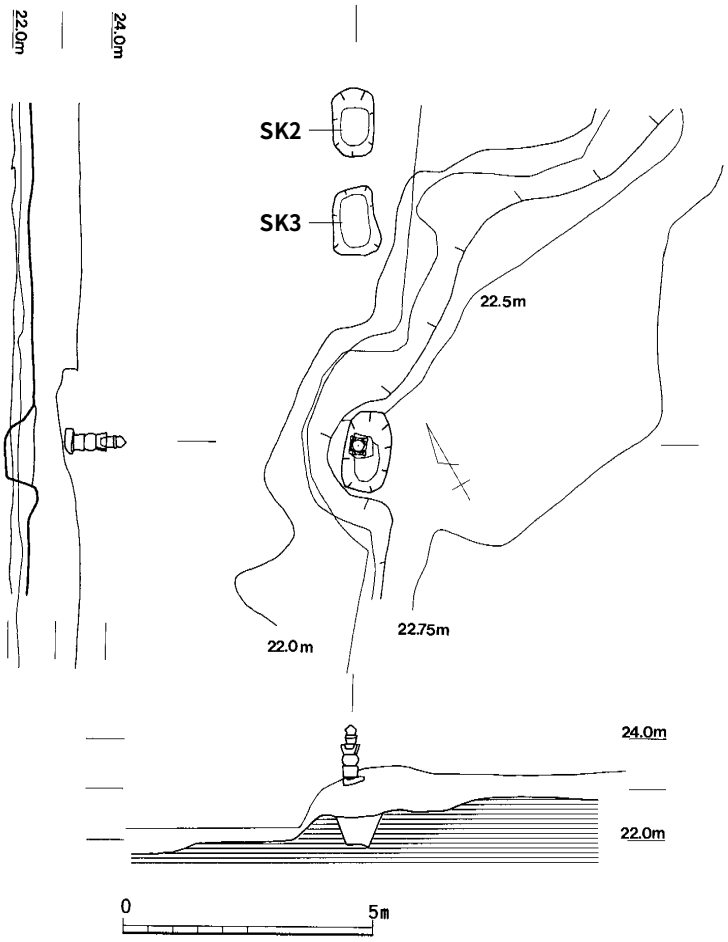
P1		褐灰色粘質土	黄色粒子を含み,マンガンが斑状に沈着する。
P2	1	にぶい黄橙色土	黄色粒子を含み,マンガンが斑状に沈着する。
	2	にぶい黄橙色土	黄色粒子を含む。
P3		灰黄褐色土	マンガンが斑状に沈着する。
P4		灰黄褐色土	マンガンが斑状に沈着する。
P5		灰黄褐色土	マンガンが斑状に沈着する。
P6		灰黄褐色土	マンガンが斑状に沈着する。
P7		灰黄褐色土	マンガンが斑状に沈着する。

SB5

P1	褐色粘質土	しまりがやや弱い。明褐色粘質土が若干混入する。φ5mm大の炭化物を若干含む。
P2	褐色粘質土	しまりがやや強い。明褐色粘質土をP1よりも多く混入する。φ3～5mm大のマンガン粒が斑に沈着する。
P3	褐色粘質土	しまりがやや強い。明褐色粘質土が若干混入する。φ3mm大のマンガン粒が全体に沈着する。
P4	褐色粘質土	しまりがやや弱い。明褐色粘質土が若干混入する。φ2mm大のマンガン粒が上位に多く沈着する。

0　　5m

第53図　SB１・３～５平面図・土層図・断面見通図（S＝1/80）



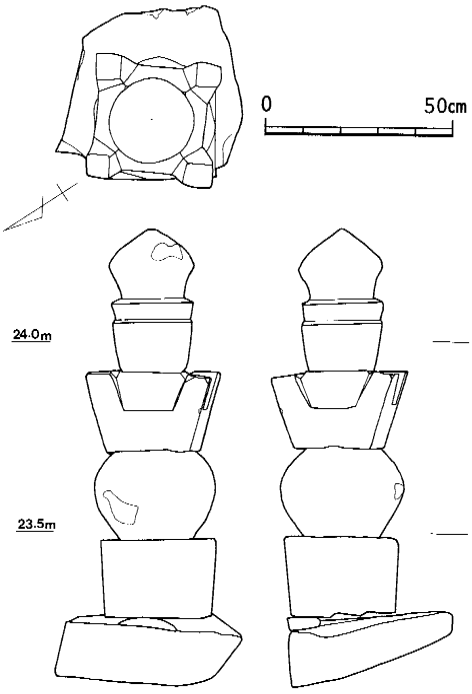
第54図　五輪塔・SF４平面図・断面見通図（S＝1/150）

えられ，現水路と同じである。遺物は型紙刷の磁器片が出土するが，小片のため図示できない。

（4）　五輪塔

（第54・55図　図版20）

D－６－19の丘陵部西斜面に位置する五輪塔である。このSF４は調査対象地内に建立されていたが，信仰の対象とされていたため，移設の際の資料として現存の状態で調査を行った後，移設・現地で保存を行った。規模は総高1.3m，空輪・風輪は一石で製作され，高さ0.13m，幅0.23m，火輪は高さ0.2m，幅0.33mを測り，宝篋印塔の笠を用いる。水輪は高さ0.23m，幅0.32m，地輪は高さ0.2m，幅0.3mを測る。地輪の下部には台石が敷かれ，高さ調節の詰め石が設けられる。石材は安山岩を使用した有耳五輪塔である。



第55図　五輪塔平面図・見通図
（S＝1/20）

（5）　土壙墓（第56～58図　第21・22表　図版20～22）

・SK４（第56図　第21表　図版20～21）

D－６－19の丘陵部西斜面に位置し，SF４の下部より確認された。規模は最大長1.57m，最大幅0.9m，最大深度0.54mを測り，形態は隅丸方形を呈する。埋土は赤色粘質土であったが，下部のみ墓壙跡が確認できた。そのため，改葬が行われたと推測されたが，その時期は不明である。墓壙跡は最大長0.75m，最大幅は復元で0.42mの隅丸方形を呈する。掘方下部の規模は，最大長1.4m，最大幅0.59mを測る。遺物は墓壙の北東側に陶器皿２点が出土し，１は口縁部を墓壙内に向けて立状し，２は据え置かれた状況であった。

出土遺物

1は口縁部～底部まで残存する陶器皿である。口縁部は丸く形成し，体部下半と高台は回転ヘラケズリ，外底はヘラケズリ成形による外底を作り出す。施釉は内面と口縁部～体部下半まで，灰釉を施す。見込みには４箇所の胎土目跡が残る。**2**は口縁部～底部まで残存する陶器皿である。

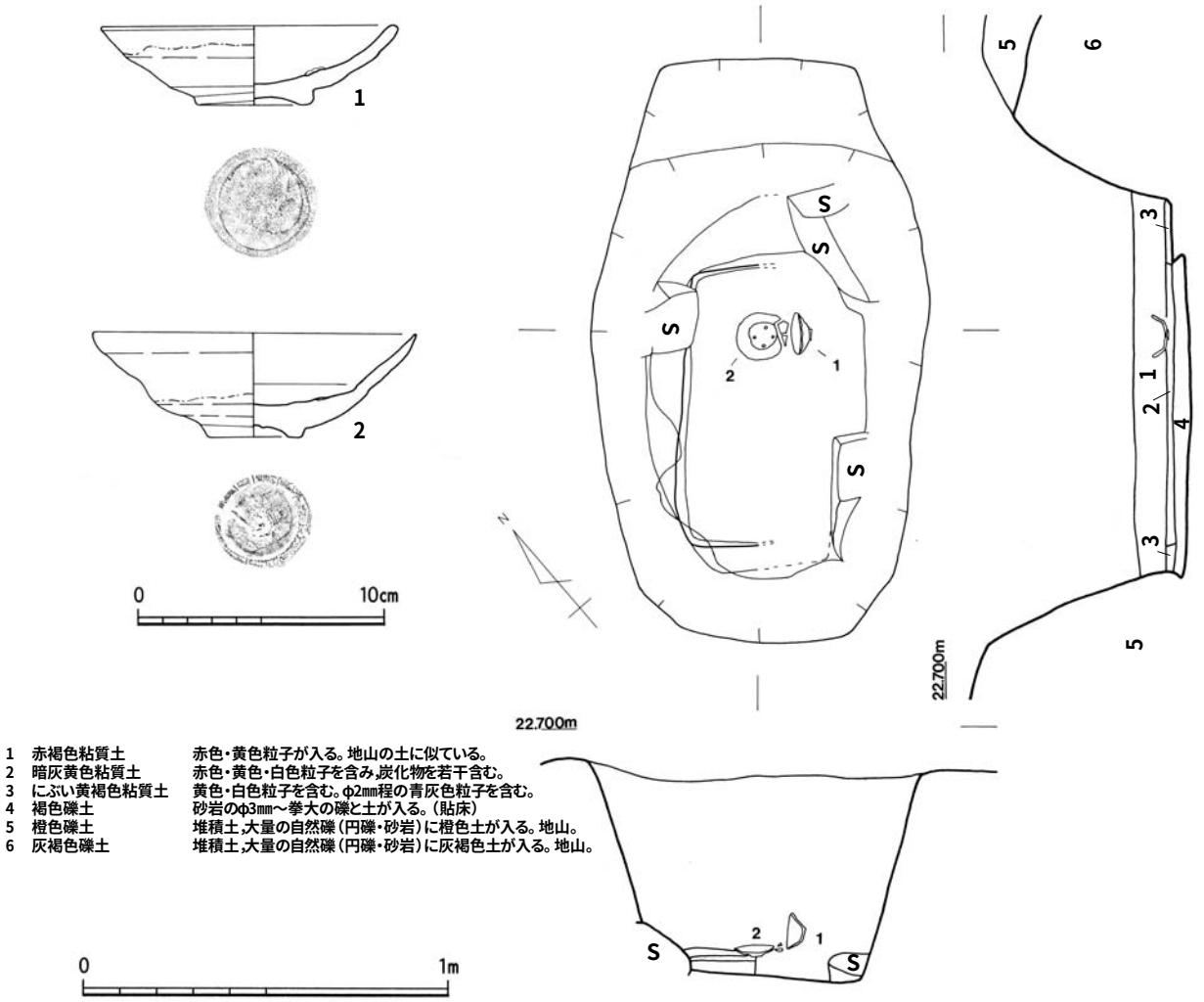
口縁部は丸く形成し，体部下半と高台は回転ヘラケズリ，外底は回転糸切後，ヘラケズリ成形による外底を作り出す。施釉は内面と口縁部～体部下半まで，灰釉を施す。見込みには４箇所の胎土目跡が残る。これらより，陶磁編年のＩ－２期に位置付けられる。

・SK７（第57図　第22表　図版21・22）

D－６－13の丘陵部西斜面に位置する。遺構の西側は，削平の影響を受ける。規模は最大長1.37m，最大幅0.79m，最大深度0.42mを測る。形態は南側が不定形であるが，隅丸方形を呈する。また，北東側は，二段構築を呈する。墓壙跡は最大長1.3m，最大幅は復元で0.65mの隅丸方形を呈する。遺物は墓壙の西側に陶器皿２点が出土した。

出土遺物

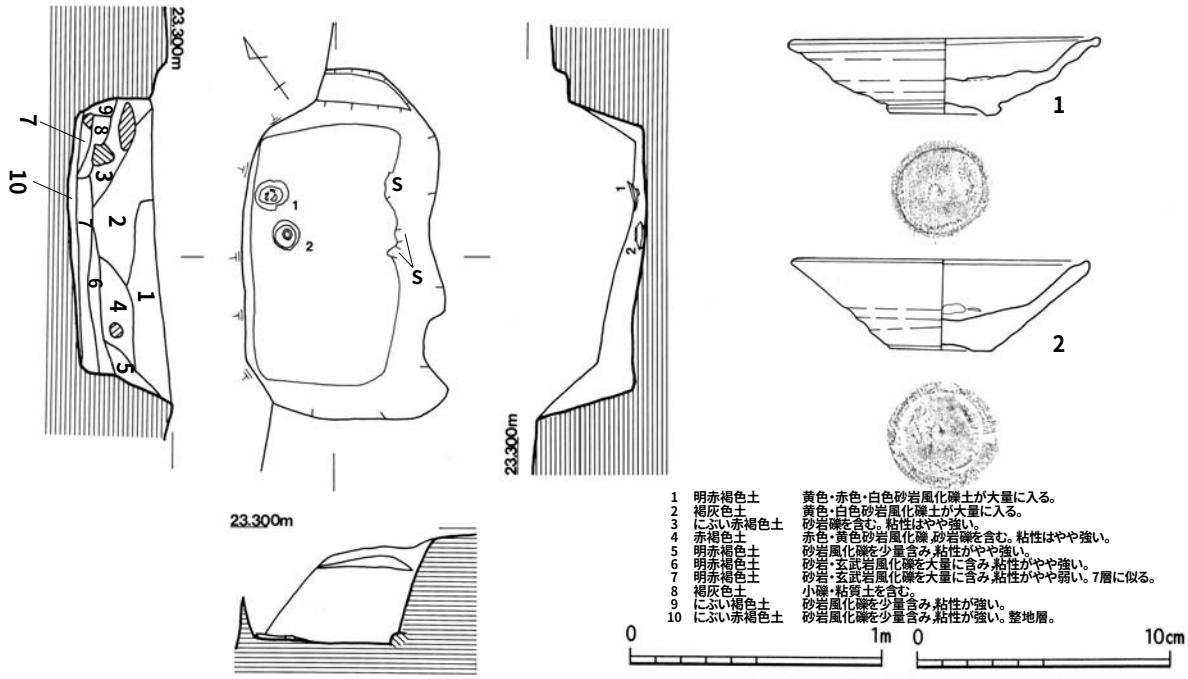
１は口縁部～底部まで残存する溝縁皿である。口唇部は丸く外方向へ張り出し，体部下半と高台は回転ヘラケズリ，外底は回転糸切後，ヘラケズリ成形による外底を窪ませる。施釉は内面と口縁部～体部下半まで，灰釉を施す。見込みには４箇所の砂目跡と釉着が残り，外底には砂が付着する。**２**は口縁部～底部まで残存する溝縁皿である。口縁部は丸く外方向へ形成し，体部下半と高台は回転ヘラケズリ，外底は回転糸切後，ヘラケズリ成形による外底を窪ませる。施釉は内面と口縁部～体部上半まで，灰釉を施す。見込みには３箇所の砂目跡と釉着が残り，外底には砂が付着する。これらより，陶磁編年のⅡ期に位置付けられる。



第56図　SK４平面図・土層図・断面見通図（S＝1/20），出土遺物（S＝1/3）

番号	種類	器種	法量(㎝)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	陶器	皿	11.8	4.5	3.2	回転ナデ/ 回転ケズリ/釉	回転ナデ/釉	良	2.5Y7/6 明黄褐色	2.5Y6/3 にぶい黄色	精緻	灰釉陶器皿 胎土目跡４ヶ所
2	陶器	皿	13.0	2.9	4.2	回転ナデ/ 回転ヘラケズリ/釉	回転ナデ/釉	良	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y6/2 灰黄色	精緻	灰釉陶器皿 胎土目跡４ヶ所

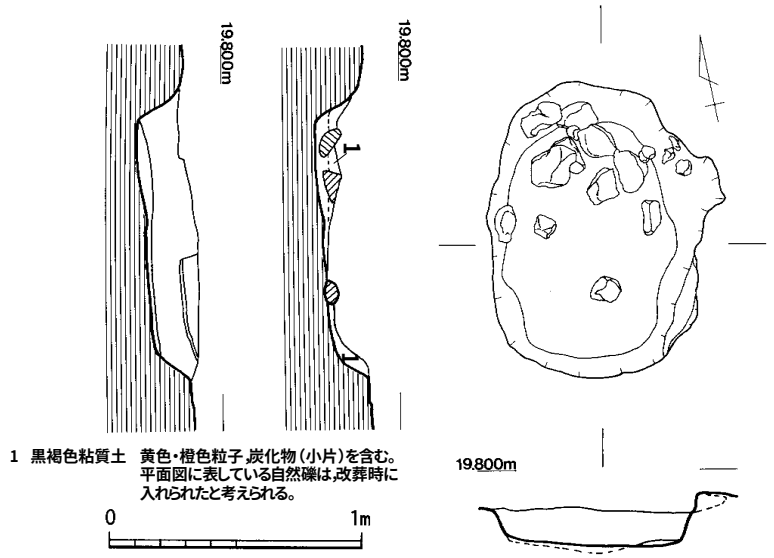
第21表　遺物観察表（SK４）



第57図　SK７平面図・土層図・断面見通図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/3）

番号	種類	器種	法量(㎝)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	陶器	皿	12.0	3.3	3.1	回転ナデ/ 回転ヘラケズリ/釉	回転ナデ/釉	良	7.5Y7/2 灰白色	7.5Y7/3 浅黄色	精緻	灰釉陶器皿 砂目跡
2	陶器	皿	13.5	2.3	3.7	回転ナデ/ 回転ヘラケズリ/釉	回転ナデ/釉	良	2.5Y7/4 浅黄色	5Y7/2 灰白色	精緻	灰釉陶器皿 砂目跡

第22表　遺物観察表（SK７）



第58図　SK８平面図・土層図・断面見通図（S＝1/30）

・SK８（第58図　図版22）

D－６－19の丘陵部西斜面に位置し，削平の影響を受ける。規模は最大長1.17m，最大幅0.92m，最大深度0.2mを測り，形態は隅丸方形を呈する。検出時は墓壙内に礫が充填され，下部のみ墓壙跡が確認できた。この礫は墓壙直上に据え置かれていた。または，改葬の際に投げ入れられたと推測される。遺物の出土はみられない。

（６） 集石遺構（第59・60図　図版23）

SF１～３はD－６－14の丘陵部の西斜面の傾斜変換付近に位置し，SF１～３全てが，SX２上に立地する。

・SF１（第59・60図　図版23）

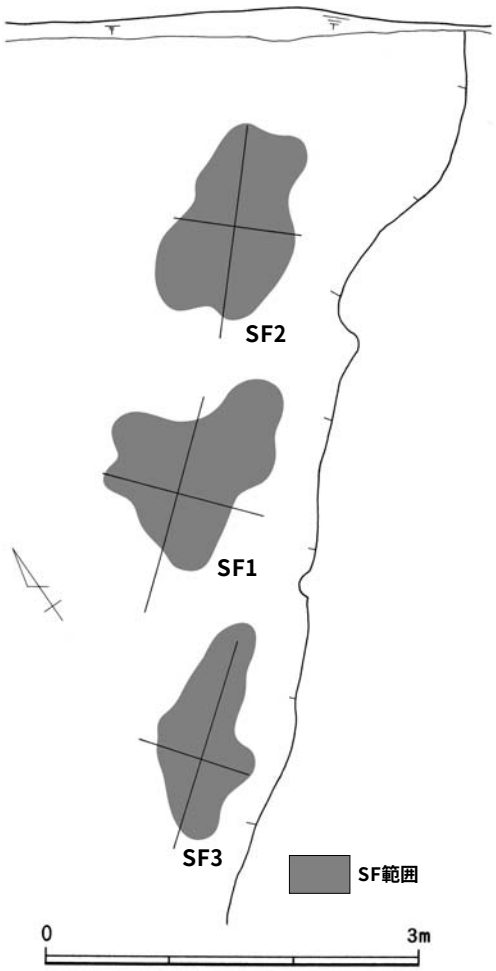
SF１は最大長1.6m，最大幅1.2mを測る。主軸はN－48°－Eである。石材は玄武岩で，径は0.02～0.03mを測る。堆積は２層に分かれ，１層は集石内に橙色土が入り込む土と２層は掘り込みの暗褐色土である。２層より出土した炭化材をAMS分析にかけた結果，第Ⅶ章－１に述べる年代が提示されたが，堆積より近世に位置付けられる。

・SF２（第59・60図　図版23）

SF２は最大長1.6m，最大幅1.2mを測る。主軸はN－41°－Eである。石材は玄武岩で，径は0.02～0.08mを測る。自然石を利用して，東西方向に延びる形態を呈する。

・SF３（第59・60図　図版23）

SF３は最大長1.35m，最大幅0.94mを測る。主軸はN－54°－Eである。形態は長方形を呈し，石材は玄武岩で，径は0.02～0.08mを測る。



第59図　SF１～３配置図（S＝1/60）

（７） 柱穴跡（第61～65図　第23表）

近世の土質と考えられる柱穴跡からの出土遺物は小片のため図化出来ない。

凡例	土色４：7.5YR4/8 橙色粘質土	土色６：7.5YR7/1 明褐色粘質土	出土遺物 黒：黒曜石	出土遺物 安：安山岩	出土遺物 剥：剥片	出土遺物 弥土：弥生土器	出土遺物 近磁：近世磁器	出土遺物 数値：出土点数

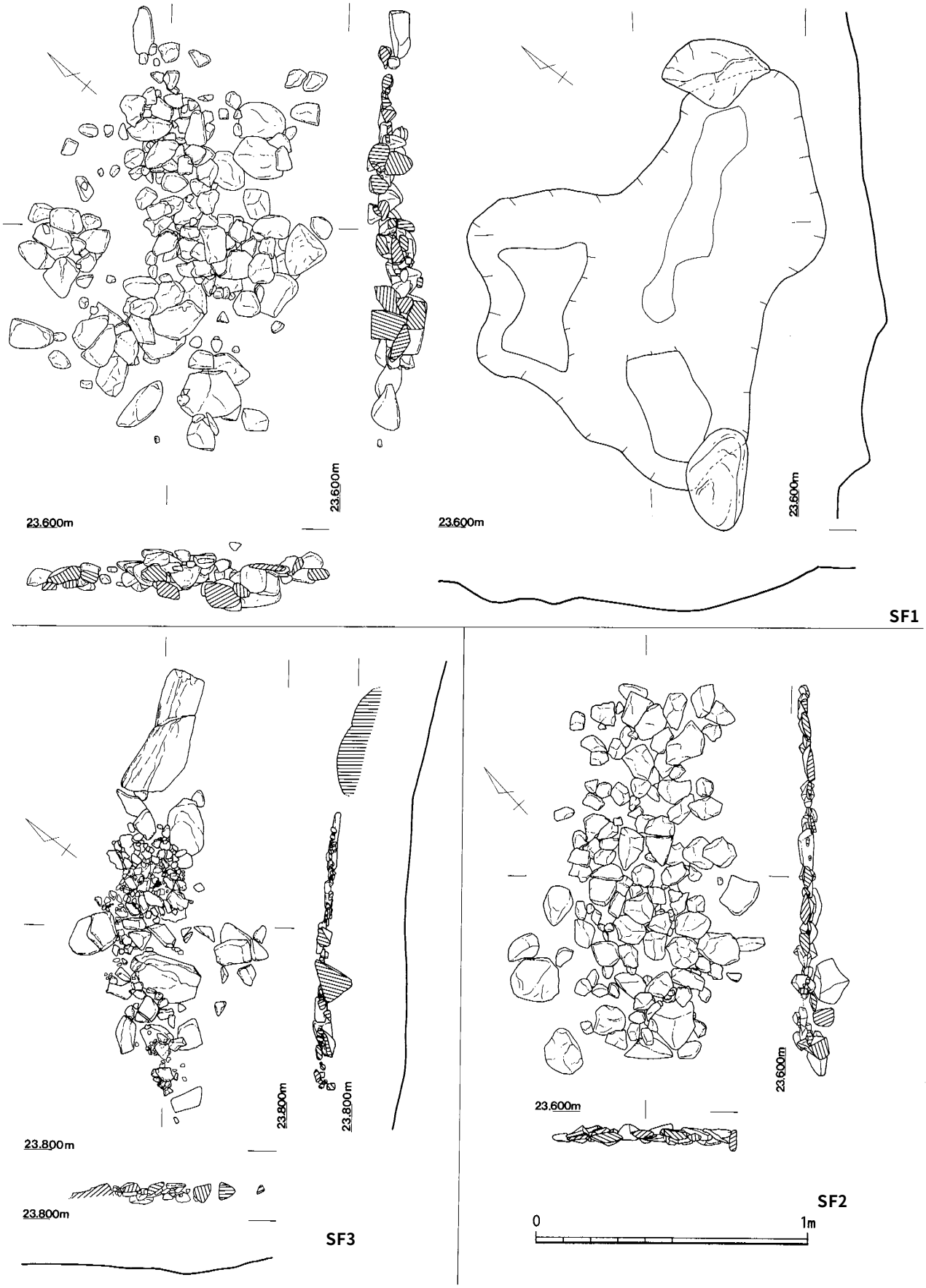
番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)	番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)	番号	地区	層	土色	出土遺物	深度(cm)
SP18	D-6-14	Ⅱ	1	弥土甕１/弥土１	21.2	SP124	D-6-25	Ⅱ	6	弥土１	13.3	SP138	D-6-24	Ⅱ	6	弥土１	14.0
SP54	D-6-6	Ⅱ	6	弥土２	13.2	SP130	D-6-19	Ⅱ	4	黒剥１	15.7	SP139	D-6-24	Ⅱ	4	黒剥２	16.3
SP95	D-6-19	Ⅱ	4	弥土１	37.6	SP132	D-6-18	Ⅱ	4	弥土１	15.4	SP142	D-6-24	Ⅱ	2	黒剥1/弥土2/ 近磁1	16.1
SP101	D-6-19	Ⅱ	4	弥土１	18.5	SP134	D-6-24	Ⅱ	4	弥土２	9.0	SP146	D-6-24	Ⅱ	6	弥土２	21.0
SP102	D-6-19	Ⅱ	4	弥土１	20.3	SP136	D-6-24	Ⅱ	6	弥土４	21.8	SP147	D-6-19	Ⅱ	4	弥土１	16.3
SP116	D-6-19	Ⅱ	4	弥土５	34.6	SP137	D-6-24	Ⅱ	4	弥土７	41.4	SP148	D-6-19	Ⅱ	4	弥土１	32.8
SP121	D-6-19	Ⅱ	4	黒剥１/弥土１	19.8												

第23表　近世SP一覧表

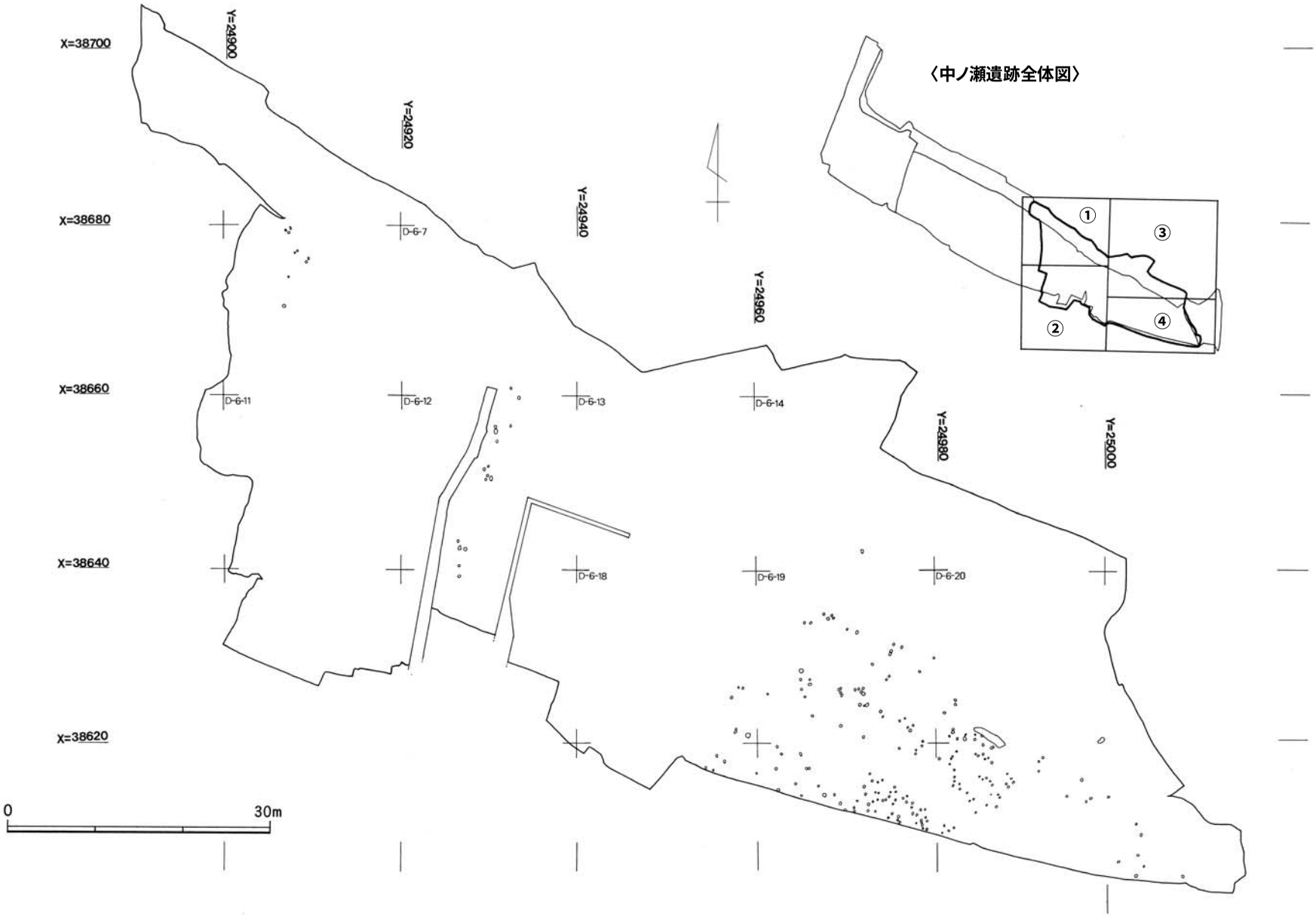
（８） 不明遺構（第66～72図　第24～27表　図版23～25）

・SX２（第66図　第25表　図版23）

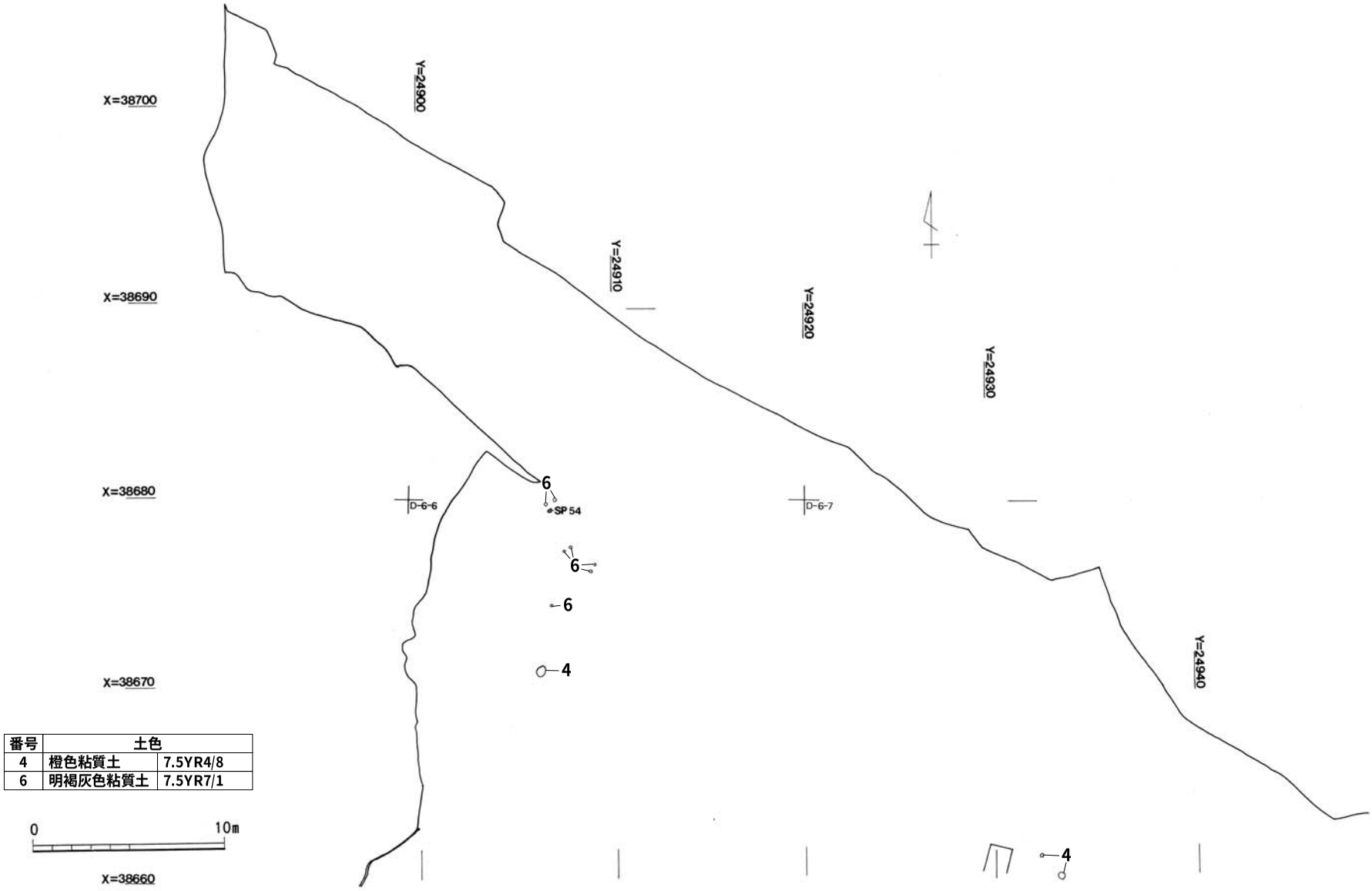
D－６－９・14に位置し，南北に展開する。堆積は黒褐色粘質土で，遺構の性格は不明である。



第60図　SF１～３平面図・断面見通図（S＝1/20）



第61図　近世 SP 配置図（S＝1/650）



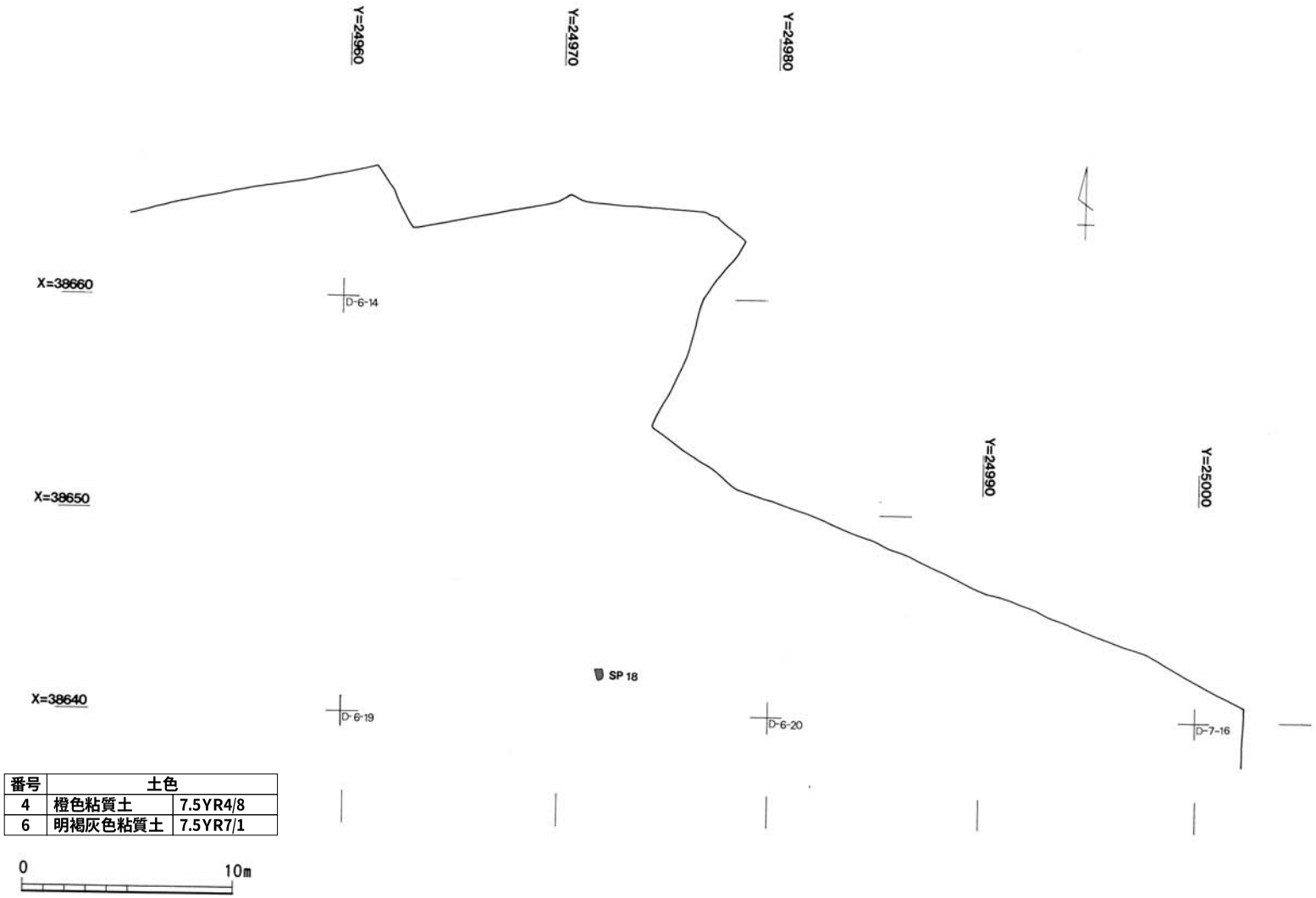
番号	土色	
4	橙色粘質土	7.5YR4/8
6	明褐灰色粘質土	7.5YR7/1

第62図　近世 SP 配置図①（S＝1/300）

番号	土色	
4	橙色粘質土	7.5YR4/8
6	明褐灰色粘質土	7.5YR7/1

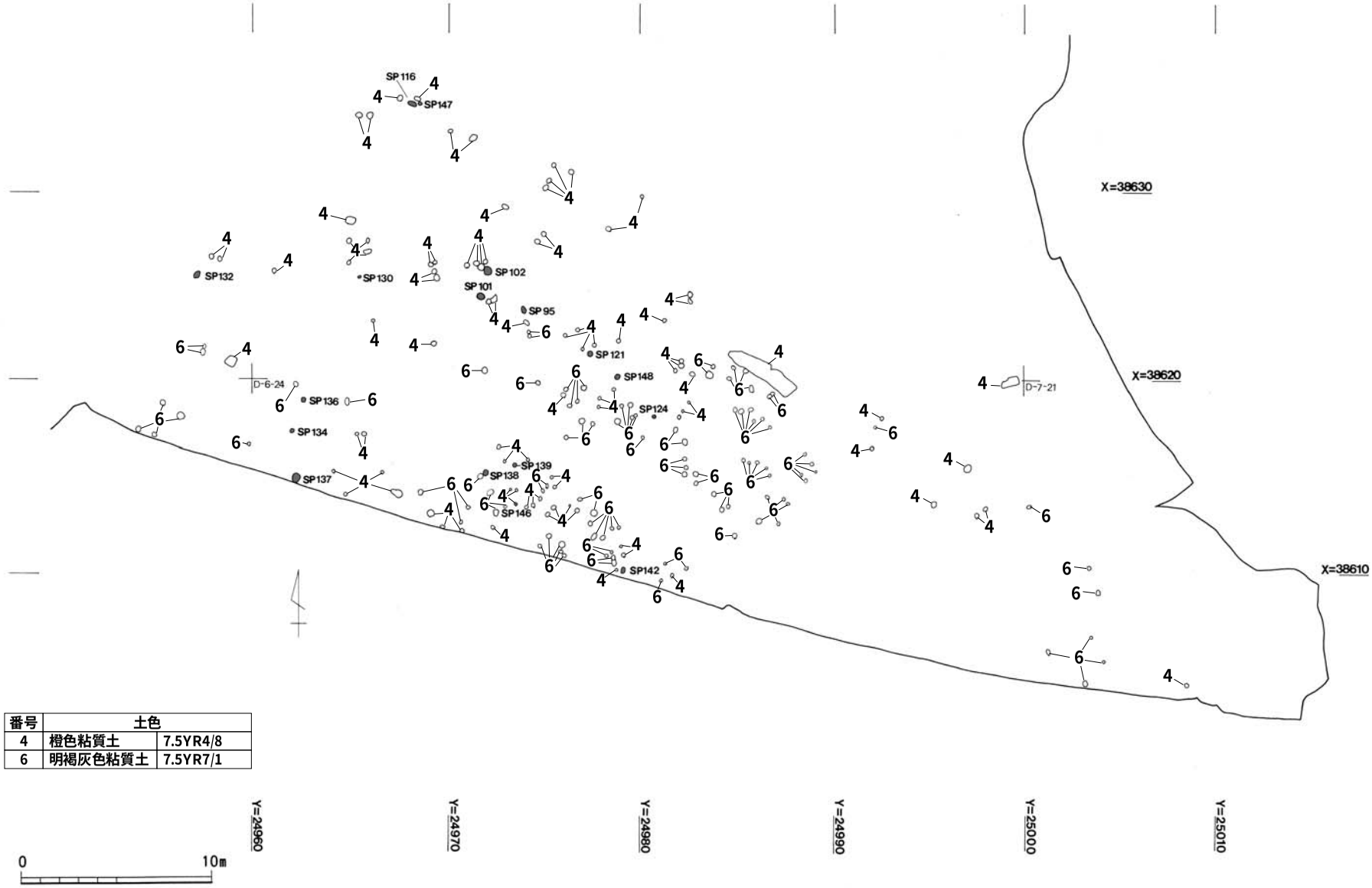
0　10m

第63図　近世 SP 配置図②（S＝1/300）



番号	土色	
4	橙色粘質土	7.5YR4/8
6	明褐灰色粘質土	7.5YR7/1

第64図　近世 SP 配置図③（S＝1/300）



番号	土色	
4	橙色粘質土	7.5YR4/8
6	明褐灰色粘質土	7.5YR7/1

第65図　近世 SP 配置図④（S＝1/300）

出土遺物

遺物は小片であるが黒曜石製剥片，弥生土器，土師器，貿易陶磁器，陶器が出土した。**1**は高麗窯系象嵌青磁の椀である。内面に２条の白胎線を施す。

・SX４（第66図　第25表　図版23）

D－５－５に位置し，褐色土が堆積する。遺構の性格は二次堆積層で，遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物

2は弥生土器の壺で，断面が三角形の突帯を貼付ける。

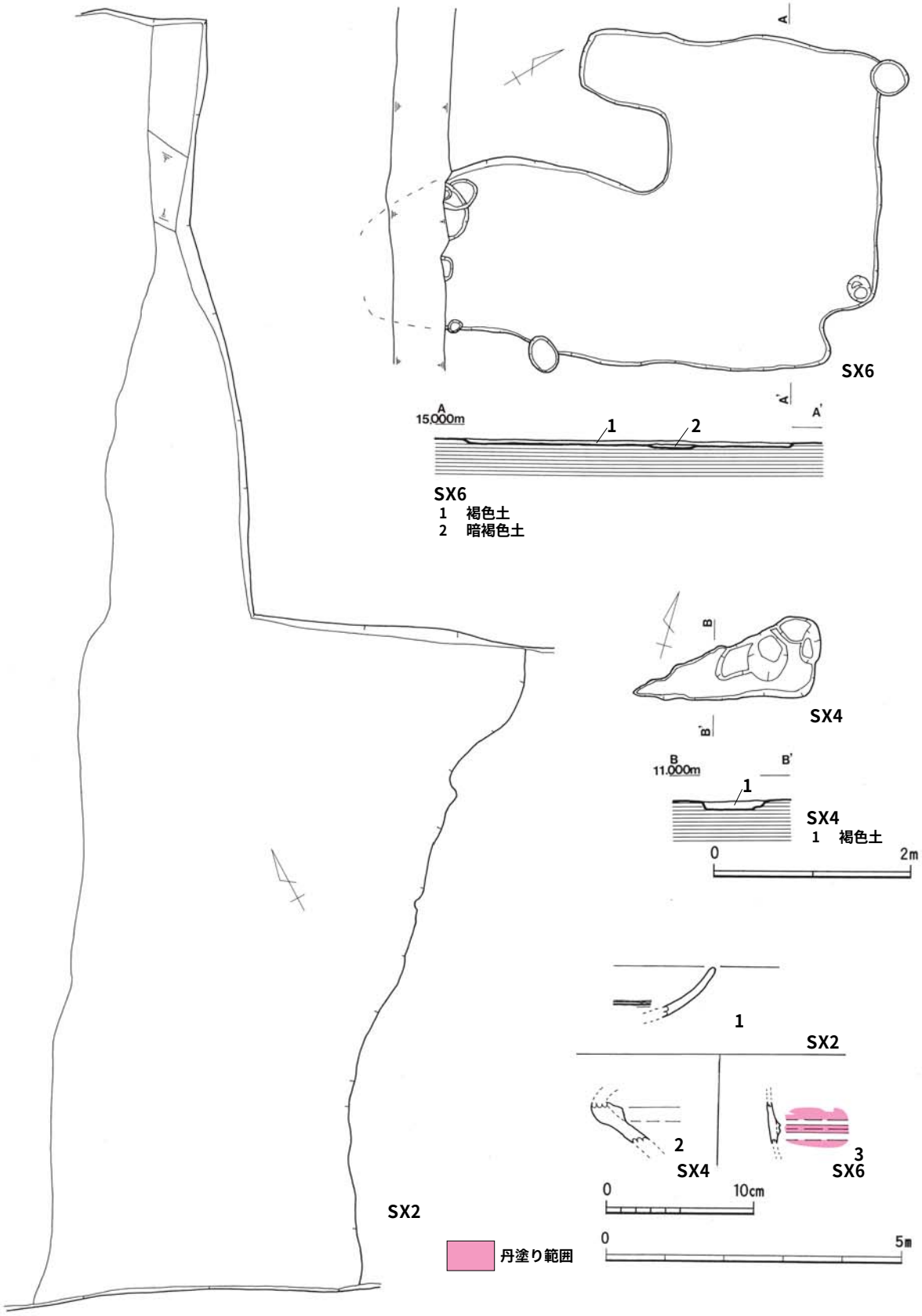
・SX５（第67・68図　第24表　図版24・25）

D－６－１・６に位置し，西側を擁壁により削平の影響を受け，南北に細長く確認される。堆積は２層に分かれ，下層が上層より自然礫が大きくかつ多く含む。遺構の性格は，旧河道跡の端部と考えられる。

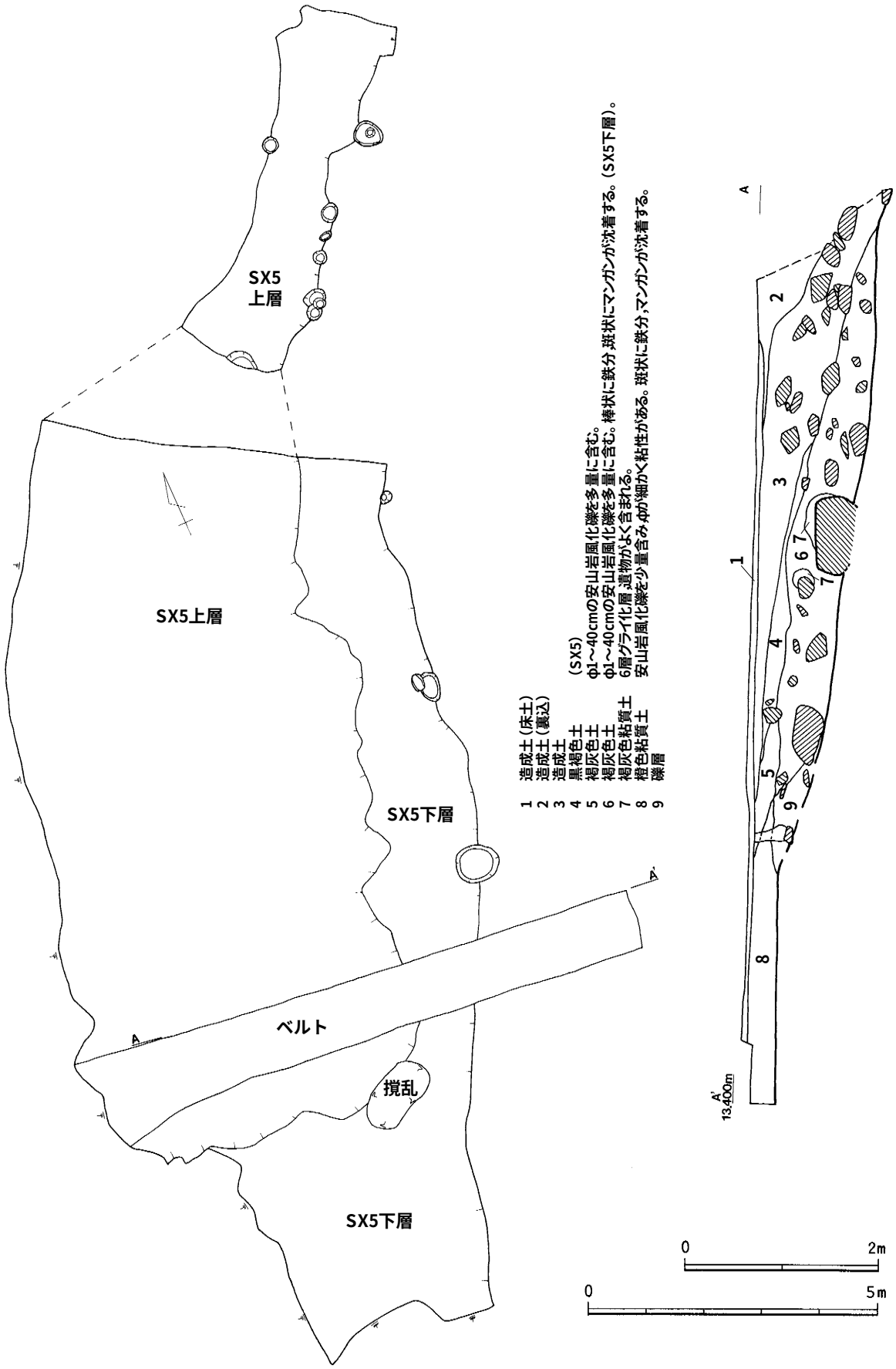
出土遺物

１～38は上層から出土した遺物である。１～23は弥生土器である。**1**～**4**は須玖式の甕である。**5**～**9**は甕である。**10**は器壁が厚い鉢である。**11**は口縁部が短い壺である。**12**は器壁が厚く，調整が荒い器台である。**13**は複合口縁壺である。**14**は断面が台形の突帯を貼付ける。**15**は「M」字状の突帯を貼付ける壺で，丹塗りが施される。**16**～**21**は底部で，平底を呈する。**22**は高坏の坏部である。**23**は高坏の脚部である。これらの土器の器面は，剥離及び磨滅が少ない。24～31は土師器である。**24**は体部下半～底部まで残存する埦である。底部の調整は不明である。**25**は口縁部～底部まで残存する坏である。外底は板状圧痕が残る。**26**は口縁部～底部まで残存する坏である。外底はヘラ切り後ナデを施す。**27**は口縁部～底部まで残存する皿である。外底は回転糸切後ナデを施す。**28**は口縁部～底部まで残存する皿である。外底は回転糸切を施す。**29**は口縁部～底部まで残存する皿である。外底は回転糸切を施す。**30**は口縁部～底部まで残存する皿である。外底は回転糸切後ナデを施す。**31**は底部が残存する埦である。32・33は白磁である。**32**は底部が残存する皿である。**33**は体部～底部が残存する合子である。底部の器壁の作りは薄い。**34**～**36**は高麗陶器の胴部である。外面が格子目タタキ，内面は格子目当て具痕にナデ消しが残る。また，外面は断面が三角形の突帯を貼付ける。**37**は甕である。胎土及び施釉より，中国産と推側される。**38**は滑石製石鍋の二次加工品である。外面はノミ痕，内面は使用擦過痕が残る。また，外面→内面へ円形の穿孔が施される。二次加工は「V」字形に施す。

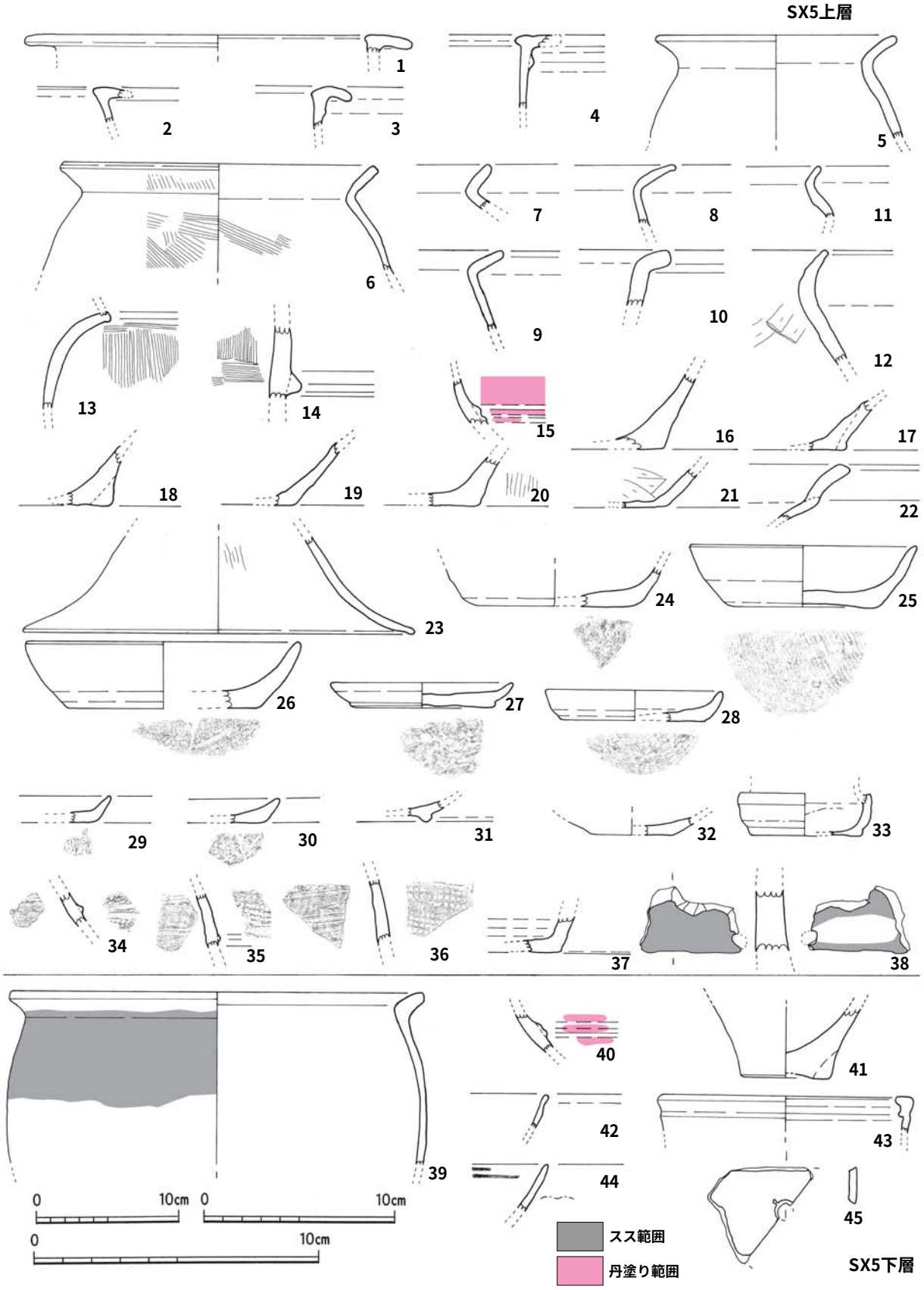
39～43は下層出土遺物である。39～42は弥生土器である。**39**は口縁部～体部が残存する甕である。口縁部～体部上半には，ススが付着する。**40**は壺の頸部が残存し，「M」字状の突帯を貼付ける。**41**は体部下半～底部が残存する底部で，上げ底状を呈する。**42**は口縁部～体部が残存する白磁の小坏である。**43**は陶器の鉢である。胎土は橙色を呈し，内・外面に灰褐色の施釉を薄く施す。成形は回転ナデを施す。胎土及び施釉より，中国産と推察される。**44**は口縁部～体部が残存する陶器の碗である。口唇部に鉄釉，体部の内・外面に藁釉を施す。これらより，時期は陶磁器編年のⅡ期に位置付けられる。**45**は粘板岩製の石包丁である。残存は剥離が激しく，表面のみである。



第66図　SX２平面図（S＝1/100），SX４・６平面図・土層図（1/60），出土遺物（S＝1/4）



第67図　SX５上・下層平面図（S＝1/100），土層図（S＝1/60）



第68図　SX５上・下層出土遺物（１～23・33～38・40～43はＳ＝１／４，39・44～45はＳ＝１／３，46はＳ＝１／２）

番号	種類	器種	法量(cm)( )は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	弥生土器	甕	(22.0)	−	1.2	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR6/8 橙色	2.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英	
2	弥生土器	甕	−	−	2.5	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR6/8 橙色	2.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
3	弥生土器	甕	−	−	3.0	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
4	弥生土器	甕	−	−	5.1	ナデ	ナデ	やや良	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
5	弥生土器	甕	(16.6)	−	7.3	ナデ	ナデ	やや良	2.5Y6/2 灰黄色	2.5YR6/2 灰黄色	やや精緻 長石・石英・片岩	
6	弥生土器	甕	(21.6)	−	7.5	斜ハケ/ナデ 不定方向ハケ	ナデ/斜ハケ	良	7.5YR7/6 橙色	5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
7	弥生土器	甕	−	−	3.1	ナデ/器面剥離	ナデ	やや良	10YR3/3 暗褐色	10YR3/3 暗褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
8	弥生土器	甕	−	−	4.3	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
9	弥生土器	甕	−	−	6.6	ナデ	ナデ	やや良	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
10	弥生土器	鉢	−	−	4.0	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/8 橙色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
11	弥生土器	壺	−	−	3.6	指頭圧痕/ナデ	ナデ	やや良	10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	やや精緻 長石・石英	
12	弥生土器	器台	−	−	9.1	ナデ/ケズリ	ナデ	やや良	10YR8/6 黄橙色	10YR8/6 黄橙色	やや精緻 長石・石英・黒曜石	
13	弥生土器	壺	−	−	6.8	ヨコハケ/タテハケ	ナデ	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	やや精緻 長石・石英・黒曜石	複合口縁壺
14	弥生土器	壺	−	−	5.1	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	やや良	10YR5/6 黄橙色	10YR7/6 明黄橙色	やや精緻 長石・石英・片岩・黒曜石	
15	弥生土器	壺	−	−	3.2	ナデ	磨滅	やや良	10R6/8 赤橙色	2.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英	丹塗り
16	弥生土器	壺/甕	−	−	5.3	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
17	弥生土器	壺/甕	−	−	3.4	ナデ	ナデ	やや良	10YR7/6 明黄褐色	7.5YR7/6 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
18	弥生土器	壺/甕	−	−	4.2	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/6 橙色	2.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	底部成形技法
19	弥生土器	壺/甕	−	−	4.4	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/8 橙色	2.5Y6/4 にぶい黄色	やや精緻 長石・石英	
20	弥生土器	壺/甕	−	−	3.4	タテハケ/ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英	底部成形技法
21	弥生土器	壺/甕	−	−	2.7	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR5/8 明赤褐色	2.5YR7/4 にぶい橙色	やや精緻 長石・石英・片岩・黒曜石	
22	弥生土器	高杯	−	−	3.8	ナデ	ナデ	やや良	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	やや精緻 長石・石英・片岩・黒曜石	
23	弥生土器	高坏	−	(27.0)	6.8	ナデ	シボリ/ナデ	良	10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	やや精緻 長石・石英・砂	
24	土師器	埦	−	(8.0)	−	ナデ/不明	ナデ	良	5YR6/8 橙色	5YR7/8 橙色	精緻 白色粒子	
25	土師器	坏	(11.6)	(7.0)	3.2	ナデ/板状圧痕	ナデ	良	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	精緻 長石・石英	
26	土師器	坏	(14.4)	(10.0)	3.4	ナデ/ヘラケズリ/ ヘラ切り	回転ナデ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/8 橙色	精緻 長石・石英	
27	土師器	皿	(5.4)	(4.7)	1.3	ナデ/回転糸切	ナデ	良	10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	精緻	
28	土師器	皿	(9.0)	(7.4)	1.5	ナデ/回転糸切	ナデ	良	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	精緻 長石・石英	
29	土師器	皿	−	−	1.4	ナデ/回転糸切	ナデ	良	5YR5/8 橙色	5YR5/8 橙色	精緻	
30	土師器	皿	−	−	1.2	ナデ/回転糸切	ナデ	良	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	精緻	
31	土師器	埦	−	−	1.1	ナデ	ナデ	良	5YR8/4 淡橙色	5YR8/4 淡橙色	精緻	
32	白磁	皿	−	(4.1)	0.9	−	釉	良	7.5Y8/1 灰白色	7.5Y8/1 灰白色	精緻	
33	白磁	合子	−	(5.8)	2.2	釉	釉	良	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	精緻	
34	陶器	甕	−	−	2.5	回転ナデ 格子目タタキ/ナデ	格子目タタキ /回転ナデ/ナデ消し	良	N61 灰色	N51 灰色	精緻 白色粒子	高麗陶器
35	陶器	甕	−	−	3.7	回転ナデ /格子目タタキ	回転ナデ	良	N61 灰色	N51 灰色	精緻 白色粒子	高麗陶器
36	陶器	甕	−	−	4.6	回転ナデ /格子目タタキ	回転ナデ	良	N61 灰色	N61 灰色	精緻 白色粒子	高麗陶器
37	陶器	甕	−	−	3.6	磨滅	釉	良	−	5YR6/4 にぶい橙色	精緻 白色粒子	
38	滑石製品	石鍋	−	−	−	−	−	−	−	−		スス付着
39	弥生土器	甕	(29.0)	−	12.0	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR5/8 明赤褐色	2.5YR6/3 にぶい橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	スス付着
40	弥生土器	壺	−	−	2.6	ナデ	器面剥離	やや良	2.5YR4/8 赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英	丹塗り
41	弥生土器	甕	−	(6.2)	6.0	ナデ	ナデ	やや良	5YR6/8 橙色	5YR6/2 灰褐色	やや精緻 長石・石英・片岩・黒曜石	
42	白磁	小杯	−	−	1.8	釉	釉	良	5GY8/1 灰白色	5GY8/1 灰白色	精緻	
43	陶器	鉢	(15.6)	−	2.5	回転ナデ/釉	回転ナデ/釉	良	5YR5/2 灰褐色	5YR5/2 灰褐色	精緻	
44	陶器	碗	−	−	2.5	釉	釉	良	5Y6/3 オリーブ黄色	5Y5/2 灰オリーブ色	精緻	
番号	種類	石種	法量(cm)			重さ(g)	備考					
			最大長	最大幅	最大厚							
45	石包丁	粘板岩	3.2	3.3	3.0	3.3						

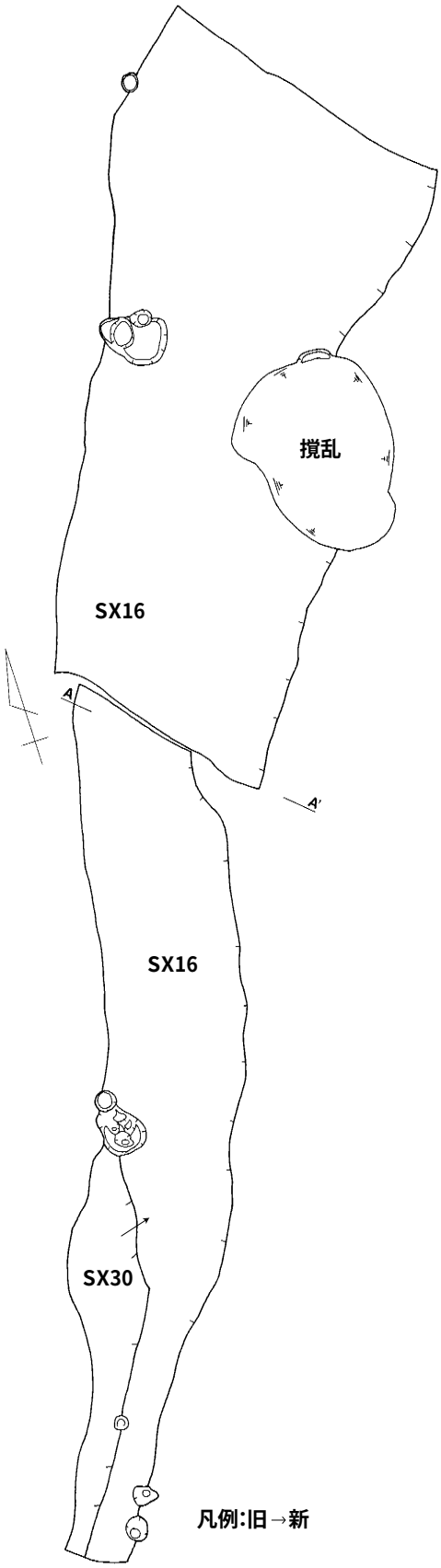
第24表　遺物観察表（SX５上・下層）

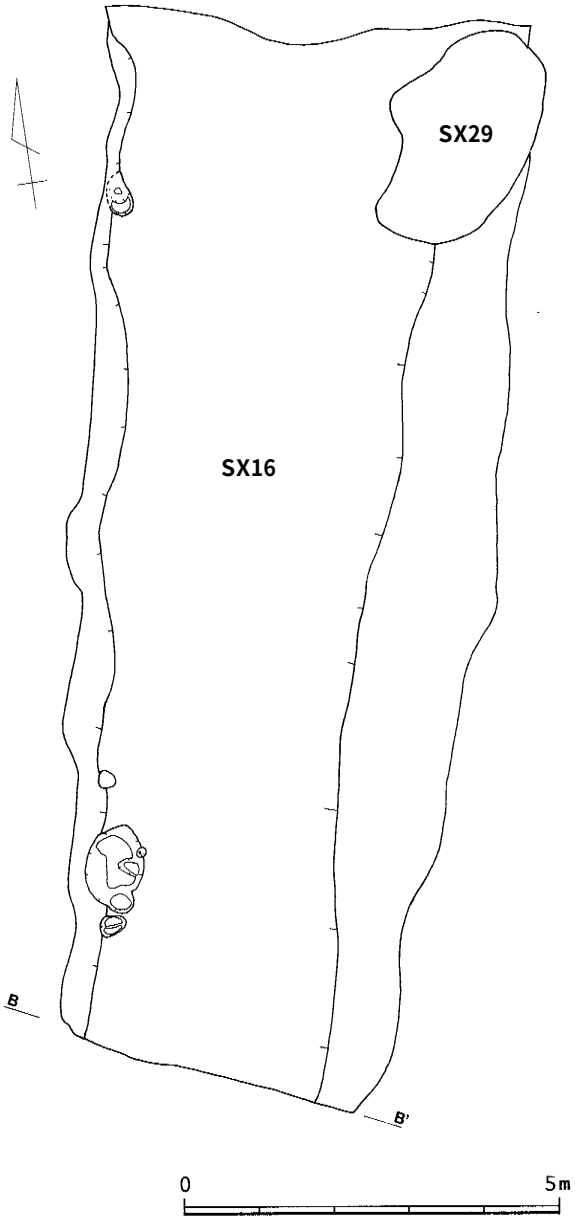
・**SX６**（第66図　第25表　図版23）

D－６－１・６に位置し，北側が調査区限界に接する。遺構の性格は二次堆積層である。

出土遺物

３は弥生土器の壺で「M」字状の突帯を貼付ける。





第69図　SX16・30平面図（S＝1/100）

番号	遺構	種類	器種	法量(cm)( )は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	SX2	青磁	椀	－	－	2.6	釉	釉	良	7.5Y6/3 灰オリーブ色	5Y6/2 灰オリーブ色	精緻 白色粒子	高麗青磁 象嵌
2	SX4	弥生土器	壺	－	－	2.8	ナデ	ナデ	良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや精緻 長石・石英	
3	SX6	弥生土器	壺	－	－	2.9	ナデ	器面剥離	やや良	10R5/8 赤色	10YR6/8 明黄褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	丹塗り

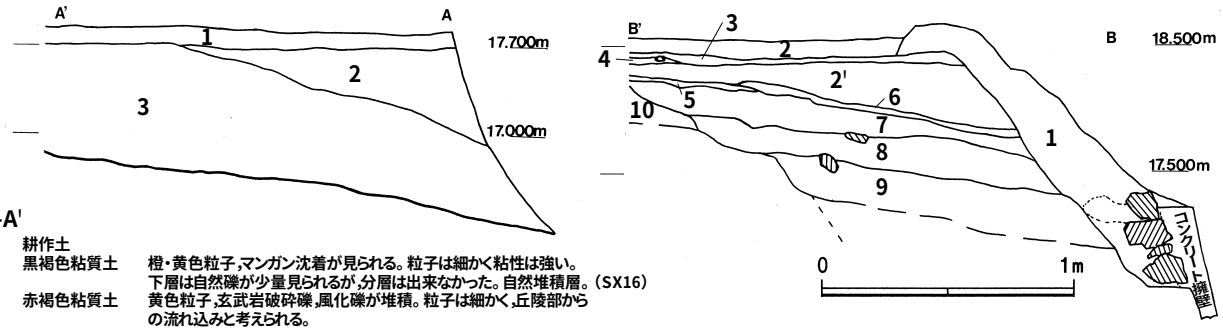
第25表　遺物観察表（SX２・４・６）

・SX16（第69～71図　第26表　図版25）

D－６－12の西斜面に位置し，南北を調査区限界に接する。また，西側を擁壁の影響を受ける。堆積は灰褐色土の単層である。調査は旧耕作土と推側し，検出・掘削を進めたが，それらに伴う遺構は検出されなかった。また，第Ⅶ章－４で述べる分析を行った。しかし，分析個体数が限られているため遺構の性格は不明である。

出土遺物

１～31は弥生土器である。**1**～**3**は口縁部～胴部上半が残存する甕である。**4**～**6**は須玖式土器の甕で，**5**は胴部上半に断面が三角形の突帯を一条張付ける。**7**・**8**は口縁部～胴部上半が残存する甕で，口唇部は尖る形状を呈する。**9**は甕で，口唇部が跳ね上がる。**10**～**12**は底部で，平底を呈する。13は口縁部～頸部が残存する壺で，外面は丹塗りが施される。**14**は口縁部が残存する壺で，内面はタテハケ→斜めハケが明瞭に残存する。また，口唇部は斜線の刻みが施される。**15**は口縁部が残存する壺で，口唇部は斜線の刻みが施される。**16**は複合口縁壺で，器壁が薄い。**17**は複合口縁壺で，口縁部の屈曲箇所に接合痕が残る。**18**は口縁部が残存する壺で，外方向へ直線的に広がる。**19**は口縁部が残存する壺で，内面はナデ調整による沈線が施される。**20**は頸部～胴部上半が残存する壺で，器面剥離が著しい。**21**は断面が台形を呈する突帯である。**22**は低い「M」字状を呈する突帯で，器面の残存は良好である。**23**は頸部～胴部上半まで残存する壺で，「M」字状の突帯を貼付ける。**24**は胴部が残存する壺で，断面が台形を呈する突帯を２条貼付ける。**25**は胴部が残存する壺で，断面が台形を呈する突帯を１条貼付ける。**26**～**30**は平底を呈する底部である。**31**は口縁部～胴部下半が残存する鉢で，口縁部は下方へ延びる。32～34は白磁である。**32**は口縁部が残存する皿である。**33**は底部が残存する椀で，施釉は外面まで施す。**34**は底部が残存する皿で，内・外面に施釉を施す。35～37は陶器である。**35**は火入と考えられ，外底は上げ底を呈する。施釉は内面及び胴部半ばまで施す。**36**は胴部下半が残



A-A'

1　耕作土
2　黒褐色粘質土　橙・黄色粒子,マンガン沈着が見られる。粒子は細かく粘性は強い。下層は自然礫が少量見られるが,分層は出来なかった。自然堆積層。（SX16）
3　赤褐色粘質土　黄色粒子,玄武岩破砕礫,風化礫が堆積。粒子は細かく,丘陵部からの流れ込みと考えられる。

B-B'

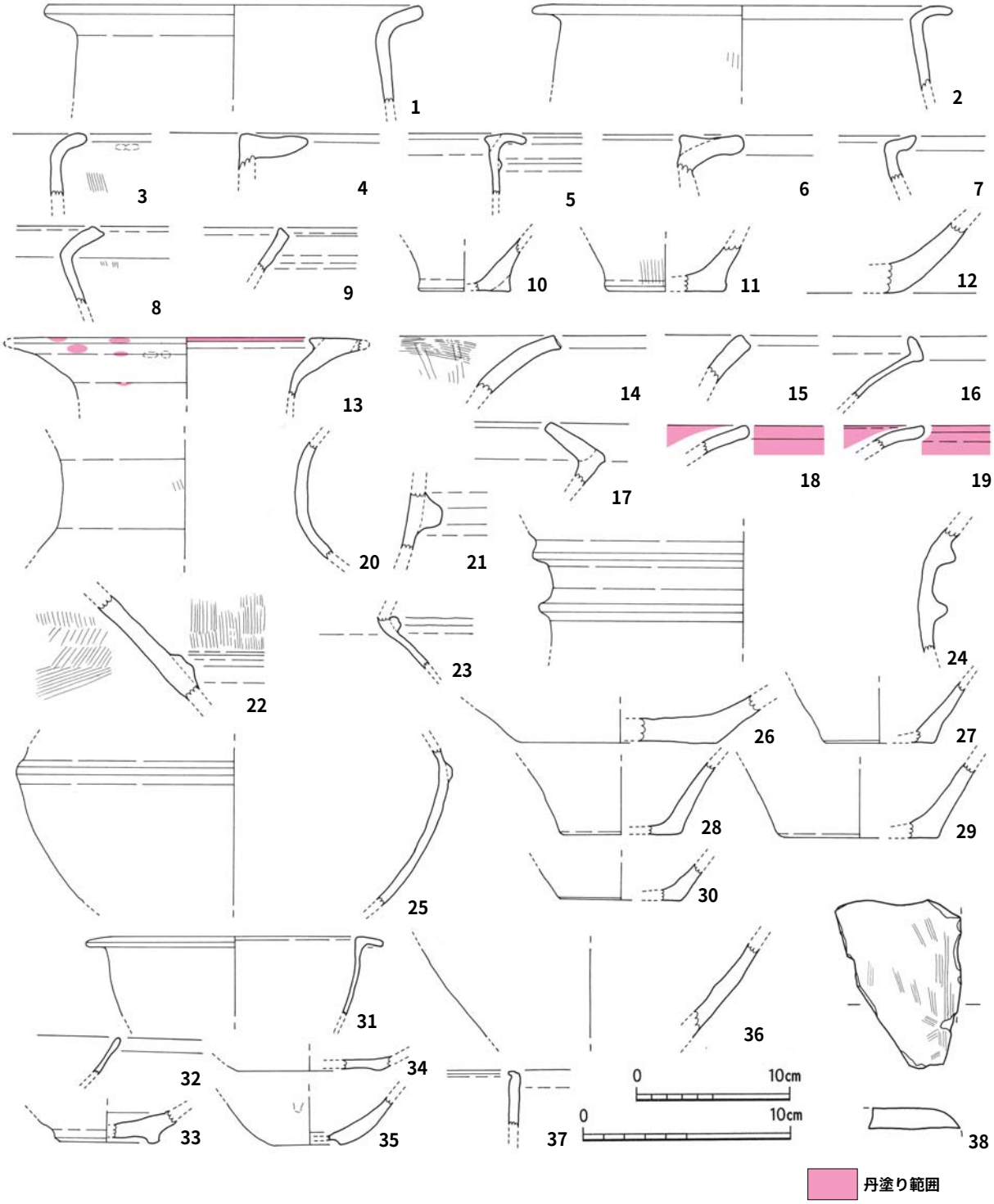
1　客土
2　耕作土
2'　旧耕作土
3　床土
4　造成土
5　床土
6　床土
7　灰褐色粘質土　（SX16）
8　褐色粘質土　玄武岩風化礫・拳大の玄武岩を含む。（SX16下層）。
9　褐色粘質土　玄武岩風化礫・玄武岩を多く含む。未遺物層に達した為,完掘まで行っていない。
10　にぶい橙色粘質土　粘性岩を密に含む。この層は西側へ行くほど粘性岩が剥離し散らばる。

第70図　SX16土層図（S＝1/30）

存する壺である。外面はカキメ後に施釉を施す。**37**は口縁部～体部上半まで残存する火入である。**38**は磨製石斧である。口唇部は内側を向き，内面に沈線を施す。これらより，陶磁編年のⅡ期に位置付けられる。

・SX30（第69図）

D－６－12の西斜面に位置し，南北を調査区限界に接する。また，西側を擁壁の影響を受ける。堆積は褐色粘質土の単層である。SX16との新旧関係（旧→新）は，SX30→16の関係である。遺物の出土はみられなかった。



第71図　SX16出土遺物（１～31・35～37はＳ＝１／４，32～34・38はＳ＝１／３）

番号	種類	器種	法量(cm)( )は復元径			調整		焼成	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	弥生土器	甕	(24.0)	−	6.1	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	5YR4/8 赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
2	弥生土器	甕	(23.0)	−	5.5	タテハケ/ナデ	ナデ	やや良	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR7/8 黄橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
3	弥生土器	甕	−	−	4.0	ナデ/指頭圧痕	ナデ	やや良	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/6 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
4	弥生土器	甕	−	−	2.4	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英	
5	弥生土器	甕	−	−	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	10YR7/6 明黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
6	弥生土器	甕	−	−	2.8	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	やや精緻 長石・石英	
7	弥生土器	甕	−	−	3.0	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/3 にぶい褐色	やや精緻 長石・石英	
8	弥生土器	甕	−	−	5.0	ヨコナデ/ タテハケ	ヨコナデ	良	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR4/6 赤褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
9	弥生土器	甕	−	−	2.9	回転ナデ	回転ナデ	やや良	10YR5/2 灰黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
10	弥生土器	甕	−	(5.6)	5.0	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	10YR4/2 灰黄褐色	やや精緻 長石・石英	
11	弥生土器	甕	−	(7.0)	3.9	タテハケ/ナデ	ナデ	やや良	2.5Y4/8 赤褐色	2.5Y4/8 赤褐色	やや精緻 長石・石英	
12	弥生土器	甕	−	−	4.6	器面剥離	器面剥離	やや良	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英	
13	弥生土器	壺	−	−	4.8	ナデ	ナデ	やや良	2.5YR5/8 明赤褐色	2.5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英	丹塗り
14	弥生土器	壺	−	−	5.7	ナデ	ヨコハケ/ タテハケ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英	
15	弥生土器	壺	−	−	3.1	ヨコハケ/ナデ	ヨコハケ/ナデ	やや良	2.5YR5/6 明赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英	
16	弥生土器	壺	−	−	4.1	器面剥離	器面剥離	やや良	10YR7/6 黄橙色	2.5Y5/4 黄褐色	やや精緻 長石・石英	
17	弥生土器	壺	−	−	4.0	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英	
18	弥生土器	壺	−	−	1.8	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	10R5/8 赤色	10R5/8 赤色	やや精緻 長石・石英	丹塗り
19	弥生土器	壺	−	−	1.5	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	やや精緻 長石・石英・片岩	丹塗り
20	弥生土器	壺	−	−	7.7	タテハケ/ 器面剥離	器面剥離	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/8 黄橙色	やや精緻 長石,石英	
21	弥生土器	甕	−	(7.4)	3.1	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/8 橙色	やや精緻 長石・石英・片岩	
22	弥生土器	壺	−	−	6.8	タテハケ/ナデ	斜ハケ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英・黒曜石	
23	弥生土器	壺	(16.2)	−	4.0	ナデ	ナデ	やや良	10YR7/6 明黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
24	弥生土器	壺	−	−	8.0	タテハケ/ ヨコナデ	斜ハケ/器面剥離	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/8 黄橙色	やや精緻 長石・石英	
25	弥生土器	壺	−	−	10.2	器面剥離	器面剥離	やや良	7.5YR7/8 黄橙色	2.5Y5/3 黄褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
26	弥生土器	壺	−	(6.3)	2.2	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/4 にぶい赤褐色	10YR7/6 明黄褐色	やや精緻 長石・石英	
27	弥生土器	壺	−	(8.0)	2.4	器面剥離	器面剥離	やや良	10YR6/6 明黄褐色	10YR6/6 明黄褐色	やや精緻 長石・石英・黒曜石	輝石を含む。
28	弥生土器	壺	−	(6.0)	3.4	ナデ	ナデ	やや良	7.5YR5/8 明褐色	7.5YR5/8 明褐色	やや精緻 長石・石英	
29	弥生土器	壺	−	(12.8)	3.1	ナデ	ナデ	やや良	5YR5/8 明赤褐色	10YR4/2 明黄褐色	やや精緻 長石・石英	
30	弥生土器	壺	−	(7.6)	4.7	ナデ	ナデ	やや良	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	やや精緻 長石・石英	
31	弥生土器	鉢	(15.8)	−	5.3	ナデ	ナデ	良	5YR5/8 明赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	やや精緻 長石・石英・片岩	
32	白磁	皿	−	−	1.8	釉	釉	良	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	精緻	Ⅸ類
33	白磁	椀	−	−	1.5	釉	釉	良	2GY7/1 明オリーブ灰色	2GY7/1 明オリーブ灰色	精緻	Ⅳ類
34	白磁	皿	−	−	0.7	釉	釉/釉剥ぎ	良	10Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白色	精緻	Ⅺ類
35	陶器	火入	−	(4.0)	3.1	釉	−	良	10YR6/2 灰黄褐色	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	精緻	近世陶器
36	陶器	壺	−	−	6.1	カキメ/釉	釉	良	2.5Y3/2 黒褐色	2.5Y5/2 暗灰黄色	精緻	近世陶器
37	陶器	火入	−	−	3.6	釉	釉	良	10Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白色	精緻	近世陶器

番号	種類	器種	法量				備考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	
38	石製品	磨製石斧	8.0	6.0	1.0	64.8	玄武岩

第26表　遺物観察表（SX16）

・SX20（第72図　図版25）

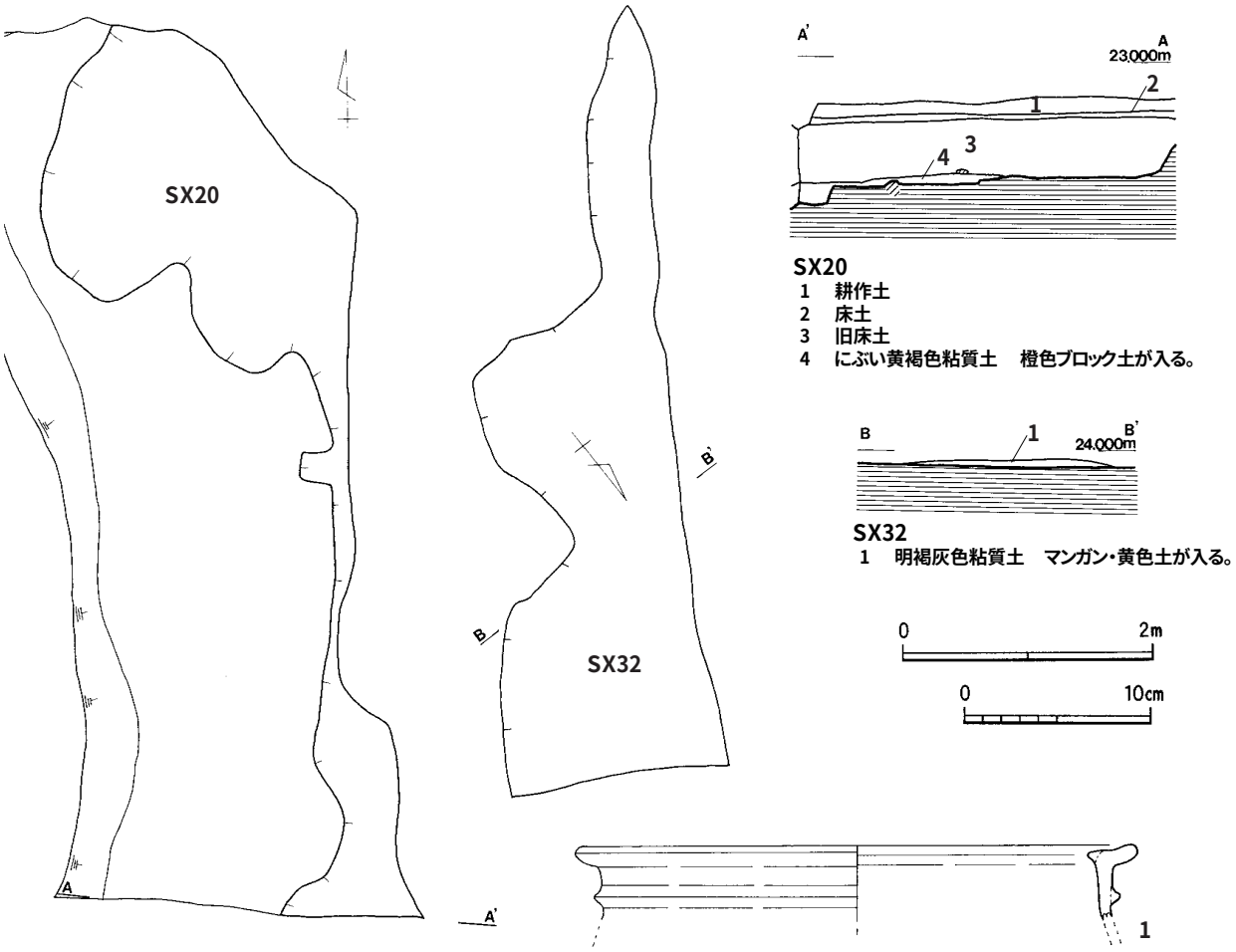
D－７－21の東側斜面に位置し，北側は擁壁と遺構の上面は耕作土の影響を受ける。また，南側は調査区限界に接する。検出遺構の規模は，南北の長さが約7.3mを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。遺物の出土はみられなかった。

・SX32（第72図　第27表　図版25）

D－６－14・19の西側斜面に位置し，明褐灰色粘質土の単層である。このため，旧耕作土と考え調査を進めたが，それに伴う遺構などは検出されなかった。

出土遺物

1は口縁部～胴部上半が残存する甕である。頸部直下には断面が三角形の突帯を一条巡らす。



第72図　SX20・32平面図・土層図（S＝1/60），出土遺物（S＝1/4）

番号	種類	器種	法量(cm)(　)は復元径			調整		焼成	色調		胎土
			口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	弥生土器	甕	(29.4)	－	5.0	ナデ	ナデ	やや良	5YR4/6 赤褐色	7.5YR6/2 灰褐色	やや精緻 長石・石英・片岩

第27表　遺物観察表（SX32）

小　結

・掘立柱建物について

丘陵部の西側で４基の SB と，SP が確認された。確認できた SB は，身舎面積及び各 SP の径は決して大きくはないものの，調査区南側へ広がる様相を示している。SB の明確な時期の特定及びそれに付随する生活遺構が確認できなかった。

・近世墓について

〈五輪塔〉

SF４は SK４の調査を経て，それに伴う遺構であると判断された。しかし，改葬された時期は不明である。SF４の特徴として，風輪と空輪が一石で製作され，火輪に宝篋印塔の笠を用いる点が挙げられる。この形態は，松浦定の供養塔とされる「文禄の役松浦家供養塔」に確認できる。この供養塔と形態に類似するが，総高などが SF４と比較して一回り大きく，各部位に装飾を施す点に差異が見出せる。この差異は階層を表現していると考えられるが，形態の類似より時期は16世紀末～17世紀初頭と考えられ，出土遺物と相違はない。

〈土壙墓〉

近世の SK は，丘陵部西側及び西側斜面にて３基確認された。形態は全て隅丸長方形を呈し，出土遺物に釘などはみられなかったが，SK４・７の堆積状況より棺を用いた葬送が推測される。出土遺物が確認できた２基は副葬品に陶器皿を用いる。窯詰め技法の痕跡である目跡は，SK４は胎土目跡２点と SK７は砂目跡２点である。そのため新旧関係（旧→新）SK４→７と判断できる。時期は陶器編年のⅡ期に該当し，17世紀初頭～17世紀前半頃と位置付けられる。

・集石遺構について

集石遺構は３基確認されたが，用いた石材の違いや大きさに差異はみられない。この下層には SX２が確認されるが，自然堆積土を用いて集石遺構が構築される。また，上部構造の痕跡も認められない。このため，遺構の性格は不明だが，類似する遺構に壱岐市京塚遺跡や佐世保市武辺城跡が確認できる。

本遺跡の丘陵部において，近世の遺構の展開が確認できたことは特筆として挙げられる。それらの時期は土壙墓よりの出土遺物が付与されるが，それ以外の遺構の時期は確認できなかった。今後の調査課題である。　（江上正高）

【参考文献】

藤田和裕　他　1983『京塚遺跡』芦部町文化財調査報告書　第１集　長崎県芦部町教育委員会
柴田妃三光　他　2008『武辺城跡・末永遺跡』長崎県佐世保文化財調査報告書　第２集　長崎県教育委員会

4　第Ⅰ層出土遺物（第73～105図　第28～59表　図版25～29）

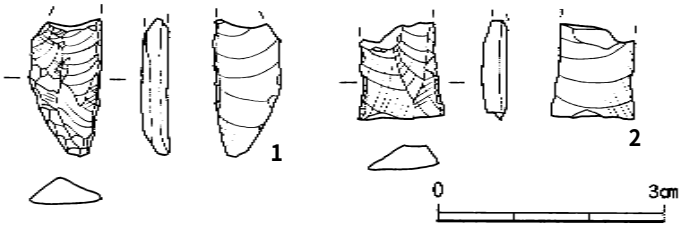
概　要

本遺跡の地形は，第Ⅱ章－１で前述した通りである。本章で述べる遺物は，第Ⅲ章－２で概要を述べたが，遺物包含層として捉える事が可能であると調査時に認識している。それは，丘陵上を中心とした本遺跡の立地状況より，南→北及び丘陵上→丘陵下への耕作土の移動は考えられるものの，東西→丘陵上（下→上）方向への耕作土の移動は非効率的であり考えにくい。すなわち，継続的に土地利用された丘陵上は各時代の土地利用された後，生活空間から耕作地へ転化したため土地利用された全時期の遺物が含まれる（遺物包含層）ことが考えられる。このため，第Ⅰ層より出土した遺物より，本遺跡について検討を試みる。　（江上正高）

（1）　旧石器時代の遺物

（第73図　第28表　図版25）

１・２はナイフ形石器である。**1**は二側縁に調整を施し，刃部は左側縁に形成される。**2**は二側縁に調整が施される。



第73図　旧石器時代の遺物（S＝1/1）

番号	器種	調査区	石種	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）
1	ナイフ型石器	⑥	黒曜石	18.0	9.0	3.5	0.73
2	ナイフ型石器	④	黒曜石	13.0	10.0	3.0	0.59

第28表　遺物観察表（旧石器時代の遺物）

（2）　縄文時代の遺物（第74～80図　第29～33表　図版25～27）

・石鏃（第74～78図　第29～32表　図版26）

第Ⅰ層から出土した石鏃は総計91点である。そのうち本報告書では72点を掲載する。第Ⅰ層より出土した石製品は新しい破損も確認でき，石鏃の完形品は５点と少なく欠損品が大部分を占める。石材は大半が黒色良質の黒曜石であったが，３点は灰色の黒曜石の使用が見られた。分類は石鏃基部における抉入の深浅と尖端角度等の形態を優先的に考え分類した。

Ａ類

１型（第75図　１～４・６）５点

平基無茎鏃で両側縁はやや内彎する。

２型（第75図　５・７）２点

平基無茎鏃で両側縁は直線的に頂点で交わる。

３型（第75図　８）１点

平基無茎鏃で両側縁はやや外彎する。

Ｂ類

１a 型（第75・76図　12～19）８点

両側縁が内彎する。脚部の抉りは深く丸いものが大半である。断面は厚いものが多い。

１b 型（第76図　20～23）４点

両側縁は内彎する。抉りは浅く，脚部の先端は尖る。

２a 型（第76図　24～29）６点

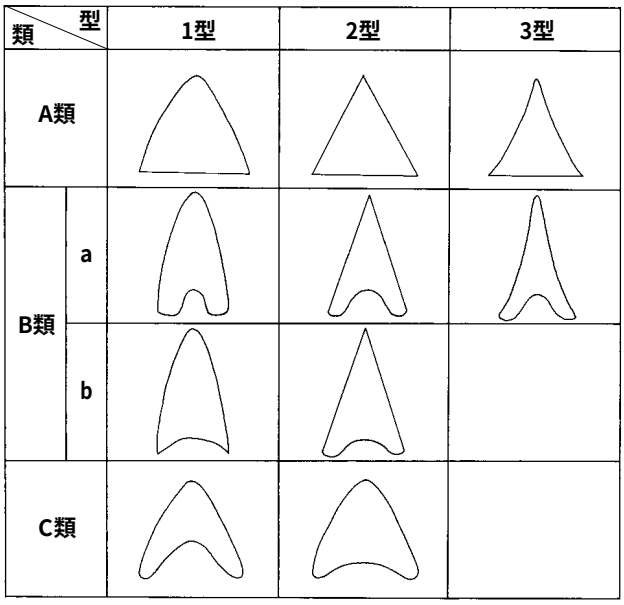
両側縁は直線的に頂点で交わる。抉りは深く丸い。脚部の先端は尖ったものと丸みをもつものがある。剥片鏃を１点含む。

２b 型（第76・77図　30～38）９点

両側縁は直線的に交わる。抉りはやや浅い。

３a 型（第77図　39～41）３点

細身で両側縁は外彎する。尖端が歪な製品が多い。



第74図　石鏃形態分類

Ｃ類

１型（第77図　42～44）３点

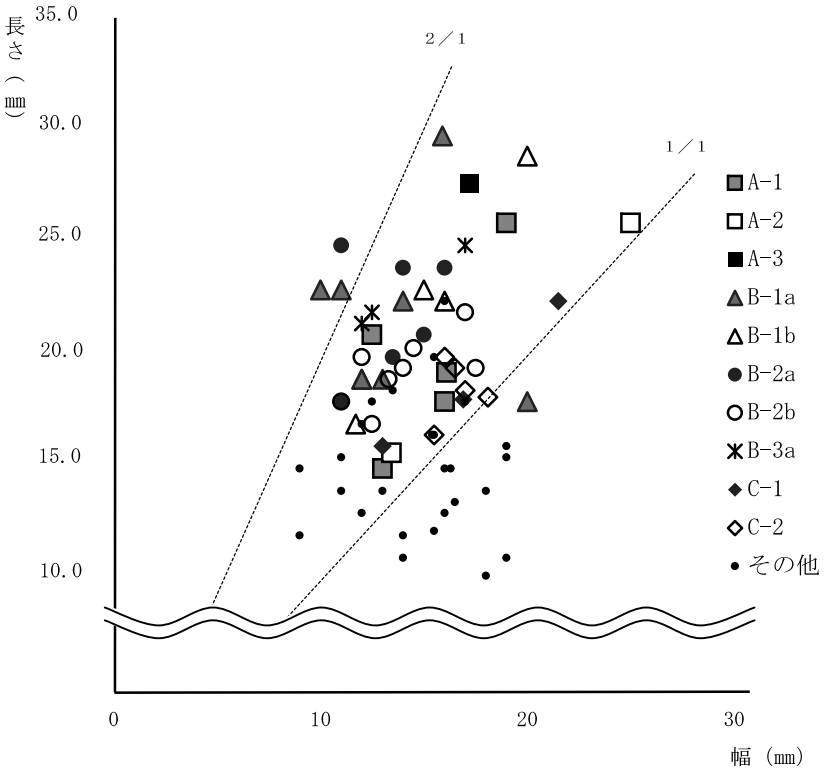
正三角形に近く抉りは深い。脚部の先端は尖る。

２型（第77図　45～49）５点

正三角形に近く抉りは浅い。

Ｄ類（第77・78図　９～11，50～72）26点

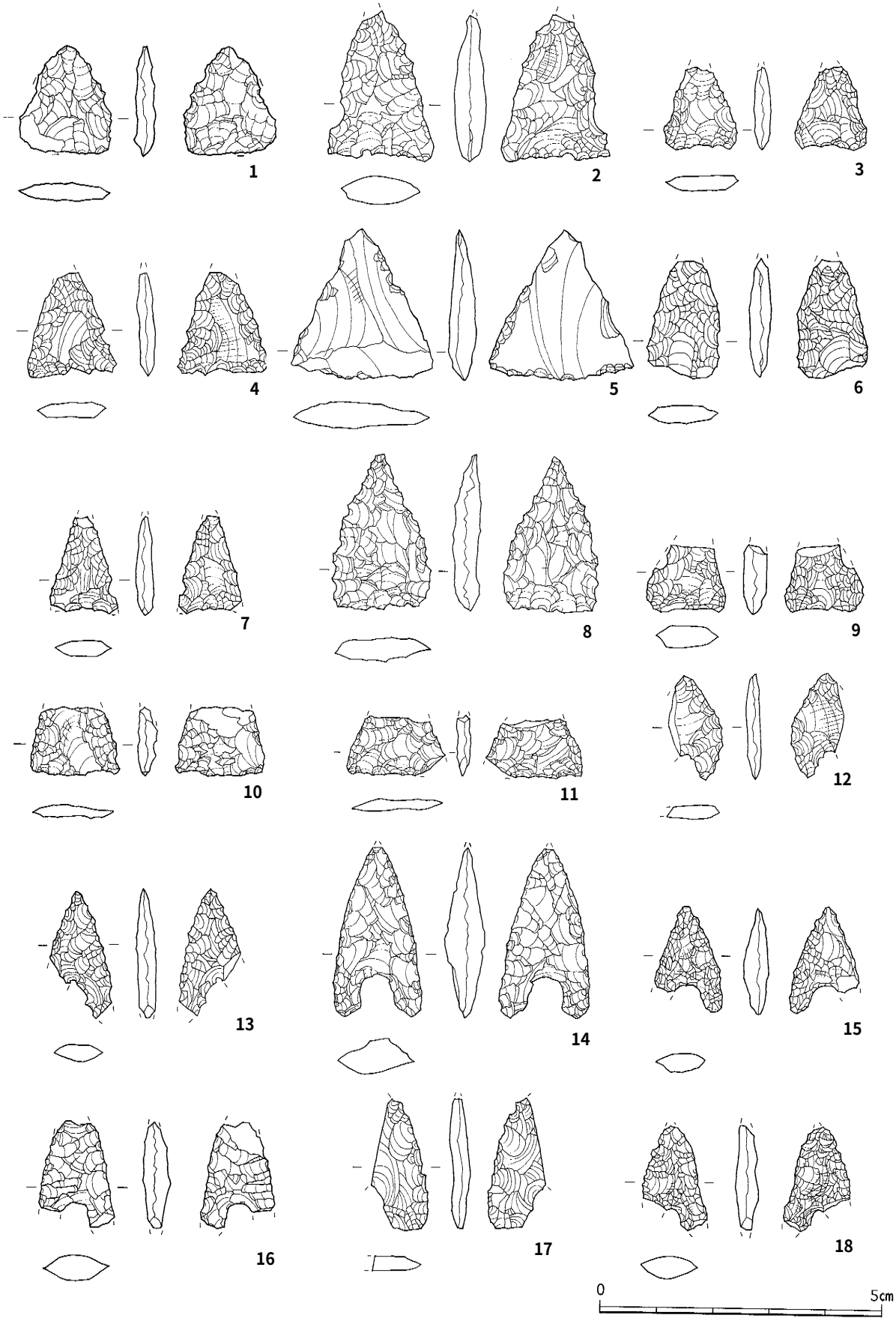
形態にばらつきが多いものや破損により分類が不可能なものにおいてはその他の分類とした。



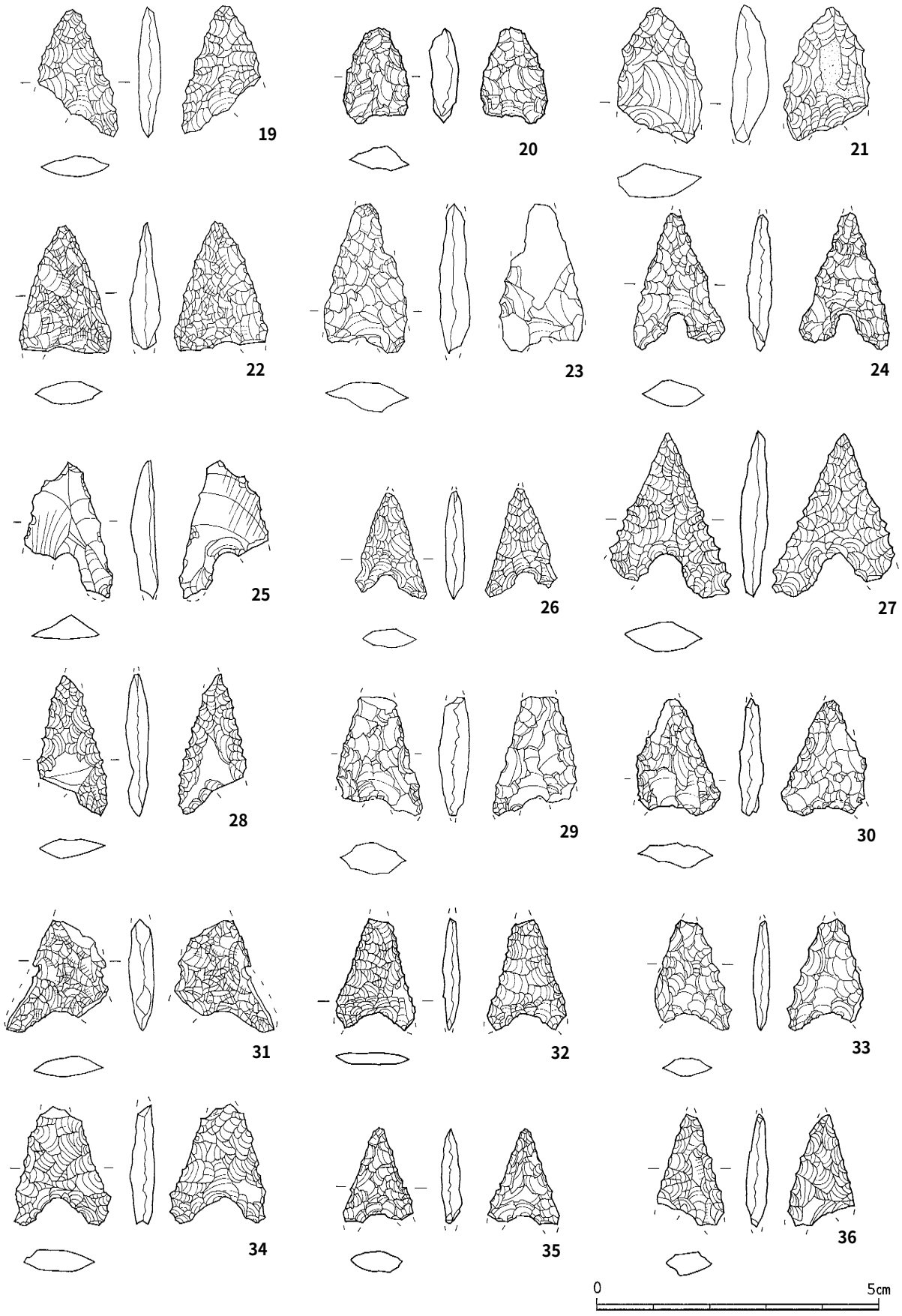
第29表　石鏃形態別相関グラフ

ここでは少ない資料ではあるが観察を通して判明した事項について述べたい。

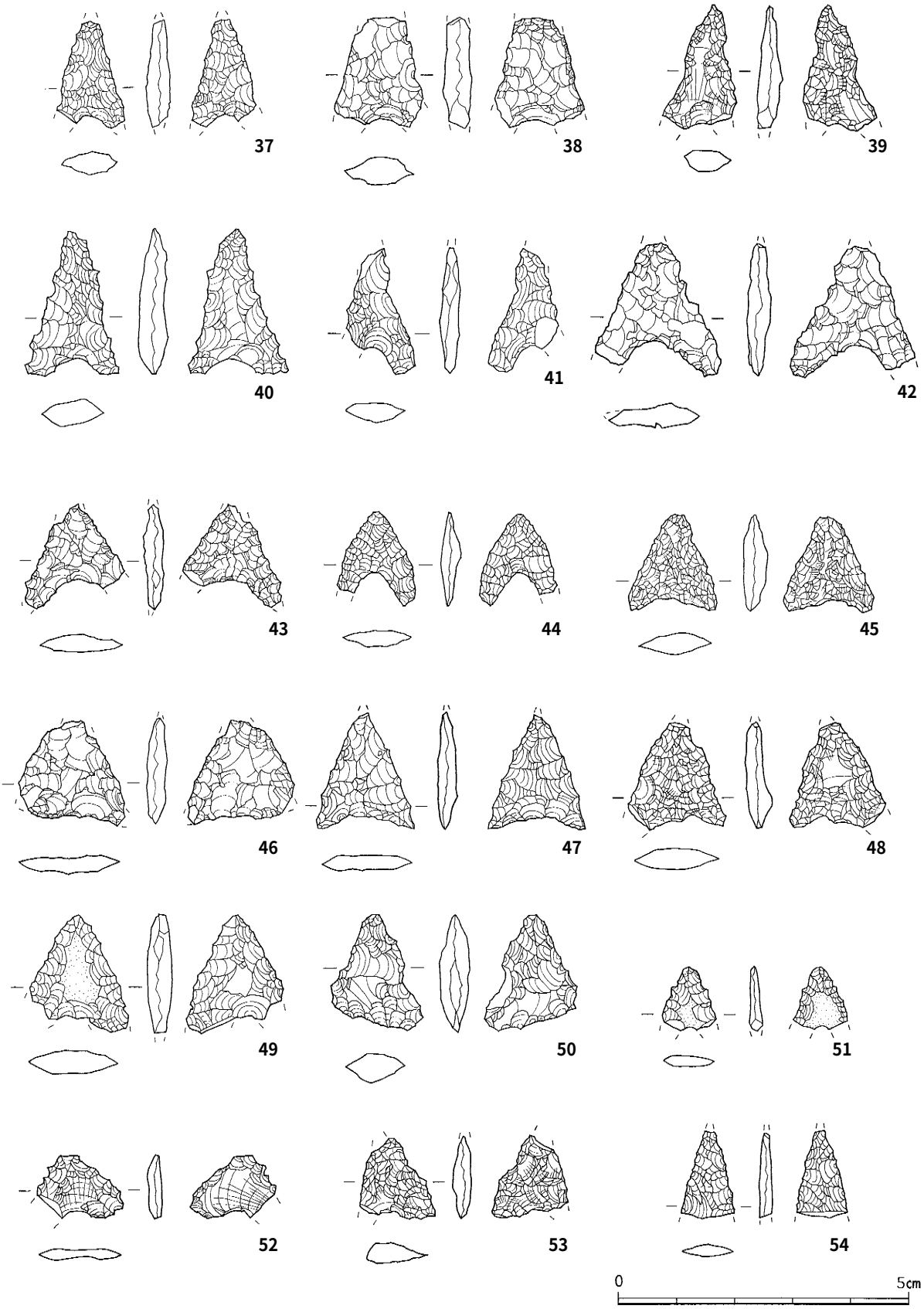
石鏃の大きさについてはＤ類を除き15㎜以上30㎜以下と比較的纏まっており，31㎜以上の大型のものは確認できなかった。また，大半が黒曜石を利用するためか，調整は入念で主要剥離面を残すものは72点中16点であった。打点を基部に，剥離の方向を縦位に用いるものが６点。打点を尖端に，剥離の方向を縦位に用いるものが３点。打点を左側辺に，剥離の方向を横位に用いるものが６点。打点を左側



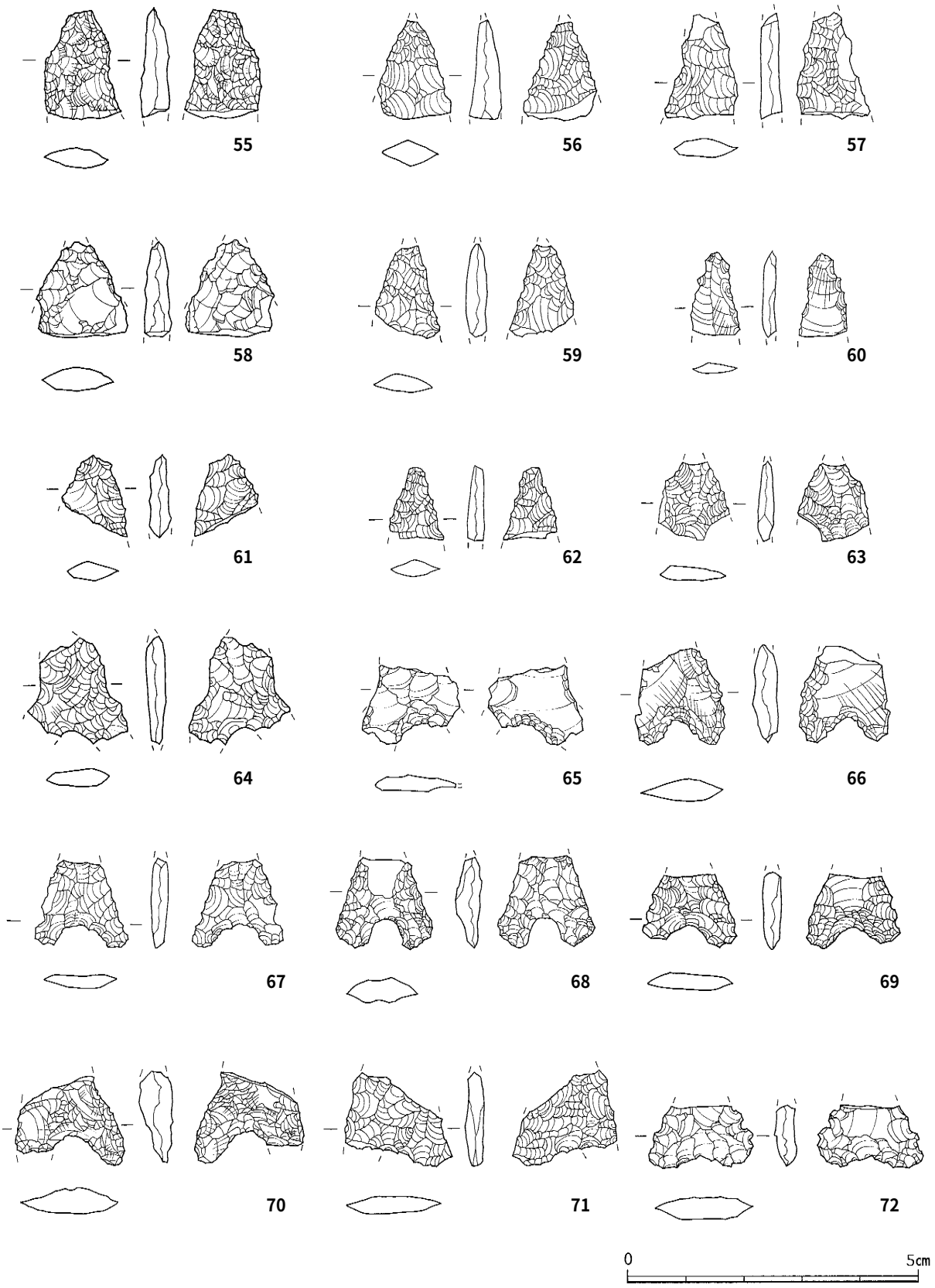
第75図　石鏃①（S＝1/1）



第76図　石鏃②（S＝1/1）



第77図　石鏃③（S＝1/1）



第78図　石鏃④（S＝1/1）

辺に，剥離の方向を横位に用いるものが６点。打点を右側辺に，剥離の方向を横位に用いるものが１点であった。しかし，資料数が少なく，形態別に比較した際に明確な特徴が得られなかった。破損状況については尖端部，脚部共に破損しているものが比較的多く見られ，形態別ではＢ類２ｂ型が最も多かった。比較的新しい破損については資料に含んでいない。

ここで掲載した石鏃資料は前述した通り，耕作土からの出土遺物であり，出土状況は良好といえない。また，石器の出土点数に比べ，縄文土器は極めて少なく共伴関係も確認できなかった。

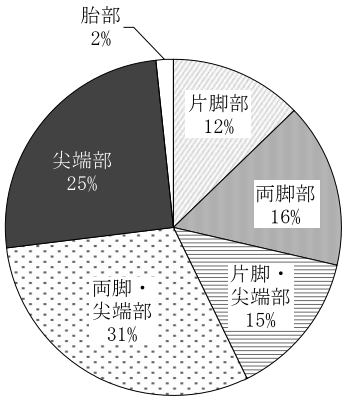
【参考文献】

吉留秀敏　1978「石鏃について」『中山遺跡の研究［Ⅰ］』遺物篇１　平戸市教育委員会

吉留秀敏　1978「石鏃について」『金柑茶屋第２遺跡』平戸市教育委員会

類	部位／型	片脚部	両脚部	片脚・尖端部	両脚・尖端部	尖端部	胎部	破損総計
A類	1型	1				4		5
	2型				1			1
	3型							0
B類	1a型	3	1		2	1		7
	1b型	1	1		1			3
	2a型	1	1	1	1	2		6
	2b型		1	2	5	1		9
	3型				1	1		2
C類	1型	1		1	1			3
	2型		1	1	1			3
その他		1	5	4	7	7	1	25
総計		8	10	9	19	16	1	64

（比較的新しい破損は含まない）



石鏃破損箇所（%）

第30表　石鏃破損状況

番号	調査区	石種	剥片剥離方向	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（ｇ）	備考
1	⑥	黒曜石		19.3	16.1	3.20	0.97	
2	④	黒曜石		26.0	19.0	5.00	1.94	
3	④	黒曜石	→	15.0	13.0	3.00	0.55	
4	⑦	黒曜石	→	18.0	16.0	3.00	0.68	
5	③	安山岩		26.0	25.0	4.00	2.07	
6	④	黒曜石		21.0	12.5	3.00	0.95	
7	④	黒曜石	↑	17.5	12.0	3.00	0.50	石匙への二次加工も考えられえる。
8	④	黒曜石		27.8	17.2	4.10	2.00	
9	④	黒曜石		12.0	14.0	4.00	0.75	
10	③	黒曜石		12.2	15.5	2.80	0.57	
11	②	黒曜石		10.5	16.8	2.00	0.48	
12	④	黒曜石	→	18.0	20.0	2.00	0.38	
13	④	黒曜石		23.0	11.0	3.00	0.56	
14	③	黒曜石		29.9	15.9	6.50	1.98	
15	④	黒曜石	→	19.0	12.0	4.50	0.59	
16	⑥	黒曜石		19.0	13.0	4.80	0.91	
17	④	黒曜石		23.0	10.0	3.00	0.69	
18	③	黒曜石		19.0	12.0	4.50	0.61	
19	④	黒曜石		22.5	14.0	4.00	0.90	
20	④	黒曜石		17.0	11.7	4.30	0.84	
21	④	黒曜石	→	23.0	15.0	6.00	1.91	
22	③	黒曜石		22.5	16.0	5.00	1.21	

第31表　遺物観察表（石鏃①）

番号	調査区	石種	剥片 剥離方向	長さ (㎜)	幅 (㎜)	厚さ (㎜)	重量 (g)	備考
23	⑥	黒曜石		26.2	14.7	5.00	1.70	
24	④	黒曜石		24.0	16.0	4.50	0.99	
25	④	黒曜石	↑	24.0	14.0	4.00	0.85	剥片鏃
26	④	黒曜石		19.0	12.8	3.50	0.55	
27	④	黒曜石		29.0	20.0	5.00	1.50	
28	④	黒曜石	↑	25.0	11.0	3.50	0.76	
29	④	黒曜石		21.0	15.0	5.50	1.32	
30	④	黒曜石		20.4	14.5	4.10	0.97	
31	③	黒曜石		19.5	17.5	5.00	1.00	
32	④	黒曜石		19.5	14.0	2.00	0.58	
33	④	黒曜石		19.0	13.3	3.10	0.55	灰色の黒曜石
34	④	黒曜石		22.0	17.0	4.00	1.02	
35	④	黒曜石		17.0	12.5	3.80	0.53	
36	④	黒曜石		20.0	12.0	4.00	0.63	
37	④	黒曜石		18.0	11.0	4.00	0.65	
38	⑥	黒曜石		19.0	15.1	5.10	1.23	
39	③	黒曜石		22.0	12.5	4.50	0.68	
40	④	黒曜石	↑	25.0	17.0	4.00	1.23	
41	④	黒曜石		21.5	12.0	3.50	0.57	
42	⑥	黒曜石		22.5	21.5	4.10	1.23	
43	③	黒曜石		18.1	16.9	3.10	0.55	
44	④	黒曜石		16.0	13.0	2.50	0.37	
45	③	黒曜石		16.5	15.5	4.00	0.71	
46	⑥	黒曜石		18.2	18.1	3.10	1.10	
47	①	黒曜石		19.5	16.5	2.50	0.68	灰色の黒曜石
48	③	黒曜石		18.5	17.0	5.00	0.82	
49	④	黒曜石	↑	20.0	16.0	4.00	1.21	
50	④	黒曜石		20.0	15.5	5.00	1.14	
51	④	黒曜石		11.0	19.0	2.00	0.18	局部磨製石鏃
52	④	黒曜石	↖	11.0	14.0	2.00	0.33	
53	③	黒曜石		14.0	13.0	3.50	0.41	
54	④	黒曜石		15.0	9.0	2.00	0.24	
55	③	黒曜石		18.5	13.5	5.50	0.79	
56	⑤	黒曜石		17.0	12.0	4.00	0.82	
57	④	黒曜石		18.0	12.5	3.00	0.68	
58	④	黒曜石		16.5	15.4	4.00	1.13	
59	④	黒曜石		15.5	11.0	3.00	0.55	
60	④	黒曜石	↓	14.0	18.0	2.00	0.22	剥片鏃
61	④	黒曜石		14.0	11.0	3.00	0.33	
62	④	黒曜石		12.0	9.0	3.00	0.27	
63	④	黒曜石		13.0	12.0	2.00	0.40	
64	④	黒曜石		18.0	17.0	3.00	0.84	
65	④	黒曜石	↓	13.5	16.5	2.70	0.58	剥片鏃
66	③	黒曜石	↓	16.5	15.5	4.50	0.87	剥片鏃
67	④	黒曜石		15.0	16.0	2.50	0.59	灰色の黒曜石
68	④	黒曜石		15.0	16.3	4.20	0.83	
69	①	黒曜石	↑	13.0	16.0	3.00	0.61	
70	③	黒曜石		15.5	19.0	5.50	0.97	
71	④	黒曜石		16.0	19.0	3.00	0.97	
72	④	黒曜石	→	10.2	18.0	3.90	0.64	

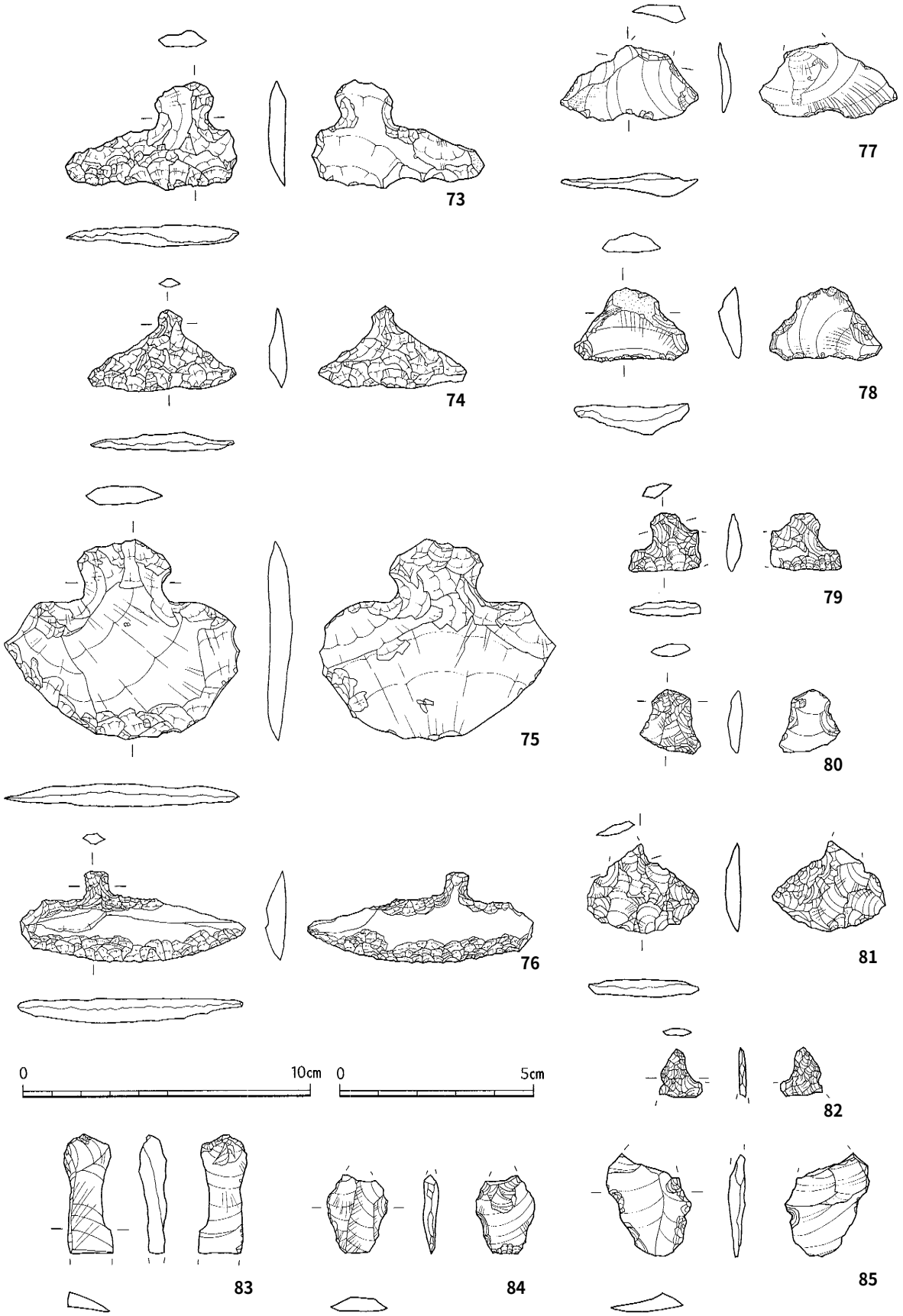
第32表　遺物観察表（石鏃②）

・石匙・加工痕のある剥片・その他石器（第79・80図　第33表　図版25・27）

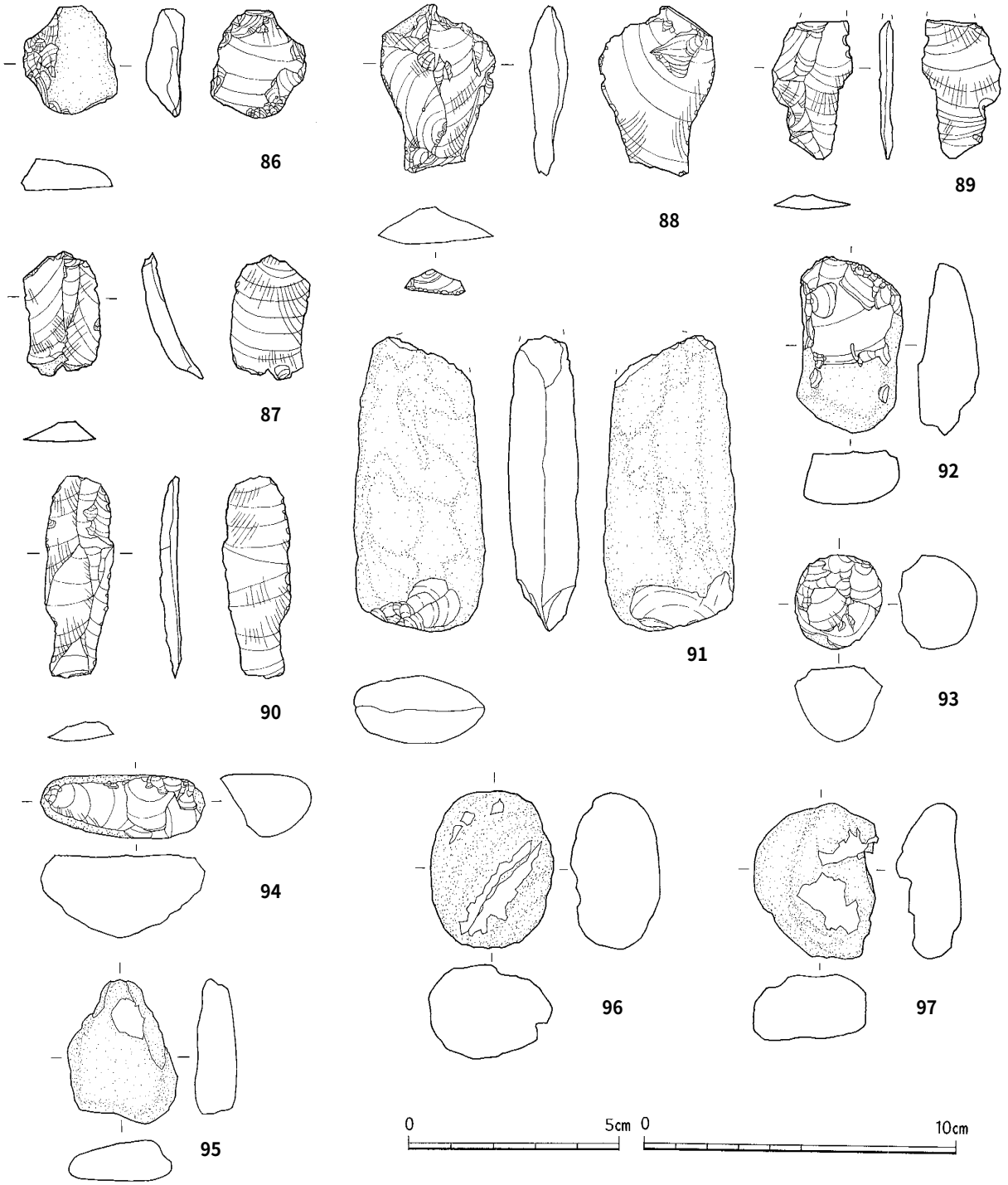
73～82は石匙である。摘み状の作り出しを形成するものを石匙とし10点を掲載した。９点が横型の石匙である。**77**は摘み部分を形成するため正面右側縁に抉りを入れるが，左側縁には調整が確認できないため未製品の可能性がある。**78**は摘み部分を形成するため正面右側縁に抉りを入れる。左側縁も僅かに調整を施す。**79**は正面右部分を欠損する。欠損した面は裏面から僅かに調整を施す。**80**は摘み部分を残し欠損する。破損した面は裏面から調整を施す。**81**は摘み部分を形成するため抉りを入れるが，調整は粗く抉りは浅い。**82**は細かく調整を施し，摘み部分を形成するが大半を欠損する。83～90は加工痕のある剥片である。**83**はスリガラス状の頭部調整が確認できる。**84**は正面左側縁と裏面下部に細かな調整を施す。**85**は両側縁に調整を施す。石材は赤色チャートである。**86**は自然面を多く残す。正面左側縁に調整を施す。**87**は頭部に調整を施す。**88**は周縁に細かな調整を施す。**89**は比較的薄く加工を施すが，細かな調整は施していない。**90**は周縁に細かな調整を施す。**91**は磨製石斧の未製品である。92～94は石核である。**92**は剥離作業面が一面に集中している。腰岳産黒曜石である。**93・94**は剥離作業面が一面に集中し，多方向から剥離を行う。自然面を多く残す。牟田産黒曜石である。**95～97**は牟田産黒曜石の原石である。（松田菜津子）

番号	器種	調査区	石種	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（ｇ）	備考
73	石匙	⑥	安山岩	37.0	59.5	6.0	13.38	
74	石匙	⑥	安山岩	29.0	51.0	6.0	6.60	
75	石匙	④	安山岩	69.0	82.0	7.0	45.01	
76	石匙	②	安山岩	32.5	79.0	0.9	14.32	
77	石匙	④	黒曜石	20.0	36.0	2.0	3.06	
78	石匙	④	黒曜石	19.5	29.5	7.0	2.99	
79	石匙	⑥	黒曜石	15.5	18.5	4.0	1.05	
80	石匙	⑥	黒曜石	17.0	15.0	3.0	1.10	
81	石匙	⑥	黒曜石	23.5	29.0	4.5	2.62	
82	石匙	④	黒曜石	13.0	11.0	1.1	0.23	
83	加工痕のある剥片	④	黒曜石	31.0	12.0	7.0	2.08	
84	加工痕のある剥片	⑦	黒曜石	11.0	21.0	3.5	1.40	
85	加工痕のある剥片	④	赤チャート	27.0	19.0	4.0	2.20	
86	加工痕のある剥片	④	黒曜石	26.0	22.0	8.0	5.00	
87	加工痕のある剥片	④	黒曜石	54.0	37.0	11.0	17.60	
88	加工痕のある剥片	⑤	黒曜石	40.0	24.0	6.5	6.70	
89	加工痕のある剥片	④	黒曜石	44.0	25.5	5.0	4.22	
90	加工痕のある剥片	⑤	黒曜石	65.0	21.0	5.5	8.05	
91	磨製石斧	③	頁岩	91.0	42.0	21.0	120.00	
92	石核	④	黒曜石	56.8	33.5	17.2	43.99	腰岳産
93	石核	④	黒曜石	30.0	28.0	24.0	23.32	牟田産
94	石核	④	黒曜石	20.9	52.9	26.9	38.74	牟田産
95	原石	⑥	黒曜石	46.4	35.5	13.0	26.49	牟田産
96	原石	⑥	黒曜石	50.5	39.5	30.4	73.23	牟田産
97	原石	④	黒曜石	49.8	39.8	21.1	44.62	牟田産

第33表　遺物観察表（石匙・加工痕のある剥片・その他の石器）



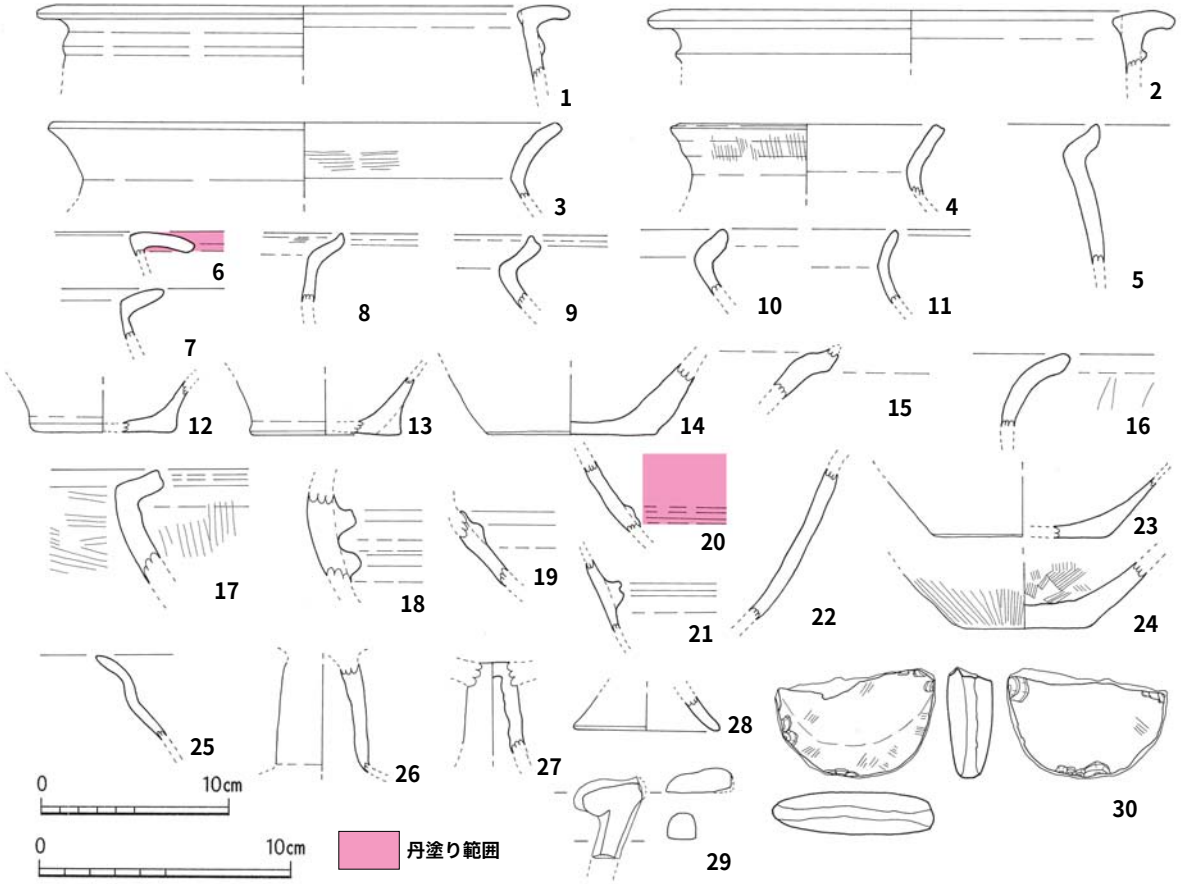
第79図　石匙・加工痕のある剥片（73～76はＳ＝１/２，77～85はＳ＝２/３）



第80図　加工痕のある剥片・その他石器（86・87はＳ＝２／３，88～97はＳ＝１／２）

（３）　弥生時代の遺物（第81図　第34表　図版27）

１～14は甕である。**１**・**２**は口縁部が逆「L」字状を呈する。口縁下に断面が三角形の突帯を一条巡らせる。**６**は口縁部が残存し，内・外面の一部分に丹塗りを施す。15～25は壺である。**16**は外面にハケを施した後ナデ調整を行う。**19**～**21**は断面が「M」字状の突帯を一条巡らせる。**20**は外面に丹塗りを施す。**24**は内面に不定方向のハケを施す。**25**は口縁部から頸部にかけ内湾する。**26**～**28**は高坏である。**29**は器種不明の遺物である。形態より縄文土器の可能性も考えられる。**30**は磨製石斧である。



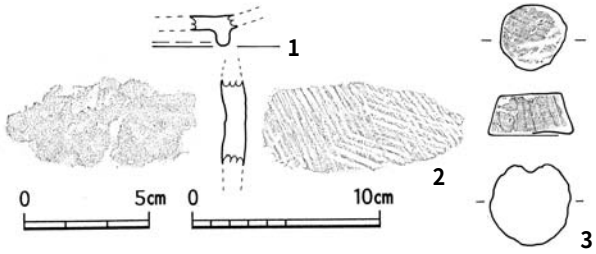
第81図　弥生時代の遺物（１～29はＳ＝１／４，30はＳ＝１／３）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	内面	外面		
1	甕	④	丘陵部	(22.6)	－	4.1	ナデ	ナデ	灰褐色	黒褐色	やや精緻 長石･石英･雲母	
2	甕	④	西斜面部	(21.4)	－	3.3	ナデ	ハケ/ナデ	橙色	黄橙色	やや精緻 長石･石英･雲母	
3	甕	④	西斜面部	(26.6)	－	4.1	ハケ/ナデ	ナデ	灰褐色	橙色	やや精緻 長石･石英	
4	甕	③	－	(14.6)	－	3.7	ハケ/ナデ	ナデ	橙色	橙色	やや精緻 長石･石英	
5	甕	④	西斜面部	－	－	7.3	調整不明	調整不明	灰黄褐色	にぶい黄橙色	精緻 長石･石英	
6	甕	④	西斜面部	－	－	1.3	調整不明	ナデ	明赤褐色	橙色	精緻 長石･石英･砂粒	丹塗り
7	甕	④	丘陵部	－	－	2.7	調整不明	調整不明	明褐色	にぶい褐色	やや精緻 長石･石英	
8	甕	④	西斜面部	－	－	3.6	ナデ	ハケ/ナデ	明褐灰色	灰白色	やや精緻 長石･石英	
9	甕	④	西斜面部	－	－	3.9	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	やや精緻 長石･石英	
10	甕	④	西斜面部	－	－	3.5	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	やや精緻 長石･石英	
11	甕	④	西斜面部	－	－	2.8	ナデ	ナデ	にぶい橙色	灰白色	やや粗雑 長石･石英･黒曜石	
12	甕	④	西斜面部	－	(7.4)	2.2	ナデ	調整不明	明赤褐色	にぶい橙色	やや精緻 長石･石英	
13	甕	④	西斜面部	－	(8.0)	2.9	ナデ	調整不明	橙色	淡橙色	やや精緻 長石･石英	
14	甕	④	丘陵部	－	(8.8)	3.8	ナデ	調整不明	明赤褐色	黒褐色	精緻 長石･石英･玄武岩	
15	壺	①	－	－	－	2.8	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや精緻 長石･石英･黒曜石	
16	壺	④	西斜面部	－	－	3.9	ハケ/ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	精緻 長石･石英･雲母･砂粒	
17	壺	④	西斜面部	－	－	4.7	ハケ/ナデ	ハケ/ナデ	橙色	橙色	やや精緻 長石･石英	
18	壺	④	西斜面部	－	－	4.9	ナデ	ナデ	橙色	橙色	やや精緻 長石･石英	
19	壺	④	丘陵部	－	－	4.0	ナデ	調整不明	橙色	にぶい橙色	やや精緻 長石･石英	
20	壺	①	－	－	－	3.7	ナデ	調整不明	明赤褐色	橙色	やや精緻 長石･石英	丹塗り
21	壺	③	－	－	－	3.8	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	やや精緻 長石･石英	
22	壺	④	西斜面部	－	－	8.1	調整不明	調整不明	明赤褐色	灰褐色	やや精緻 長石･石英･黒曜石	
23	壺	①	東部	－	－	9.0	調整不明	調整不明	明黄褐色	にぶい黄橙色	精緻 長石･石英	
24	壺	④	西斜面部	－	(6.4)	4.5	ハケ/ナデ	ハケ	橙色	明赤褐色	精緻 長石･石英･黒色粒子	
25	壺	④	丘陵部	－	－	4.5	調整不明	調整不明	黄橙色	にぶい橙色	やや精緻 長石･石英	
26	高坏	①	－	－	－	6.8	調整不明	調整不明	黄橙色	黄橙色	やや精緻 赤色粒子･長石･石英･黒曜石	
27	高坏	④	西斜面部	－	－	4.3	調整不明	調整不明	橙色	灰褐色	やや精緻 長石･石英･砂粒	
28	高坏	④	丘陵部	－	(7.8)	1.8	ナデ	ナデ	橙色	橙色	やや精緻 長石･石英	
29	不明	④	丘陵部	－	－	3.9	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい橙色	やや精緻 長石･石英	
番号	器種	調査区				材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考	
30	磨製石斧	④		西斜面部		玄武岩	4.38	6.4	1.69	69.4		

第34表　遺物観察表（弥生時代の遺物）

（4） 古墳時代・古代の遺物（第82図　第35表　図版27）

1は底部が残存する黒色土器Ｂ類の埦である。**2**は胴部が残存する須恵器の甕である。内面は不定方向にナデを施す。外面には平行タタキを施した後，一部に斜め方向にもタタキ目を施す。**3**は滑石製の紡錘車である。穿孔が施されず未製品と考えられる。



第82図　古墳時代・古代の遺物
（1はＳ＝1/3，2・3はＳ＝1/4）

番号	種類	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			調整		色調		胎土
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
1	黒色土器	埦	④	西斜面部	－	－	1.3	調整不明	調整不明	灰白色	灰白色	やや精緻 長石･石英
2	須恵器	甕	②	－	－	－	4.5	タタキ目	ナデ	褐灰色	褐灰色	精緻 長石･石英
番号	器種	器種	調査区		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(ｇ)	備考			
3	石製品	紡錘車	④	丘陵部	3.3	4.2	2.2	79.0	滑石製			

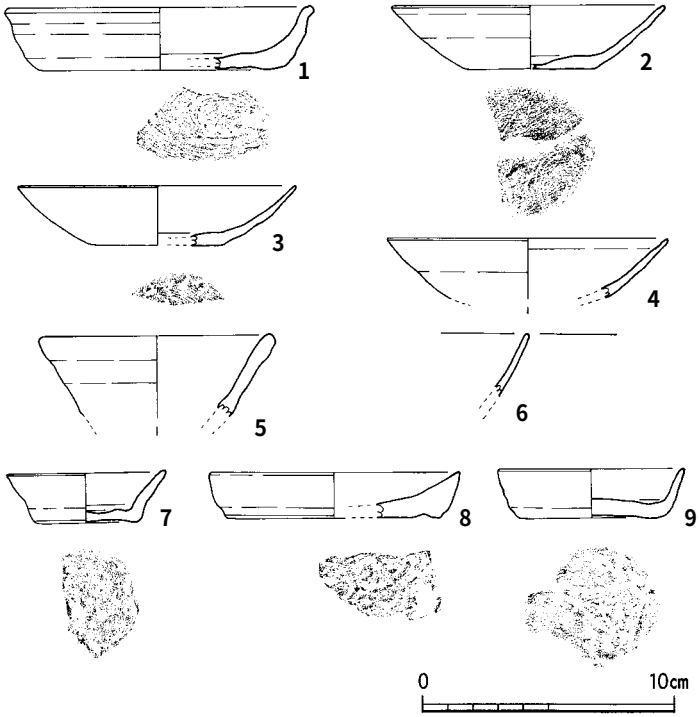
第35表　遺物観察表（古墳時代・古代の遺物）

（5） 中世の遺物（第83～97図　第36～49表　図版27～29）

・土師器①

（第83図　第36表　図版27）

１～６は坏である。１～３は底部に回転糸切を施す。**1**は口縁部が外反し，底部には面取りを行った痕跡が確認できる。**2**は立ち上がりが直線状を呈する。**3**・**4**は底部から僅かに内湾しながら立ち上がる。**5**は口縁部に厚みをもつ。**6**は内・外面が明褐灰色，胎土は黒色を呈する。**7**は小坏である。底部は回転ヘラ切を施す。８・９は小皿である。**8**は底部に回転糸切後，ナデ調整を施す。ナデ調整により底部の一部がへこむ。**9**は底部に回転糸切を施す。立ち上がりは直線状を呈する。



第83図　土師器①（Ｓ＝1/3）

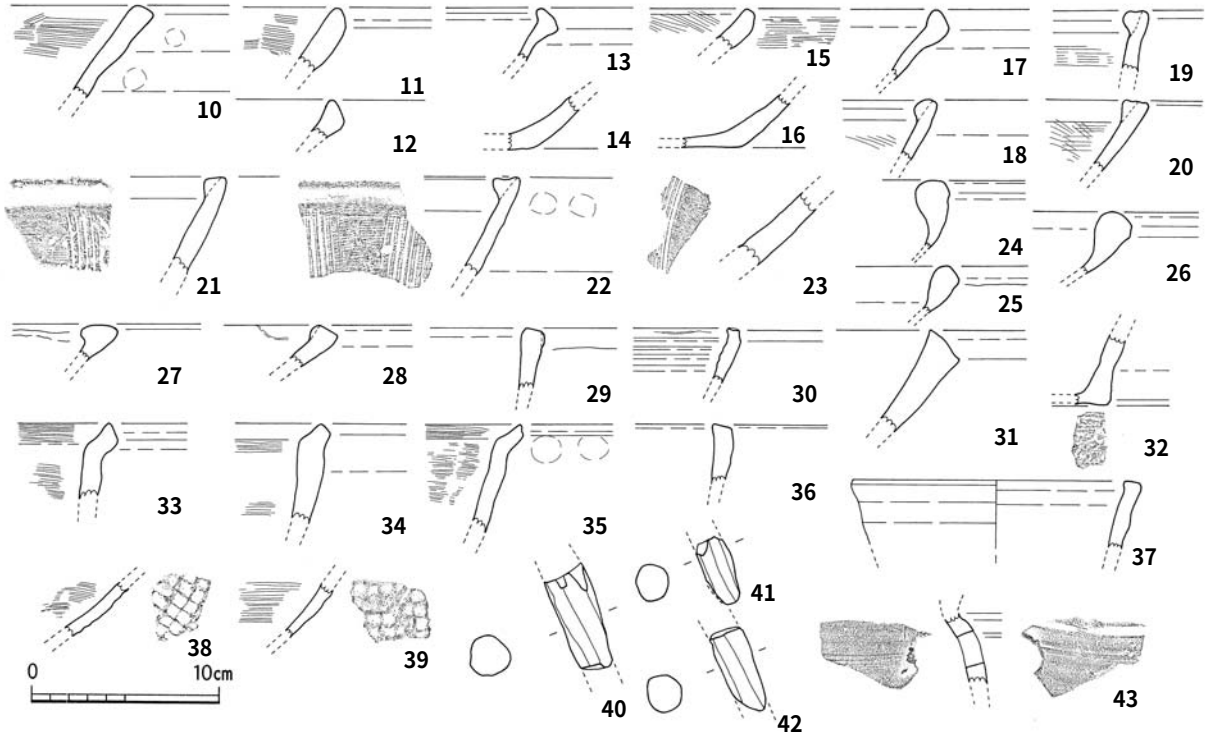
番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			調整		色調		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
1	坏	④	丘陵部	(12.0)	(9.8)	2.4	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	やや精緻 砂粒
2	坏	③	－	10.8	5.2	2.5	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	明赤褐色	明赤褐色	精緻白色粒子･黒曜石
3	坏	③	－	(11.2)	(5.0)	2.3	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	黄橙色	黄橙色	精緻 白色粒子
4	坏	③	－	(11.2)	－	2.4	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	黄橙色	精緻 白色粒子
5	坏	④	－	(9.0)	－	3.3	回転ナデ	回転ナデ	明褐色	明褐色	精緻 白色粒子
6	坏	③	－	－	－	2.5	調整不明	調整不明	明褐灰色	明褐灰色	精緻 長石･白色粒子
7	小坏	③	－	(6.2)	(4.2)	1.9	回転ナデ/回転ヘラ切	回転ナデ	明赤褐色	明赤褐色	やや精緻 長石･砂粒
8	小皿	④	－	(9.6)	(8.4)	1.8	回転ナデ/回転糸切/ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	精緻 長石
9	小皿	③	－	(7.4)	5.4	1.9	回転ナデ/回転糸切	回転ナデ	明赤褐色	明赤褐色	やや精緻 砂粒

第36表　遺物観察表（土師器①）

・土師器②・瓦質土器・備前系陶器（第84図　第37表　図版27）

10～17は捏鉢である。**10**・**11**は土師器，**12**～**14**は須恵器で東播磨系，**15**～**17**は瓦質土器である。**13**

は口縁部にオリーブ黒色の自然釉が確認できる。**17**は口縁部と体部に色調差が確認できる。18～23は擂鉢である。**18**～**22**は瓦質土器で周防系，**18**は須恵質である。**23**は備前産陶器である。擂目は**21**が６条，**22**が８条一単位で施され，**23**が５条確認できる。24～31は鉢である。**24**～**30**は土師器，**31**は備前産陶器である。**24**は口縁部と体部の境にケズリを施す。**32**は土師器の甕である。**33**～**35**は土師器の鍋である。36～42は足鍋である。**36**・**37**は土師器，**38**～**42**は瓦質土器である。**40**～**42**は脚部が残存し全面にケズリを施す。**43**は土師器の風炉である。穿穴が確認できる。



第84図　土師器②・瓦質土器・備前系陶器（Ｓ＝１／４）

番号	種類	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			調整		色調		胎土
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
10	土師器	捏鉢	③	－	－	－	5.0	ハケ/指頭圧痕	ハケ	灰白色	灰褐色	やや精緻 長石･石英
11	土師器	捏鉢	③	－	－	－	3.5	ナデ	ハケ/ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや精緻 長石･石英
12	須恵器	捏鉢	④	－	－	－	2.1	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	やや精緻 長石･石英
13	須恵器	捏鉢	④	－	－	－	2.9	ナデ	ナデ	灰色	灰色	やや精緻 長石･石英
14	須恵器	捏鉢	④	西斜面部	－	－	2.8	ナデ	ナデ	灰色	灰色	やや精緻 長石･石英
15	瓦質土器	捏鉢	④	西斜面部	－	－	2.1	ハケ/ナデ	ナデ	灰黄褐色	橙色	やや精緻 長石･石英
16	瓦質土器	捏鉢	④	－	－	－	2.8	回転ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	やや精緻 長石･石英
17	瓦質土器	捏鉢	④	西斜面部	－	－	3.8	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	やや精緻 長石
18	瓦質土器	擂鉢	③	－	－	－	3.2	ナデ	ハケ	褐灰色	褐灰色	やや精緻 長石･石英
19	瓦質土器	擂鉢	③	－	－	－	3.3	ナデ	ハケ/スリメ/ナデ	灰白色	灰白色	やや精緻 長石･石英･片岩
20	瓦質土器	擂鉢	③	－	－	－	3.8	ナデ	ハケ/ナデ	灰色	灰色	やや精緻 長石･石英
21	瓦質土器	擂鉢	③	－	－	－	5.2	ナデ	ハケ/スリメ/ナデ	灰白色	灰白色	やや精緻 長石･石英･片岩
22	瓦質土器	擂鉢	④	西斜面部	－	－	5.3	ナデ/指頭圧痕	ハケ/スリメ/ナデ	褐灰色	褐灰色	やや精緻 長石･石英
23	陶器	擂鉢	④	－	－	－	3.5	回転ナデ	回転ナデ/スリメ	灰白色	灰白色	やや精緻 白色粒子
24	土師器	鉢	③	－	－	－	3.7	ケズリ/ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	やや精緻 長石･石英
25	土師器	鉢	④	－	－	－	3.5	ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	やや精緻 長石･石英
26	土師器	鉢	③	－	－	－	3.3	ケズリ/ナデ	ナデ	にぶい橙色	浅黄橙色	やや精緻 長石･石英
27	土師器	鉢	④	－	－	－	1.9	調整不明	調整不明	黄橙色	黄橙色	やや精緻 長石･石英
28	土師器	鉢	③	－	－	－	2.2	ナデ	ナデ	橙色	黒色	やや精緻 白色粒子
29	土師器	鉢	⑥	－	－	－	3.3	ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	やや精緻 長石･石英
30	土師器	鉢	④	西斜面部	－	－	2.9	ナデ/ケズリ	回転ナデ	浅黄橙色	灰白色	精緻 砂粒
31	陶器	鉢	③	－	－	－	5.5	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色	褐灰色	やや精緻 長石･石英
32	土師器	甕	④	丘陵部	－	－	3.8	調整不明	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや精緻 長石･石英
33	土師器	鍋	④	丘陵部	－	－	4.2	ナデ/指頭圧痕	ハケ	褐色	黄褐色	やや精緻 長石･石英
34	土師器	鍋	③	－	－	－	5.4	ナデ	ハケ	褐色	浅黄橙色	やや精緻 長石･石英･片岩
35	土師器	鍋	④	西斜面部	－	－	5.9	ナデ/指頭圧痕	ハケ	褐色	黄橙色	やや精緻 長石･石英
36	土師器	足鍋	④	－	－	－	3.2	調整不明	ナデ	明赤褐色	橙色	やや精緻 長石･片岩
37	土師器	足鍋	③	－	(13.6)	－	4.6	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや精緻 長石･石英
38	瓦質土器	足鍋	④	西斜面部	－	－	2.9	格子目タタキ	ハケ	橙色	淡橙色	やや精緻 長石･石英･片岩
39	瓦質土器	足鍋	④	西斜面部	－	－	5.0	格子目タタキ	ハケ	橙色	橙色	やや精緻 長石･石英･片岩
40	瓦質土器	足鍋	④	西斜面部	－	－	5.6	ケズリ	－	褐灰色	－	やや精緻 長石･石英･片岩
41	瓦質土器	足鍋	④	西斜面部	－	－	3.6	ケズリ	－	黄橙色	－	やや精緻 長石･石英･片岩
42	瓦質土器	足鍋	④	西斜面部	－	－	4.5	ケズリ	－	灰白色	－	やや精緻 長石･石英･片岩
43	土師器	風炉	④	－	－	－	3.8	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	精緻 白色粒子

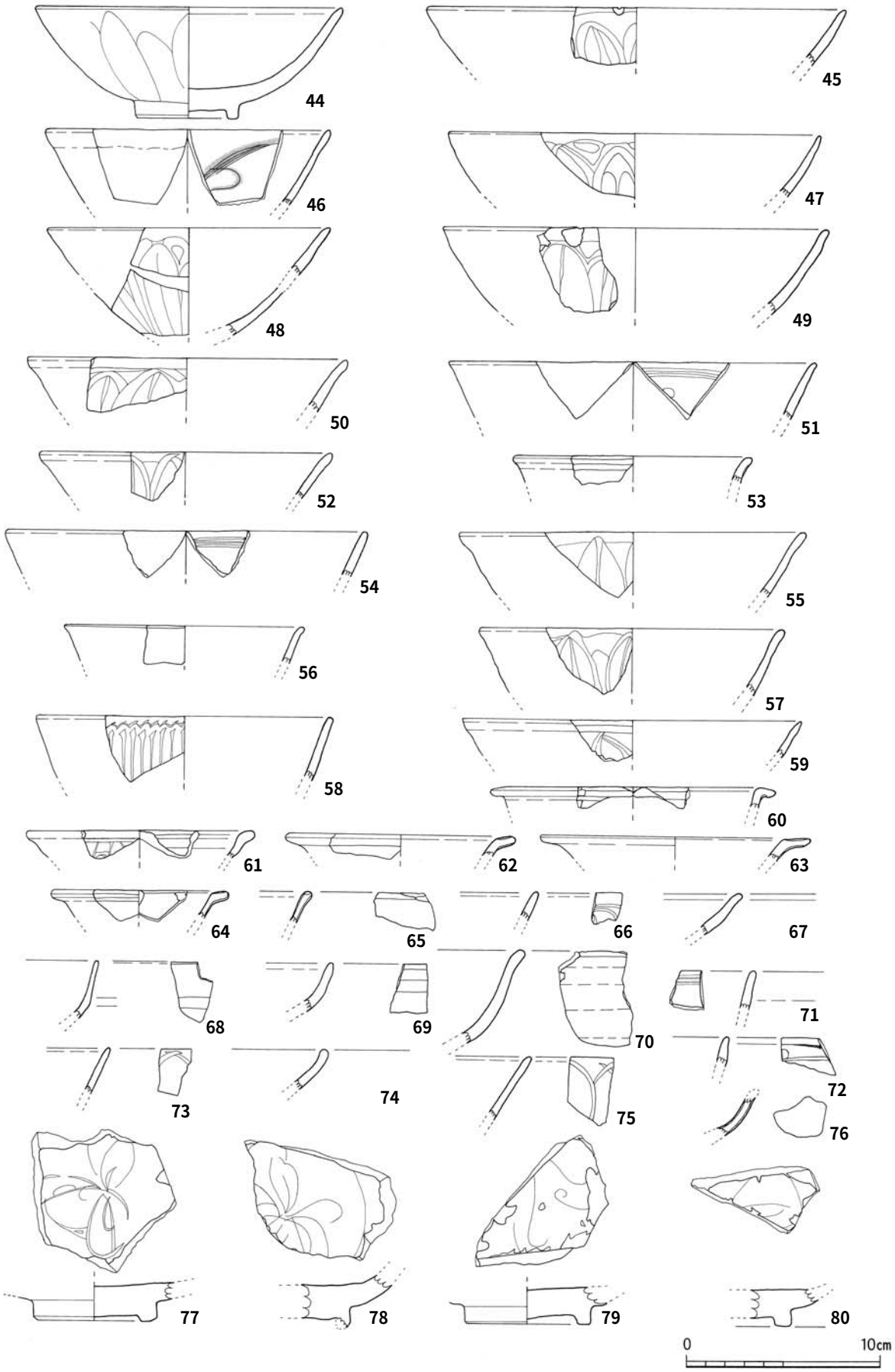
第37表　遺物観察表（土師器②・瓦質土器・備前系陶器）

・龍泉窯系青磁（第85・86図　第38表　図版27）

44～59・65～88は椀である。**44**は体部外面に片彫蓮弁文を施す。**45・47～50・52・55・57**は体部外面に鎬蓮弁文を施す。**46**は口縁部外面に厚く施釉する。体部内面に草花文を施す。**51**は口縁部外面に沈線を４条巡らし，体部には草花文を施す。**53**は口縁部から体部上半が残存し，体部上半は厚く施釉する。**54**は貫入が内・外面に確認でき，内面は３条の沈線を施す。**58**はヘラ先による細線蓮弁文を施す。**59**は口縁端部が薄く，外面に片彫蓮弁を施す。**65**は口縁部が外反し，口縁端部がやや上方へ立ち上がる。**68・69**は体部中位で屈曲し，口縁部は直口縁である。**70**は口縁部が外反する。**71**は内面に沈線を３条施す。**72**は外面に２条の沈線を施し，一部を丸く削る。**73・75**は口縁部から体部まで残存し，口縁部は直口縁を呈する。外面には広弁の蓮弁文を施す。**74**は口縁部が厚みを持ち内湾する。**77・78**は見込みに花文を施す。畳付から高台内面にかけ露胎する。**79・80**は見込みに花文を施し，畳付から高台内面にかけ露胎する。**81**は全面に施釉する。**82**は高台内面に胎土の付着が確認できる。高台内面は一部に釉がかかる。**83**は全面に施釉する。**84**は高台中心部が突出しており，高台内面は露胎する。貫入が確認できる。**85**は見込みに幾何学花文を施し，高台内面は露胎する。**86・87**は外面に蓮弁文を

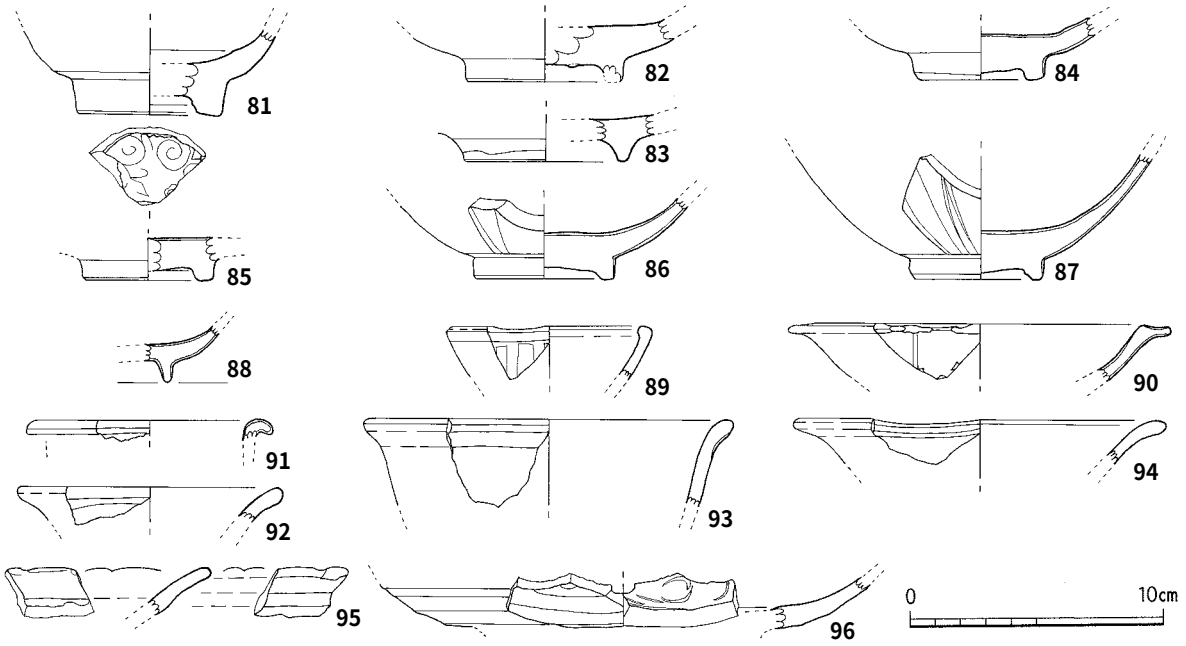
番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
44	椀	④	西斜面部	(15.8)	5.8	5.0	暗オリーブ色	暗オリーブ色	精緻	Ⅱ－ａ類
45	椀	④	－	(21.7)	－	2.9	浅黄色	灰白色	精緻	
46	椀	④	－	(14.6)	－	3.9	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻	
47	椀	④	－	(19.8)	－	3.2	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻 黒色粒子	Ⅱ－ｃ類
48	椀	④	－	(14.6)	－	5.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや精緻	
49	椀	④	－	(20.0)	－	4.4	オリーブ灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	
50	椀	③	－	(16.5)	－	2.8	オリーブ灰色	灰白色	精緻	
51	椀	③	－	(18.9)	－	3.0	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻 黒色粒子	Ｃ類
52	椀	④	－	(15.0)	－	2.3	オリーブ黄色	灰オリーブ色	精緻	
53	椀	④	－	(12.1)	－	1.2	オリーブ灰色	オリーブ灰色	やや精緻	
54	椀	④	－	(18.6)	－	2.3	オリーブ黄色	オリーブ黄色	やや精緻	Ｃ類
55	椀	④	－	(17.9)	－	3.3	オリーブ黄色	オリーブ黄色	精緻 黒色粒子	
56	椀	④	－	(12.3)	－	1.9	オリーブ褐色	黄褐色	やや精緻	
57	椀	④	－	(15.7)	－	3.4	オリーブ色	灰オリーブ色	精緻 黒色粒子	
58	椀	④	－	(15.2)	－	3.3	灰オリーブ色	灰色	精緻	Ｂ類
59	椀	④	－	(17.5)	－	1.9	浅黄色	灰白色	精緻	Ｂ類
60	坏	④	－	(13.0)	－	1.1	灰白色	灰白色	精緻	
61	坏	④	－	(11.5)	－	1.4	明緑灰色	緑灰色	精緻 黒色粒子	Ｄ類
62	坏	④	－	(11.6)	－	1.0	オリーブ灰色	オリーヴ灰色	やや精緻	Ｄ類
63	坏	④	－	(13.8)	－	1.2	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻 黒色粒子	
64	坏	④	－	(8.9)	－	1.4	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
65	椀	③	－	－	－	1.6	緑灰色	緑灰色	精緻	
66	椀	④	－	－	－	1.5	オリーブ黄色	灰オリーブ色	やや精緻	
67	椀	③	－	－	－	2.1	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
68	椀	④	－	－	－	3.0	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻	
69	椀	④	－	－	－	2.5	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
70	椀	④	－	－	－	4.9	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	やや精緻	Ⅳ類
71	椀	③	－	－	－	2.0	オリーブ黄色	灰オリーブ色	精緻	
72	椀	④	－	－	－	1.5	灰オリーブ色	オリーブ色	精緻	
73	椀	③	－	(17.5)	－	2.4	オリーブ黄色	オリーブ黄色	精緻	
74	椀	③	－	－	－	2.1	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
75	椀	③	－	－	－	3.3	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
76	椀	④	－	－	－	2.1	灰オリーブ色	暗オリーブ色	精緻	
77	椀	④	－	－	(5.8)	2.0	にぶい橙色	灰オリーブ色	精緻	Ⅰ類
78	椀	②	－	－	－	2.5	灰オリーブ色	オリーブ灰色	精緻	Ⅰ類
79	椀	②	－	－	(6.4)	1.9	灰色	オリーブ黄色	精緻	Ⅰ類
80	椀	④	－	－	－	1.9	灰オリーブ色	オリーブ灰色	精緻	
81	椀	④	－	－	(5.6)	3.5	灰オリーブ色	灰白色	精緻 白色粒子	
82	椀	③	－	－	(6.0)	3.5	緑灰色	灰オリーブ色	精緻	
83	椀	③	－	－	(6.4)	1.9	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻	
84	椀	①	東部	－	(4.7)	2.5	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻 黒色粒子	Ⅲ類
85	椀	④	－	－	(4.8)	1.7	暗オリーブ色	オリーブ色	精緻	Ⅱ－ｃ類
86	椀	③	－	－	(5.4)	2.9	灰オリーブ色	灰オリーブ色	やや精緻	
87	椀	④	－	－	(5.0)	4.9	灰オリーブ色	オリーブ黄色	精緻	Ⅳ類
88	椀	④	－	－	－	2.3	緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
89	香炉	③	－	－	(7.6)	2.5	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
90	坏	④	－	(13.0)	－	2.2	オリーブ黄色	オリーブ黄色	精緻	
91	坏	④	－	(9.0)	－	0.8	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
92	坏	④	－	(10.0)	－	1.4	明オリーブ色	明オリーブ色	精緻 黒色粒子	
93	坏	④	－	(14.4)	－	3.4	オリーブ灰色	灰白色	精緻	
94	坏	④	－	(14.5)	－	1.7	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻	
95	皿	④	－	－	－	1.9	オリーブ灰色	灰オリーブ色	精緻	
96	皿	－	－	－	－	2.0	灰オリーブ色	オリーブ黄色	やや精緻	

第38表　遺物観察表（龍泉窯系青磁）



第85図　龍泉窯系青磁①（S＝1/3）

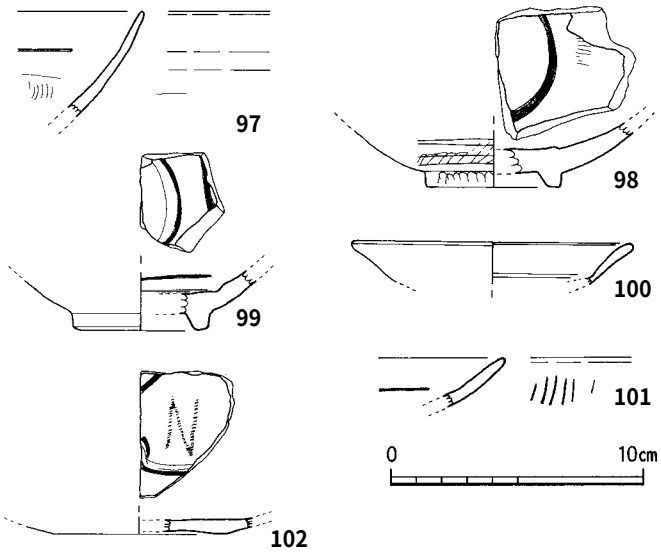
施す。釉が厚く，貫入が確認できる。**88**は高台の断面が細く，尖り気味である。全面に施釉し，畳付は露胎する。**89**は香炉である。60～64・90～94は坏である。**60**～**64**は口縁部が外反し，**64**は口縁端部がやや上方へ立ち上がる。**90**は口縁部が外反し，口縁端部はやや凹面を呈する。**91**は口縁部が大きく外反する。**92**～**94**は口縁部が外反し，釉は厚くかかる。95・96は皿である。**95**は口縁端部に輪花を有し，口縁部内面に沈線を巡らせる。**96**は見込みと体部内面の境に沈線を，体部内面には文様を施す。



第86図　龍泉窯系青磁②（S＝1/3）

・同安窯系青磁（第87図　第39表　図版27）

97～99は椀である。**97**は体部内面に沈線と櫛目文を施し，立ち上がりはやや内湾する。**98**・**99**は見込みと体部の境に段を施す。**98**は底部が厚く立ち上がりはやや内湾して開く。体部外面に櫛目文を施す。**99**は段が深く底部外面を凸状に削り残す。高台まで施釉し，畳付の釉は荒く削る。100～102は皿である。**100**は見込みに浅い段をもち，体部中位から口縁部にかけてやや外反する。**101**は体部外面に幅広の縦櫛目文を施す。畳付と高台内面は露胎する。**102**は見込みにジクザク点描文を描く。底部は上げ底を呈する。



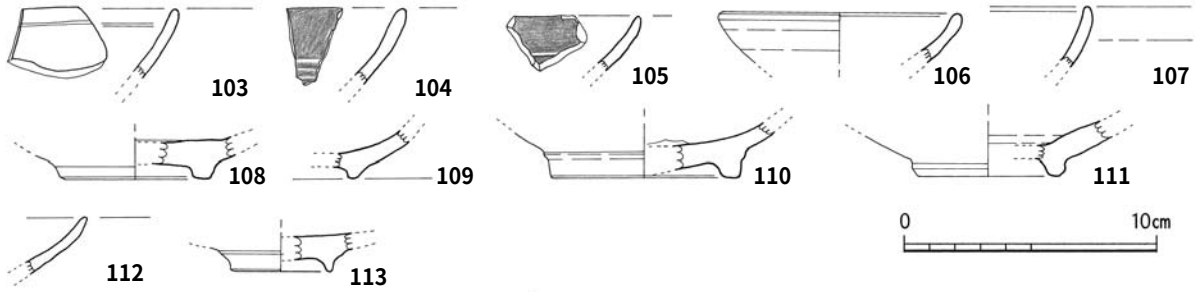
第87図　同安窯系青磁（S＝1/3）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
97	椀	④	―	―	―	4.1	灰オリーブ色	オリーブ黄色	精緻 黒色粒子	Ⅰ類
98	椀	④	―	―	(5.3)	2.6	灰オリーブ色	灰黄色	やや精緻 黒色粒子	Ⅰ類
99	椀	②	―	―	(4.6)	2.4	オリーブ灰色	オリーブ灰色	やや精緻 白色粒子	Ⅰ類
100	皿	④	―	(11.0)	―	1.6	灰色	灰色	精緻 黒色粒子	Ⅰ類
101	皿	③	―	―	―	1.9	にぶい黄色	オリーブ黄色	精緻 白色粒子	Ⅰ類
102	皿	④	―	―	(6.8)	0.6	灰オリーブ色	灰オリーブ色	やや精緻 黒色粒子	Ⅰ類

第39表　遺物観察表（同安窯系青磁）

・**高麗青磁（第88図　第40表　図版28）**

103～113は椀である。**103**は体部内面に沈線を施す。**104**・**105**は体部内面に象嵌で圏線を巡らせる。**106**は口縁端部に丸みをもつ。**107**は体部外面に白化粧土がかかる。**108**は全面に貫入が確認できる。**109**は畳付に砂が付着する。**110**は見込みに胎土目跡が残る。**111**は内・外面に白化粧土を施し，見込みに段を有する。**112**は口縁部がやや上方に立ち上がる。**113**は畳付が露胎する。



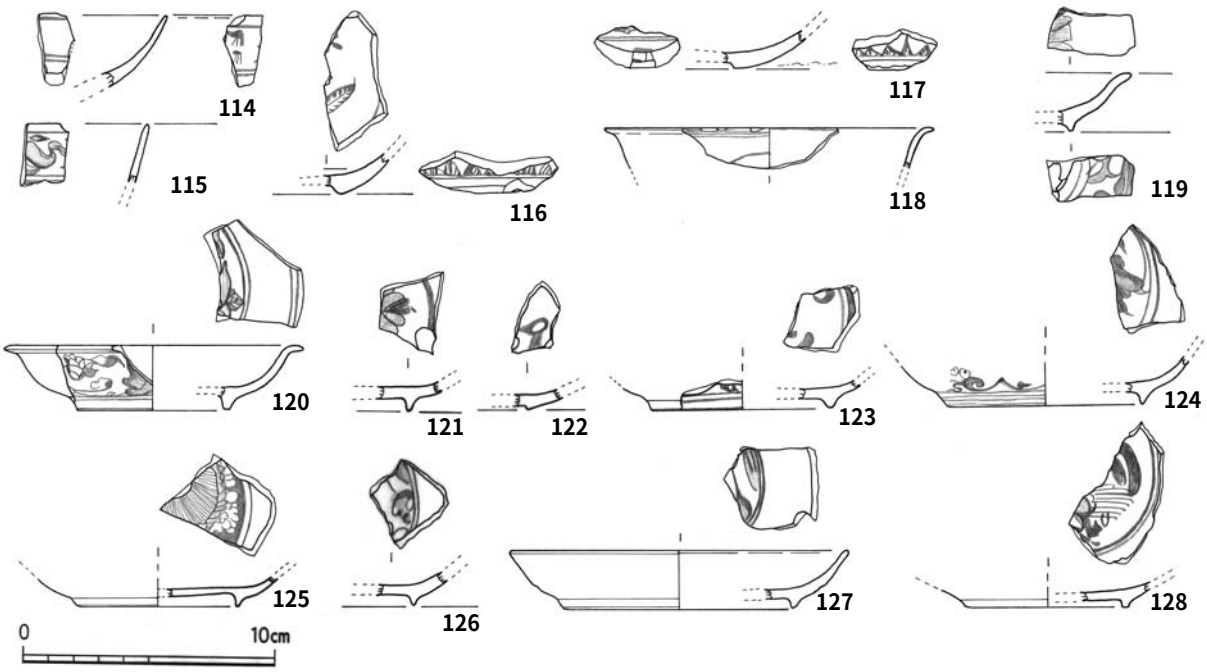
第88図　高麗青磁（S＝1/3）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面	
103	椀	④	―	―	―	2.8	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻
104	椀	④	―	―	―	3.0	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻
105	椀	④	―	―	―	2.2	緑灰色	緑灰色	精緻
106	椀	②	―	(9.4)	―	2.0	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻
107	椀	④	―	―	―	2.4	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻
108	椀	③	―	―	(5.8)	1.5	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻　白色粒子
109	椀	④	―	―	―	1.9	灰オリーブ色	オリーブ灰色	精緻
110	椀	⑤	―	―	(7.4)	2.1	黄褐色	黄褐色	やや精緻
111	椀	③	―	―	(5.6)	2.1	にぶい黄橙色	オリーブ灰色	精緻
112	椀	TP１	―	―	―	2.2	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻
113	椀	④	―	―	(4.0)	1.5	オリーブ灰色	灰オリーブ色	精緻

第40表　遺物観察表（高麗青磁）

・**景徳鎮窯系青花（第89図　第41表　図版28）**

114・115は碗である。**114**は体部外面に梵字文を施文する。口縁部内面に一重圏線，体部と見込みの境に二重圏線を巡らせる。**115**は口縁部から体部にかけ直線的な器形で，体部内面に施文する。116



第89図　景徳鎮窯系青花（S＝1/3）

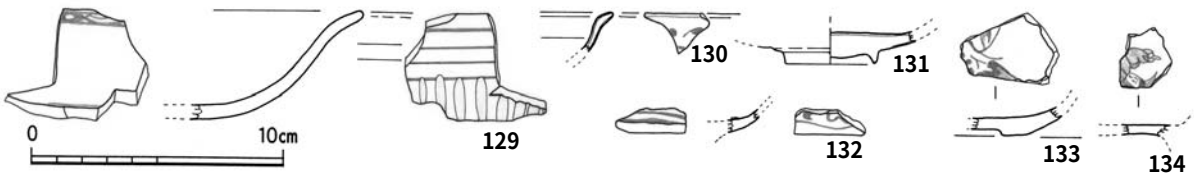
～128は皿である。**116**は見込みに草花文，体部外面には芭蕉葉紋を施す。**117**は体部内面と見込みに施文し，体部外面には芭蕉葉文を描く。底部は碁笥底を呈する。**118**は口縁部が大きく外反し，内・外面ともに施文する。**119**は口縁部が外反する。見込みに花文，体部外面に唐草文を施す。**120**は口縁部が外反し，体部外面には唐草文，見込みは草花文を施す。**121**は見込みに花文，体部外面にも僅かに文様が確認できる。**122**は見込みに施文し，碁笥底が認められる。**123**は見込みと体部外面に施文する。**124**は見込みに草花文，体部外面に唐草文を施す。**125**は見込みに花文を施文する。**126**は見込みに玉取獅子が僅かに確認できる。**127**・**128**は畳付に砂が付着する。

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
114	碗	④	―	―	―	2.8	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻 黒色粒子	
115	碗	④	―	―	―	2.3	灰白色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
116	皿	⑤	―	―	―	1.6	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	C類
117	皿	②	―	―	―	1.6	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	C類
118	皿	⑤	―	(12.8)	―	1.6	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	B類
119	皿	①	―	―	―	2.3	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	B類
120	皿	④	―	(11.6)	(6.0)	2.5	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
121	皿	③	―	―	―	1.2	明緑灰色	明緑灰色	やや精緻 黒色粒子	
122	皿	④	―	―	―	0.8	明緑灰色	灰白色	やや精緻 黒色粒子	
123	皿	④	―	―	(7.0)	1.1	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻 黒色粒子	
124	皿	④	―	―	(7.6)	1.9	明青灰色	明青灰色	精緻 黒色粒子	
125	皿	③	―	―	(6.4)	1.1	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
126	皿	③	―	―	―	1.3	明緑灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	
127	皿	③	―	(13.3)	(9.0)	2.3	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
128	皿	④	―	―	(6.4)	1.0	明緑灰色	明青灰色	精緻 黒色粒子	

第41表　遺物観察表（景徳鎮窯系青花）

・福建省産青花（第90図　第42表　図版28）

129～131は碗である。**129**は口縁部が外反する。口縁部内面に渦巻帯文を施し，見込みにも圏線を巡らせる。体部外面中位に沈線を１条巡らせ，体部中位から体部下位に縦状の沈線を施す。**130**は口縁部が外反し，釉が厚くかかる。外面に施文する。**131**は見込みと体部外面に圏線を巡らせる。体部下半から高台にかけ露胎する。132～134は皿である。**132**は見込みに砂目跡が確認でき，二重圏線を巡らせる。外面にも施文する。**133**は見込みに施文し，底部は碁笥底が認められる。**134**は見込みに人物を施文する。



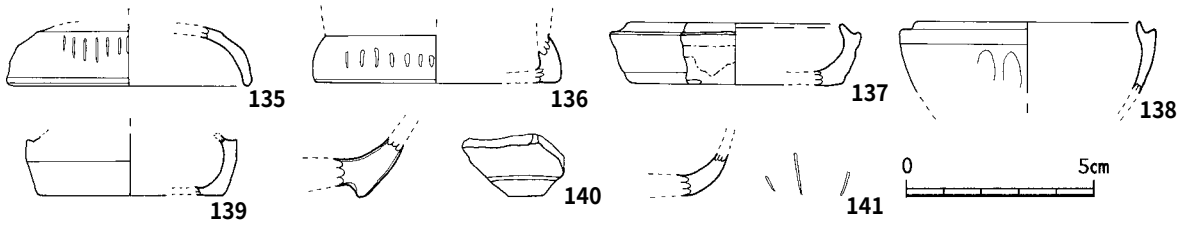
第90図　福建省産青花（S＝1/3）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面	
129	碗	④	―	―	―	4.2	明オリーブ色	明オリーブ色	精緻 黒色粒子
130	碗	④	―	―	―	1.6	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻 黒色粒子
131	碗	①	―	―	3.5	1.3	浅黄色	明オリーブ灰色	やや精緻
132	皿	④	―	―	―	1.0	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻
133	皿	④	―	―	―	1.2	灰白色	灰白色	やや精緻
134	皿	④	―	―	―	0.5	灰白色	浅黄色	精緻 黒色粒子

第42表　遺物観察表（福建省産青花）

・青白磁（第91図　第43表　図版28）

135～141は合子である。**135**は蓋である。型押しによる陽刻文様を施す。136～141は身である。**136**は外面に縦方向の沈線を施す。**137**は体部外面下位まで施釉する。**138**は外面に型押しによる陽刻文様を施す。**139**は体部外面下位まで施釉する。**140**は体部外面に沈線を巡らせる。釉は厚くかかる。**141**は体部外面に縦状の沈線を施す。



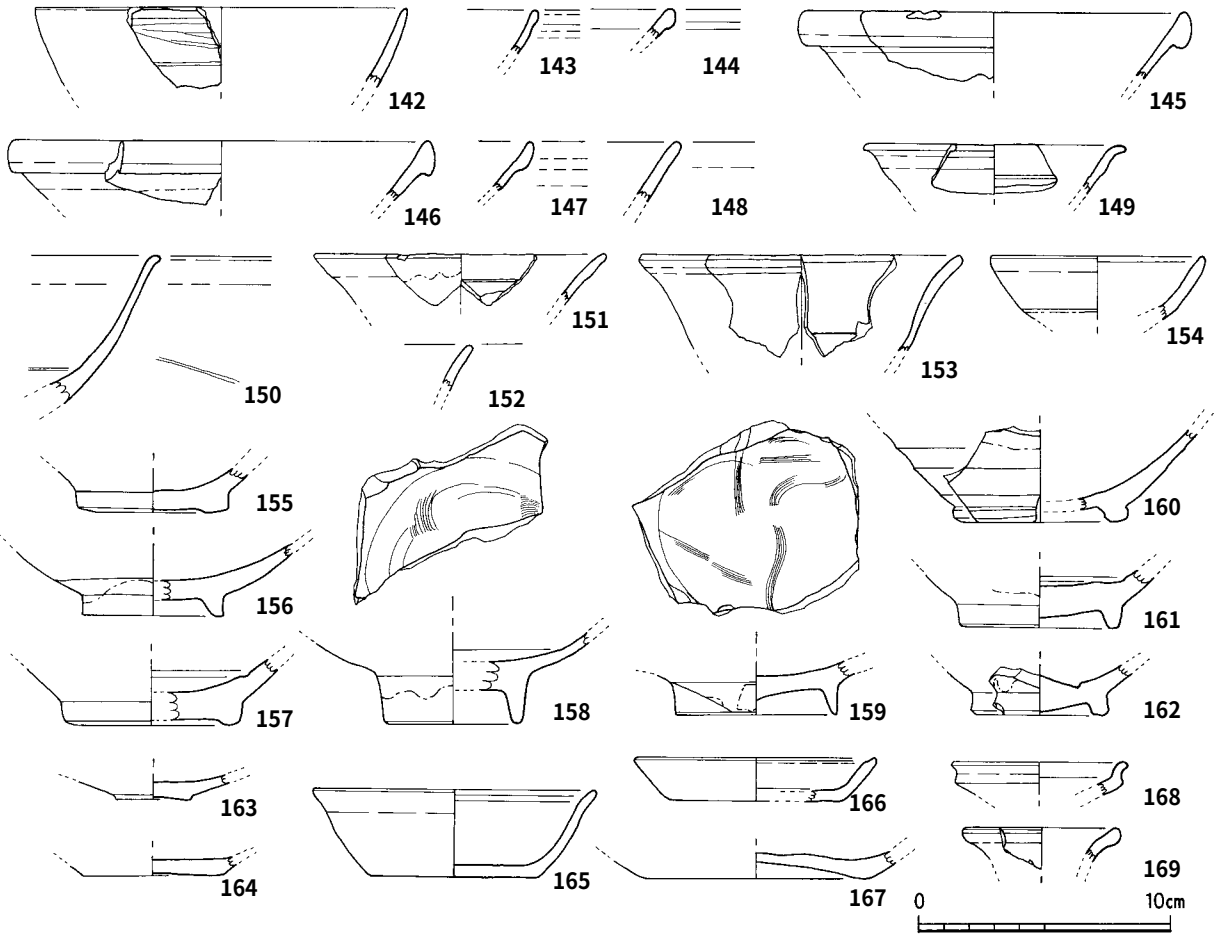
第91図　青白磁（S＝1/2）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面	
135	合子	③④	―	(6.2)	―	1.5	灰白色	灰白色	精緻
136	合子	③	―	―	―	1.3	灰白色	灰白色	精緻
137	合子	③	―	5.7	(5.4)	1.6	灰白色	灰白色	精緻
138	合子	④	―	(5.9)	―	1.9	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子
139	合子	④	―	―	(4.8)	1.6	灰白色/橙色	灰白色	精緻
140	合子	④	―	―	―	1.6	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子
141	合子	④	―	―	―	1.1	灰白色	灰白色	精緻

第43表　遺物観察表（青白磁）

・白磁（第92図　第44表　図版28）

142～163は椀である。**142**は口縁部から体部上位にかけ刷毛目が確認できる。**143**は小さな玉縁口縁をもつ。**144**は玉縁口縁で露胎する。**145**～**147**は厚い玉縁口縁をもつ。**148**は直口縁で内面に貫入が確認できる。**149**は口縁部が外反し，体部内面に沈線を施す。**150**は体部と見込みの境に段を有し，口縁部は外反する。体部外面に沈線を施す。**151**は体部内面に沈線を施す。口縁部に釉が厚くかかる。**152**



第92図　白磁（S＝1/3）

は直口縁を呈し，口縁部の釉が一部剥ぎ取られる。**153**は口縁部に厚みがあり，口禿げを呈する。体部内面には沈線を施す。**154**は口縁部が口禿げを呈する。体部外面下位は露胎する。**155**は高台内面の削りが浅く，高台に厚みをもつ。外面は露胎する。**156**は内・外面に貫入が確認でき，体部外面下位から底部にかけ露胎する。**157**は高台内面の削りが浅く，高台に厚みをもつ。見込みと体部の境に沈線を施す。**158・159**は高台の断面が薄く高さがある。見込みに櫛目文を施す。**160・161**は見込みに釉剥ぎを施す。**162**は見込みと体部の境に段を有する。**163**は内面に施釉し，外面は露胎する。164～167は皿である。**164・165**は底部が平底を呈する。**165**は口縁部が口禿げを呈し，全面に施釉する。**166**は口縁部が口禿げを呈する。底部は平底を呈する。**167**は底部が上げ底を呈し，外面は露胎する。168・169は瓶である。**168**は口縁端部を摘み上げる。**169**は口縁部が外反し厚みをもつ。

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
142	椀	④	―	(14.8)	―	3.1	灰白色	灰白色	精緻	
143	椀	④	―	―	―	1.8	灰白色	灰白色	精緻	
144	椀	④	―	―	―	1.1	灰白色	灰白色	精緻	
145	椀	④	―	(15.1)	―	2.6	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	Ⅳ類
146	椀	④	―	(16.5)	―	2.3	灰白色	灰白色	精緻	Ⅳ類
147	椀	④	―	―	―	1.9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	精緻	Ⅳ類
148	椀	②	―	―	―	2.3	灰白色	灰オリーブ色	精緻	
149	椀	④	―	(10.0)	―	1.9	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
150	椀	④	―	―	―	5.8	灰白色	灰色	精緻 黒色粒子	Ⅷ類
151	椀	③	―	(11.5)	―	2.0	灰白色	灰白色	やや精緻 黒色粒子	Ⅷ類
152	椀	④	―	―	―	1.8	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻 黒色粒子	
153	椀	④	―	(12.6)	―	3.8	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
154	椀	④	―	(8.4)	―	2.5	灰白色	灰白色	精緻	Ⅸ類
155	椀	④	―	―	(3.0)	1.8	灰白色	灰白色	精緻	Ⅳ類
156	椀	②	―	―	(5.6)	2.9	灰白色	灰白色	精緻	
157	椀	③	―	―	(6.4)	2.6	灰白色	灰白色	精緻	Ⅳ類
158	椀	④	―	―	(5.2)	3.6	灰白色	灰白色	精緻	Ⅵ類
159	椀	④	―	―	(6.4)	2.1	灰白色	灰白色	精緻	Ⅵ類
160	椀	③	―	―	(6.0)	3.6	浅黄色	灰白色	やや精緻	
161	椀	②	―	―	(6.2)	2.3	灰白色	灰白色	精緻	
162	椀	④	―	―	(5.2)	2.0	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
163	椀	④	―	―	(5.0)	1.0	灰白色	浅黄色	精緻	
164	皿	④	―	―	(5.6)	0.7	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
165	皿	②	―	―	(6.6)	3.4	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
166	皿	④	―	(9.4)	―	1.7	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	Ⅸ類
167	皿	④	―	―	(9.0)	1.1	明オリーブ色	にぶい褐色	精緻 白色粒子	Ⅸ類
168	瓶	④	―	(6.8)	―	1.3	灰白色	灰白色	精緻	
169	瓶	②	―	(6.0)	―	1.2	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻 黒色粒子	

第44表　遺物観察表（白磁）

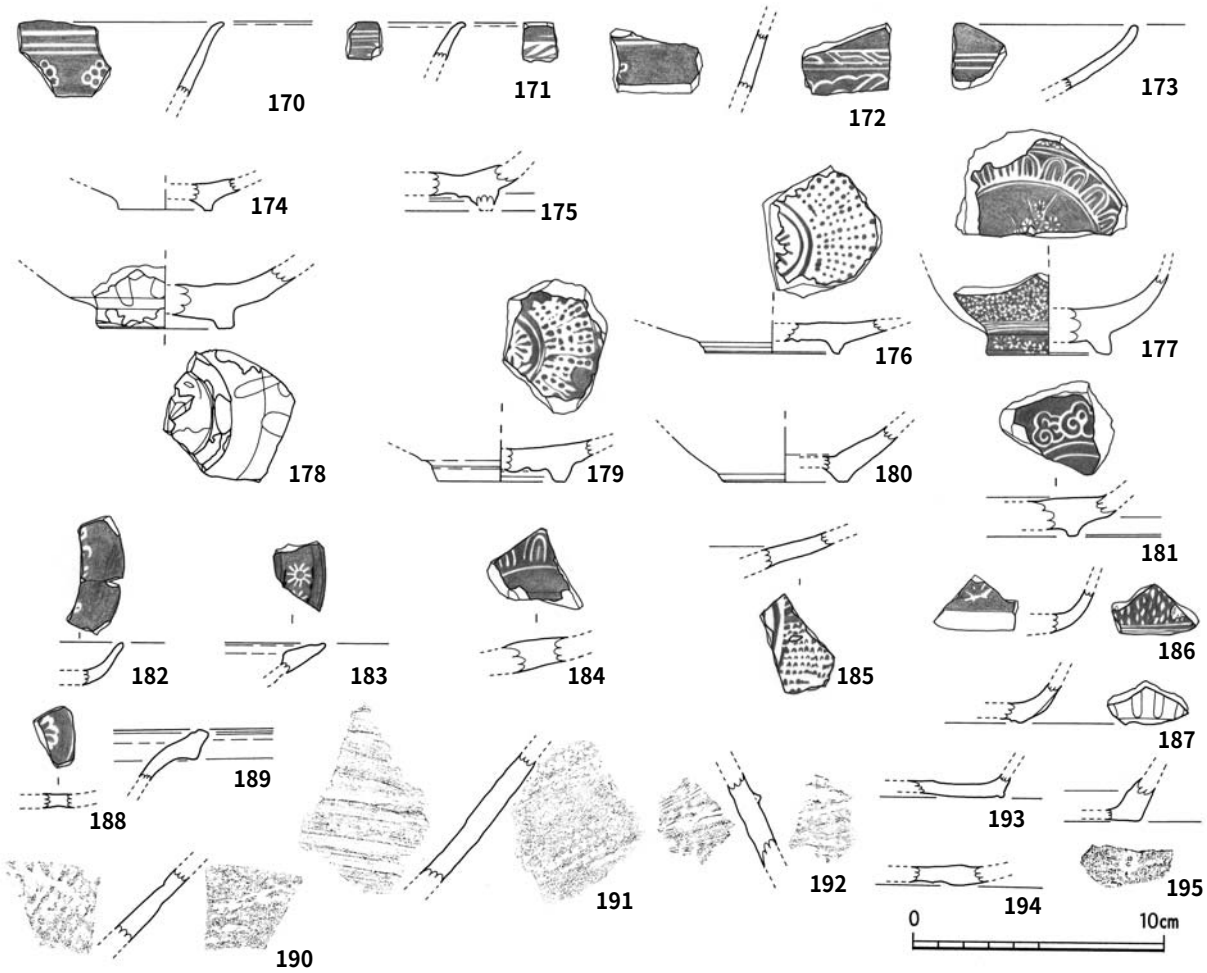
・高麗陶磁器（第93図　第45表　図版28）

170～181は椀である。**170・171**は口縁部が外反する。**171・172**は内・外面に象嵌を施す。**173**は体部内面に象嵌で三重圏線を施す。**174**は見込みに胎土目跡が確認できる。**175**は見込みに砂目跡が確認できる。**176・179**は見込みに菊花文，周囲は蓮珠文を象嵌で施す。**177**は見込みに蓮弁文と草花文を，内・外面には密に菊文を象嵌で施す。**178**は外面に縦状の沈線を施す。**180**は見込みと体部の境に沈線を施し，外面は露胎する。**181**は見込みに如意頭文を象嵌で施す。182～186は皿である。**182**は口縁部が直口縁を呈し，見込みに象嵌を施す。**183**は黒白象嵌を施す。**184**は体部外面に蓮弁文を象嵌で施す。**185**は外面に蓮珠文を象嵌で施す。**186**は内・外面に象嵌を施す。**187**は合子である。**188**は蓋である。菊花文を象嵌で施す。189～195は高麗陶器の壺である。**189**は口縁部が残存し，回転ナデを施す。**190・191**は外面にナデ消し後格子目タタキを施す。**193～195**は底部が残存する。

・朝鮮王朝陶器（第94図　第46表　図版28）

196～207は碗である。**196**は内面に蓮弁文を象嵌で施す。**197**は体部内面に花文を象嵌で施す。底部の形が六角形ないし八角形である。**198**は口縁部に二重圏線を象嵌で施す。**199**は口縁部が直口縁を呈し，端部がやや尖る。**200**は体部内面に黒白象嵌を施し，体部外面に二重圏線を象嵌で表す。体部は

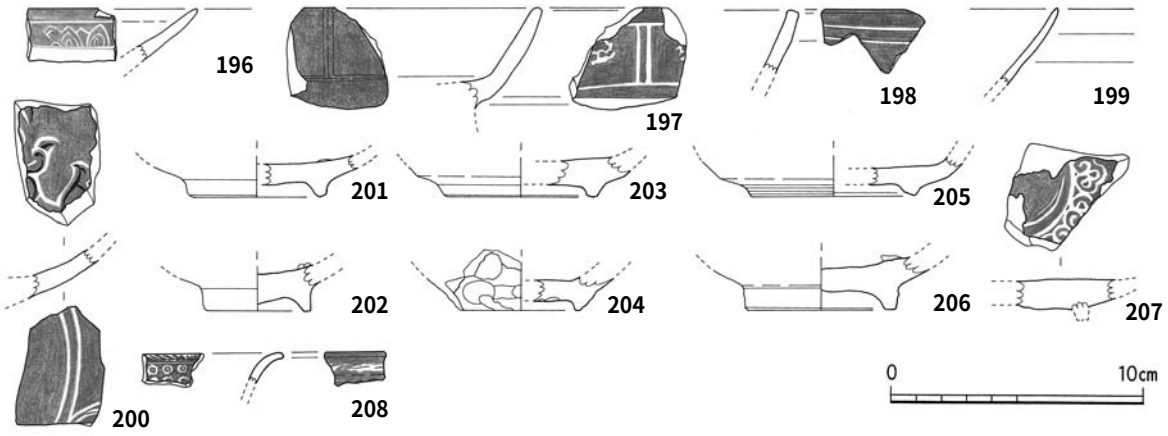
やや内湾する。**201**・**202**は見込みに砂目跡が確認できる。**203**～**205**は底部が残存し，全面に施釉する。**206**は白土による胎土目跡が確認できる。**207**は見込みに二重圏線と如意頭文を象嵌で施す。**208**は杯である。口縁部は外反し，体部内面には菊文帯を巡らせる。　　（松田菜津子　福永祐馬）



第93図　高麗陶磁器（S＝1/3）

番号	器種	調査区		法量(cm)( )は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
170	椀	③	—	—	—	3.0	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻	
171	椀	④	—	—	—	1.5	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻	
172	椀	③	—	—	—	2.5	灰色	灰オリーブ色	精緻	
173	椀	④	—	—	—	2.6	にぶい黄色	オリーブ黄色	精緻	
174	椀	④	—	—	(3.8)	1.2	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻 白色粒子	
175	椀	④	—	—	—	1.6	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子・白色粒子	
176	椀	⑥	—	—	(5.4)	1.3	灰オリーブ色	灰白色	精緻	
177	椀	③	—	—	(5.0)	3.2	灰色	灰オリーブ色	精緻 白色粒子	
178	椀	④	—	—	(5.6)	2.5	黄褐色	黄褐色	精緻 白色粒子	
179	椀	④	—	—	(5.2)	1.7	灰色	灰白色	精緻 白色粒子	
180	椀	③	—	—	(5.0)	2.2	灰白色	明オリーブ灰色	精緻	
181	椀	TP３	—	—	—	1.6	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
182	皿	④	—	—	—	1.6	黒褐色	黒褐色	精緻	
183	皿	④	—	—	—	1.1	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
184	皿	④	—	—	—	1.4	灰オリーブ色	オリーブ黄色	精緻	
185	皿	④	—	—	—	1.4	灰白色	にぶい黄橙色	精緻 白色粒子	
186	皿	④	—	—	—	1.7	灰白色	灰オリーブ色	精緻	
187	合子	④	—	—	—	1.6	灰オリーブ色	オリーブ灰色	精緻	
188	蓋	④	—	—	—	0.5	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻	
番号	器種	調査区		法量(cm)( )は復元径			調整		色調	胎土
				口径	底径	器高	外面	内面	内面　外面	
189	壺	⑥	—	—	—	2.1	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色　緑灰色	やや精緻
190	壺	②	—	—	—	3.0	格子目タタキ	格子目タタキ	灰色　にぶい黄褐色	やや精緻
191	壺	④	—	—	—	5.2	格子目タタキ/回転ナデ	回転ナデ	青灰色　青灰色	やや精緻 白色粒子
192	壺	④	—	—	—	3.7	格子目タタキ/回転ナデ	回転ナデ	青灰色　青灰色	やや精緻 白色粒子
193	壺	②	—	—	(3.4)	0.9	回転ナデ	回転ナデ/タタキ	灰色　灰黄色	やや精緻
194	壺	④	—	—	—	0.7	回転ナデ	回転ナデ	灰色　灰黄色	やや精緻 黒色粒子・白色粒子
195	壺	④	—	—	—	1.7	調整不明	回転ナデ	暗オリーブ色　暗緑灰色	やや精緻

第45表　遺物観察表（高麗陶磁器）



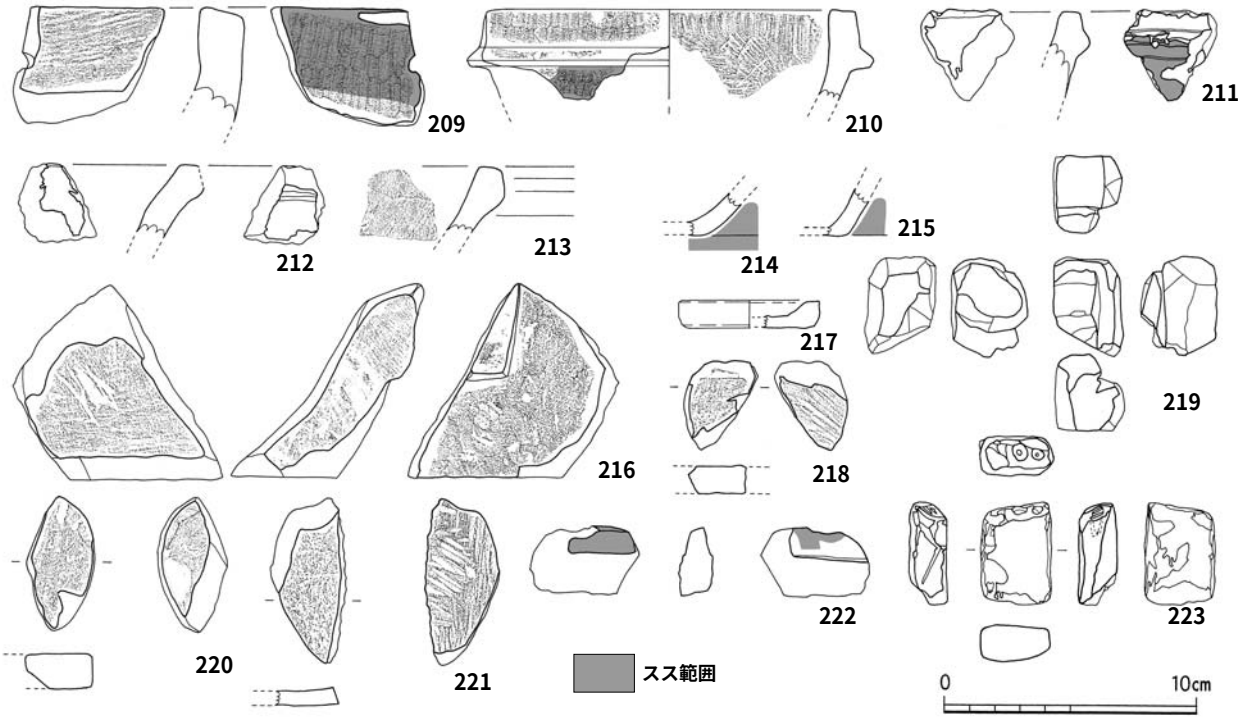
第94図　朝鮮王朝陶器（S＝1/3）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			胎土		胎土
				口径	底径	器高	外面	内面	
196	碗	②	―	―	―	2.1	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻
197	碗	③	―	―	―	4.0	オリーブ灰色	暗オリーブ色	精緻 白色粒子
198	碗	④	―	―	―	2.5	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻
199	碗	④	―	―	―	3.0	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻 白色粒子
200	碗	②	―	―	―	2.0	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻
201	碗	④	―	―	5.0	1.6	淡黄色	淡黄色	精緻
202	碗	④	―	―	(4.2)	1.8	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子
203	碗	④	―	―	(6.0)	1.6	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻
204	碗	④	―	―	(4.8)	1.3	灰白色	浅黄色	精緻
205	碗	④	―	―	(6.4)	1.6	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻 白色粒子
206	碗	④	―	―	5.8	1.6	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻 長石
207	碗	③	―	―	―	1.0	灰オリーブ色	灰色	精緻
208	杯	―	―	―	―	1.2	灰白色	灰オリーブ色	精緻

第46表　遺物観察表（朝鮮王朝陶器）

・滑石製石鍋，滑石製石鍋二次加工品（第95図　第47表　図版29）

209は外面に縦位，内面に斜位のノミ痕を施す。体部には円形の穿孔を施す。**210**は縦位のノミ痕を施し，外面はススの付着が確認できる。**211**～**213**は口縁部から体部上半まで残存する鍔付型の石鍋で



第95図　滑石製石鍋・滑石製石鍋二次加工品（S＝1/3）

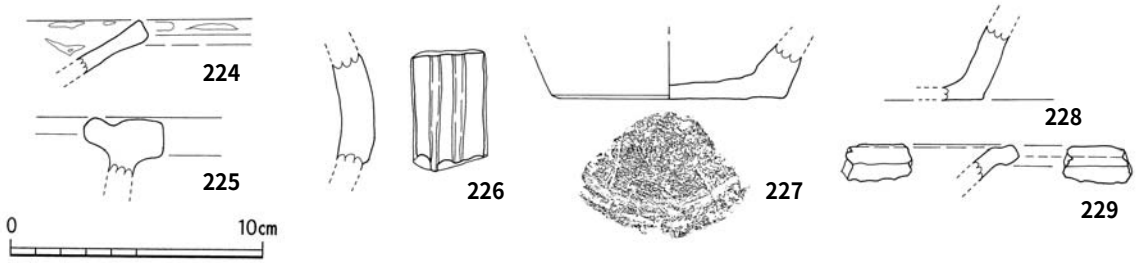
ある。**211**は鍔から体部上半までススの付着が確認できる。**214**・**215**は底部が残存する。外面はススの付着が確認できる。**216**～**223**は二次加工品である。**216**は縦耳型の石鍋の器壁に，横位にノミによる調整を施す。**217**はノミ状工具を用いて内底を削り，外底は平底に形成し，容器への転用が考えられる。**218**は上下面にノミによる調整を施す。**219**は縦耳型の石鍋の把手部で，石鍋の内面と両側面にノミによる調整を施す。把手部は上面から，三角形の切り込みをノミによって施す。**220**・**221**は上下面，一側面にノミによる調整を施す。**221**は断面の形状より，皿への転用が考えられる。**222**は鍔付型の石鍋の二次加工品で，口唇部と外面はススの付着が確認できる。二次加工は体部中位と，口縁部内面に認められる。**223**は石鍋の体部を用いたと考えられ，内外面，両側面，上面に二次加工を施す。また，上面の２箇所に円形の穿孔の痕跡が認められる。（江上正高）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			把手部	調整		ススス	
				口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面
209	石鍋	④	丘陵部	―	―	6.1	縦耳型	ノミ痕	ノミ痕	○	―
210	石鍋	④	西斜面部	(17.0)	―	4.8	鍔付型	ノミ痕/使用擦過	ノミ痕	○	―
211	石鍋	③	―	―	―	4.6	鍔付型	―	使用擦過	○	―
212	石鍋	②	―	―	―	3.8	不明	使用擦過	―	○	―
213	石鍋	④	西斜面部	―	―	3.4	鍔付型	使用擦過	ノミ痕	―	―
214	石鍋	④	丘陵部	―	―	2.3	不明	―	使用擦過	○	―
215	石鍋	④	丘陵部	―	―	3.4	不明	使用擦過	使用擦過	○	―
番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			重さ(g)	調整		ススス	
				口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面
217	二次加工品	②	―	(7.4)	(7.0)	1.45	15.9	ノミ痕	ノミ痕	○	―
番号	器種	調査区		法量				備考			
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)				
216	二次加工品	④	丘陵部	10.3	8.5	3.8	614.0				
218	二次加工品	④	丘陵部	4.7	3.5	1.5	27.4				
219	二次加工品	④	西斜面部	5.0	3.5	4.1	107.0	バレン状石製品の未製品か。			
220	二次加工品	④	西斜面部	7.1	3.6	1.8	74.1				
221	二次加工品	④	丘陵部	8.8	5.0	9.0	48.8	石皿か。			
222	二次加工品	④	丘陵部	3.7	5.6	1.8	52.0	鍔付型			
223	二次加工品	③	―	5.4	3.7	2.5	69.5				

第47表　遺物観察表（滑石製石鍋・滑石製石鍋二次加工品）

・その他の陶器・貿易陶磁器（第96図　第48表）

224は産地不明の壺の口縁部である。口縁部外面と口縁部内面から体部内面上位にかけ白土が僅かに確認できる。**225**は甕の口縁部で全面に施釉する。口縁端部は二又に分かれる。**226**は陶器の把手で全面に施釉する。外面に沈線を２条施す。**227**は壺の底部である。平底を呈し，内・外面共に回転ナデを施す。**228**は産地不明の底部である。全面ににぶい黄色の釉を施す。**229**は瀬戸美濃産の折縁皿である。



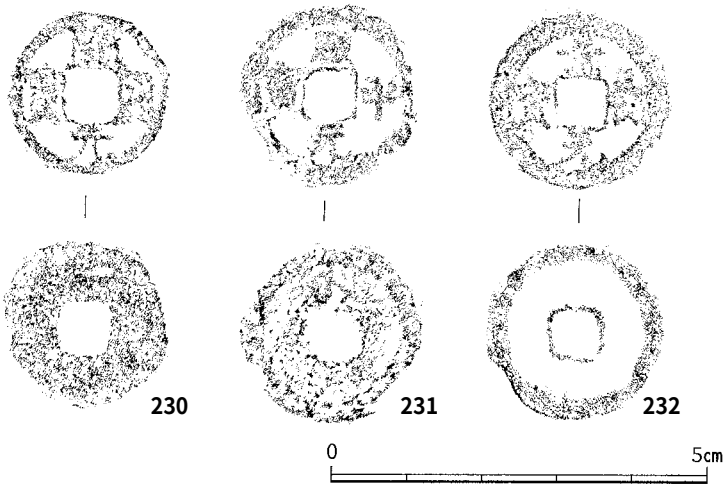
第96図　その他の陶器・貿易陶磁器（Ｓ＝１/３）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
224	陶器壺	④	西斜面部	―	―	2.1	黄橙色	黄橙色	やや精緻 白色粒子	産地不明施釉陶器
225	陶器甕	④	西斜面部	―	―	2.3	灰色	灰色	やや精緻 白色粒子	産地不明施釉陶器
226	陶器把手	⑥	―	―	―	4.8	灰褐色	灰褐色	やや精緻 白色粒子	
227	壺	④	―	―	―	2.2	黄橙色	黄橙色	やや精緻	
228	不明	④	―	―	―	3.0	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻	越州窯系青磁か。
229	陶器皿	④	―	―	―	1.5	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻	瀬戸美濃産の折縁皿

第48表　遺物観察表（その他の陶器・貿易陶磁器）

・銭貨（第97図　第49表）

銭貨は29点出土し，渡来銭は３点確認できた。**230**は唐銭の開元通寶である。621年に初鋳される。**231**は北宋銭の咸平元寶である。998年に初鋳される。**232**は北宋銭の景徳元寶である。1004年に初鋳される。



第97図　銭貨（S＝1/1）

番号	種別	調査地区		最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)
230	開元通寶	④	－	21.0	－	1.0	2.24
231	咸平元寶	⑤	丘陵部	24.0	－	1.0	1.70
232	景徳元寶	⑤	－	24.0	－	1.0	3.45

第49表　遺物観察表（銭貨）

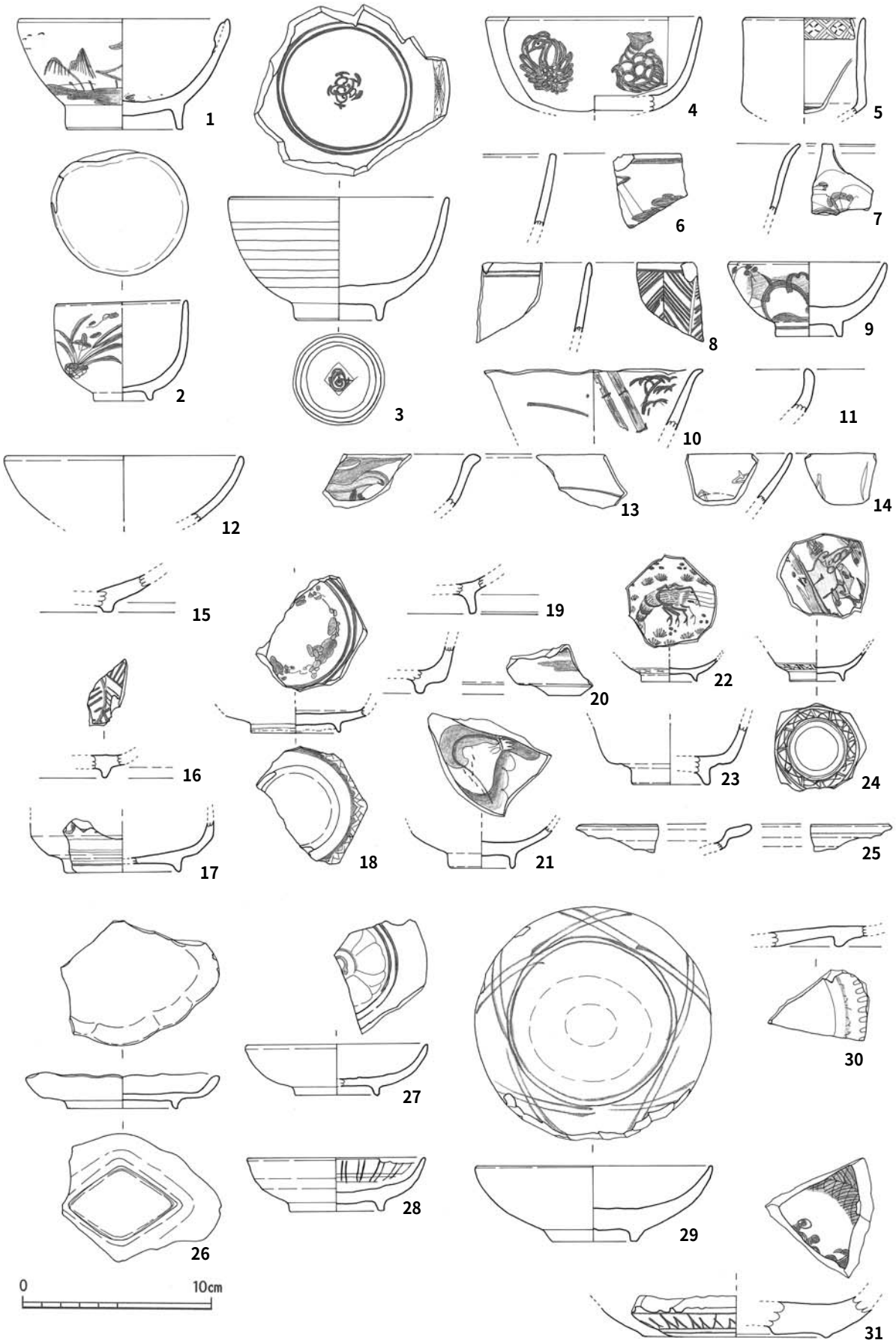
（６） 近世の遺物（第98～104図　第50～54表　図版29）

・国産磁器（第98・99図　第50表）

１～24は碗である。**1**は口縁部内面に融着痕が確認でき，見込みには砂目跡が認められる。**2**は直口縁を呈し，口縁部から体部にかけ凹みが確認できる。**3**は見込みに五弁花文のコンニャク印判を，高台内面に崩れた渦福銘を施す。**4**は口縁部が直口縁を呈し，外面に鶴と亀を施文する。**5**は筒形碗で外面に鉄釉を施す。**6**は口縁端部が角状を呈し，口禿げを施す。**7**は薄手の端反碗である。**10**は口縁部が，**11**は断面が厚く内湾する。貫入が確認できる。**12**は灰黄色の釉がかかり，貫入が確認できる。**16**は見込みに檜垣文を色絵で施す。**18**は筒形碗で見込みに三方梅枝文，体部外面に蓮弁文を施す。**23**は畳付に砂の付着が確認できる。25～35は皿である。**26**は型打成形の木瓜皿である。**27**は見込みに花文を色絵で施し，釉剥ぎを施す。**28**・**29**は見込みに蛇ノ目釉剥ぎと砂の付着が認められる。**30**は高台内面に籾殻の付着が確認できる。**31**～**33**は蛇ノ目凹高台が確認できる。**34**は底部が碁笥底を呈する。36～38は紅皿である。**36**・**37**は貝殻状に型押し成形する。**38**は蛸唐草文を型押し成形で表す。**39**は仏飯具である。高台内面の削りが浅く露胎する。40～45は瓶である。**42**は角瓶である。**45**は底部が広い仏花瓶である。**46**は白磁の人形である。**47**は火入である。**48**は香炉である。口縁部に厚みをもつ。**49**～**51**は蓋である。**52**～**54**は戸車である。**55**～**57**はハマである。**58**はチャツである。

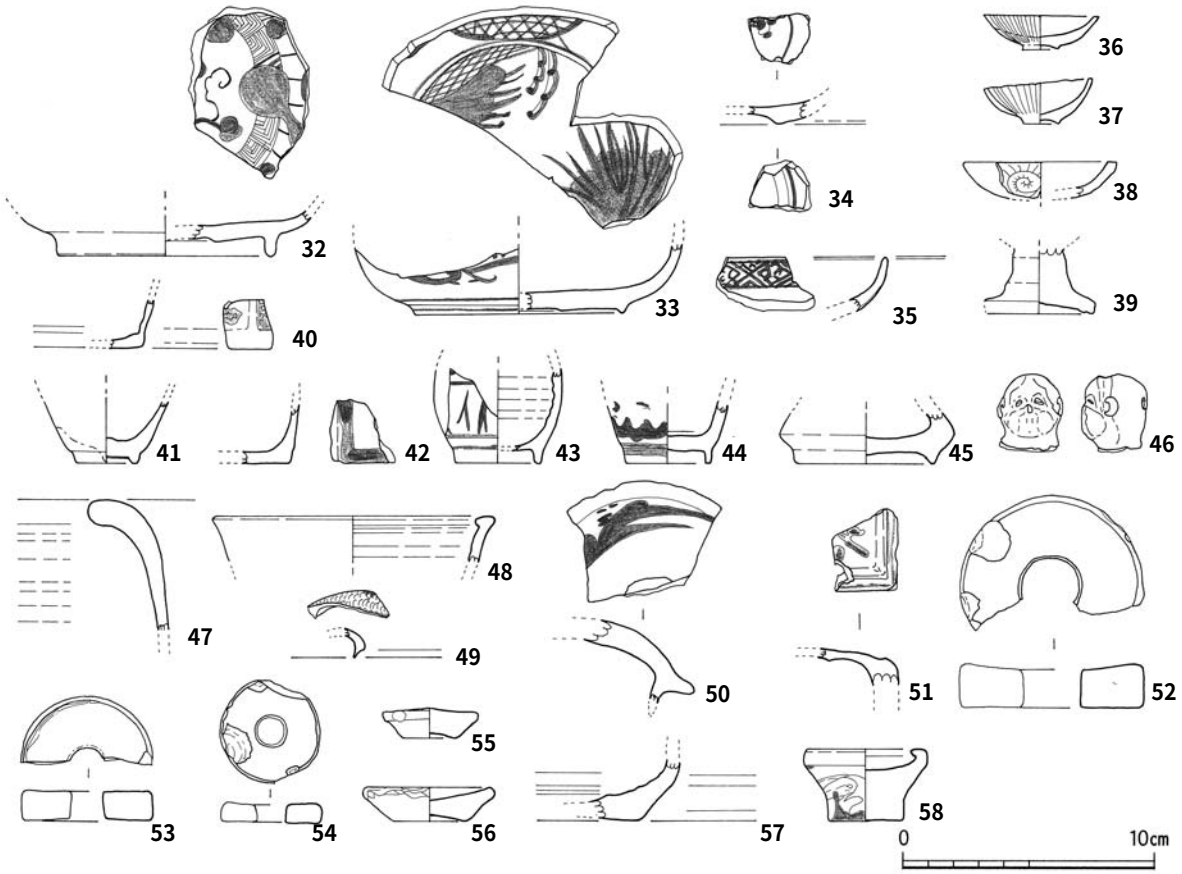
・国産陶器・瓦・墓石（第100・101図　第51・52表　図版29）

59～87は碗である。**59**は見込みに胎土目跡が確認でき，高台は兜巾状を呈する。**60**は内・外面にナデ調整を施す。**62**はやや内湾しながら立ち上がり，口縁部は直口縁を呈する。**63**は内面に白化粧土による刷毛目文を施す。**64**は内・外面に白化粧土による施文が確認できる。**65**～**68**は口縁部が直口縁を呈し，断面は薄い。**69**は内・外面に鉄釉を施したあと，藁灰釉を施す。**73**は畳付に幅があり，外面は露胎する。**74**は見込みに胎土目跡が確認できる。高台内面は削り取り，中央部が突出する。**75**は見込みに象嵌を施し，胎土目跡が確認できる。高台内面まで施釉する。**76**は高台内面に砂の付着が確認で

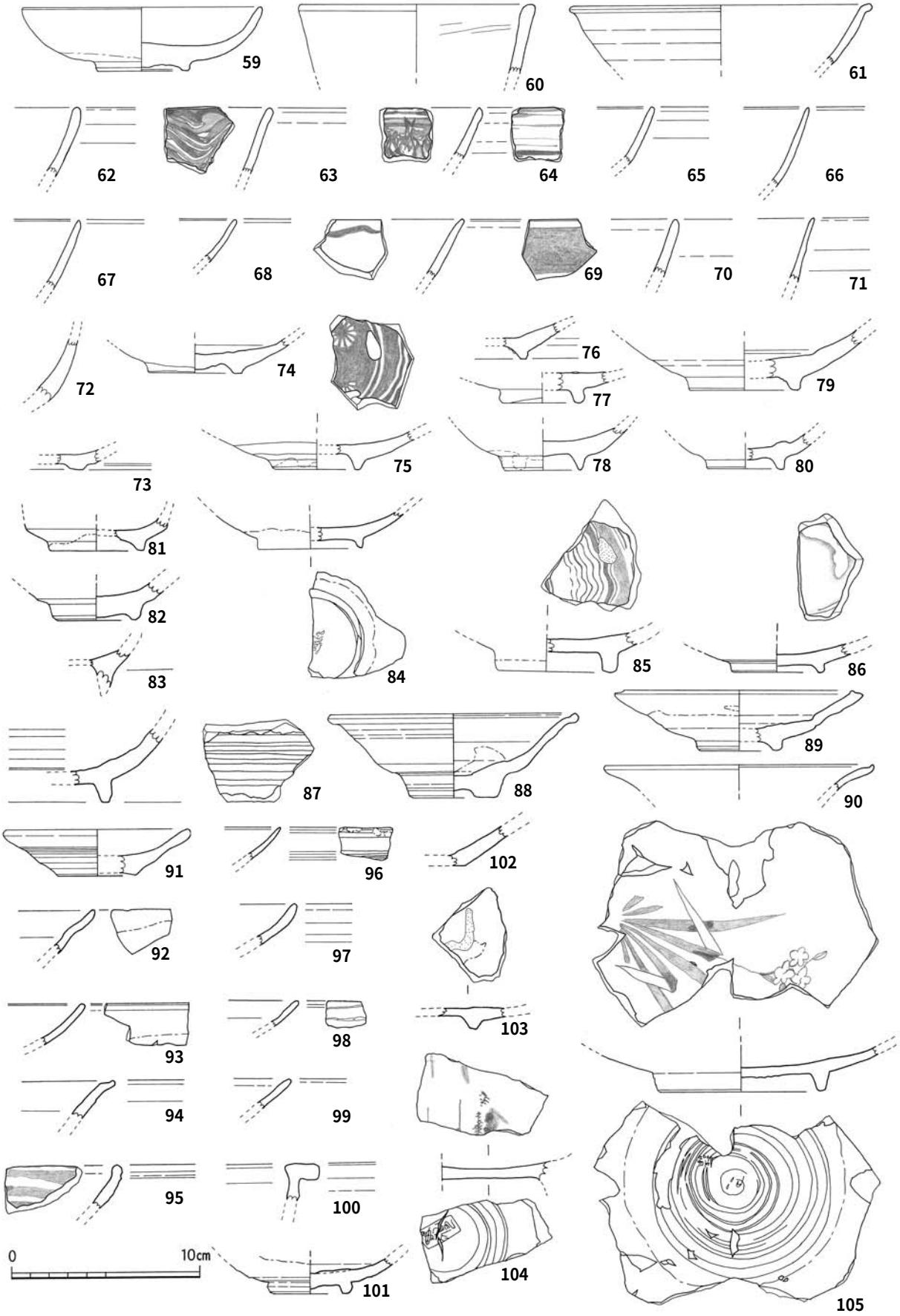


第98図　国産磁器①（S＝1/3）

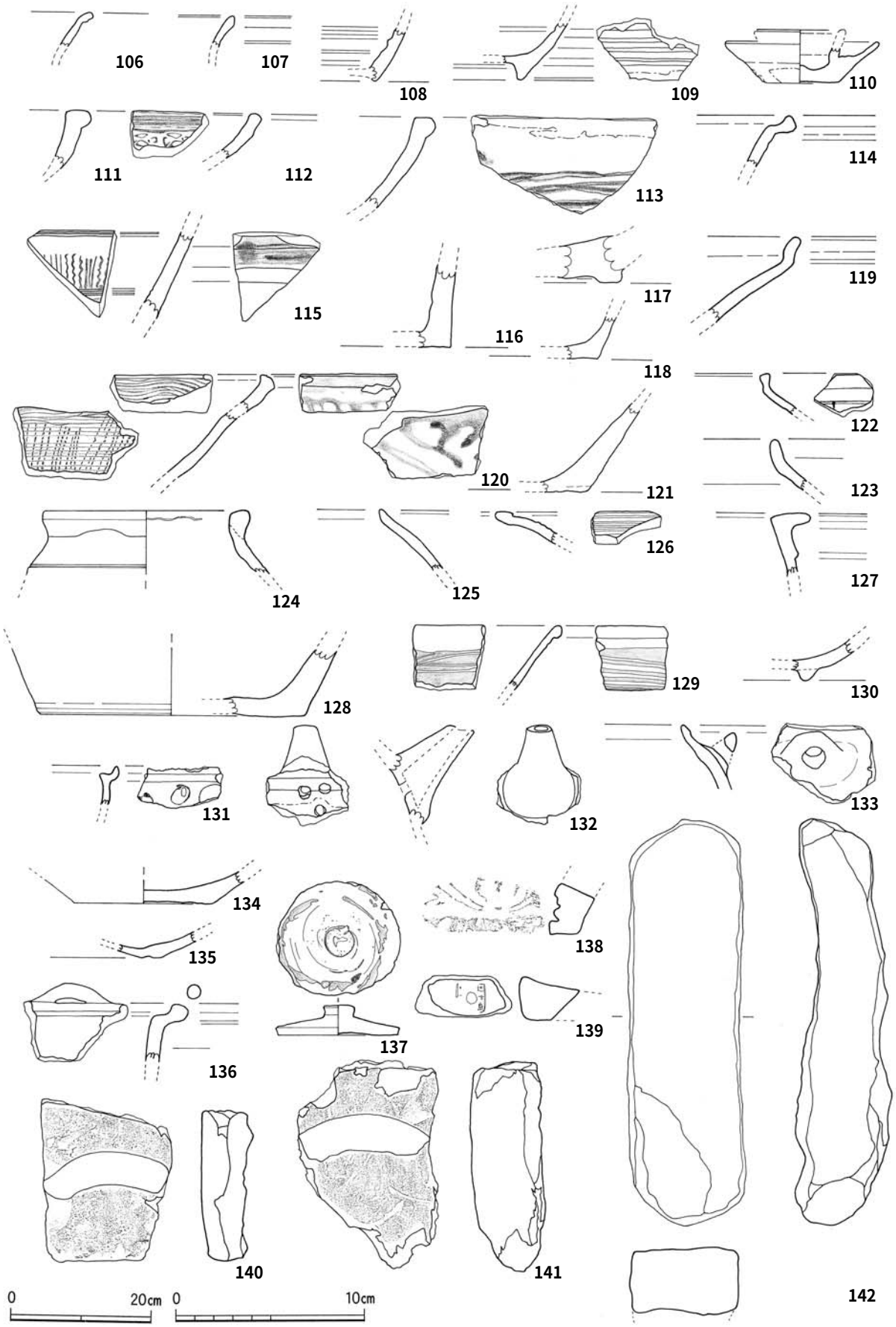
きる。外面に沈線を３条巡らせる。**77**は見込みに砂目跡が確認でき，畳付に砂の付着が認められる。**78**は内面と体部下位にかけ鉄釉を施す。畳付の幅は狭く，高台の断面は薄い。**79**は見込みと体部の境に段を有する。見込みの釉が一部剥ぎ取られる。重ね積みの跡と考えられる。高台内面に砂の付着が認められる。**81**は体部下位から屈曲し立ち上がる。高台内面は露胎する。**85**は白土で施文し，見込みに砂目跡が確認できる。88～105は皿である。**88**は口縁部が外反し，見込みに砂目跡が確認できる。体部外面下位まで施釉する。**92**は体部上位で「く」の字形に屈曲する。**95**はやや内湾気味に開き，体部外面中位まで施釉する。**101**は高台が兜巾高台を呈する。見込みに砂目跡が確認でき，畳付に砂が付着する。106～109は瓶である。**106・107**は口縁部，**108・109**は底部である。**110**は受皿のつく灯火皿である。111～118は鉢である。**111・113**は口縁部が玉縁状を呈する。外面は白化粧土による刷毛目を施す。**114**は口縁部が「く」の字状を呈する。119～121は擂鉢である。**120**は口縁端部に内側への突出が見られる。口縁部内面には波状の櫛目が施される。**121**は８条一単位の擂目をもち，底部は平底を呈する。122～126は壺である。**124**は同心円文の当て具痕が僅かに確認できる。127・128は甕である。**127**は①・③・④区で出土し接合した。口縁部は外反し，体部外面には段を有する。**128**は口縁部上面に貝目が認められる。**129**は火入である。**130**は香炉である。外面は露胎である。**131**は水指である。外面に施文する。**132**～**135**は土瓶である。**136**は土鍋である。口縁部から「く」の字に屈曲し，把手がつく。**137**は蓋である。138～141は瓦である。**138**は唐草文を有する軒平瓦である。**139**は軒平瓦で文字銘が入るが明確でないため解読できない。**140・141**は丸瓦である。**142**は墓石で現代の石垣に転用される。表面に文字が彫られているが，風化により明確でないため解読できない。



第99図　国産磁器②（Ｓ＝１/３）



第100図　国産陶器・瓦・墓石①（S＝1/3）



第101図　国産陶器・瓦・墓石②（106～141はＳ＝１／３，142はＳ＝１／８）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
1	碗	③	―	(11.0)	(6.0)	5.9	明オリーブ色	灰白色	精緻 黒色粒子	
2	碗	③	―	7.3	3.1	5.3	灰白色	明緑灰色	精緻	
3	碗	③	―	(11.4)	(4.4)	6.4	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	Ⅳ期
4	碗	③	―	(11.1)	―	5.0	灰白色	灰白色	精緻	Ⅳ期
5	碗	④	―	(6.2)	―	5.1	にぶい赤褐色	灰白色	精緻	鉄釉
6	碗	④	―	―	―	3.9	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
7	碗	④	―	―	―	3.7	青灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	Ⅴ期
8	碗	④	―	―	―	3.7	明青灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
9	碗	④	―	8.1	3.5	3.9	灰白色	灰白色	精緻	小碗
10	碗	④	―	(11.5)	―	3.2	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
11	碗	④	―	―	―	2.3	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精緻	
12	碗	④	―	(12.3)	―	3.4	灰黄色	灰黄色	精緻	
13	碗	③	―	―	―	2.8	灰白色	明緑灰色	精緻	
14	碗	③	―	―	―	2.7	灰白色	灰白色	精緻	
15	碗	④	―	―	―	2.0	淡黄色	灰白色	やや精緻	
16	碗	④	―	―	―	1.2	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	色絵
17	碗	④	―	―	(6.0)	2.7	明緑灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	
18	碗	④	―	―	(4.6)	1.4	灰白色	灰白色	やや精緻	Ⅳ期　筒形碗
19	碗	④	―	―	―	2.0	淡黄色	淡黄色	やや精緻	
20	碗	④	―	―	―	2.5	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
21	碗	③	―	―	3.2	2.2	灰白色	灰白色	精緻	
22	碗	②	―	―	(2.9)	1.2	灰白色	灰白色	やや精緻	小碗
23	碗	①	―	―	(3.8)	3.2	明緑灰色	明オリーブ灰色	精緻	
24	碗	④	―	―	2.9	1.6	灰白色	灰白色	精緻	小碗
25	皿	③	―	―	―	1.3	灰白色	明緑灰色	やや精緻	
26	皿	④	―	(10.0)	(5.8)	1.7	淡黄色	浅黄色	精緻 黒色粒子	木瓜形
27	皿	⑤	―	(9.4)	(4.3)	2.7	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	小皿　Ⅳ期
28	皿	③	―	(9.3)	(4.8)	2.8	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	小皿　Ⅳ期
29	皿	③	―	12.3	4.4	4.0	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	五寸皿　Ⅴ期
30	皿	④	―	―	―	1.1	明緑灰色	灰色	精緻 黒色粒子	Ⅱ期
31	皿	④	―	―	(9.5)	2.2	灰白色	明緑灰色	精緻	
32	皿	④	―	―	(8.3)	1.8	灰白色	灰白色	精緻	
33	皿	③	―	―	(8.2)	2.7	灰白色	灰白色	精緻	Ⅴ期
34	皿	④	―	―	―	0.9	灰白色	明緑灰色	精緻	
35	皿	④	―	―	―	2.1	明緑灰色	明緑灰色	精緻	
36	紅皿	③	―	(4.6)	1.4	1.4	灰白色	灰白色	精緻	
37	紅皿	③	―	(4.3)	1.4	1.8	明緑灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	
38	紅皿	③	―	(6.0)	―	1.4	灰白色	灰白色	精緻	1850年～
39	仏飯器	③	―	―	4.2	2.6	灰白色	―	精緻	Ⅳ期
40	瓶	④	―	―	―	1.9	明緑灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	
41	瓶	④	―	―	(2.4)	2.4	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	
42	瓶	TP５	―	―	―	2.3	灰白色	灰白色	精緻	角瓶
43	瓶	①	―	―	(3.4)	3.7	灰白色	灰白色	精緻	Ⅴ期
44	瓶	④	―	―	(3.3)	2.5	明緑灰色	明緑灰色	精緻	
45	瓶	③	―	―	(5.4)	2.0	明緑灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	仏花瓶
46	人形	④	―	―	―	3.1	灰白色	―	精緻	
47	火入	③	―	―	―	5.1	明緑灰色	明緑灰色	精緻	
48	香炉	④	―	(10.8)	―	1.8	明オリーブ灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	
49	蓋	⑥	―	―	―	1.2	明青灰色	灰白色	精緻 黒色粒子	
50	蓋	④	―	―	―	3.3	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻	
51	蓋	⑥	―	―	―	1.4	明緑灰色	明緑灰色	精緻 黒色粒子	
52	窯道具	⑥	―	―	―	1.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	精緻 黒色粒子	戸車
53	窯道具	④	―	―	―	1.2	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	戸車
54	窯道具	⑥	―	―	―	0.8	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	戸車
55	窯道具	⑤	―	―	―	0.9	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	ハマ
56	窯道具	⑥	―	―	―	1.4	灰白色	浅黄色	やや精緻 黒色粒子	ハマ
57	窯道具	④	―	―	―	2.4	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	ハマ
58	窯道具	④	―	―	―	2.8	灰白色	灰白色	精緻 黒色粒子	チャツ

第50表　遺物観察表（国産磁器）

番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
59	碗	④	―	(12.6)	(5.0)	3.4	灰黄色	オリーブ褐色	精緻 白色粒子	Ⅰ－２期
60	碗	③	―	(12.4)	―	3.7	にぶい黄橙色	浅黄色	精緻	
61	碗	④	―	(16.0)	―	2.2	黄灰色	黄灰色	精緻	
62	碗	④	―	―	―	3.7	オリーブ黄色	オリーブ黄色	精緻	Ⅲ期
63	碗	④	―	―	―	3.5	褐灰色	灰黄褐色	精緻 白色粒子	Ⅲ期
64	碗	④	―	―	―	2.7	にぶい黄褐色	にぶい黄色	精緻	Ⅲ期
65	碗	③	―	―	―	3.0	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻	Ⅳ期
66	碗	④	―	―	―	4.2	灰白色	灰黄色	精緻	Ⅳ期
67	碗	③	―	―	―	3.8	淡黄色	浅黄色	精緻	Ⅳ期
68	碗	③	―	―	―	2.3	浅黄色	灰白色	精緻	Ⅳ期
69	碗	④	―	―	―	3.2	黒褐色	黒褐色	精緻	
70	碗	④	―	―	―	3.1	灰白色	灰オリーブ色	精緻	
71	碗	④	―	―	―	3.4	浅黄色	浅黄色	精緻	
72	碗	③	―	―	―	3.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	精緻	
73	碗	④	―	―	―	1.1	浅黄色	灰白色	精緻 白色粒子	Ⅰ－１期
74	碗	④	丘陵部	―	(4.9)	1.9	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精緻	Ⅰ期
75	碗	④	西斜面部	―	(4.6)	2.0	にぶい黄褐色	褐灰色	精緻	Ⅱ期
76	碗	④	―	―	―	1.9	灰オリーブ色	オリーブ灰色	精緻	Ⅱ期
77	碗	④	―	―	(4.2)	1.6	オリーブ黄色	オリーブ灰色	やや精緻	Ⅱ期

第51表　遺物観察表（国産陶器・瓦・墓石①）

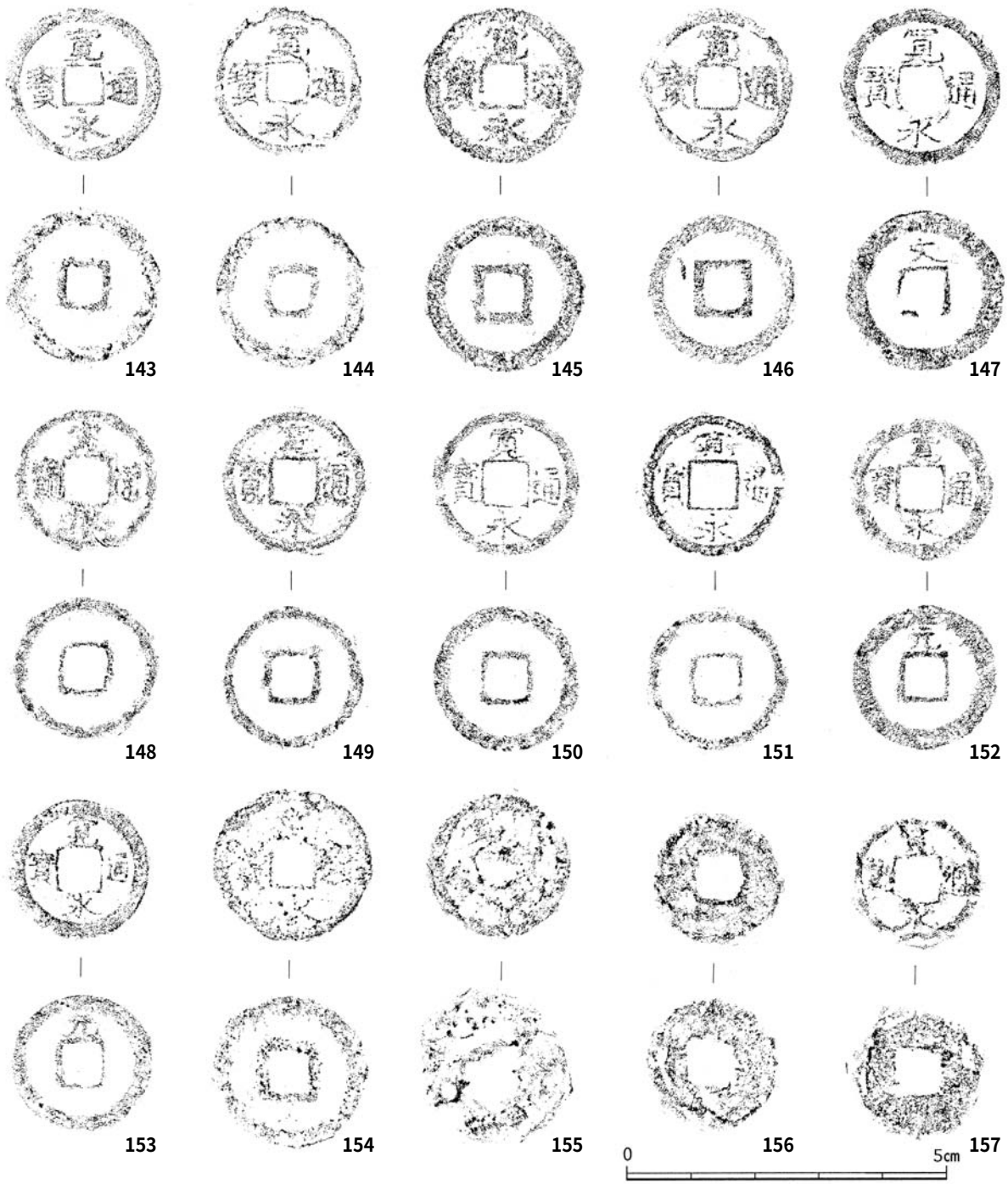
番号	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
78	碗	②③④	—	—	(4.1)	2.2	灰白色	暗灰黄色	精緻	Ⅲ期
79	碗	④	—	—	(5.8)	3.2	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	精緻 白色粒子	Ⅲ期
80	碗	③	—	—	(4.0)	1.9	暗赤褐色	黒褐色	精緻	
81	碗	⑥	—	—	(5.0)	1.7	にぶい黄橙色	浅黄色	精緻	Ⅳ期
82	碗	④	—	—	4.2	1.6	にぶい黄橙色	黒褐色	やや粗雑	
83	碗	④	—	—	—	2.1	灰オリーブ色	灰白色	やや精緻	
84	碗	④	—	—	5.6	2.8	浅黄色	浅黄色	やや精緻	
85	碗	④	—	—	(6.2)	2.1	淡黄色	暗赤褐色	精緻	
86	碗	④	—	—	(4.8)	2.0	にぶい黄色	にぶい黄褐色	精緻	
87	碗	④	—	—	—	4.0	褐色	灰褐色	やや精緻	
88	皿	④	—	13.0	4.4	4.5	にぶい赤褐色	灰白色	精緻	Ⅱ期　灰釉
89	皿	④	—	(12.2)	(4.2)	3.2	灰白色	灰オリーブ色	精緻 黒色粒子	
90	皿	④	—	(14.2)	—	1.4	浅黄色	灰白色	精緻	
91	皿	④	—	(9.6)	(4.2)	3.0	赤褐色	暗赤色	精緻	
92	皿	③	—	—	—	2.3	にぶい黄橙色	オリーブ黄色	精緻	Ⅰ期
93	皿	③	—	—	—	2.2	オリーブ黄色	オリーブ黄色	精緻	Ⅲ期
94	皿	③	—	—	—	2.0	オリーブ黄色	オリーブ黄色	精緻	
95	皿	③	—	—	—	2.4	にぶい黄褐色	オリーブ褐色	やや精緻	Ⅲ期
96	皿	③	—	—	—	1.7	灰白色	灰オリーブ色	精緻	
97	皿	③	—	—	—	2.2	灰白色	灰白色	精緻	Ⅱ期
98	皿	④	丘陵部	—	—	1.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	精緻 黒色粒子	
99	皿	④	丘陵部	—	—	1.6	浅黄色	浅黄色	精緻 白色粒子	
100	皿	⑥	—	—	—	2.0	灰白色	灰オリーブ	精緻	
101	皿	③	—	—	(4.2)	1.9	オリーブ黄色	オリーブ黄色	やや粗雑	Ⅱ期
102	皿	④	—	—	—	1.6	暗褐色	黒色	精緻	
103	皿	③	—	—	—	1.1	オリーブ黄色	オリーブ黄色	やや精緻	
104	皿	③	—	—	—	1.0	にぶい黄色	灰黄色	やや精緻	
105	皿	①	—	—	8.8	2.0	オリーブ黄色	灰オリーブ色	精緻	
106	瓶	④	—	—	—	1.8	黒褐色	黒褐色	精緻 白色粒子	
107	瓶	④	—	—	—	1.7	黄褐色	黄灰色	精緻	
108	瓶	④	—	—	—	2.9	にぶい褐色	にぶい黄褐色	精緻	
109	瓶	④	—	—	—	3.0	赤黒色	暗褐色	精緻	
110	灯火具	③	—	8.2	3.8	3.3	灰赤色	灰赤色	粗雑	Ⅰ・Ⅱ期
111	鉢	①	—	—	—	3.1	にぶい橙色	黒褐色	精緻	Ⅲ期
112	鉢	④	—	—	—	2.5	にぶい黄色	暗オリーブ色	やや精緻 白色粒子	
113	鉢	④	—	—	—	4.9	黒褐色	黒褐色	やや精緻	Ⅲ期
114	鉢	④	—	—	—	2.7	オリーブ褐色	暗灰黄色	精緻	Ⅳ期
115	鉢	③	—	—	—	4.6	褐色	褐灰色	精緻	
116	鉢	③	—	—	—	4.4	灰色	灰黄色	やや精緻	
117	鉢	④	—	—	—	2.5	浅黄色	浅黄色	精緻 黒色粒子	胎土目
118	鉢	④	—	—	—	2.3	暗オリーブ色	オリーブ色	やや粗雑	
119	擂鉢	⑤	—	—	—	4.5	オリーブ黄色	にぶい黄色	やや精緻	
120	擂鉢	③	—	—	—	2.0	明黄褐色	黒褐色	やや精緻	Ⅱ期
121	擂鉢	③	—	—	—	4.7	灰オリーブ色	灰白色	やや粗雑	Ⅱ期
122	壺	④	—	—	—	1.9	にぶい黄色	にぶい黄色	精緻	
123	壺	①	—	—	—	2.7	にぶい褐色	にぶい褐色	やや精緻	
124	壺	③	—	(11.0)	—	3.4	黒褐色	黒褐色	やや粗雑	
125	壺	③	—	—	—	3.2	灰白色	灰白色	精緻 白色粒子	
126	壺	③	—	—	—	1.7	褐灰色	褐灰色	精緻	
127	甕	④	—	—	—	3.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	精緻 白色粒子	
128	甕	①③④	—	—	14.0	3.5	暗赤灰色	灰赤色	やや精緻	
129	火入	⑤	—	—	—	3.4	灰オリーブ	灰オリーブ	精緻	18c～
130	香炉	④	—	—	—	2.2	明赤褐色	灰白色	精緻 白色粒子	
131	水指	④	—	—	—	2.1	灰オリーブ	オリーブ黄色	精緻 黒色粒子	
132	土瓶	④	—	—	—	5.2	黒褐色	にぶい褐色	精緻 白色粒子	
133	土瓶	③	—	—	—	3.4	黄灰色	灰色	やや精緻	Ⅴ期
134	土瓶	③	—	—	7.4	1.2	暗赤褐色	明赤褐色	やや精緻 白色粒子	
135	土瓶	④	—	—	—	0.9	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	やや精緻 白色粒子	
136	土鍋	③	—	—	—	4.1	赤黒色	暗赤褐色	精緻 白色粒子	
137	蓋	③	—	—	6.4	1.6	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	やや粗雑	
番号	器種	調査区	法量				色調		胎土	備考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	外面	内面		
138	瓦	④	2.7	6.5	1.7	39.7	灰黄色	灰色	やや精緻 長石・砂粒	
139	瓦	④	3.2	5.0	2.3	32.9	暗灰色	灰色	やや精緻 砂粒	
140	瓦	④	8.8	6.9	2.8	119.0	灰色	黄灰色	精緻 砂粒	
141	瓦	④	11.0	7.5	3.8	168.0	灰色	にぶい黄橙色	やや精緻 砂粒	
142	墓石	④	58.0	15.5	9.7	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	—	

第52表　遺物観察表（国産陶器・瓦・墓石②）

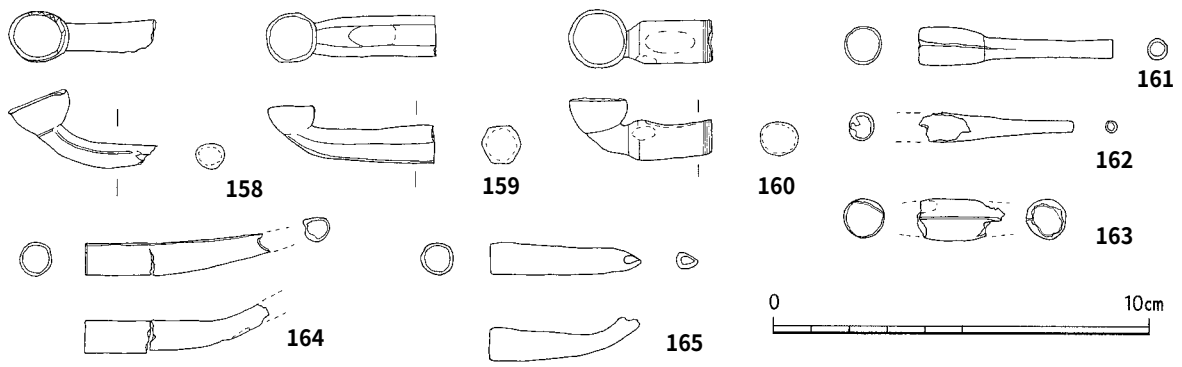
・金属器（第102・103図　第53表）

143～157は寛永通寶である。本遺跡から銭貨は36枚出土しており，そのうち寛永通寶は15枚，約40%を占める。寛永通寶を寛永13年（1636）公鋳された古寛永，寛文８年（1668）から江戸亀戸で鋳造された文銭，元禄10年（1697）に鋳造された新寛永に大別すると，古寛永４枚，文銭１枚，新寛永６枚に分けられる。残る４枚については付着物等により判読が不可能であった。**146**は背面の左部分に線が入るが，明確でなく位置も不安定であることから製造工程についたものと考えられる。**147**は文銭で通字の頭が「コ」を呈する。**152・153**は背面に「元」字を有し，大阪高津で鋳造されたものである。158～165は羅宇キセルである。分類は古泉弘氏（『江戸文化の考古学』2000）の分類をもとに行った。

158～160は雁首である。**158**は補強帯があり，脂返しがやや湾曲している。**159**は補強帯が無く，脂返しの湾曲が小さい。首部は六角形を呈する。161～165は吸口である。**164・165**は口付に近づくにつれ上方に湾曲する。



第102図　金属器①（S＝1/1）



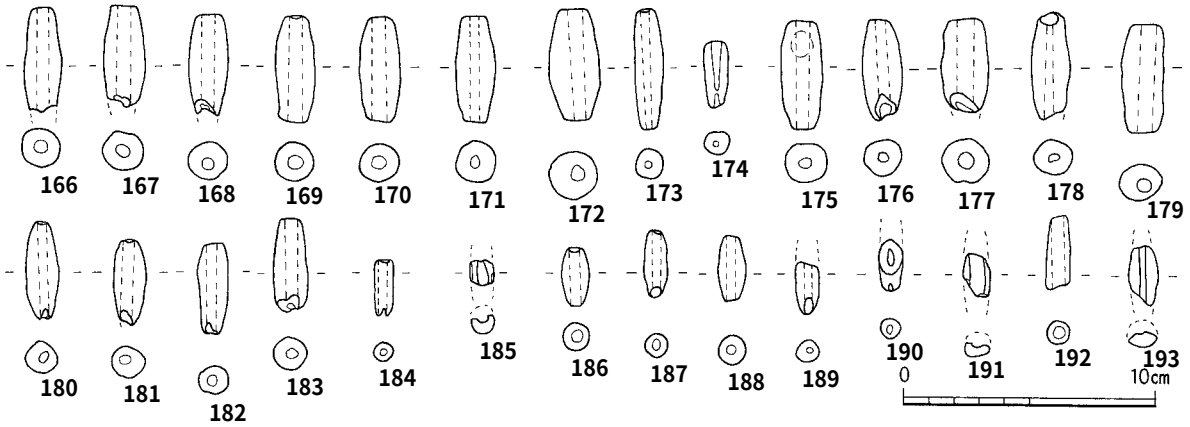
第103図　金属器②（S＝1/2）

番号	種別	調査地区		最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	備考
143	寛永通寶	⑤	粘土層	25.0	―	1.0	3.54	古寛永
144	寛永通寶	④	西斜面部	25.0	―	1.0	3.70	古寛永
145	寛永通寶	④	丘陵部	24.5	―	1.0	3.52	古寛永
146	寛永通寶	④	丘陵西斜面部	24.0	―	1.0	2.47	古寛永
147	寛永通寶	④	丘陵西斜面部	25.0	―	1.0	2.31	文銭　正字背文　1618～
148	寛永通寶	④	西斜面部	23.0	―	1.0	2.10	新寛永
149	寛永通寶	④	丘陵西斜面部	23.0	―	1.0以下	2.11	新寛永
150	寛永通寶	⑤	―	23.0	―	1.0	2.45	新寛永
151	寛永通寶	④	西斜面部	23.0	―	1.0	2.73	新寛永
152	寛永通寶	⑤	―	23.0	―	1.0	2.00	新寛永　高津背元銭　1741～
153	寛永通寶	⑤	―	22.0	―	1.0	1.85	新寛永　高津背元銭　1741～
154	寛永通寶	④	丘陵西斜面部	25.0	―	1.0	2.67	
155	寛永通寶	④	丘陵部	23.0	―	3.0	3.37	
156	寛永通寶	④	西斜面部	22.0	―	1.0以下	15.70	
157	寛永通寶	④	―	21.5	―	1.0以下	1.46	
158	羅宇キセル	④	丘陵部	39.0	14.0	―	―	Ⅲ類
159	羅宇キセル	④	西斜面部	45.0	13.0	―	―	Ⅴ類　雁首，一部六角形
160	羅宇キセル	④	―	37.0	15.0	―	―	
161	羅宇キセル	④	西斜面部	51.5	1.0	―	―	
162	羅宇キセル	④	丘陵部	41.0	8.0	―	―	
163	羅宇キセル	④	―	23.0	11.0	―	―	
164	羅宇キセル	④	西斜面部	49.0	9.0	―	―	
165	羅宇キセル	④	―	40.5	8.0	―	―	

第53表　遺物観察表（金属器）

・土錘（第104図　第54表）

166～193は土錘である。縦長で断面円形を呈する。胎土及び焼成，形態より分類が可能である。**166～171**は膨らむタイプである。**172**は径が大きく赤褐色を呈し，成形が整っている。**173・174**は細長いタイプである。**175～177**は浅黄橙色を呈し，同じ胎土である。**178**は明赤褐色，**179**は焼成が良好である。**180・181**は同じ胎土を示す。**182・183**は暗灰色を呈する。**184～199**は細く短いタイプである。**190～191**は破片である。**192**は白色を呈する。**193**は破片である。　（松田菜津子　福永祐馬）



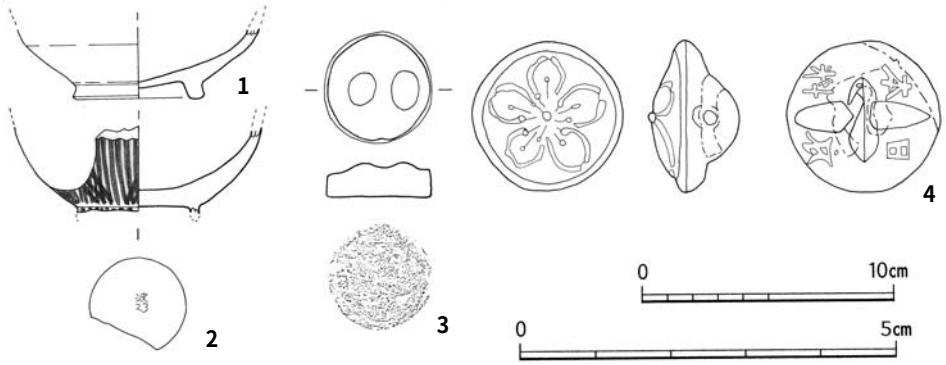
第104図　土錘（S＝1/3）

番号	調査区		法量			
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)
166	④	丘陵部	4.1	1.5	1.5	8.0
167	④	―	4.0	1.5	1.5	8.3
168	④	―	4.0	1.5	1.5	8.2
169	④	―	4.2	1.5	1.5	8.6
170	④	―	4.2	1.6	1.5	9.3
171	④	―	4.1	1.5	1.6	9.3
172	④	丘陵部	4.4	1.9	1.8	12.5
173	④	西斜面部	4.7	1.1	1.1	2.9
174	④	西斜面部	2.6	1.0	0.8	1.7
175	④	丘陵部	4.3	1.6	1.4	8.2
176	④	丘陵部	4.0	1.5	1.3	6.7
177	⑥	―	4.0	1.5	1.4	10.3
178	④	丘陵部	4.2	1.5	1.4	8.6
179	③	―	4.3	1.6	1.5	9.9
180	③	―	3.8	1.3	1.3	6.4
181	⑥	―	3.4	1.3	1.3	5.0
182	②	―	3.6	1.2	1.1	3.2
183	④	丘陵部	3.7	1.4	1.3	7.4
184	④	西斜面部	2.2	0.8	0.7	0.8
185	④	西斜面部	1.0	0.9	0.7	0.4
186	④	丘陵部	2.3	1.0	1.1	1.8
187	④	西斜面部	2.6	0.9	0.9	1.5
188	④	―	2.6	1.1	1.1	2.5
189	③	―	2.1	0.9	0.8	1.2
190	④	西斜面部	2.1	1.0	0.9	0.8
191	④	―	1.7	1.0	0.5	0.6
192	④	西斜面部	2.8	0.9	0.9	2.1
193	④	丘陵部	1.4	1.1	0.6	1.6

第54表　遺物観察表（土錘）

（7） 近・現代の遺物（第105図　第55表）

1は土師器埦である。形態は，高台から体部下半まで直線的に開き立ち上がる。高台は回転ヘラ削りが施される。**2**は染付碗である。形態は，底部から口縁部にかけて内湾し立ち上がる。外面に斜格子文を描き，高台内に**「**波23**」**銘が描かれる。この銘は，戦時経済統制下に製造所ごとに割り振られた統制番号を表し，『近現代肥前陶磁銘款集』（佐賀県立九州陶磁文化館　2006）によると波佐見王山窯の製品とされる。**3**は用途不明の土製品である。表面に二つの突起があり，裏面に摩擦痕が見られる。胎土は雲母の粉末を混入している。**4**は陶器のボタンである。表面は桜の型押と茶色の釉が施される。裏面は糸通しとその周囲に**「**日本衣料**」**と印刻され，その一部に透明釉が掛けられる。(福永祐馬)



第105図　近・現代の遺物（1～3はS＝1/3，4はS＝1/1）

番号	種類	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			調整		胎土	色調		備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	
1	土師器	埦	③	―	―	(5.4)	2.8	ナデ	ナデ	精緻	黒褐色	黒褐色	
番号	種類	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			産地／窯		胎土	備考		
					口径	底径	器高						
2	磁器	碗	④	丘陵部	(11.6)	3.8	―	波佐見王山窯		精緻	外面に斜格子文　高台内「波23」		
番号	種類	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			調整		胎土	重さ（g）	備考	
					直径	底径	高さ	外面	内面				
3	土製品	不明	③	―	4.3	―	1.4	ナデ	ナデ	精緻	23.63		
番号	種類	器種	調査区		法量(cm)(　)は復元径			色調		胎土	重さ（g）	備考	
					口径	底径	最大厚	表面	裏面				
4	陶器	ボタン	④	西斜面部	2.0	―	1.25	明黄褐色	灰白色	精緻	2.72	印刻「日本衣料」	

第55表　遺物観察表（近・現代の遺物）

小　結

第Ⅰ層より出土した遺物について，まとめてみたい。

・旧石器時代

後期に属する石器が確認できる。石材は腰岳産黒曜石を使用し，この時期から土地利用の開始が窺える。

・縄文時代

時期が不明の土器が，数点確認できる。そのうち，滑石混入の土器が１点（第23図－１）確認できる。石製品は黒曜石原石（牟田産，腰岳産）が出土，石核や剥片，砕片が出土点数の大半（5,600点）を占めている。一方，製品は石鏃および石匙が確認できるものの，出土数は限られる。これらより，一時的な土地利用が推測される。

・弥生時代

部位の判断が可能な器種より，須玖Ⅰ式＜須玖Ⅱ式＞高三潴式の出土量の傾向が窺え，糸島系，東九州（遠賀川以東）系土器も確認できる。SH を含め丘陵上は中期前半と中期後半に位置付けられる遺構が展開し，その前後に生活空間として利用されたことが推測できる。また，出土した土器の胎土を，肉眼観察による分類を行った結果，以下の通りである。

Ａ：砂礫（長石，石英）を多量に含む。　　4,257点（92%）

Ｂ：砂質（粒子が細かい）を多量に含む。　　229点（５%）

Ｃ：Ａをより多く，そして黒曜石を少量含む。　　158点（３%）

計4,644点

このうち，Ａは北部九州系の形態を示し，この地域特有の混和材である。Ｂ・Ｃは胎土に特徴が見出され，特にＣは産地同定がし易い混和材である。このＣは，小片が多く図化に耐えられない遺物が多いことも特徴として挙げられる。今後，北松浦半島特有な胎土を持つ土器かどうか，検証を進めたい(註1)。

	ナイフ形石器	石鏃	石匙	加工痕のある剥片	磨製石斧	石核	原石	剥片	削片	スクレイパー	細石刃	合計
旧石器時代	3										7	10
縄文時代		91	11	261	1	99	49	4960	138	4		5614
弥生時代					1							1
											合計	5625

第56表　第Ⅰ層出土石器組成表

・古墳時代・古代

須恵器の坏身が数点出土し，古墳時代後期に位置付けられる。黒色土器片は数点確認でき，古代末期に位置付けられる。このため，古墳時代～古代にかけては，土地利用はあまり窺えない。

・中世

中世前期は在地産土師器片，瓦器片が少量出土する。貿易陶磁器は大宰府磁器区分Ｃ期にあたる，白磁椀Ⅳ・Ⅴ類，龍泉窯系青磁椀Ⅰ類，同安窯系青磁椀・皿Ⅰ類が出土する。このため，12世紀後半

調査区	土師器	須恵器	黒色土器	在地産瓦器	畿内産瓦器	東播系須恵器	貿易陶磁器							滑石製品	合計
							白磁	越州窯系	龍泉窯系	同安窯系	高麗窯系	景德鎮窯系	彰州窯系		
①	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
②	135	3	1	0	0	0	21	0	46	8	2	1	0	14	231
③	457	1	0	0	0	0	128	0	303	11	48	6	0	8	962
④	840	7	2	1	0	4	292	0	733	2	90	13	11	47	2073
⑤	22	2	0	0	0	0	21	0	47	0	1	0	0	7	100
⑥	23	0	0	0	0	0	27	0	69	0	6	1	4	3	133
⑦	13	0	0	0	0	0	3	0	6	0	0	0	0	0	22
合計	1490	13	3	1	0	4	492	0	1205	21	147	21	15	79	3522

（数字は破片点数）

第57表　第Ⅰ層出土古代末～中世遺物組成表

龍泉窯系青磁

調査区	類	椀				小椀				束口椀		浅形椀		坏				皿							他器種				破片	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅳ	A（大宰府Ⅲ類）	B	C	D	E	香炉	水注	合子	不明		
①																													1	1
②		9	20							1		1				1					5					1			8	46
③・④		6	124			1	4			3						6	1	5			116	5	16		12		1	10	1	1036

高麗（大宰府編年）

調査区	類	椀				小碗	皿		蓋		高麗陶器	森本・片山 Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期			破片	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	壺	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ		
②～⑤											8		79	3	13		1	43	147

同安窯系青磁

調査区	類	椀				小椀	皿		破片	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ		
②～④		5					4		12	21

白磁

調査区	類	椀																	小椀					坏
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	XⅢ	XⅣ	B	C	D	E	Ⅰ	Ⅴ・Ⅵ	Ⅹ	XⅤ	B
③・④					31	17			13	22		1					1		1		2			

調査区	類	皿												鉢			水注			他器種	破片	合計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	XⅠ	B	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ			
③・④			11		2	6		1		103				2						28	179	420

他器種＝福建産，青白磁など

第58表　貿易陶磁器組成表

	器種	期	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅴ以降
			-1	-2	-1	-2				
		年代	～1610		1610～1650		1650～1690	1690～1780	1780～1860	1860～
陶器	碗			△	●		●	△		○
	皿			△	○					
	鉢				△		○	●	△	
	蓋付鉢							△		
	擂鉢					△	○	●	○	
	水指							△	△	
	灯火具						△	△		
	土瓶							△	○	
	壺・甕				●		●	△	△	
	瓶				△		△	△	△	
	火入						△	△		
	蓋			△			△	○		
磁器	碗					○	●	●	●	○
	小坏					△	△	●	○	△
	皿			△	△		○	●	●	△
	小皿					△	△	△		
	紅皿						△		○	
	鉢					△	△	○	△	
	蓋付鉢							○	△	
	仏飯具							△		
	瓶					△	△	○	△	△
	猪口						△	○	△	△
	香炉						△	△	△	
	蓋						△	△	△	
	戸車								○	
	窯道具								○	

△＝０～10点少量ある　○＝10～20点ある　●＝20点以上多量にある

第59表　近世陶磁器組成表

に再び丘陵上で，土地利用が開始する。その後，龍泉窯系青磁椀Ⅱ－a 類が多量に出土し，白磁椀・皿Ⅸ類が大量に，龍泉窯系青磁椀Ⅱ－c 類が少量出土する。このため，前者が大宰府磁器区分Ｄ期にあたる12世紀後半～13世紀前半にピークを迎え，大宰府磁器区分Ｅ期にあたる13世紀中頃～13世紀後半は減少傾向である。その他の出土遺物として，福建省産白磁椀・皿・合子（13～14世紀），高麗陶器片（12～15世紀代）が出土する。貿易陶磁器の出土は，供膳具が主体である。また，SK５がこの時期（AMS 分析結果より）に該当する。

中世後期は，土師器片が確認できなかったが，貿易陶磁器の龍泉窯系青磁碗Ｂ類を主体に，Ｄ類が出土する。高麗・朝鮮陶磁は椀（象嵌・灰青）が出土する。青花は景徳鎮窯系碗Ｂ群が出土する。国産陶器は備前焼擂鉢，周防系足鍋・擂鉢が出土する。また，SX19はこのころに堆積したと想定され，15世紀代に丘陵上の削平行為が考えられる。その後，貿易陶磁器は龍泉窯系青磁椀Ｃ類が少量，景徳鎮窯系碗・皿Ｃ群，皿Ｂ群，福建省産青花皿が出土する。国産陶器では，瀬戸美濃大窯製品の折縁皿の出土が確認できる。時期は16世紀代と考えられる。

・近　世

陶器の供膳具（碗・皿）が少量出土し，陶磁編年Ⅰ期に該当する。陶磁編年Ⅱ期は陶器の供膳具と貯蔵具（壺・甕・瓶）の出土量が増加する。染付は供膳具（碗・皿）が少量出土する。SK７がこの時期に該当する。また，SX16（西斜面）では，Ⅱ期以降の遺物が含まれないことから，この時期の掘削行為が考えられる。その際に，SK８が削平されたと推測される。陶磁編年Ⅲ期の陶器は，供膳具の出土量の減少及び調理具(鉢・擂鉢)と貯蔵具の出土量が増加する傾向が窺える。染付は供膳具・貯蔵具の出土量が増加する。陶器と染付の転換時期に相当し，染付の出土量の増加より丘陵上の人口増加が想定される。陶磁編年Ⅳ期は陶器に調理具（土瓶）の出土量が最大値を示す。一方，染付は供膳具の出土量が最大値を示す。陶磁編年Ⅴ期は，陶器の調理具が減少する。染付は供膳具，貯蔵具ともに減少する。特記として瓦（丸瓦・桟瓦），戸車，窯道具が出土する。窯道具（ハマ）の形態は，松浦皿山窯址出土資料に類似する。また，第101図－127は①・③・④区で出土し接合できた。このため，近世を通して遺物の出土が窺え，集落の展開が推測される。しかし，陶磁編年Ⅴ期以降の遺物量の減少より，集落の移動（埋立てた海岸付近か？）が推測され，耕作地へ転換したと考えられる。

・近・現代

染付は少量だが出土する。特記として，統制陶磁器が出土する。

以上より，本遺跡が立地する丘陵上を中心とした第Ⅰ層出土遺物の検討を行った。丘陵上を含め耕作のため，削平の繰り返し及び区画整理等の影響を受けたため，各時期の遺物が含まれたことが想定される。しかし土の移動は限られたものと考えられ，今後周辺の調査事例と照らし合わせて検討を進めたい。（江上正高）

【註】

註１　弥生土器の胎土については，次の文献を参考にした。

第三調査係　2005「土器胎土の鉱物を求めて」『研究紀要・年報　縄文の森から』第３号
鹿児島県埋蔵文化財センター

第二調査課　第二調査係　2006「土器胎土の鉱物を求めて２」『研究紀要・年報　縄文の森から』第４号
鹿児島県埋蔵文化財センター

Ⅴ　まとめ

調査区域は，大きく東側の丘陵上部と丘陵斜面部，西側の平地部に分けられる。

平地部は，遺構，遺物ともに確認できなかった。今福川の氾濫原であり，生活環境として適していなかったと考えられる。一時期安定した環境となり生活が営まれたとしても，新たな氾濫により破壊されたものであろう。今福川の旧河道跡は，近世以降のものを１条確認した。遺物は，旧河道跡埋土層から縄文時代の石器，弥生土器，須恵器，中世の石製品，近世陶磁器を，第Ⅰ層（現水田層及びその客土層）より縄文時代の石器，弥生土器，土師器，瓦質土器，貿易陶磁器，近世陶磁器等が出土した。

丘陵斜面部は，東は人柱川支流，西は今福川によって削取形成された河岸段丘である。東側斜面部は，西側に比べると傾斜が急であり，近年に至るまで大雨による崩落が頻発している。このような環境が原因と考えられるが，遺構は確認できなかった。第Ⅰ層から縄文時代の石器，弥生土器，土師器，貿易陶磁器，近世陶磁器が出土した。第Ⅰ層下はすぐに砂岩盤であった。西側斜面部では，水田化に伴う削平を免れた部分に柱穴群が展開していた。数基の柱穴埋土中から弥生土器，黒色土器，龍泉窯系青磁が出土したため，一部は12世紀後半期以降のものと考えられるが，それ以外，時代は判明せずプランも定かでない。柱穴底部のレベルは，推定される段丘ごとにほぼ均一であり，段状に建物が建てられていたと思われる。ほとんどの遺物は，第Ⅰ層や傾斜によって丘陵上部から移動し２次的に形成された包含層を中心に出土し，弥生時代から近世に至る物を確認した。

丘陵上部は，冬季には海からの非常に強い北西風が直接あたる厳しい環境ではあるが，斜面部とともに平地部より安定した環境にあるため，長年にわたって場の利用が行われていたと推測される。集石遺構，墓壙，柱穴跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，竪穴式住居跡などが検出した。遺構について特筆すべきは，円形プランの竪穴式住居跡４基の検出である。円形プランの竪穴式住居跡は，長崎県北部において白井川遺跡（東彼杵町）・四反田遺跡（佐世保市）・里田原遺跡（平戸市）・馬込遺跡（平戸市）につづき５例目で，松浦市域では初例となる大変貴重な発見であった。時期的には，遺構内出土遺物等により弥生時代中期のものと考えられる。またこれにより，丘陵上には弥生時代中期の居住域が広く展開することが想定され，今後の発掘調査の実施と結果が期待される。墓壙は共伴遺物などにより中世から近世のものと考えられ，６基が検出した。すぐ北側に隣接して今福神社があるため，宗家松浦氏や当社との関係も考えられる。このうち，胎土目跡の灰釉陶器皿が出土し，近世初頭のものと考えられる１基の真上には，客土層を挟むものの近世初頭のいわゆる耳付五輪塔が存在した。水田化に伴う土地の改変を受けた際，２次元的には五輪塔の位置を変えず，３次元的に垂直移動させたと推測される。信仰上の理由によるものであろう。この五輪塔は残念ながら調査後に工事区域外に移されたが，今も献花・供物が絶えることがない。遺物の多くは，第Ⅰ層から出土した。当然ながら２次的な包含であるが，今回敢えて紹介した。水田耕作土は現地の状況的に丘陵上で動いていると考えられる。水田基盤をなす今福地区特有の赤褐色土は，丘陵が接続する石倉山麓から搬入したことが現地の方から裏付けられている。つまり，ともにその包含する遺物は当該丘陵及び今福地域に由来するものであり，今福地域の歴史的環境を考察する上での重要な情報であると考えたためである。しかし，縄文時代から近世に至る多くの遺物を確認したものの，具体的な検討までには至らなかった。残念ながら今後の課題としたい。

（杉原敦史）

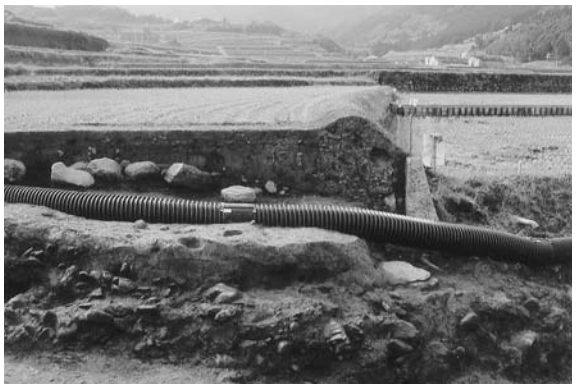
Ⅵ　図　　版

TP１　北壁土層（西から）

TP２　北壁土層（南から）

TP３　北壁土層（西から）

TP４　北壁土層（南から）



①区南壁土層（北から）

②区東側完掘状況（東から）

②区完掘状況（東から）

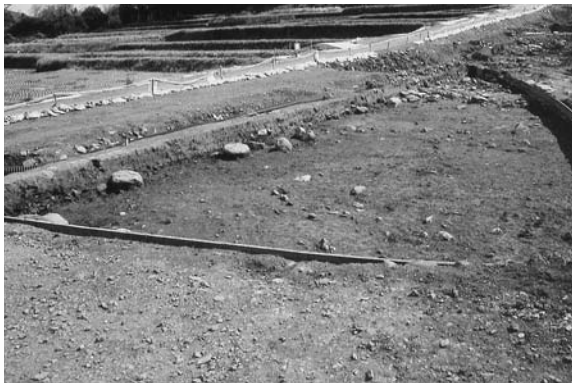
③区南壁土層（北から）

図版１　範囲確認調査及び①～③区

③区西斜面土層（北から）

④区西斜面（丘陵部）土層（北から）

⑤区完掘状況①（西から）



⑤区完掘状況②（西から）

⑥区完掘状況（南から）

⑥区拡張区完掘状況（南から）

⑦区南側土層（北から）

⑦区北側土層（南から）

図版２　③～⑦区

④区主要遺構完掘状況

④区丘陵部（里道部分）土層（北から）

④区西斜面（丘陵）土層（北から）

④区西斜面土層（北から）

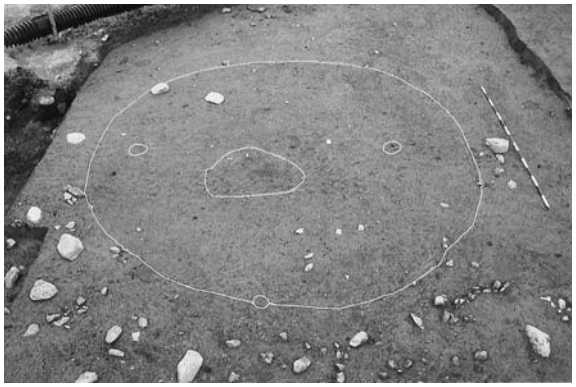
④区丘陵部完掘状況（北東から）

⑤・⑥区完掘状況（西から）

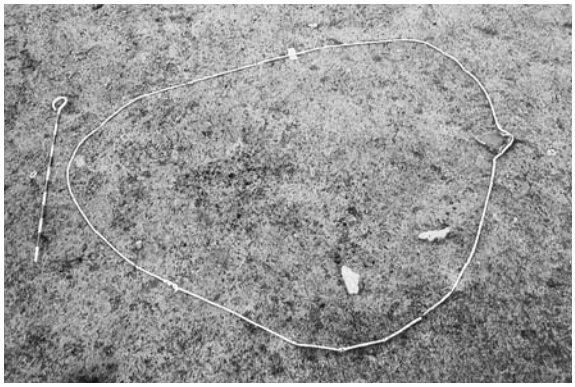
⑤区南北土層（東から）

⑦区完掘状況（北から）

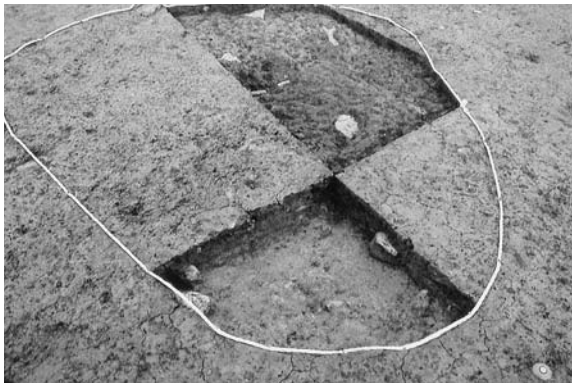
図版３　④～⑦区



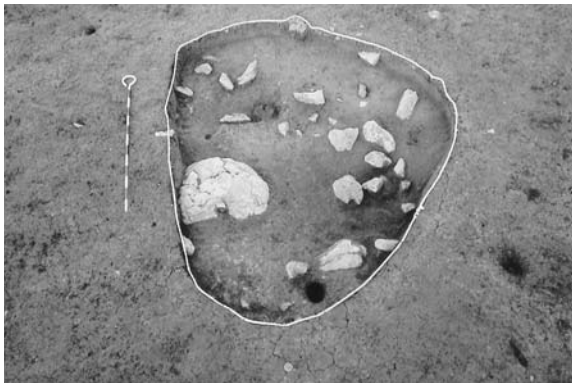
SH１（新）検出状況（西から）



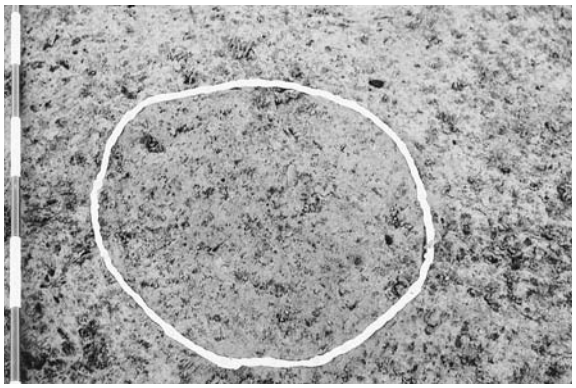
SH１（新）炉跡検出状況（西から）



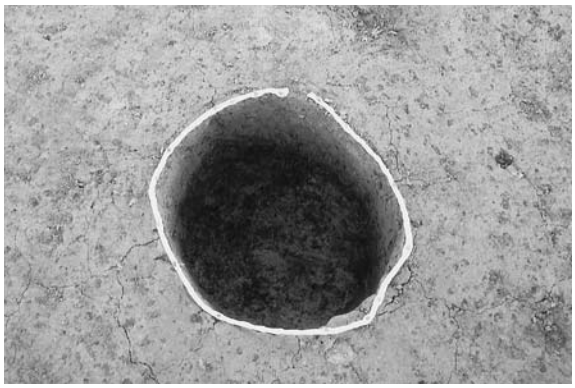
SH１（新）炉跡土層（南から）



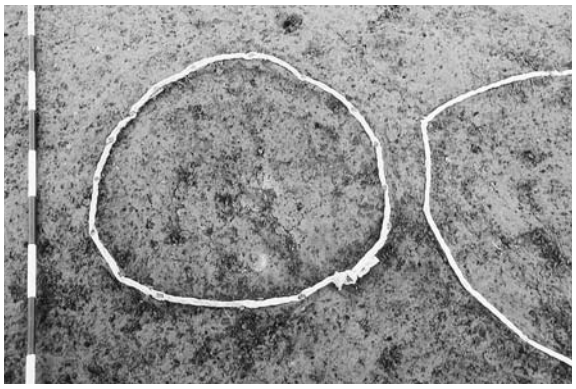
SH１（新）炉跡完掘状況（南から）



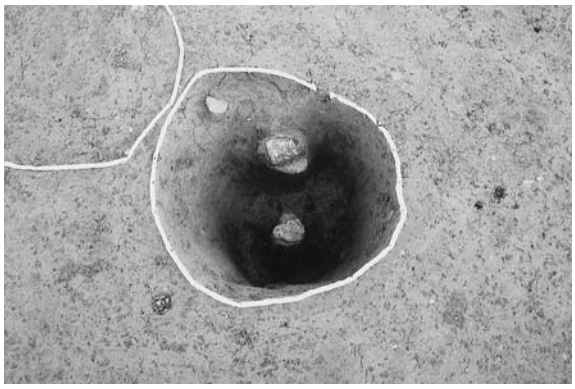
SH１（新）P１検出状況（東から）



SH１（新）P１完掘状況（西から）



SH１（新）P２検出状況（東から）



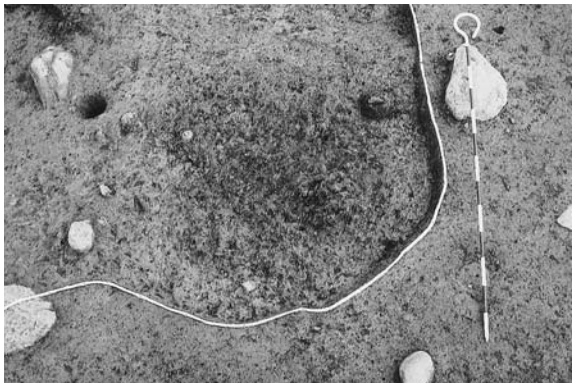
SH１（新）P２完掘状況（西から）

図版４　竪穴式住居跡①

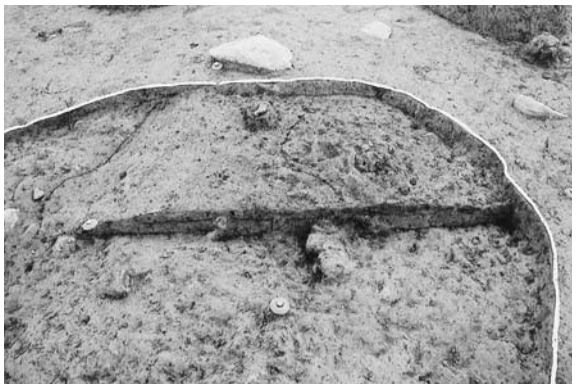
SH１（新）完掘状況（西から）

SH１（古）検出状況（西から）

SH１（古）炉跡検出状況（南から）



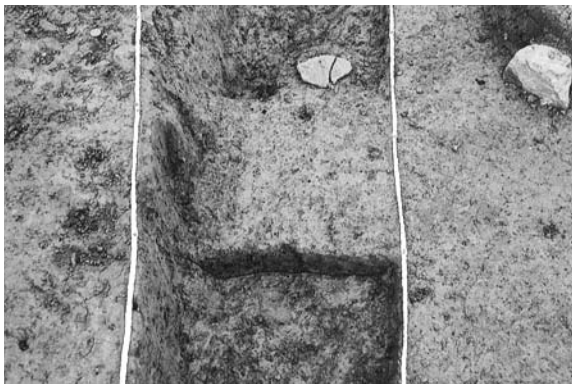
SH１（古）炉跡硬化面検出状況（西から）



SH１（古）炉跡土層（北から）

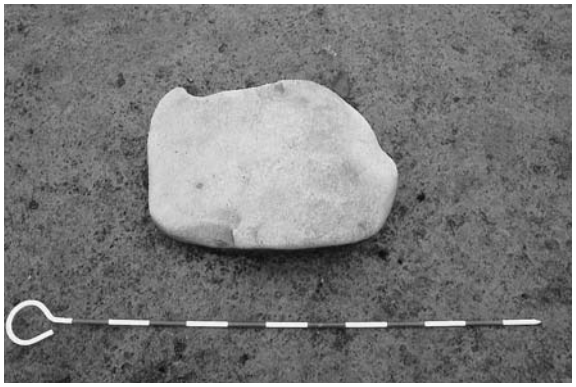
SH１（古）炉跡完掘状況（北から）

SH１（古）炉跡完掘状況全景（南から）

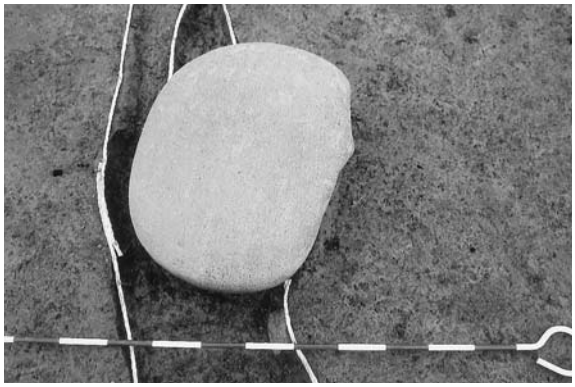


SH１周溝土層（東から）

図版５　竪穴式住居跡②



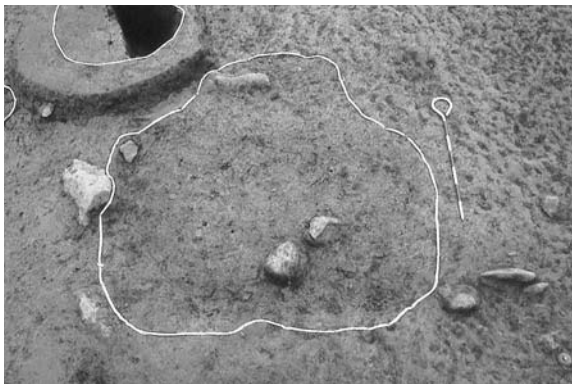
SH１（古）S１検出状況（北から）



SH１（古）S２検出状況（北から）

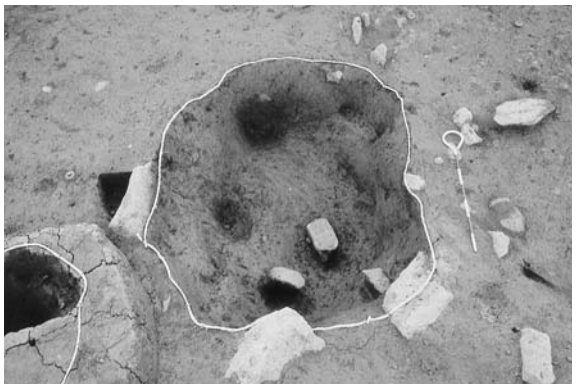
SH１（古）完掘状況（西から）

SH１（古）貼床完掘状況（東から）



SH１（古）土坑跡検出状況（東から）

SH１（古）土坑跡半截状況（東から）

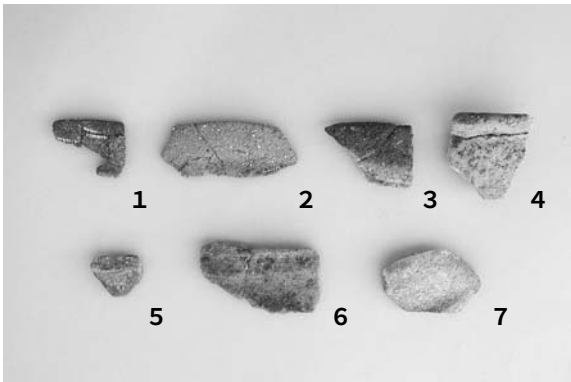


SH１（古）土坑跡完掘状況（北から）

SH１遺物出土状況（東から）

図版６　竪穴式住居跡③，出土遺物

SH１（古）遺物出土状況（北から）

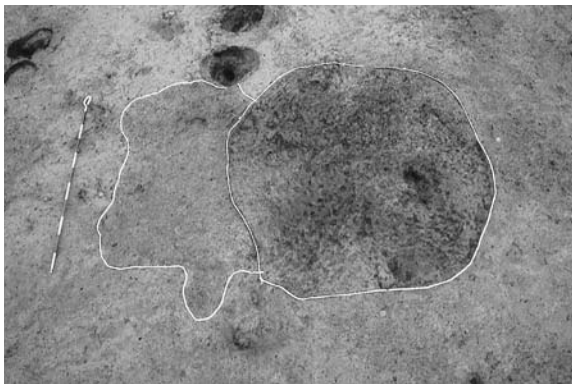


SH１出土遺物（土器）

SH２検出状況（東から）

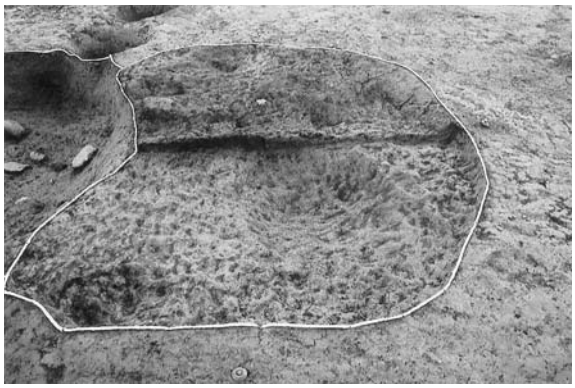
SH２柱穴跡検出状況（東から）

SH２柱穴跡完掘状況（東から）



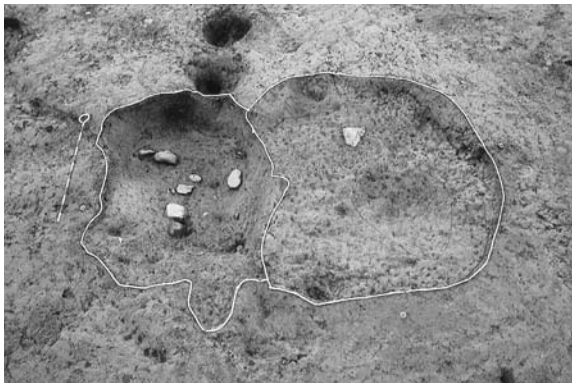
SH２炉跡・土坑跡検出状況（南から）

SH２炉跡土層（北から）



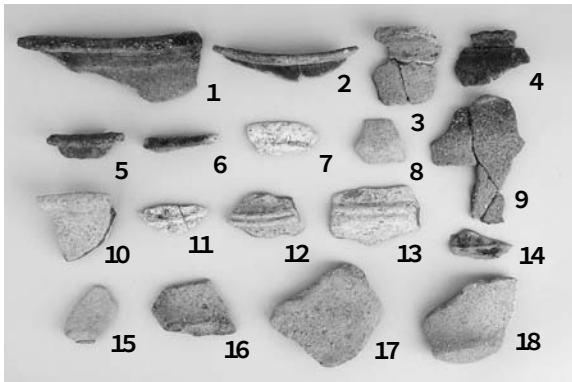
SH２炉跡・土坑跡完掘土状況（南から）

図版７　竪穴式住居跡④，出土遺物

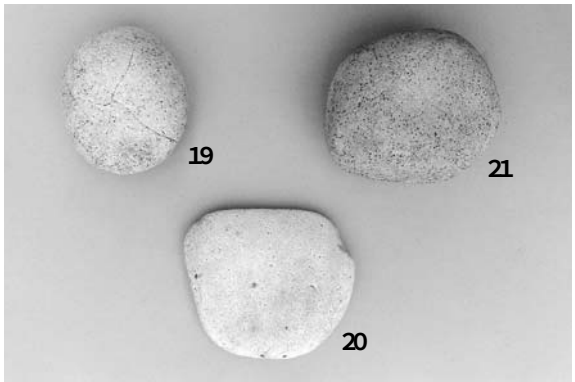


SH２土坑跡・炉跡完掘状況（北から）

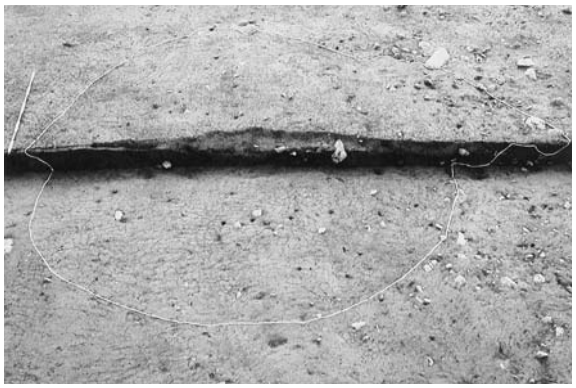
SH２完掘状況（東から）



SH２出土遺物（土器）



SH２出土遺物（石器）



SH３検出状況（北から）

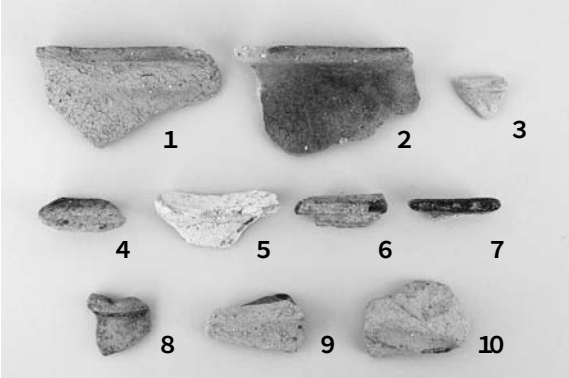
SH３炉跡・土坑跡検出状況（南から）

SH３土坑跡土層（南から）

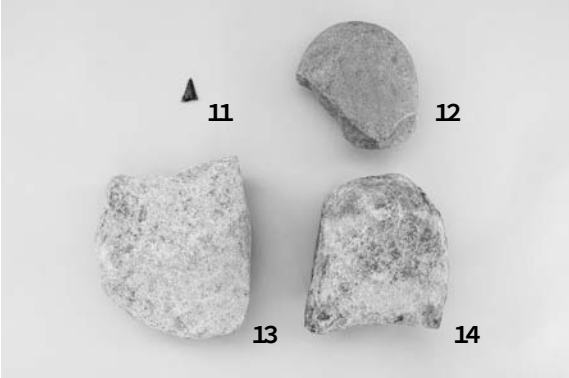
SH３炉跡・土坑跡完掘状況（北から）

図版８　竪穴式住居跡⑤，出土遺物

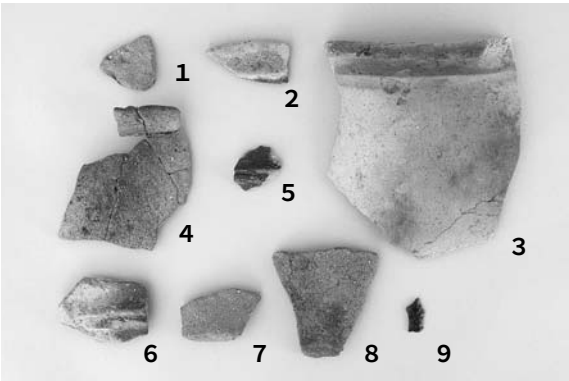
SH３完掘状況（北から）



SH３出土遺物（土器）

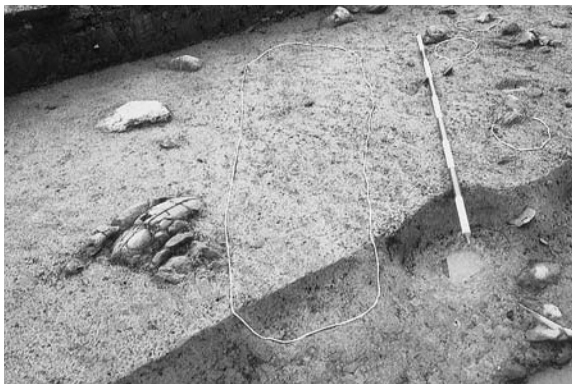


SH３出土遺物（石器）



弥生時代 SP 出土遺物

SP038出土状況（北から）

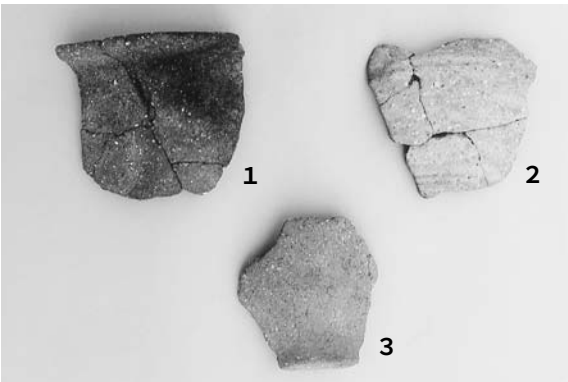


SX11検出状況（北から）

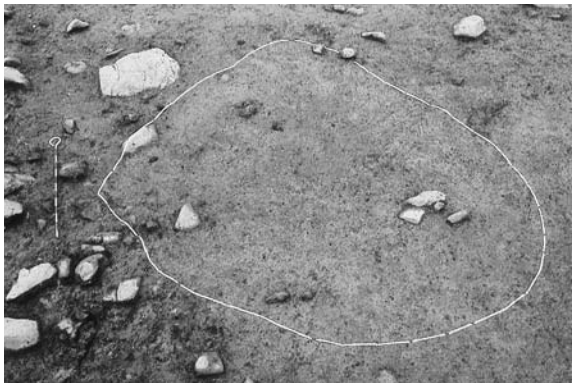
SX11土層（北から）

SX11完掘状況（北から）

図版９　竪穴式住居跡⑥，柱穴跡（弥生），不明遺構①，出土遺物



SX13出土遺物



SX23検出状況（北から）

SX23土層（北から）

SX23完掘状況（北から）

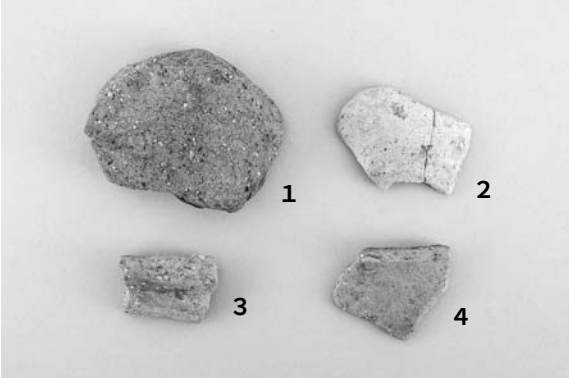
SX25土層（南から）

SX26検出状況（南から）

SX26土層（北から）

SX26完掘状況（北から）

図版10　不明遺構②，出土遺物

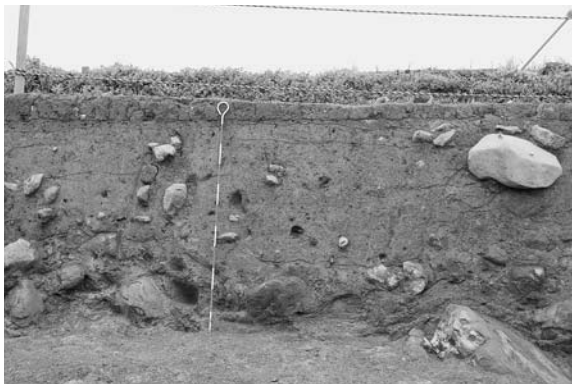


SX27・29出土遺物

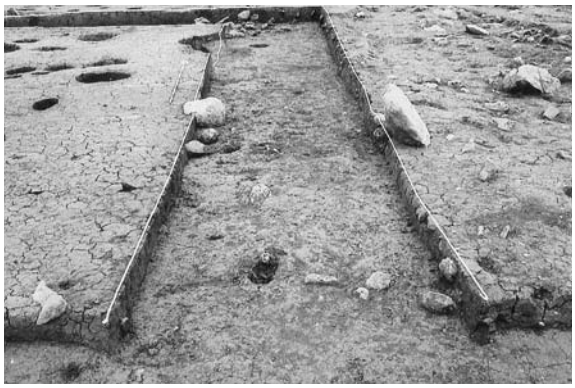
SX27土層（北から）

SX33土層（北から）

SX34土層（北から）



SX35土層（南から）



Ⅲ層トレンチ①（北から）

Ⅲ層トレンチ②（西から）

SK１検出状況（東から）

図版11　不明遺構③，トレンチ，木棺墓①，出土遺物

SK１土層（南から）

SK１墓壙完掘状況（北から）

SK１遺物出土状況①（東から）

SK１遺物出土状況②（東から）

SK１遺物出土状況③（北から）

SK１遺物出土状況④（東から）

SK１遺物出土状況⑤（東から）

SK１墓壙完掘状況（北から）

図版12　木棺墓②

SK１完掘状況（北から）

SK１－１出土遺物

SK１－２出土遺物

SK１－３出土遺物

SK１－４出土遺物

SK１－５出土遺物

SK１－６出土遺物

SK１－７出土遺物

図版13　木棺墓③，出土遺物

SK１－８出土遺物

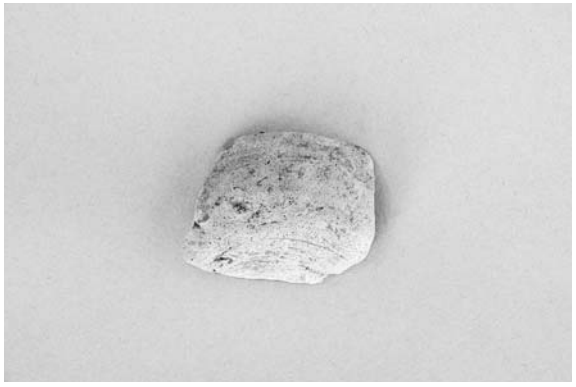
SK１－９出土遺物

SK１－10出土遺物

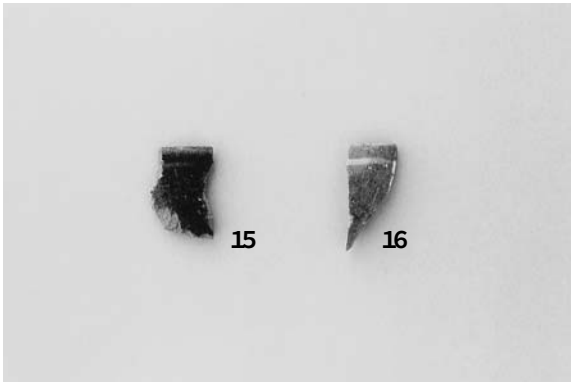
SK１－11出土遺物

SK１－12出土遺物

SK１－13出土遺物

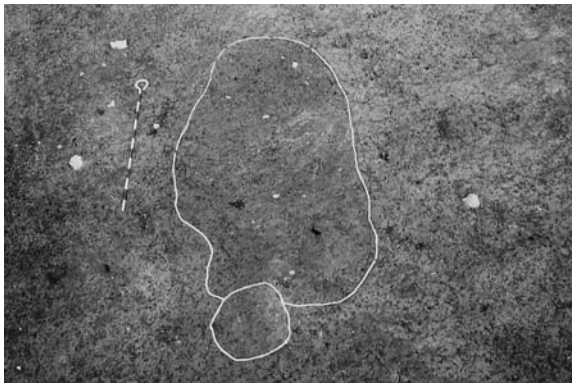


SK１－14出土遺物

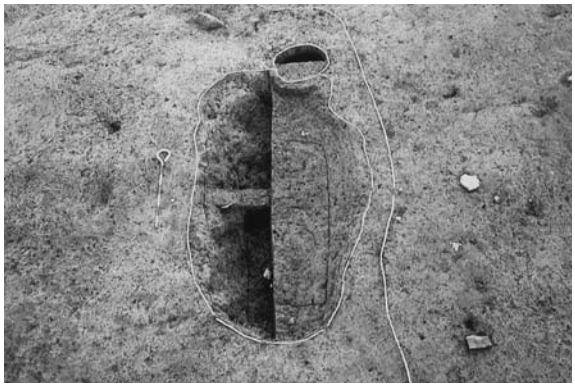


SK１－15・16出土遺物

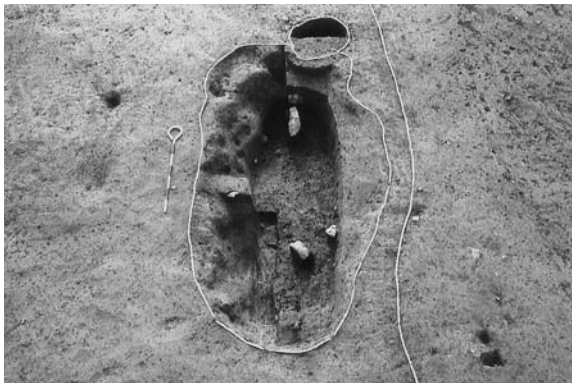
図版14　木棺墓④，出土遺物



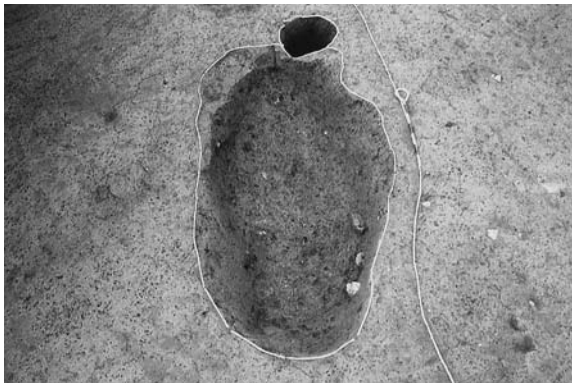
SK６検出状況（南から）



SK６墓壙検出状況（北から）

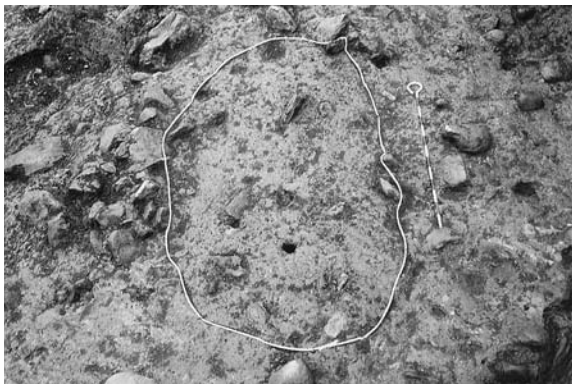


SK６墓壙完掘状況（北から）



SK６完掘状況（北から）

SK２・３検出状況（東から）



SK２検出状況（南から）

SK２完掘状況（東から）

SK３検出状況（南から）

図版15　木棺墓⑤，土壙墓①

SK３遺物出土状況（東から）

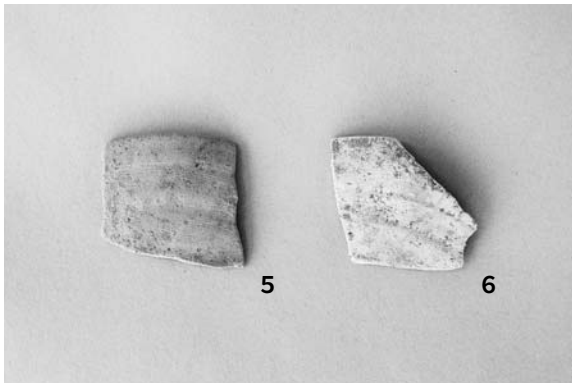
SK３完掘状況（東から）

SK３－１出土遺物

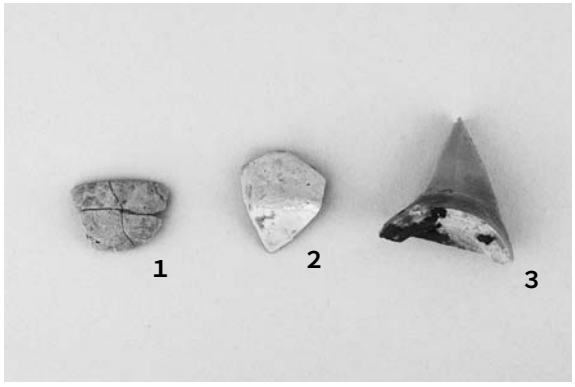
SK３－２出土遺物

SK３－３出土遺物

SK３－４出土遺物



SK３－５・６出土遺物



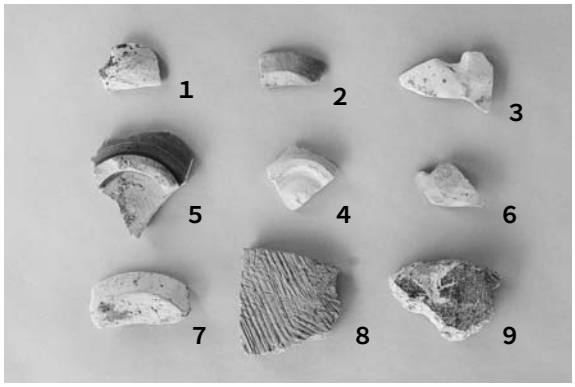
中世 SP 出土遺物①

図版16　土壙墓②，柱穴跡（中世）①，出土遺物

中世 SP 出土遺物②（滑石製品）

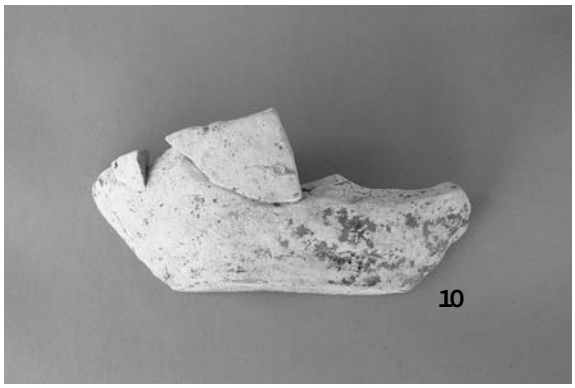
SX１・３完掘状況（西から）

SX１完掘状況（北から）



SX１・３出土遺物

SX14土層（南から）



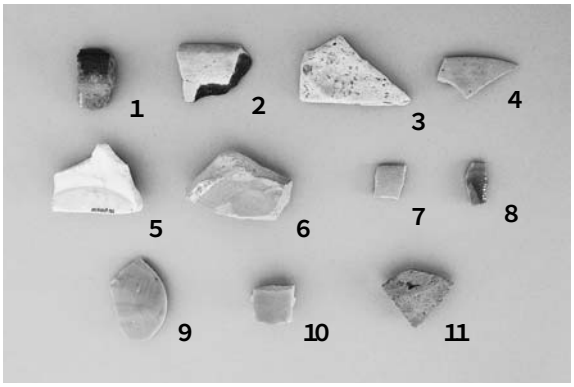
SX14出土遺物

SX19検出状況（北から）

SX19土層（北から）

図版17　不明遺構④，柱穴跡（中世）②，出土遺物

SX19完掘状況（東から）

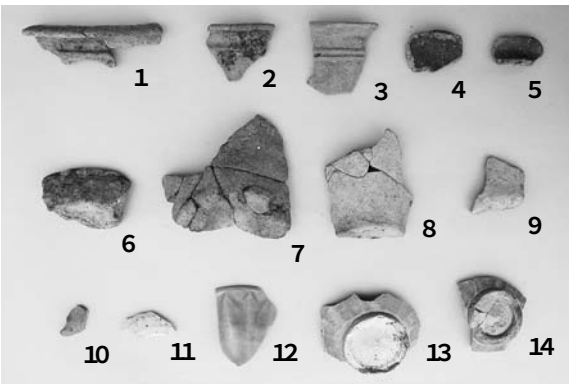


SX19出土遺物

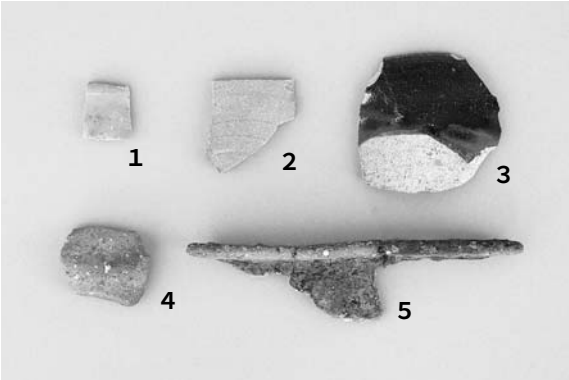
SX21・22検出状況（南から）

SX21・22土層（北から）

SX21・22完掘状況（南から）



SX21出土遺物



SX24出土遺物

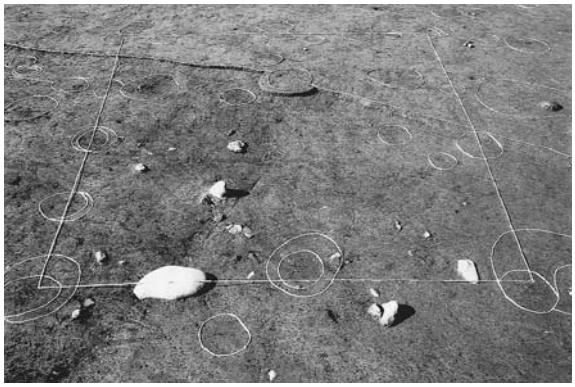
SX28検出状況（北から）

図版18　不明遺構⑤，出土遺物

SX28出土遺物

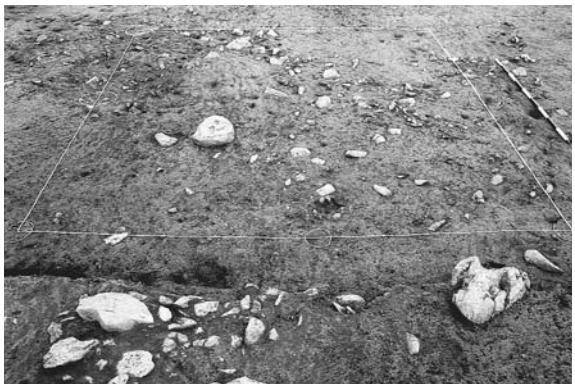
SR１土層（東から）

SR１完掘状況（南から）

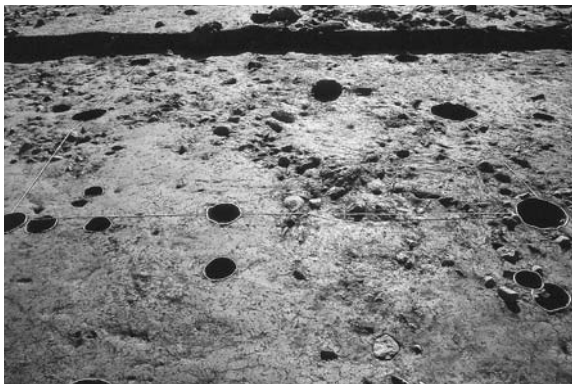


SB１検出状況（北から）

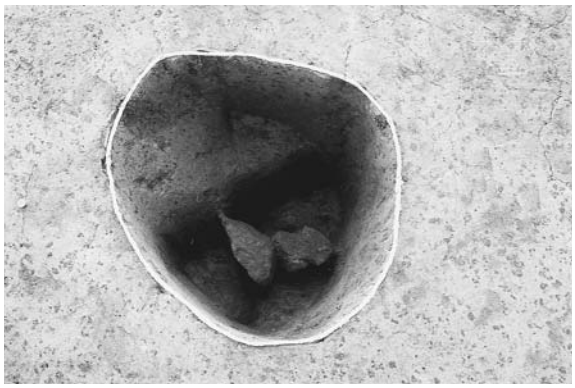
SB１完掘状況（北から）



SB３検出状況（北から）

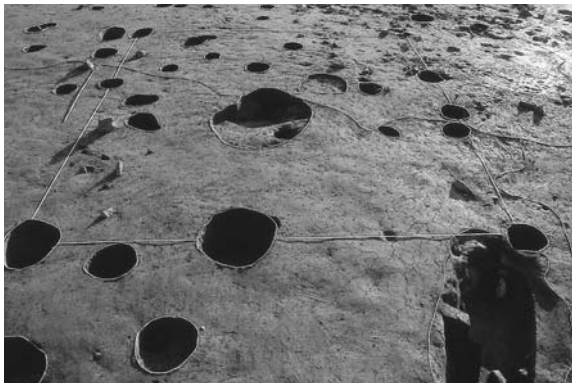


SB３完掘状況（北から）



SB４　P１遺物出土状況（北から）

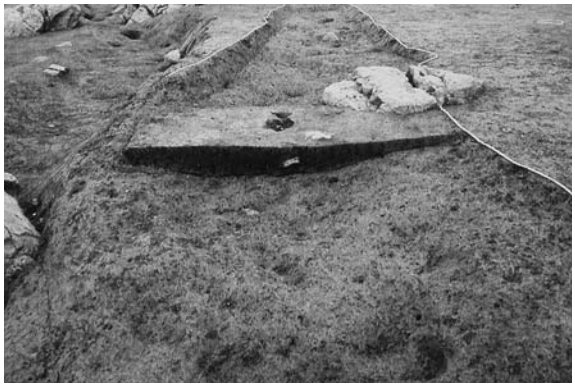
図版19　不明遺構⑥，旧河道跡，掘立柱建物跡①，出土遺物



SB４完掘状況（北から）

SB５検出状況（北から）

SB５完掘状況（北から）



SD２土層（北から）

SD２完掘状況（北から）

SF４（調査前）（西から）

SF４（調査前）（南から）

SK４土層（東から）

図版20　掘立柱建物跡②，溝跡，五輪塔，土壙墓③

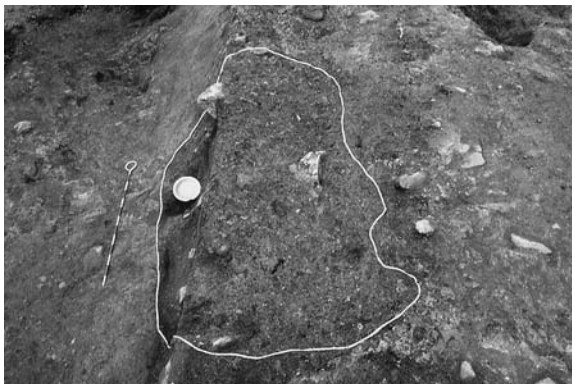
SK４遺物出土状況（西から）

SK４墓壙完掘状況（東から）

SK４完掘状況（東から）

SK４－１出土遺物

SK４－２出土遺物

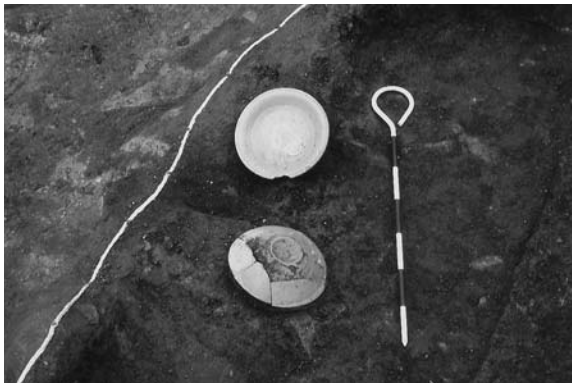


SK７検出状況（南から）

SK７土層（西から）

SK７遺物出土状況（南から）

図版21　土壙墓④，出土遺物



SK７遺物出土状況（南から）

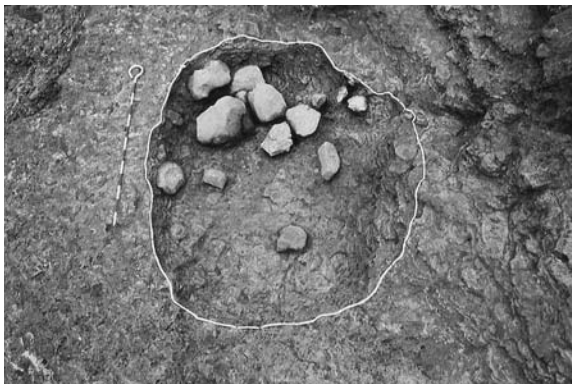
SK７完掘状況（南から）

SK７－１出土遺物

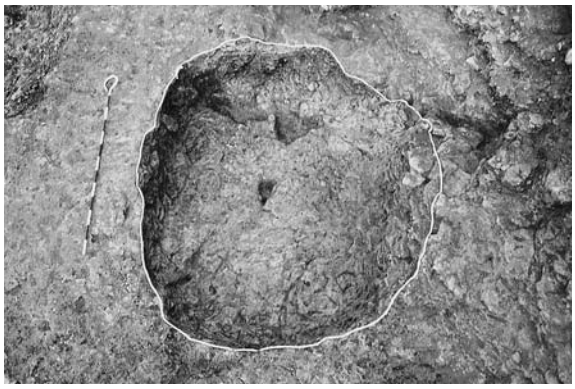
SK７－２出土遺物

SK８検出状況（南から）

SK８土層（西から）

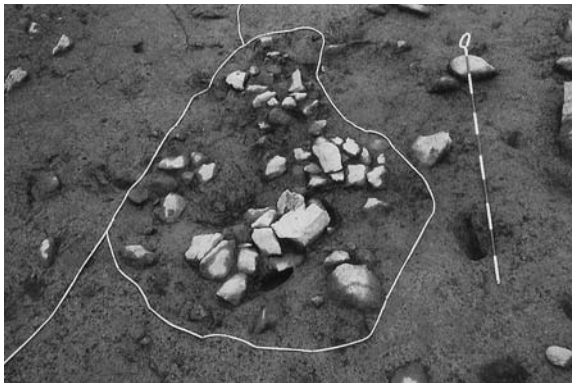


SK８礫出土状況（南から）



SK８完掘状況（南から）

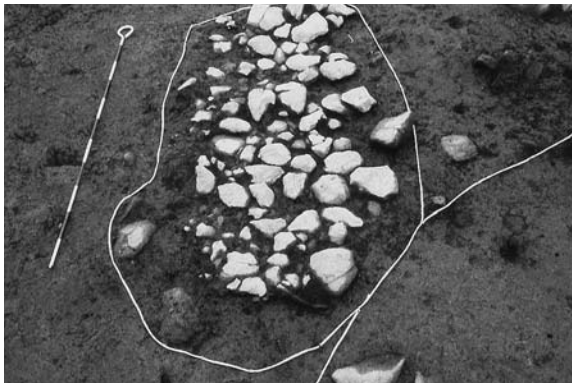
図版22　土壙墓⑤，出土遺物



SF１検出状況（南から）

SF１土層（南から）

SF１完掘状況（南から）

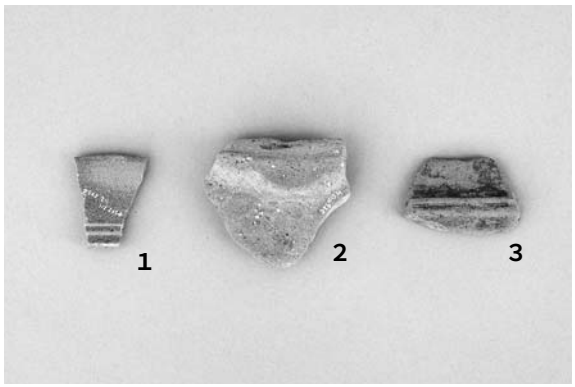


SF２検出状況（南から）

SF２完掘状況（南から）

SF３検出状況（北から）

SF３完掘状況（南から）



SX２・４・６出土遺物

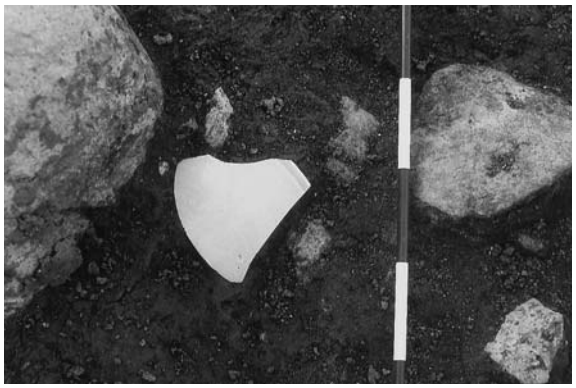
図版23　集石遺構，不明遺構⑦，出土遺物

SX５検出状況（南西から）

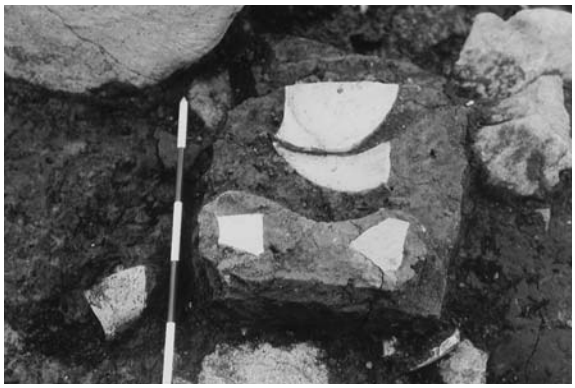
SX５土層（北東から）

SX５完掘状況（西から）

SX５下層完掘状況（西から）



SX５出土遺物（貿易陶磁器）

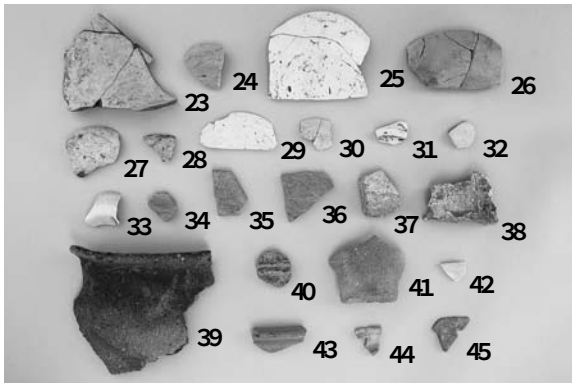


SX５出土遺物（土師器）

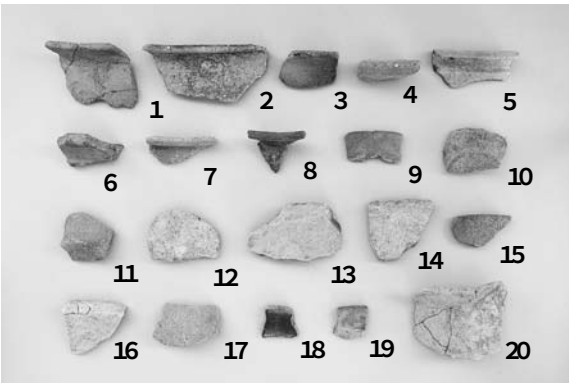
SX５出土遺物（土師器）

SX５出土遺物①

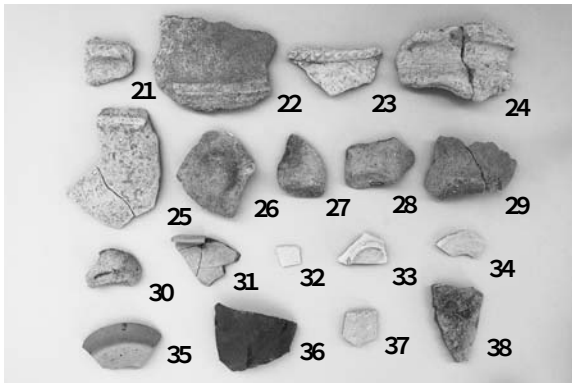
図版24　不明遺構⑧，出土遺物



SX５出土遺物②



SX16出土遺物①

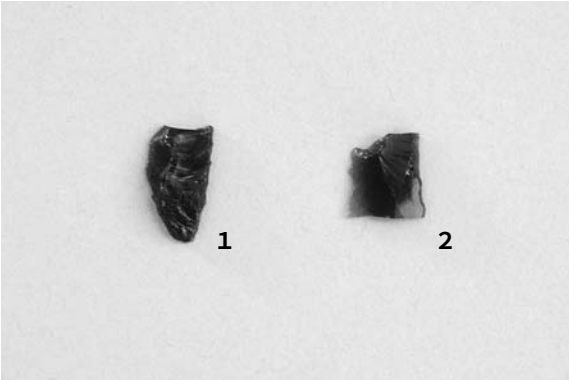


SX16出土遺物②

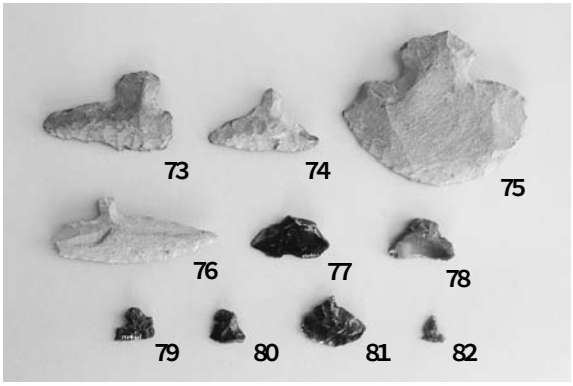
SX20検出状況（西から）

SX20完掘状況（西から）

SX32出土遺物

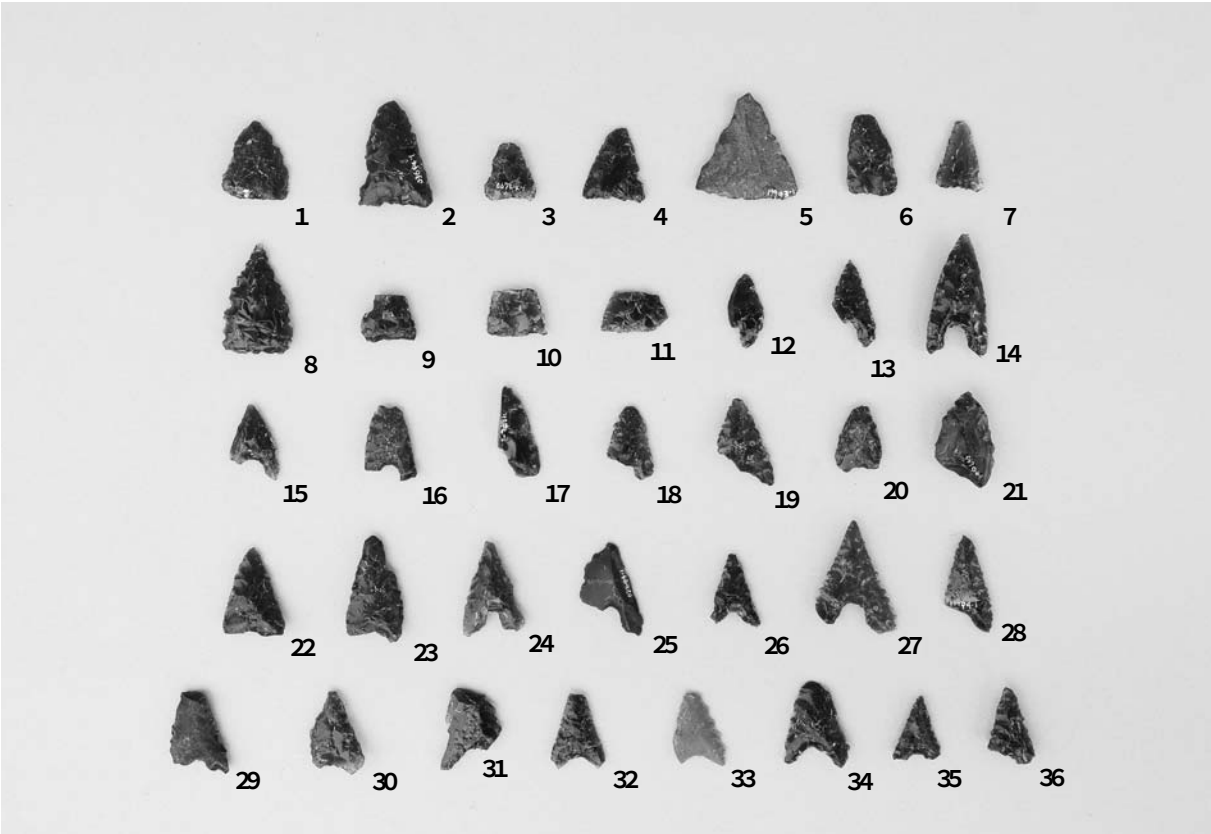


旧石器時代の遺物

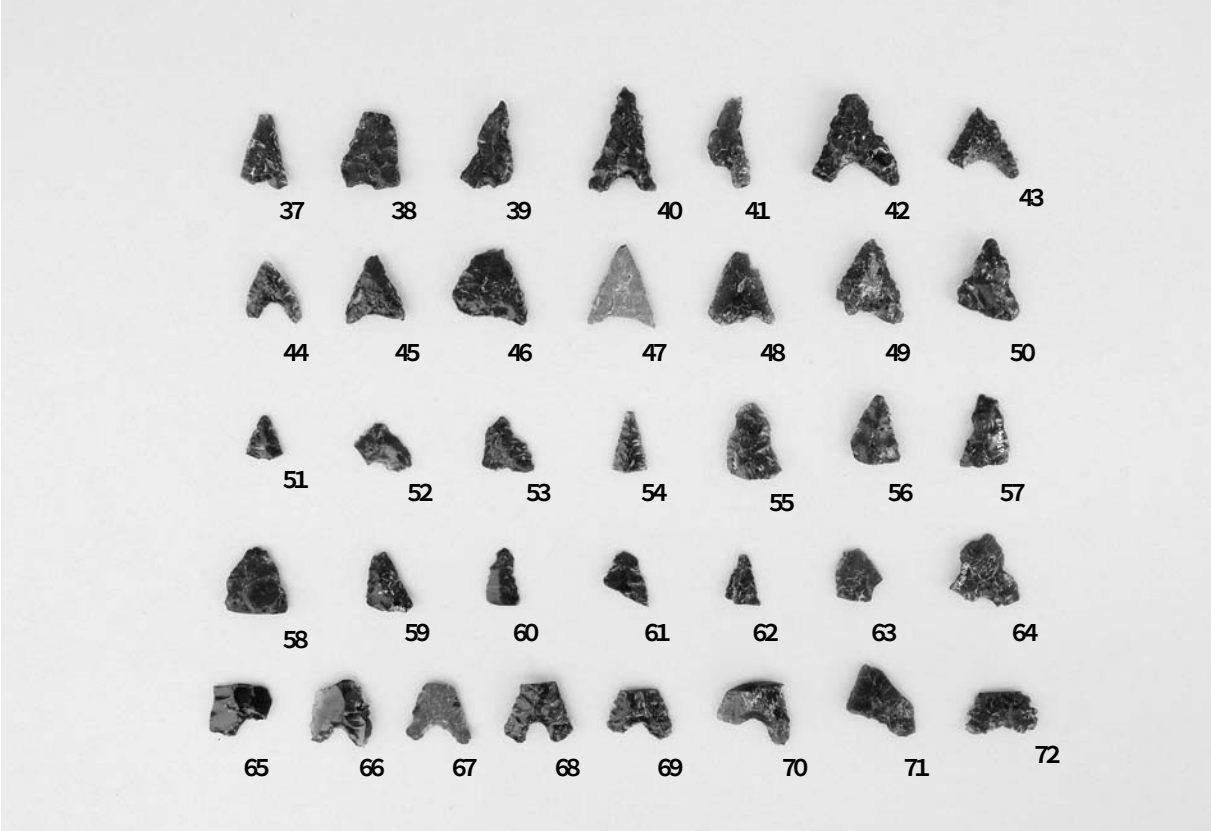


石匙

図版25　不明遺構⑨，出土遺物，第Ⅰ層出土遺物①

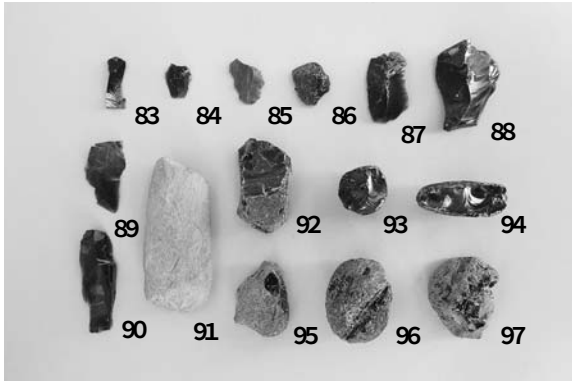


石鏃①

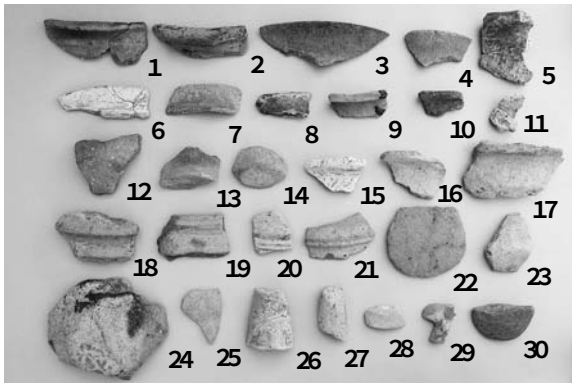


石鏃②

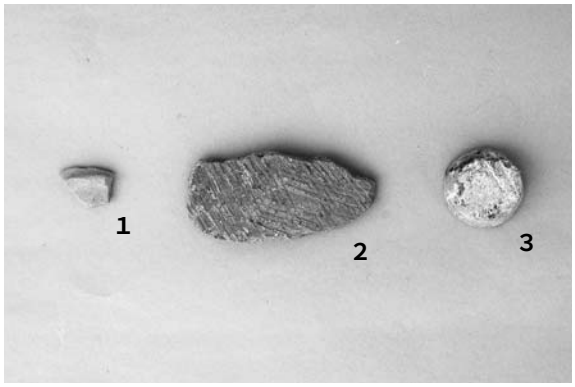
図版26　第Ⅰ層出土遺物②



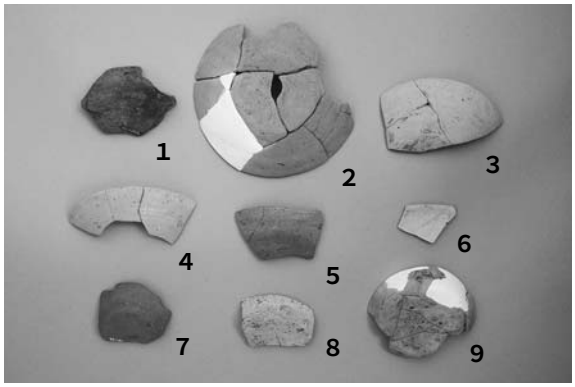
加工痕のある剥片・その他石器



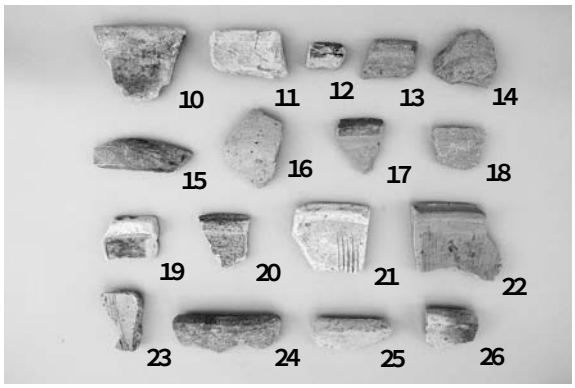
弥生時代の遺物



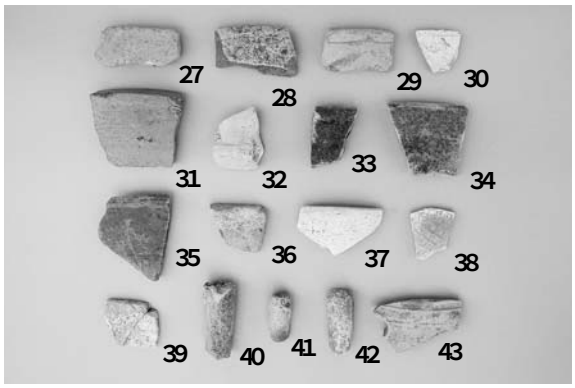
古墳時代・古代の遺物



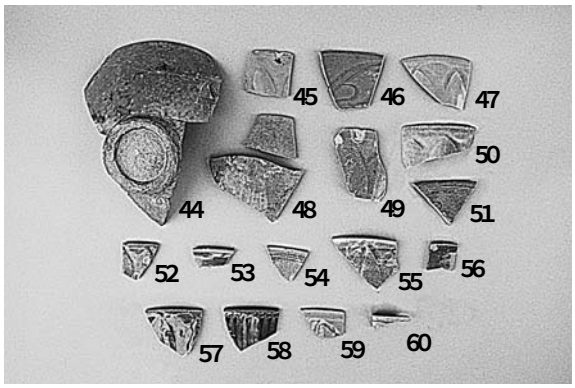
土師器①



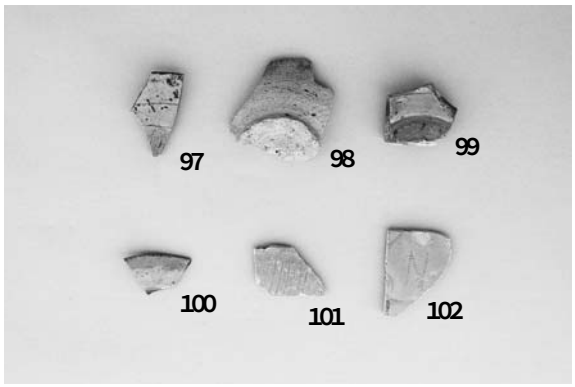
土師器②・瓦質土器・備前系陶器①



土師器②・瓦質土器・備前系陶器②

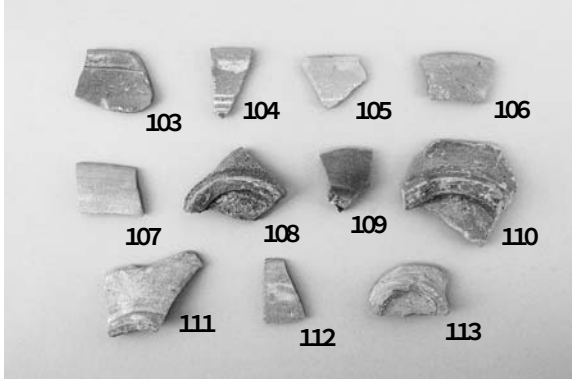


龍泉窯系青磁

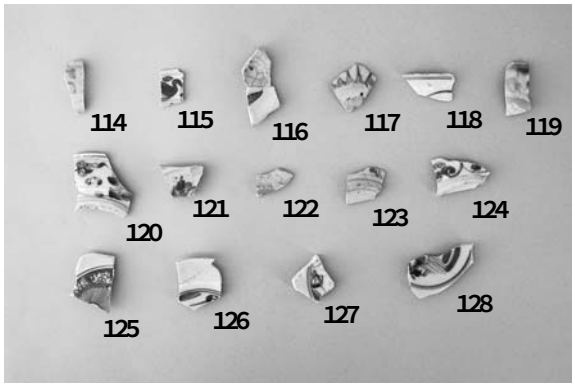


同安窯系青磁

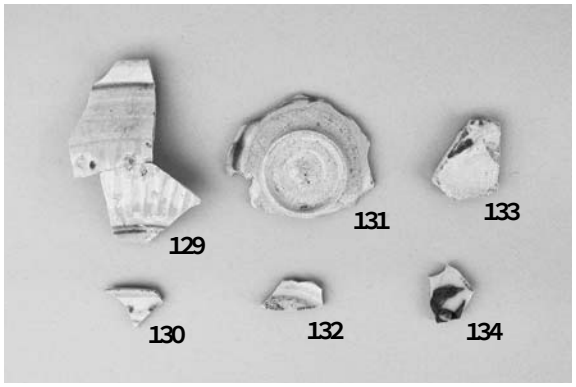
図版27　第Ⅰ層出土遺物③



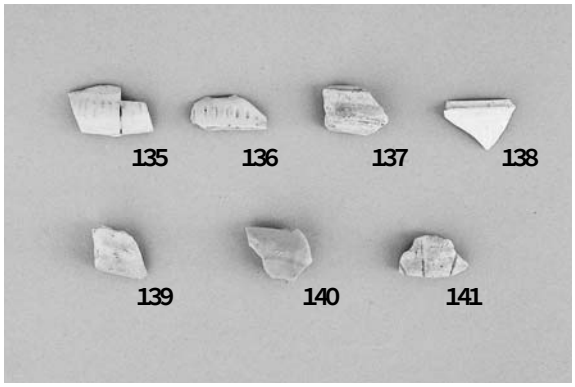
高麗青磁



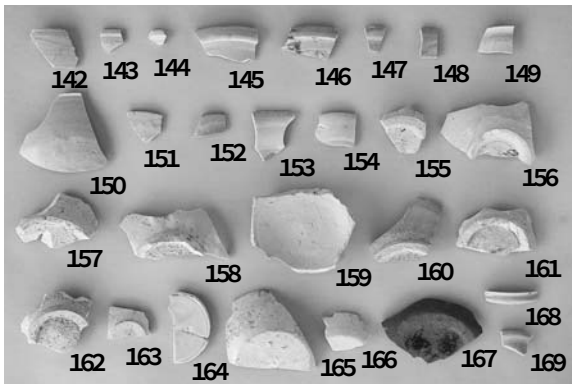
景徳鎮窯系青花



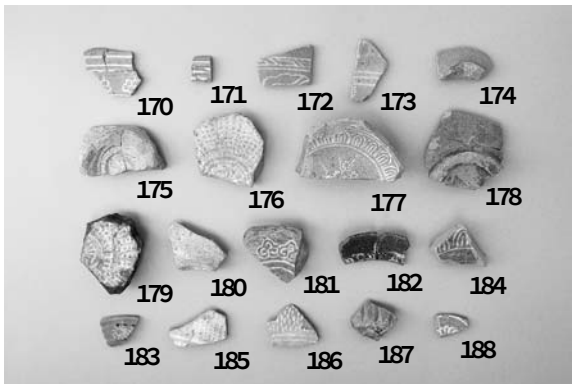
福建省産青花



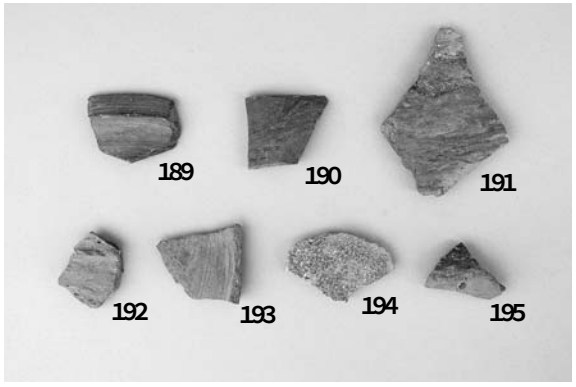
青白磁



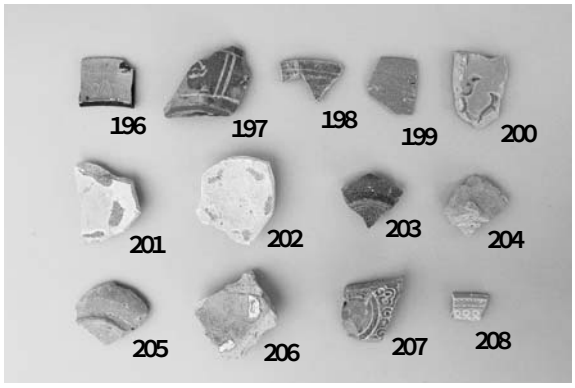
白磁



高麗陶磁器①

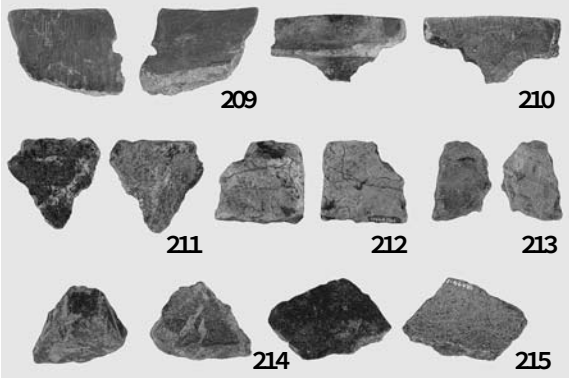


高麗陶磁器②

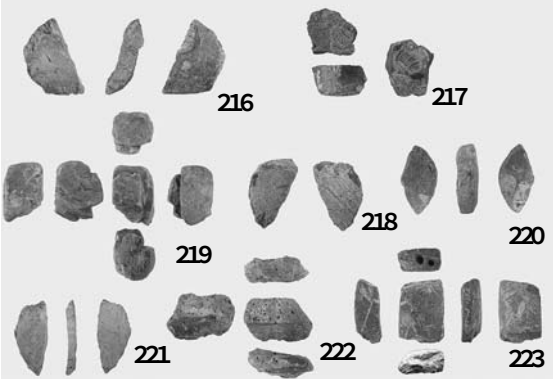


朝鮮王朝陶磁器

図版28　第Ⅰ層出土遺物④



滑石製石鍋



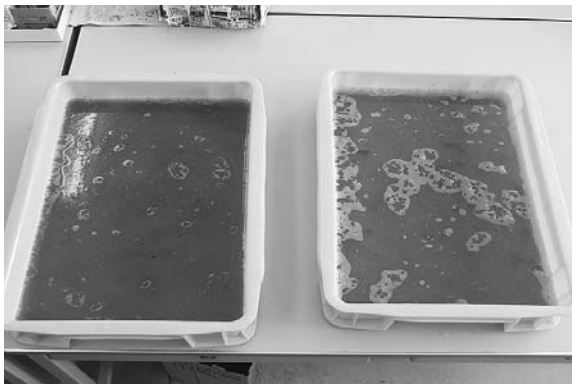
滑石製石鍋二次加工品

墓石出土状況

墓石

作業風景（土砕き）

作業風景（乾燥）



作業風景（フローテーション）

作業風景（セパレーション）

図版29　第Ⅰ層出土遺物⑤・土壌洗浄

Ⅶ　附　　編

1　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

（1）　はじめに

長崎県今福町松浦市に位置する中ノ瀬遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

（2）　資料と方法

測定試料の情報，調製データは表１－１のとおりである。試料はいずれも炭化材で，試料№１（PLD-13170）が SF１からの出土，試料№２～４（PLD-13171～13173）が SK１からの出土で，試料№３と№４は最外年輪が確認されている。試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製1. 5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-13170	遺構：SF１ 試料 No. １ 層位：下層	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1. 2N, 水酸化ナトリウム：１N, 塩酸：1. 2N）
PLD-13171	遺構：SK１ 試料 No. ２ 層位：１層	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1. 2N, 水酸化ナトリウム：１N, 塩酸：1. 2N）
PLD-13172	遺構：SK１ 試料 No. ３ 層位：４層貼床	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1. 2N, 水酸化ナトリウム：１N, 塩酸：1. 2N）
PLD-13173	遺構：SK１ 試料 No. ４ 層位：２層裏込土	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1. 2N, 水酸化ナトリウム：１N, 塩酸：1. 2N）

表１－１　測定試料及び処理

（3）　結　果

表１－２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値，誤差を丸めて表示した^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を，図１－１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。^{14}C年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68. 2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40

測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-13170 試料 No. １	-27. 16±0. 20	2231±19	2230±20	367BC（11. 4%）354BC 292BC（54. 2%）231BC 218BC（ 2. 6%）214BC	383BC（21. 1%）348BC 318BC（74. 3%）207BC
PLD-13171 試料 No. ２	-26. 93±0. 22	290±18	290±20	1528AD（41. 7%）1553AD 1633AD（26. 5%）1647AD	1521AD（61. 1%）1592AD 1620AD（34. 3%）1653AD
PLD-13172 試料 No. ３	-27. 75±0. 22	303±17	305±15	1524AD（48. 2%）1559AD 1565AD（ 3. 3%）1569AD 1631AD（16. 7%）1644AD	1518AD（70. 5%）1594AD 1618AD（24. 9%）1648AD
PLD-13173 試料 No. ４	-29. 14±0. 21	301±17	300±15	1524AD（49. 6%）1559AD 1631AD（18. 6%）1644AD	1520AD（69. 5%）1593AD 1619AD（25. 9%）1648AD

表１－２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C年代の暦年較正にOxCal 4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

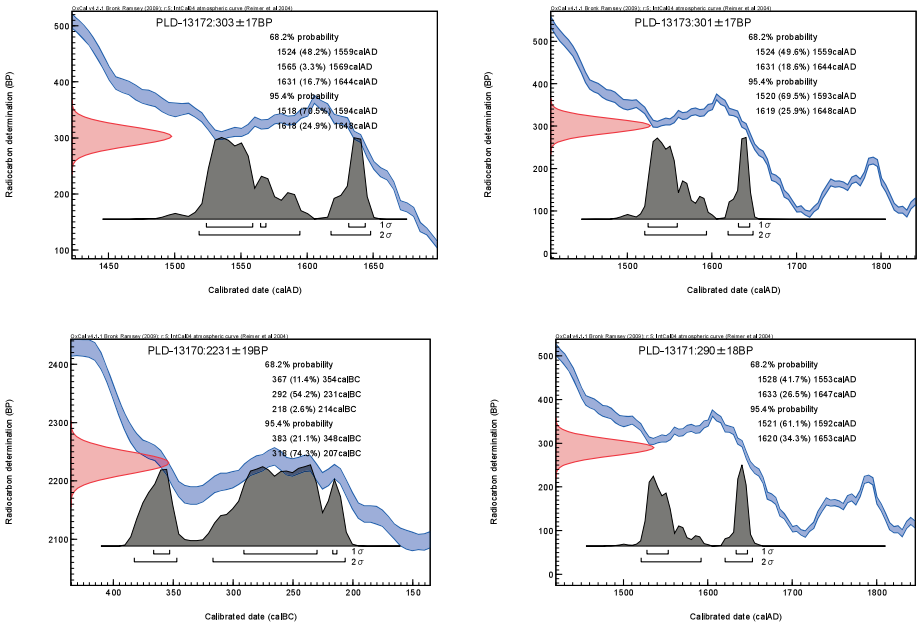


図１－１　暦年較正結果

（4） 考　察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた年代を図１－１・１－２に図示する。

SF１より出土した試料№１は，２σ暦年代範囲で紀元前４世紀前半あるいは３世紀を示した。これは，藤尾（2007）によると弥生時代中期前半に相当する。ただし，最外年輪が確認されていない試料であるため，実際の伐採年代は得られた年代よりも新しい可能性がある。SK１より出土した試料№２～№４は，№２のみ最外年輪ではないものの，３点とも近い年代を示しており，いずれも２σ暦年代範囲で16世紀～17世紀前半，１σ暦年代範囲まで絞ると16世紀第２四半期～第３四半期あるいは17世紀第２四半期を示した。

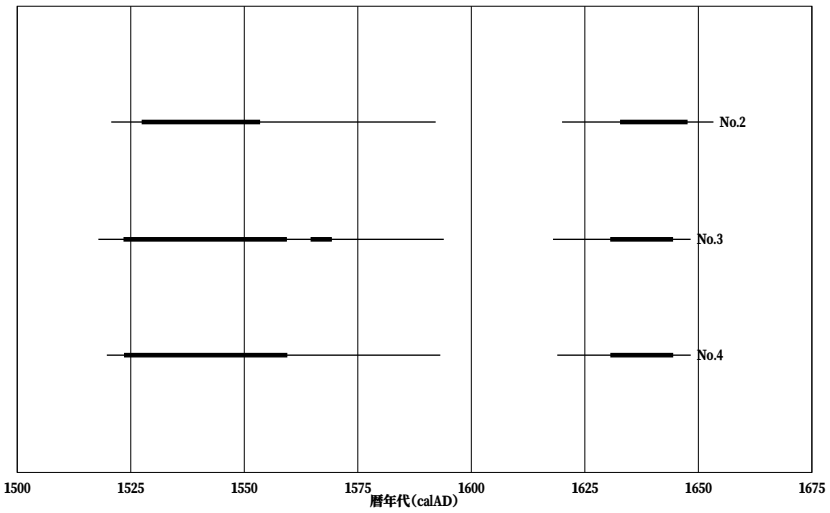


図１－２　SK１出土炭化材

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

藤尾慎一郎（2007）九州における弥生時代中期の開始年代．新弥生時代のはじまり第２巻　縄文時代から弥生時代へ，45-51，雄山閣.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，３-20.
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K. B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058

2　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

（1）　はじめに

長崎県松浦市今福町に所在する中ノ瀬遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

（2）　資料と方法

測定試料の情報，調製データは表２－１のとおりである。

PLD-15511，PLD-15512は，竪穴式住居 SH１の炉跡より検出された炭化材で堆積状況より，PLD-15511が新しく，PLD-15512の方が古いと考えられる。時期は周辺の住居跡などから，弥生時代中期後半頃と考えられる。PLD-15513は，竪穴式住居 SH２の炉跡より検出された炭化材である。SH２出土遺物構成より弥生時代中期後半頃と考えられる。PLD-15514は，竪穴式住居 SH３の炉跡より検出された炭化材である。SH３出土遺物構成より弥生時代中期後半頃と考えられる。PLD-15515は，土壙墓 SK６より検出された炭化材である。棺材は確認されていないが，５層裏込め土の，底板と考えられる位置付近より試料を採取した。周辺の遺構の状況や出土遺物より中世と考られる。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15511	遺跡名： 中ノ瀬遺跡 遺構： SH１(新)炉跡	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）
PLD-15512	遺跡名： 中ノ瀬遺跡 遺構： SH１(古)炉跡	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）
PLD-15513	遺跡名： 中ノ瀬遺跡 遺構： SH２炉跡	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）
PLD-15514	遺跡名： 中ノ瀬遺跡 遺構： SH３炉跡	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）
PLD-15515	遺跡名： 中ノ瀬遺跡 遺構：SK６ 層位： ５層裏込め土	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）

表２－１　測定試料及び処理

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

（3）　結　果

表２－２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を，図２－１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うた

めに記載した。^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記し^{14}C年代誤差（±１σ）は測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：Intcal09）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-15511	-26.02±0.17	2088±21	2090±20	160BC(23.0%)133BC 117BC(26.7%)88BC 77BC(18.5%)56BC	173BC(95.4%)47BC
PLD-15512	-24.32±0.12	2126±20	2125±20	198BC(45.6%)155BC 137BC(22.6%)114BC	341BC(2.4%)328BC 204BC(90.1%)90BC 74BC(3.0%)59BC
PLD-15513	-25.24±0.12	2117±21	2115±20	185BC(68.2%)108BC	201BC(87.8%)87BC 80BC(7.6%)55BC
PLD-15514	-25.77±0.14	2191±20	2190±20	354BC(48.3%)291BC 231BC(19.9%)202BC	361BC(60.3%)271BC 264BC(35.1%)192BC
PLD-15515	-25.20±0.12	621±19	620±20	1300AD(29.4%)1321AD 1350AD(26.2%)1368AD 1382AD(12.6%)1391AD	1294AD(38.0%)1329AD 1340AD(57.4%)1397AD

表２－２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

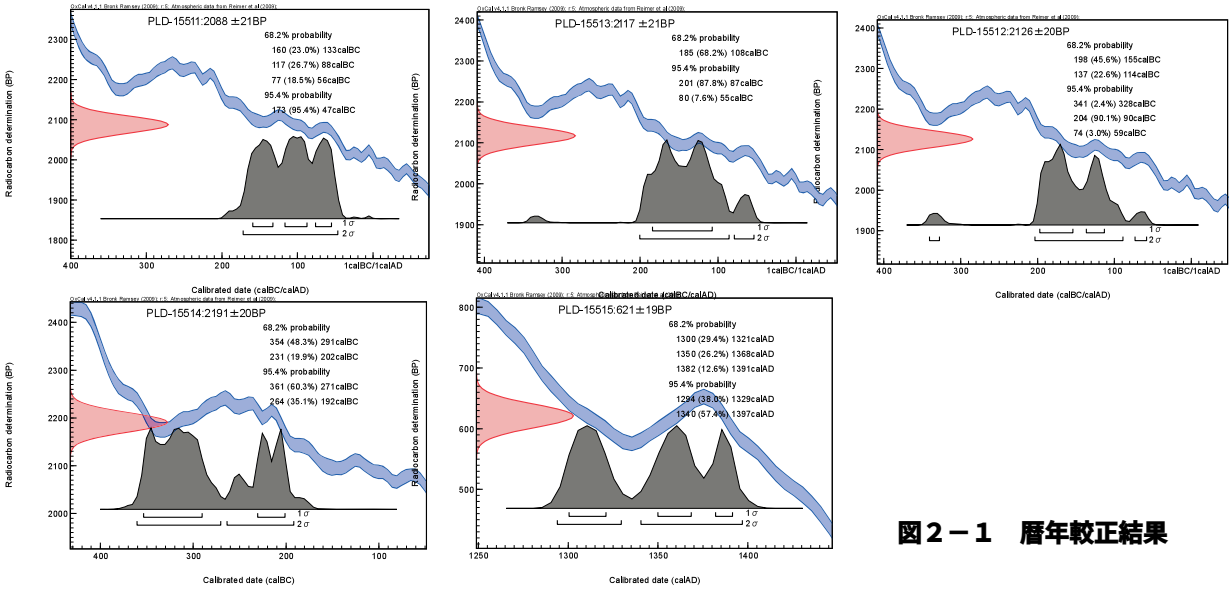


図２－１　暦年較正結果

（４）　考　察

図２－２に中ノ瀬遺跡の竪穴式住居跡出土試料４点の暦年代範囲の分布図を示す。以下２σ暦年代範囲を基に述べる。弥生時代の土器編年との対応関係については，春成・今村編（2004）を参照した。

PLD-15511（SH１（新）炉跡）は，１σ暦年代範囲で160-133calBC（23.0%），117-88calBC（26.7%）および77-56calBC（18.5%），２σ暦年代範囲で173-47calBC（95.4%）となり，紀元前２世紀前半～

同１世紀中頃の範囲を示した。これは弥生時代中期後半にあたる。PLD-15512（SH１（古）炉跡）は，１σ暦年代範囲で198-155calBC（45.6%）および137-114calBC（22.6%），２σ暦年代範囲で341-328calBC（2.4%），204-90calBC（90.1%）および74-59calBC（3.0%）となり，紀元前４世紀中頃～同１世紀中頃の範囲を示した。これは弥生時代中期にあたるが，１σ暦年代範囲に絞り込むと紀元前２世紀初頭～後半となり，弥生時代中期後半である可能性が高い。PLD-15513（SH２炉跡）は，１σ暦年代範囲で185-108calBC（68.2%），２σ暦年代範囲で201-87calBC（87.8%）および80-55calBC（7.6%）となり，紀元前３世紀末～同１世紀前半の範囲を示した。これは弥生時代中期後半にあたる。PLD-15514（SH３炉跡）は，１σ暦年代範囲で354-291calBC（48.3%）および231-202calBC（19.9%），２σ暦年代範囲で361-271calBC（60.3%）および264-192calBC（35.1%）となり，紀元前４世紀前半～同２世紀初頭の範囲を示した。これは弥生時代中期前半にあたる。SH１，SH２はいずれも弥生時代中期後半の可能性が高く，想定していた時期との齟齬はなかった。また，PLD-15511とPLD-15512の暦年代はほぼ重複しており，SH１炉跡の新旧関係の矛盾もないといえる。一方，SH３は弥生時代中期前半という結果が得られ，想定していた時期よりも古い結果となった。PLD-15515（SK６）は，１σ暦年代範囲で1300-1321calAD（29.4%），1350-1368calAD（26.2%）および1382-1391calAD（12.6%），２σ暦年代範囲で1294-1329calAD（38.0%）および1340-1397calAD（57.4%）となり，13世紀末～14世紀末の範囲を示した。これは鎌倉時代後期～室町時代前期にあたる。木材の場合，最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが，内側の部分を測定すると最外部からの年輪分だけ古い年代が得られる（古木効果）。今回測定した試料はいずれも最外年輪の確認されていない試料であるため，古木効果の影響を考慮しておく必要がある。

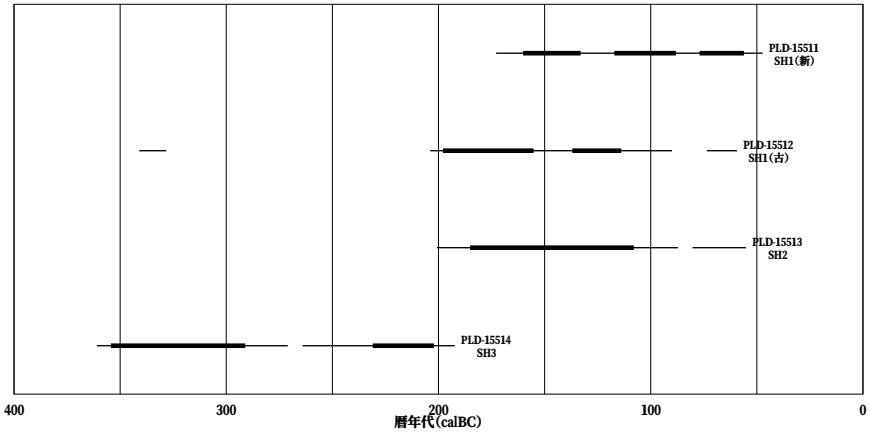


図２－２　中ノ瀬遺跡の竪穴式住居出土試料の暦年代の分布（太線：１σ，２σ）

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

春成秀爾・今村峯雄編（2004）弥生時代の実年代炭素14年代をめぐって．253p，学生社．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，３-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

３　中ノ瀬遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

（１）　はじめに

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体，骨，貝殻，土壌，土器付着炭化物などが測定対象となり，約５万年前までの年代測定が可能である。

（２）　試料と方法

測定試料の詳細と放射性炭素年代測定の前処理・調整法および測定法を次表に示す。

試料№	地点・層準	種類	前処理・調整法	測定法
№１	SX27，下層地山	炭化材	超音波洗浄， 酸-アルカリ-酸処理	AMS

表３－１　試料と方法

（３）　測定結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた^{14}C濃度について，同位体分別効果の補正を行った後に，放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示し，図３－１に暦年較正結果（較正曲線）を示す。BP：Before Physics（Present），AD：紀元後

	測定№ （PED-）	δ^{13}C （‰）	^{14}C年代：年BP （暦年較正用）	暦年代（較正年代）	
				１σ（68.2%確率）	２σ（95.4%確率）
№１	16672	-25.31±0.13	1870±20 （1868±19）	AD 80-140（49.3%） AD150-170（ 9.2%） AD190-210（ 9.8%）	AD80-220（95.4%）

表３－２　測定結果

（ア）　δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を－25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（イ）　放射性炭素（^{14}C）年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から，現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが，国際的慣例によりLibbyの5568年を用いた。統計誤差（±）は１σ（シグマ）（68.2%確率）である。^{14}C年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが，暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

（ウ）　暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで，放射性炭素（^{14}C）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU／Th（ウラン／トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal09，較正プログラムはOxCal3.1である。暦年代（較正年代）は，^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し，OxCalの確率法により１σ（シグマ）（68.2%確率）と２σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では，複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。（　）内の%表示は，その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布，二重曲線は暦年較正曲線

を示す。

（4） 所　見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，№１の炭化材では1870±20年 BP（２σの暦年代で AD80～220年）の年代値が得られた。

【文献】

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，p. 3 -20.

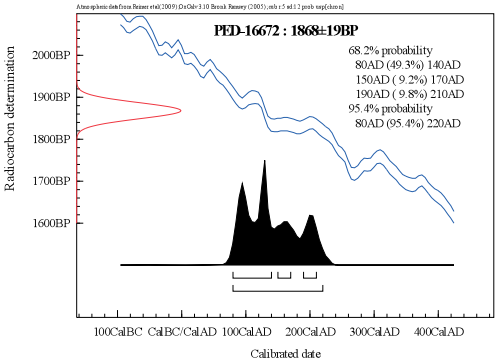


図３－１　暦年較正結果

４　中ノ瀬遺跡のプラント・オパール

株式会社　パレオ・ラボ

（1） はじめに

中ノ瀬遺跡は長崎県松浦市今福町に所在しており，縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。ここでは，④区の性格不明遺構より採取された土壌試料について，遺構とその堆積状況について検討する目的でプラント・オパール分析を行なった。以下にこの結果及び考察を記す。

（2） 試料と方法

試料は，④区より採取された３試料である。各試料について，試料 No.７（SX16）は黒褐色の粘質土でしまりが強い。試料 No.８（SX19）は暗褐色の粘質土でしまりが強い。試料 No.９（SX24）は黄灰色砂質土であり，やや硬質である。いずれの試料も，耕作土と推定されている。時期は，試料 No. ７が17世紀初頭頃，試料 No.８と No.９が16世紀頃堆積したものと考えられている。

プラント・オパール分析は上記した３試料について，下記に示した手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり，約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30㎤加え，脱有機物処理を行う。処理後，水を加え，超音波ホモジナイザーによる試料の分散後，沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し，検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが300個に達するまで行った。

（3） 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（表４－１），それらの分布を図４－１に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。検鏡の結果すべての試料から，イネのプラント・オパールが検出された。個数的には試料 No.９が最も多く，12,800個体が得られてお

り，試料 No. 8からは11,600個体が検出されている。また試料 No. 7では1,100個体が観察されている。イネ以外ではクマザサ属型が多く検出されており，すべての試料でおおむね10,000個体が得られている。その他，ウシクサ族とキビ族が検出されている。

試料 No.	遺構名	イネ（個/ｇ）	クマザサ属型（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	不明（個/ｇ）
7	SX16	1,100	11,100	1,100	7,800	5,600
8	SX19	11,600	9,300	2,300	5,800	2,300
9	SX24	12,800	9,600	2,100	8,500	4,300

表４－１　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

（４） 稲作について

上記したように３試料すべてから，イネのプラント・オパールが検出された。ここで検出個数の目安を示すと，イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と，実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原，1984)。こうしたことから，稲作の検証としてこの5,000個を目安に，プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。試料 No. 8と試料 No. 9からは，10,000個体を上回るイネのプラント・オパールが検出されている。これら２試料は，発掘状況から耕作土であると推定されており，イネのプラント・オパールの検出個体数からみて，16世紀頃に SX19と SX24において，稲作が行われていた可能性は高いとプラント・オパール分析からは判断される。また，試料 No. 7においてはイネのプラント・オパールが1,100個体と，稲作検証の目安である5,000個体には達していない。よって，SX16において稲作が行なわれていた可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断される。しかしながら，少ないながらイネのプラント・オパールが検出されていることから，SX16についてはさらに検討が必要であろう。

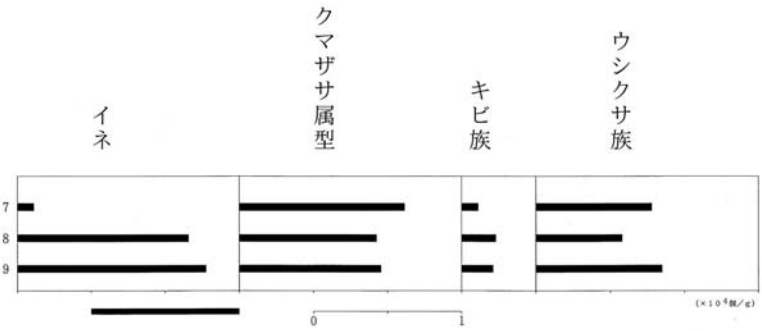
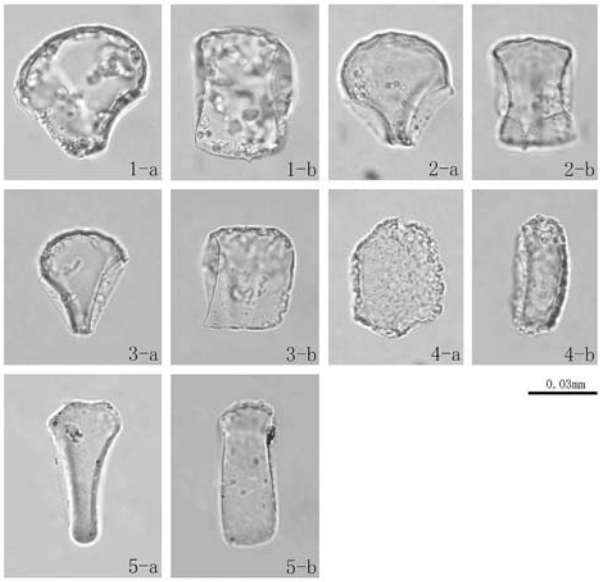


図４－１　中ノ瀬遺跡プラント・オパール分布図

（５） 遺跡周辺のイネ科植物

イネ以外で最も多く観察されているクマザサ属型のササ類（スズタケ，ミヤコザサなど）については，遺跡周辺の空地や耕作地周辺に成立していたであろう森林の下草的存在で生育していたとみられる。ウシクサ族は，上記森林の林縁部などの日のあたる開けたところに草地を形成していたとみられる。また，キビ族についてはその形態からアワ，ヒエ，キビといった栽培種によるものか，エノコログサ，スズメノヒエ，イヌビエなどの雑草類によるものかについて現



図版１　中ノ瀬遺跡④区のプラント・オパール
1～3：イネ（a：断面、b：側面）1：No. 7、2：No. 8、3：No. 9、4：クマザサ属型（a：断面、b：側面）No. 9、5：ウシクサ族（a：断面、b：側面）No. 8

図４－２　中ノ瀬遺跡④区のプラント・オパール

時点においては分類が難しく不明であるが，ここでは稲作にともなう雑草類（タイヌビエなど）ではないかと思われる。

【引用文献】

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル，227，２-７．

５　中ノ瀬遺跡における樹種同定

株式会社　古環境研究所

（１）はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（２）試　料

試料は，SH２遺構の Pit１より出土した多数の炭化物片から無作為に抽出した炭化材①～⑧の８点である。

（３）方　法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義），放射断面（柾目），接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し，落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（４）結　果

表５－１に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科　写真１・２・３

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県，新潟県佐渡以南），四国，九州に分布する常緑高木で，高さ20m，径1.5mに達する。材は耐朽，保存性やや低く，建築器具などに用いられる。なお，シイ属にはスダジイとツブラジイがあり集合放射組織の有無などで同定できるが，試料が小片で広範囲の観察が困難なためシイ属の同定にとどめた。

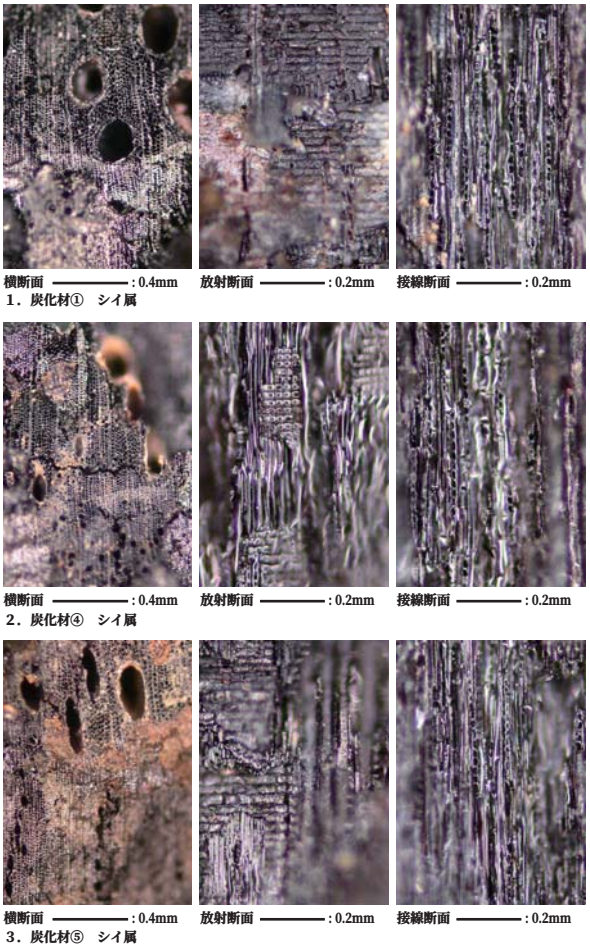


図５－１　中ノ瀬遺跡の炭化材

（5） 所　見

樹種同定の結果，SH２遺構の Pit１から採取された炭化材８点は，いずれもシイ属と同定された。シイ属にはツブラジイとスダジイがあり，温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは照葉二次林要素である。シイ類の種実（ドングリ）は，アク抜きの必要がなくそのままでも食用となる。

【文献】

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.
島地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

試料	結果（学名／和名）	
炭化材①	Castanopsis	シイ属
炭化材②	Castanopsis	シイ属
炭化材③	Castanopsis	シイ属
炭化材④	Castanopsis	シイ属
炭化材⑤	Castanopsis	シイ属
炭化材⑥	Castanopsis	シイ属
炭化材⑦	Castanopsis	シイ属
炭化材⑧	Castanopsis	シイ属

表５－１　中ノ瀬遺跡における樹種同定結果

６　中ノ瀬遺跡における花粉分析

株式会社　古環境研究所

（1） はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

（2） 試　料

分析試料は，弥生時代の遺構と考えられる SX33（倒木痕），SX34（倒木痕），SX35（倒木痕）から採取された計３点である。

（3） 方　法

花粉の分離抽出は，中村（1967）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）試料から１㎤を秤量
２）0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
３）水洗処理の後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去
４）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
５）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
６）再び氷酢酸を加えて水洗処理
７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
８）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

（4） 結　果

（ア） 分類群

出現した分類群は，樹木花粉３，草本花粉３，シダ植物胞子１形態の計７である。なお，寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表２に示し，主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科

〔草本花粉〕

イネ科，アブラナ科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子

分類群		SX33	SX34	SX35
学名	和名			
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属			1
Cryptomeria japonica	スギ			18
Taxaceae-Cephalotaxaxeae -Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科			3
Cruciferae	アブラナ科			1
Artemisia	ヨモギ属			1
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	1	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	20
Arboreal･Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	5
Total pollen	花粉総数	0	0	25
Pollen frequencies of 1 cm^3	試料１cm^3中の花粉密度	0	0	3.6 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	4
Fern spore	シダ植物胞子	1	1	1
Helminth eggs	寄生虫卵	（－）	（－）	（－）
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	（－）	（－）	（－）
Charcoal fragments	微細炭化物	（＋）		

表６－１　中ノ瀬遺跡における花粉分析結果

（イ） 花粉群集の特徴

SX33と SX34では，花粉が検出されなかった。SX35では，樹木花粉のスギ，マツ属複維管束亜属，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，草本花粉のイネ科，アブラナ科，ヨモギ属が検出されたが，いずれも少量である。なお，各試料ともシダ植物単条溝胞子が少量検出された。

（5） 花粉分析から推定される植生と環境

SX35では，花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが，当時は周辺にスギ，マツ属複維管束亜属，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの樹木，およびイネ科，アブラナ科，ヨモギ属などの草本類が生育していたと考えられる。これらの草本類は，乾燥を好む人里植物である。SX33と SX34では，花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと，土層の堆積速度が速かったこと，および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

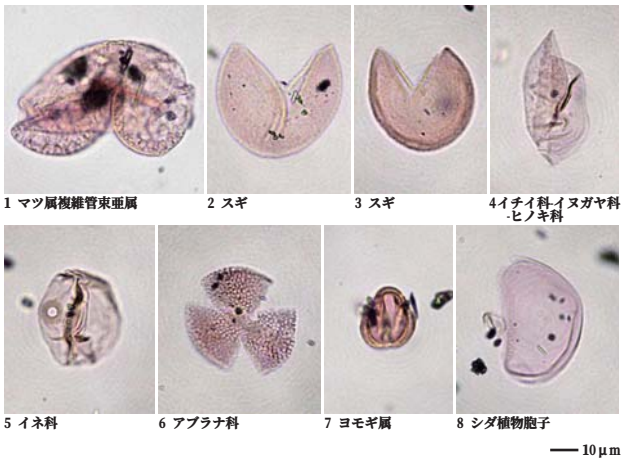


図６－１　中ノ瀬遺跡の花粉・胞子

【文献】

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

7　中ノ瀬遺跡の種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中ノ瀬遺跡は長崎県松浦市今福町に所在し，今福川によって形成された沖積平野と微高地の範囲に展開する（標高約10～40m）。発掘調査の結果，丘陵部や斜面付近で多数の柱穴や土壙墓と推定される遺構，弥生土器，須恵器，石鍋，貿易陶磁器，近世陶磁器などの遺物を検出している。

本分析調査では，平成21年度発掘調査で竪穴式住居跡から出土した種実遺体の同定を実施し，当時の植生や植物資源の利用状況に関する情報を得る。

（1） 試　料

試料は，弥生時代中期後半の竪穴式住居跡 SH２と，弥生時代中期前半の竪穴式住居跡 SH３の柱穴や床面から採取した土壌を洗浄して回収した種実遺体14点16粒である。各試料の詳細は，分析資料情報とともに表１に示す。

（2） 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，現生標本および石川（1994），中山ほか（2000）等の図鑑との対照から種類と部位を同定する。分析後は，種実遺体を容器に入れて保存する。湿り気のある種実遺体は，約70％のエタノール溶液を入れた容器中で保存する。

（3） 結　果

結果を表１に示す。種実遺体は，被子植物８分類群（木本のクスノキ１個，草本のコムギ，イネ科，イヌタデ近似種，アズキ類，マメ類，タカサブロウ，アキノノゲシ）に同定された。SH３第２層 No. １の１個は，種類や部位の特定に至らず不明であった。

遺構別出土状況は，SH２は炭化した栽培種の可能性があるアズキ類の種子が１個と，炭化していない草本のイヌタデ近似種が３個，タカサブロウが２個確認された。SH３は，炭化した栽培種のコムギの胚乳が１個，炭化した栽培種の可能性があるマメ類の種子が１個と，炭化していない常緑広葉樹のクスノキが１個，イネ科が１個，タカサブロウが４個，アキノノゲシが１個確認された。

種実遺体の保存状態は，栽培種のコムギと，栽培種の可能性があるアズキ類，マメ類は炭化してい

遺構名・採取位置等	番号 No.	時代	同定結果					
			分類群	部位	状態		点数	備考
SH２ 竪穴式住居跡 土坑跡	1	弥生中期後半	アズキ類	種子	破片	炭化	1	半分，長さ4.95㎜，幅3.3㎜，厚さ2.1㎜＋
SH２ 竪穴式住居跡 床面北東	13	弥生中期後半	イヌタデ近似種	果実	完形	非炭化	1	
SH２ 竪穴式住居跡 床面北東	84	弥生中期後半	タカサブロウ	果実	完形	非炭化	1	
SH２ 竪穴式住居跡 床面北西	174	弥生中期後半	イヌタデ近似種	果実	完形	非炭化	1	
				花被	破片	非炭化	1	
SH２ 竪穴式住居跡 床面南東	28	弥生中期後半	タカサブロウ	果実	完形	非炭化	1	
SH３ 竪穴式住居跡 床面北東	32	弥生中期前半	マメ類	種子	完形	炭化	1	長さ5.59㎜，幅3.7㎜，厚さ3.2㎜＋，臍確認
SH３ 竪穴式住居跡 床面北西	26	弥生中期前半	コムギ	胚乳	完形	炭化	1	長さ3.43㎜，幅2.5㎜，厚さ2.4㎜
SH３ 竪穴式住居跡 床面北西	60	弥生中期前半	クスノキ	種子	破片	非炭化	1	半分，長さ6.28㎜，幅6.3㎜，厚さ3.1㎜＋
SH３ 竪穴式住居跡 床面南西	2	弥生中期前半	タカサブロウ	果実	完形	非炭化	1	
SH３ 竪穴式住居跡 床面南西	3	弥生中期前半	タカサブロウ	果実	完形	非炭化	2	
SH３ 竪穴式住居跡 床面南西	16	弥生中期前半	タカサブロウ	果実	完形	非炭化	1	
SH３ 竪穴式住居跡 床面南西	89	弥生中期前半	アキノノゲシ	果実	完形	非炭化	1	
SH３ 竪穴式住居跡 土坑跡	6	弥生中期前半	イネ科	果実	完形	非炭化	1	
SH３ 竪穴式住居跡 第２層	1	弥生中期前半	不明				1	

表７－１　種実同定結果

るのに対し，クスノキ，イネ科，イヌタデ近似種，タカサブロウ，アキノノゲシは，炭化が認められず，良好な状態である。本分析で確認された各分類群の写真を図７－１に示し，形態的特徴を以下に記す。

〈炭化種実〉

・コムギ（*Triticum aestivum* L.）　イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色，長さ3.43㎜，幅2.5㎜，厚さ2.4㎜の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり，背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面は微細な粒状模様がある（７－１－１）。

・アズキ類（*Vigna subgen. Ceratotropics*（Piper）Verdc.）　マメ科ササゲ属

種子は炭化しており黒色，やや偏平な楕円体。SH２土坑跡（No.1）より出土した種子は，子葉の合わせ目から半割した１片で，長さ4.95㎜，幅3.3㎜，（半分の）厚さ2.1㎜以上。子葉内面には，北大基準（吉崎，1992）の「アズキグループ（幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり，胚珠中央に向けて伸びる）」に該当する幼根や初生葉の状態が確認される（図版７－１－２b）。種皮表面はやや平滑（図版７－１－２a）。

・マメ類（*Leguminosae*）　マメ科

種子は炭化しており黒色，やや偏平な楕円体。SH３床面北東（No.32）より出土した種子は，長さ5.59㎜，幅3.7㎜，厚さ3.2㎜以上。腹面の子葉合わせ目上に長さ１㎜，幅0.2㎜程度の細長い長楕円形の臍がある（図版７－１－３c）。種皮表面は焼き崩れている。SH２土坑跡（No.1）出土種子と類似し，アズキ型（小畑，2008）と思われるが，幼根や初生葉の状態を確認していないため，マメ類にとどめている（図７－１－３）。

〈炭化していない種実〉

・クスノキ（*Cinnamomum camphora*（L.）Presl）　クスノキ科ニッケイ属

種子は灰褐色，偏球体。頂部にやや突出する臍からはじまり，側面の途中で終わる低い稜がある。破片は稜に沿って半割した１片で，長さ6.28㎜，幅6.3㎜，（半分の）厚さ3.1㎜以上。種皮は硬く表面は粗面，断面は柵状（図７－１－４）。

・イネ科（Gramineae）

果実は淡灰褐色，長さ3.4㎜，径1.9㎜程度の半狭卵体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。果皮表面には縦長の網目模様が配列する（図版７－１・５）。

・イヌタデ近似種（*Polygonum* cf. *longisetum* De Bruyn）タデ科タデ属

果実は黒色，長さ2.3～2.5㎜，径1.5～1.6㎜程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り，花柱を欠損する。基部は切形で灰褐色，径0.5㎜程度の萼片と花被がある。果皮表面は平滑で光沢がある（図版７－１－６～８）。

・タカサブロウ（*Eclipta prostrata*（L.）L.）　キク科タカサブロウ属

果実は灰褐色，長さ2.5～３㎜，径1.1～1.7㎜程度のやや偏平な三角状倒狭卵体。両端は切形，果皮は海綿状で，両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり，水に浮きやすい。

・アキノノゲシ（*Lactuca indica* L.）　キク科アキノノゲシ属

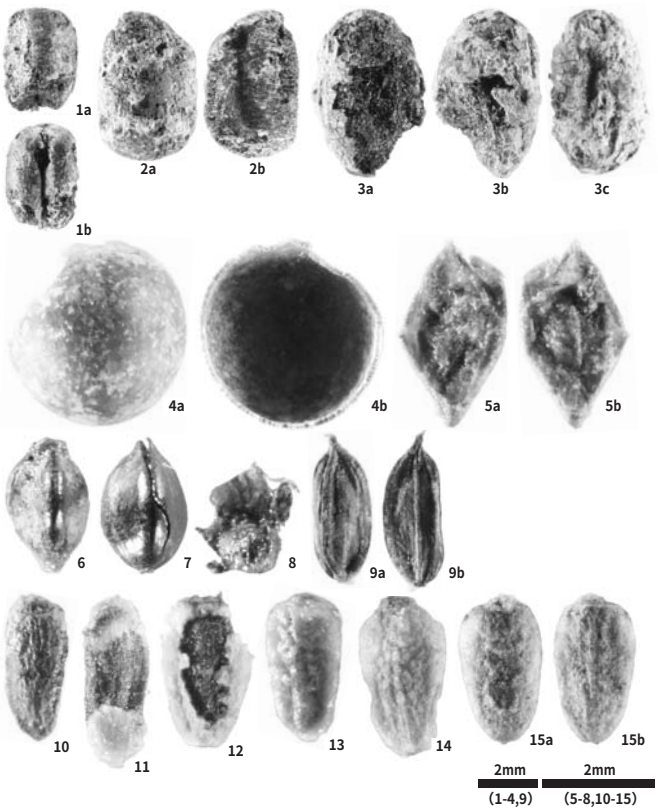
果実は黒灰褐色，長さ5.2㎜，幅2.0㎜程度の偏平な非対称倒卵形。頂部は尖り，白色の冠毛を欠損

する。背腹両面の正中線上に１個の縦隆条があり，両縁は翼状。果皮表面には微細な網目模様と短い伏毛状体が横に多数並び，鱗状模様をなす。

（4） 考　察

弥生時代中期前半の竪穴式住居跡 SH３では，床面北西から炭化した栽培種のコムギの胚乳が１個，床面北東から炭化した栽培種の可能性があるマメ類の種子が１個確認された。また，弥生時代中期後半の竪穴式住居跡 SH２では，土坑跡から炭化した栽培種の可能性があるアズキ類の種子が１個確認された。これらの穀類は，当時の本遺跡周辺域で利用されていた植物質食糧と示唆され，住居内に持ち込まれ，何らかの理由により火を受け炭化残存したことが考えられる。

一方，栽培種（可能性を含む）を除いた分類群は，常緑高木のクスノキは，本地域の暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要な構成種である。草本のイネ科，イヌタデ近似種，アキノノゲシは日当たりのよい荒れ地や草地などに，タカサブロウはやや湿り気のある道ばたなどに生育する，いわゆる人里植物に属する分類群である。これらの種実遺体は，調査地周辺域の植生を反映していると考えられる。ただし，保存状態が良好で炭化していないことから，後代より落ち込んだ混入物に由来する可能性がある。この点に関して，遺跡から出土する種実のうち，低湿地以外から出土した炭化していない種実は，炭化物と同様に扱うには問題があると指摘されている（吉崎，1992など）。



1．コムギ 胚乳（SH3床面北西;No.26）
2．アズキ類 種子（SH2土坑跡;No.1）
3．マメ類 種子（SH3床面北東;No.32）
4．クスノキ 種子（SH3床面北西;No.60）
5．イネ科 果実（SH3土坑跡;No.6）
6．イヌタデ近似種 果実（SH2床面北東;No.13）
7．イヌタデ近似種 果実（SH2床面北西;No.174）
8．イヌタデ近似種 花被（SH2床面北西;No.174）
9．アキノノゲシ 果実（SH3床面南西;No.89）
10．タカサブロウ 果実（SH2床面北東;No.84）
11．タカサブロウ 果実（SH2床面南東;No.28）
12．タカサブロウ 果実（SH3床面南西;No.2）
13．タカサブロウ 果実（SH3床面南西;No.3）
14．タカサブロウ 果実（SH3床面南西;No.3）
15．タカサブロウ 果実（SH3床面南西;No.16）

図７－１　種実遺体

【引用文献】

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.

小畑　弘巳，2008，マメ科種子同定法．「極東先史古代の雑穀３」，日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金（基盤Ｂ-２）（課題番号16320110）「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書，小畑　弘巳編，熊本大学埋蔵文化財調査室，225-252.

吉崎昌一，1992，古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル，No.355，2-14.

報告書抄録

ふりがな	なかのせいせき
書名	中ノ瀬遺跡
副書名	一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第７集
編著者名	江上正高・松田菜津子・杉原敦史・福永祐馬
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎県長崎市江戸町２番13号　TEL095－824－1111
発行年月	西暦2012年３月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中ノ瀬遺跡（なかのせいせき）	長崎県（ながさきけん） 松浦市（まつうらし） 今福町（いまぶくちょう）	42208	53-38	33° 20′ 54″	129° 46′ 6″	20081118 ～ 20100316	17,559	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中ノ瀬遺跡	遺物包含地	・弥生 ・古墳 ・古代 ・中世 ・近世	・竪穴式住居跡 ・木棺墓 ・土壙墓 ・掘立柱建物跡	・黒曜石製品 ・弥生土器 ・土師器 ・防長系足鍋 ・貿易陶磁器 ・滑石製品 ・国産陶磁器	・弥生時代中期の集落を確認した。 ・中世の墓域を確認した。 ・近世の集落と墓域を確認した。

長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第７集

一般国道497号伊万里松浦道路建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅱ

中ノ瀬遺跡

平成24年（2012）３月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
TEL095－824－1111

印刷所　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007-２
TEL0957－22－6000